



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コーパスに基づく日本語慣用句の研究
Author(s)	呉, 琳
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12510号
Issue Date	2017-03-23
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k12510
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68578
Type	doctoral thesis
File Information	Wu_Lin.pdf



平成 28 年度
博士学位申請論文

コーパスに基づく日本語慣用句の研究

北海道大学大学院文学研究科

専攻 言語文学

指導教員 池田証壽

氏名 呉 琳

要 旨

本論文は、コーパスを活用した日本語慣用句の研究である。論文は序論・結論と、2 部構成の本論からなり、別に参考文献一覧と添付資料 3 編を備える。以下、論文の構成に従い、要旨を記す。

序論では、日本語の慣用句について、これまでのところ多角的な視点から様々な分析がなされてきたが、慣用句の数量的側面と意味的側面との両特性を生かした研究は少ないことを指摘し、特に慣用句全体を対象とした数量的・意味的分析はまだ見受けられないことを述べる。そこで、慣用句の研究が盛んに行われてきたなかで、定量的研究と定性的研究が日本語慣用句の研究にとって重要な意味をもつことを指摘する。そして、近年、コンピュータ技術の発達により様々なコーパスが構築され、過去には難しかった研究が現在可能になったことに触れ、本論文の目的を、(1) 慣用句の使用度数と意味分野の把握、(2) 現代日本語における基幹慣用句の選定、(3) 慣用句の通時的変化に見られる類型や要因の発見、(4) 個別の慣用句の意味・用法に関する記述、の 4 点に設定する。最終的には、これらの研究成果を日本語教育と関連付け、学習者向けの慣用句辞典記述への応用を目指したい。

本論は、基本分析編と事例研究編という 2 部から構成される。第 1 部では、書籍と新聞コーパスにおける慣用句の計量的・質的分析を行う。第 2 部では慣用句の事例研究として、「鳥肌が立つ」と「足を洗う」(意味拡大の例)、及び「まんじりともせず」(意味縮小の例)を取り上げ、使用実態調査を行う。

第 1 部第 1 章では、まず慣用句という用語の定義を述べ、形式的・統語的・意味的・音韻的側面から日本語慣用句の特徴を分析した。次いで、慣用句をめぐる先行研究を概観した。時系列に沿って確認すると、慣用句の研究は、1942 年からの萌芽期(白石大二氏による一連の研究)、1970 年代からの模索期(宮地裕氏をはじめとする慣用句の認定に関する研究)、1980 年代からの成立期(慣用句の構成や品詞性に着目した研究)、1990 年代からの成長期(慣用句の意味に関する研究や諸外国語との対照研究)、さらに 2000 年以降の発展期(慣用句データベースの作成やコーパスを用いた慣用句研究)を経てきた。以上の確認のちに、この章では、コーパスの研究史及び慣用句研究におけるコーパス利用の可能性について述べた。

第2章では、まず書籍コーパスから1,000句近くの慣用句の使用度数を調査した。度数順位に従い、ほとんど使わない慣用句からよく使う慣用句まで5つに区分し、各区分に含まれる慣用句の意味分野を観察した。その結果、全体としても各区分においても、用の類（動詞の類）、そして「人間活動—精神および行為」という部門に含まれる慣用句が多いことが分かった。使用度数を考慮しつつ意味分野を詳細に記述することにより、各意味分野にどのような慣用句が分布するのか、それがどのくらい使用されるのか、を提示した。

そして、新聞記事を資料とし、同様の分析手法を用いて調査した。二種の調査結果に対し、相関係数を算出することにより、書籍・新聞という異なるレジスターによる慣用句使用度数の分布差異が見られるかどうか、を解明した。結果として、相関係数が0.7を超え、2つのデータには強い正の相関があることが示唆された。それに基づき、片方の資料における使用度数が多いと、もう片方の資料における使用度数も多く、異なるレジスター間の分布差異が見られないことを指摘した。

第3章では、書籍のうち、各ジャンルにおける各慣用句の使用度数を把握するとともに、全体的に使用度数が多くても少数のジャンルにしか高頻度で使用されない慣用句や、全体的に使用度数が少なくても複数のジャンルにわたって低頻度で広く使用される慣用句を確認し、複数のジャンルにわたって高頻度で使用される慣用句を基幹慣用句として選定した。基幹慣用句がその反対の立場に位置する慣用句、つまり、少数のジャンルにおいて低頻度で使用される慣用句と区別される背景に、慣用句の構成要素が大きく影響することを提示した。

第2部第4章では、「鳥肌が立つ」が1362年ごろ『河海抄』に寒さの表現として使われ始め、1929年ごろまでには、寒さや恐怖の表現として認識され、1929年に小林多喜二『不在地主』に興奮の表現としてはじめて使われたことを明らかにした。寒さを表す用法を本来の用法、恐怖を表す用法をネガティブな用法、興奮を表す用法をポジティブな用法とするならば、新聞記事データベースにおいて、ポジティブな用法はおおよそ1990年代以降ネガティブな用法を上回り、その後広く定着したことを明らかにした。

第5章では、「足を洗う」が通常、好ましくないことをやめる表現とされてきたが、1900年代島崎藤村『破戒』、『並木』に好ましいことをやめる表現として使われ始め、それ以降用例数が徐々に増加し、現在の新聞記事では、おおよそ3例に1例が好ましいことに使用されることを解明した。実際の用例に基づく好ましいことと、好ましくないことの度数順位を提示することにより、〈動作主〉が〈対象〉から/の足を洗うという文型をとる場合、「足を洗う」とよく共起する〈対象〉を見出した。

第 6 章では、「まんじりともせず」の構成要素「まんじり」がどのような意味・用法を担っているのか、それが類義語「まじまじ」の意味・用法とどう関連するのかを明らかにすることにより、「まんじりともせず」が慣用句として成立した理由を通時的に考察した。結果として、多義性をもつ「まんじり」は「まじまじ」との意味分担を有しつつ、多義性が解消され、否定形式の動詞と結びつき、「まんじりともせず」の形で定着したことを解明した。それにより、ある言葉は特定の意味内容と表現形式に多用されると、慣用句の構成要素として限定されやすい、という見解を提示した。

第 7 章では、これまでの慣用句に関する研究、特に日本語の慣用句を外国語の慣用句と対照した研究は、教育現場から問題点や研究課題のヒントを得てきたが、一方で研究成果を教育現場に還元し、学習者の慣用句習得や日本語教師の慣用句指導に役立てる試みはまだ十分になされてきたとは言いがたい、ということを指摘した。そこで、日本語教育現場に存在する問題点を意識しながら、コーパス利用による慣用句意味記述の有効性を提案し、学習者用の慣用句辞典項目を試作した。

結論では、本論文をまとめるとともに、今後の課題と展望を記す。

なお、本論文は中国国家留学基金管理委员会及び日本電通育英会の支援による研究成果である。また、第 2 部事例研究は、「通時コーパスに基づく日本語慣用句の意味分析」と題した、平成 27 年度北海道大学大学院文学研究科研究プロジェクト「人文学と社会」リサーチ・アシスタント（RA）勤務期間中の研究成果であることをここに付言しておきたい。

目 次

序論 研究の目的と概要	1
1 研究背景	1
2 研究目的	1
3 本研究で利用するコーパス	2
第1部 基本分析編	5
第1章 研究史	6
1.1 慣用句の定義と特徴	6
1.2 慣用句に関する先行研究の概観	11
1.2.1 慣用句研究の萌芽期	11
1.2.2 慣用句研究の模索期	13
1.2.3 慣用句研究の確立期	14
1.2.4 慣用句研究の成長期	15
1.2.5 慣用句研究の発展期	17
1.3 コーパス日本語学の発展	18
1.4 慣用句研究におけるコーパス利用の可能性	20
第2章 現代日本語における慣用句の使用度数	23
2.1 はじめに	23
2.2 BCCWJ における慣用句の使用度数	23
2.3 考察	30
2.3.1 類からみる各区分の慣用句	34
2.3.2 部門からみる各区分の慣用句	35
2.3.3 中項目からみる各区分の慣用句	38
2.4 BCCWJ と新聞記事を用いた調査結果の相関分析	44
2.4.1 調査結果の概要	45
2.4.2 二種のデータに関する相関分析	50
2.5 本章のまとめ	53

第3章 現代日本語における基幹慣用句の選定	54
3.1 はじめに	54
3.2 基幹慣用句とは	54
3.3 選定基準	55
3.3.1 林（1971）による選定基準	55
3.3.2 土屋（1992）による選定基準	56
3.3.3 本研究で用いた選定基準	56
3.4 調査結果の概要	58
3.5 考察	60
3.6 本章のまとめ	65
第2部 事例研究編	67
第4章 慣用句の意味拡大（1）	68
4.1 はじめに	68
4.2 「国語に関する世論調査」の結果及び各種辞書における意味記述	69
4.3 新聞記事データベースを利用した使用実態調査	74
4.3.1 調査概要	74
4.3.2 各種用法の用例	76
4.3.3 調査結果	82
4.4 BCCWJ の用例	83
4.5 近代の用例	86
4.6 本章のまとめ	87
第5章 慣用句の意味拡大（2）	89
5.1 はじめに	89
5.2 「足を洗う」の意味・用法の分類	90
5.3 現代語における用例	91
5.3.1 「足を洗う①」の用例	93
5.3.2 「足を洗う②」の用例	94
5.4 「足を洗う」の歴史的変遷	96
5.4.1 近世までの用例	96
5.4.2 近代の用例	97
5.5 「足を洗う②」の生じた原因	98
5.6 本章のまとめ	99

第 6 章 慣用句の意味縮小	101
6.1 はじめに	101
6.2 現代語における用例	103
6.3 「まんじり」の歴史的変遷	107
6.3.1 近世までの用例	107
6.3.2 近代の用例	109
6.4 「まじまじ」との関係	109
6.5 本章のまとめ	112
第 7 章 日本語教育への応用に向けた展望	114
7.1 慣用句研究と日本語教育	114
7.2 コーパス利用による慣用句意味記述の有効性	116
7.2.1 「鳥肌が立つ」がどのような用法として使用されるか	116
7.2.2 「足を洗う」がどの要素と共起するか	117
7.2.3 「まんじりともせず」にはどのような形式上の変種があるか	118
7.3 慣用句辞典項目の試作	120
結論 全体のまとめと今後の展望	123
1 全体のまとめ	123
2 課題と展望	125
参考文献	128
添付資料	135
資料 1 基本慣用句一覧	135
資料 2 慣用句に関する主要先行研究一覧	157
資料 3 基本慣用句の分類番号一覧	163
謝 辞	179

序論 研究の目的と概要

1 研究背景

語彙の特性に関する研究においては、語彙の数量的側面と意味的側面に着目するものが少なくない（田島 2003、田中 2002、広瀬 2003）。田島氏（以下、本文敬称略）（2000:83、2003:112）は両者を生かした研究方法の有効性を指摘する。

一方、慣用句の研究に関しては、個別の慣用句（佐々木 2013 など）、あるいは形態や意味において共通した特徴をもつ複数の慣用句（支・吉田 2003 など）を対象とした数量的・意味的分析は、これまでも若干なされているものの、慣用句全体を対象とした数量的・意味的分析はまだない。慣用句の研究が盛んに行われてきたなかで、定量的研究と定性的研究が慣用句の研究にとって重要な意味をもつ。

かつては、慣用句の数の多さや用例採集の困難さにより、数量的・意味的分析は難しかった。しかし、近年、コンピュータ技術の発達により様々なコーパス¹が構築され、このような研究が可能になった。そこで、本研究は、そうした言語資料を活用し、慣用句の数量的・意味的分析を試みようとするものである。

慣用句を対象とした研究には、大きく分けて 3 つの方向性がある。すなわち、個別の慣用句、形態や意味において共通した特徴をもつ複数の慣用句、あるいは慣用句全体を取り上げる研究方向である。形態や意味において共通した特徴をもつ複数の慣用句を対象とした研究には、慣用句の構成要素（身体部位詞や動物名称など）に着目したものが多いが、意味的なまとまりの慣用句の研究はまだ十分とは言えない。そのため、呉（2010、2013、2014a）は、「怒り」を表す慣用句という類義の慣用句を取り上げ、その使用意識と使用実態に関する計量的調査、及び共通した意味以外のところで互いに区別される意味特徴に関する質的分析を試みた。これを受けて、本論文では残された課題である慣用句全体及び個別の慣用句を研究対象とする、という方向性を提示する。

2 研究目的

本論文の目的は、(1) 慣用句の使用度数²と意味分野の把握、(2) 現代日本語における基

¹ コーパスとは、「大規模に収集され電子化された言語資料」のことである。狭義には、研究目的で設計され、話し手・書き手に関する情報や単語の品詞情報、文の係り受け情報などの研究に資する情報を付与した言語資料のことを指すが、広義には、電子化されたテキストを単に収集しただけの言語資料も含む（後藤 1995:74-78、砂川 2010:99）。

² 荻野（2007:43）によると、語彙調査の結果から得られる情報として、「いる」とか「山」とかのそれぞ

幹慣用句の選定、(3) 慣用句の通時的変化に見られる類型や要因の発見、(4) 個別の慣用句の意味・用法に関する記述、の 4 点である。最終的には、これらの研究成果を日本語教育と関連付け、学習者向けの慣用句辞典記述への応用を目指したい。

周知のとおり、初級レベルの学習者が学ぶ日本語では話す技能が重視され、読み書きについて深く学ぶことは難しい。しかし、中級レベルに入ると、読み書きの日本語の基礎をしっかりと身に付ける必要がある。中上級ではさらにその輪を大きくし、読み書きの力を高めていかなければならない。そのため、中級以降の日本語教育においては、慣用句のような難しい表現もしばしば取り上げられるようになる。現代日本語における慣用句の使用実態は、慣用句指導にとって避けて通れない問題である。そこで、本研究ではコーパスを利用して、これまであまり調査されたことのなかった慣用句の使用度数と意味変遷について分析を行う。

まず、慣用句全体を研究対象とし、どのような意味分野にどのような慣用句が分布するのか、それがどのくらい使われるのかについて、二種のコーパスから調査を行ったうえで、両者の結果を比較する。次いで、慣用句がいくつのジャンルにわたって出現するかを表す「広さ」と、使用度数の多少を表す「深さ」を指標として、慣用句の基幹度を測り、基幹慣用句を選定する。それから、意味拡大と意味縮小の事例として複数の慣用句を取り上げ、コーパスからの用例採集を行いつつ、意味・用法を詳細に記述する。各種コーパスを総合的に通時コーパスとして捉えたと、慣用句の意味・用法に見られる通時的変化及び意味変遷の類型を見出すことができる。

3 本研究で利用するコーパス

本研究の用例採集に利用したコーパス³は、以下のとおりである。

一、上古・中古・中世・近世を中心とするもの

○『大系本文（日本古典文学・断本）データベース』<https://www.nijl.ac.jp/pages/database/>

国文学研究資料館『大系本文（日本古典文学・断本）データベース』は、岩波書店刊行の旧版『日本古典文学大系』の 556 作品及び東京堂出版刊行の『断本大系』の 329 作品を収録しており、全文検索とテキスト閲覧が可能である⁴。

れの語について何回出てきたかを使用度数という。度数の多い順に並べて順位をつけたものを度数順位という。

³ ここに掲げたコーパスのなかで、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』を除くと、ほかのコーパスは、新聞、雑誌、小説といった特定のジャンルのテキストを機械可読化したものであり、日本語に対する代表性を持たないため、狭義の「コーパス」とは言えない（後藤 1995:74-78、杉本 2010:180）。本論文では、広義に従い、こういった電子化された言語資料を全部含めて「コーパス」と言う。

⁴ 大系本文（日本古典文学）データベースは、2016 年 1 月 29 日に公開が休止され、2016 年 6 月 24 日に日本古典文学大系本文データベースに改称し、<http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb/>（最終アクセス 2016 年 11 月 29 日）で公開されている。また、大系本文（断本）データベースは、2016 年 1 月 29 日に断本大系本文データベースに改称し、<http://base1.nijl.ac.jp/~hanashibon/>（最終アクセス 2016 年 11 月 29 日）で公開されている。

二、明治～昭和戦前を中心とするもの

○『青空文庫』 <http://www.aozora.gr.jp/>

『青空文庫』は、日本国内において著作権が消滅した文学作品を主に収集・公開しているインターネット上の電子図書館である。富田倫生が中心となり、1997年に設立された。作品の電子化は現在も進められており、2016年7月3日現在、約13,706点の作品が登録されている。

明治期から昭和戦前の作品が大部分を占め、一部現代の作品もある。ジャンルは政治から趣味まで幅広いが、文学作品（時代小説・探偵小説などの娯楽作品も含む）が比較的多い。必ずしも著名な作品がすべてそろっているとは言えないが、日本語作品に関しては相当充実してきている（外国語作品の場合、翻訳者の著作権の関係で、まだ数が少ない）⁵。

○『近代語のコーパス』 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/

国立国語研究所コーパス開発センターにより公開の『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』の4つを利用する。

『太陽コーパス』（2005年公開）は明治後期～大正期の総合雑誌『太陽』（博文館刊）から、1895年（明治28年）、1901年（明治34年）、1909年（明治42年）、1917年（大正6年）、1925年（大正14年）の5年分を抽出した全文コーパスである。総文字数は約1,450万字である。

『近代女性雑誌コーパス』（2006年公開）は明治後期～大正期の女性雑誌『女学雑誌』（女学雑誌社、1894年・1895年31冊）、『女学世界』（博文館、1909年6冊）、『婦人倶楽部』（講談社、1925年3冊）の3種から40冊を抽出した全文コーパスである。総文字数は約210万字である。

『明六雑誌コーパス』（2012年公開）は明治初期の学術啓蒙雑誌『明六雑誌』（明六社刊、1874年～1875年）全号の全文コーパスである。総語数は約18万語である。

『国民之友コーパス』（2014年公開）は明治中期の雑誌『国民之友』の1～36号（民友社刊、1887年～1888年）の全文コーパスである。総語数は約101万語である。

三、昭和戦後～今日を中心とするもの

○『現代日本語書き言葉均衡コーパス』 http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下においてはこのコーパスの英語名“the Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese”の略語「BCCWJ」を用いてこのコーパスを指すこととする）は国立国語研究所を中心に開発された、現代日本語の書き言葉を対象とした大規模な均衡コーパスである。1億430万語のデータを格納したこのコーパスは、日

⁵ <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9D%92%E7%A9%BA%E6%96%87%E5%BA%AB>（最終アクセス2016年11月29日）を参照。

本語では初となる均衡コーパスであり、綿密な調査に基づいたコーパスデザインを持ち、母集団に対する統計的な代表性を有するサンプリングが実施されているという点に、最大の特徴がある（丸山 2013:123）。

BCCWJ に収録されているテキストの種類と語数の一覧を、表 1 に挙げる。全体は、合計 172,675 個のサンプルによって構成されている。このうち、特に母集団の定義と代表性を保障するサンプリングが実施されているのは、書籍、雑誌、新聞の部分である（丸山 2013:123）。

表 1 BCCWJ に収録されたテキストの種類と語数（概数）

書籍*	6,270	教科書*	90	韻文*	20
雑誌*	440	広報紙†	380	法律†	110
新聞*	140	Yahoo! 知恵袋†	1,030	国会会議録†	510
白書*	490	Yahoo! ブログ†	1,020		

（単位：万語）

丸山（2013:123）より引用

○『聞蔵Ⅱビジュアル』<http://database.asahi.com/index.shtml>

本研究では、北海道大学附属図書館を通して検索できる新聞記事データベースのなかから、朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』に絞り込み調査を行う。『聞蔵Ⅱビジュアル』は日本国内外の多くの大学や図書館などに利用されるオンライン記事データベースであり、その概要は次のとおりである。

- ①1879 年（明治 12 年）の創刊号から今日まで、135 年を超える期間に刊行された紙面から、約 1,500 万件の記事・広告が検索可能。日本国内最大級の新聞記事データベースで、沖縄を除く 46 都道府県の全地域面を収録。
- ②1985 年から現在までは記事の全文検索、テキスト本文の表示が可能。
- ③1879 年から 1999 年までは記事の見出し・キーワード等による検索、紙面イメージ(PDF)の表示が可能。
- ④雑誌「AERA」「週刊朝日」の記事も収録。
- ⑤2005 年 11 月以降は切り抜きイメージ (PDF) も利用可能。

本研究では、1986 年 1 月 1 日～2015 年 12 月 31 日まで 30 年間の記事を検索する（最終アクセス 2016 年 6 月 13 日）。なお、『聞蔵Ⅱビジュアル』のほかに、適宜、毎日新聞社『毎索（マイサク）』（検索範囲 1987 年 1 月 1 日～2015 年 12 月 31 日、最終アクセス 2016 年 5 月 23 日）、読売新聞社『ヨミダス歴史館』（検索範囲 1986 年 1 月 1 日～2015 年 12 月 31 日、最終アクセス 2016 年 5 月 23 日）も利用する。

第 1 部
基本分析編

第1章 研究史

1.1 慣用句の定義と特徴

「相槌を打つ」、「足を洗う」、「油を売る」といった表現はわれわれがよく知っている慣用句である。ここに言う慣用句とは、2つ以上の語が結合したもので、さらに次のいずれかの特徴⁶に該当する語彙的単位のことである、と暫定的に理解することにしよう。

(1) 普通の連語とは異なり、構成要素を自由に類義語や反義語に置き換えることができず、形式的に定まっている。たとえば、慣用句「油を売る」は、類義語「オイルを売る」や反義語「油を買う」に置き換えることができない⁷。

(2) 普通の連語ほど統語的操作の可否が均一ではない。たとえば、「相槌を打つ」という表現に対し、「相槌を打たない」(否定形式にする)や「相槌を上手に打つ」(連用修飾語を挿入する)、「上手に相槌を打つ」(連用修飾語を付加する)とは言えても、「打った相槌」(名詞句に転換する)や「相槌が打たれる」(受身表現にする)とは言えない。つまり、受けられる統語的操作と受けられない操作が限定されている。これに対し、「言葉を言う」という普通の連語はこのような統語的操作をより自由に受けることができる⁸。

(3) 全体の意味が定まっており、それぞれの構成要素の意味から導き出されない。たとえば、「足を洗う」は水などを使って足の汚れを取り去るという文字通りの意味があるが、慣用句として使用されるときは、人が長時間にわたって、好ましくない職業・事柄・生活との関係を断って良い状態になるという意味になる。

上記に掲げるすべての要件を満たす場合、つまり、形式的、統語的、意味的に固定した2つ以上の語が結合した表現は典型的な慣用句⁹であると言えよう。

なお、複合語も構成要素間の結びつきが緊密であり、その意味も構成要素の意味を足し

⁶ 米川・大谷(2005:538-540)を参照。

⁷ ただし、「兜を脱ぐ」と「シャッポを脱ぐ」などのように、類義語である「兜」と「シャッポ」のいずれを用いても同じ意味を表わせる場合がまれにある(靱山 2002:127)。

⁸ 普通の連語でも何らかの統語的制約を受けるものが多い。たとえば、「日本語を勉強する」は「日本語が勉強される」(受身表現)、「チャンスを得る」は「チャンスをお得になる」(敬語表現)とは言えない。本研究ではとりあえず、先行研究にのっとり、慣用句は普通の連語と比べ、相対的に統語的制約が強いものであると見なす。

⁹ 「典型的な慣用句」と対立する概念として、「周辺の慣用句」というものがある。飛鳥(1982)、石田(1999)、石田(2000)、石田(2004)は、慣用性(慣用句らしさ)という尺度を設定して、慣用句の階層関係について論じている。これらの論述により、慣用句を典型的なものから周辺のものへと分類することが可能であるということが示唆されている。

合わせたものになるとは限らないが¹⁰、慣用句は通常、語以上文以下の単位、つまり語と文の中間段階に位置するものとして設定されているため、ここでは、すでに一語化したと見られる複合語は慣用句と見なさない。

以下、本論文では、2 つ以上の語が結びつき、形式的・統語的・意味的にある程度固定した句レベルのものを慣用句と定める。慣用句という概念に関する従来の理解は、現実には狭義と広義の理解の仕方がある。もっとも広義にとらえた場合には、慣用化した表現や慣用表現と同義に用いられる。

たとえば、佐々木（1995:42）を参照すると、慣用句は全部で約 2,000 句あるという¹¹。一方、倉持保男・阪田雪子編『三省堂慣用句便覧』（三省堂、1998 年）には日常の言語生活で使用頻度の高い慣用句、約 4,500 項目が収録されている。この場合、前者は狭義にとらえるのに対して、後者は広義にとらえる。本論文に言う慣用句は、特別な説明がない限り、すべて狭義の理解に基づく。

では、現代の社会で使用されている日本語の慣用句はいったいどのくらいあるのだろうか。森田（1966:71）が、主要辞典・新聞・雑誌・小説類・教科書、及び話し言葉としてテレビ・日常会話中の言葉について、慣用的な言い方と思われるものを調査した結果、1,806 句が認められている。宮地（1982）『慣用句の意味と用法』掲載の「常用慣用句一覧」¹²を調べると、1,280 句¹³の慣用句がある。このように、調査範囲や調査方法により、その結果も大きく異なるため、慣用句の数についてはまだ定説に至っていないと言える。

参考に、1990 年以降日本で出版された専門の日本語慣用句辞典の収録数を表 1 に示す。これらの辞典のうち、⑨の収録数が約 3,700 句と最も多い。ほかの慣用句辞典と収録数が大きく異なるのは、「日常生活でよく用いられている慣用句を中心に、故事・ことわざ・連語をも含めて」（井上 1992:ii）という編集趣旨に関わると考えられる。そのほかの慣用句辞典にもことわざ・格言¹⁴の類が若干含まれており、これを鑑みて大まかに言えば、現代日本語においては、およそ 2,000 句の慣用句が認められるであろう。

¹⁰ これについて、佐久間・加藤・町田（2004:108）の指摘がある。たとえば、「酒飲み」という複合語は、「酒を飲むこと」ではなく「酒を（たくさん）飲む人」を意味し、「湯飲み」は、「湯を飲むこと」ではなく「湯を飲むための器」を意味している。

¹¹ 詳しくは、水谷修ほか編『日本事情ハンドブック』（大修館書店、1995 年）の「日本語の慣用句」の項（佐々木瑞枝執筆、pp. 42-43）を参照されたい。

¹² 「常用慣用句一覧」は宮地（1982）が日本の児童生徒の学習用国語辞典五種（小学校五・六年生から中学校一年生あたり向けのもの。三省堂『小学国語辞典』、旺文社『小学学習国語辞典』、講談社『新国語辞典』、小学館『学習国語辞典』、学習研究社『学習国語辞典』）に記載されている慣用句を一覧にした「基本慣用句表」と『慣用句の意味と用法』所収の慣用句とを合わせて作ったものである。

¹³ これは、宮地（1982）が同じ項目の中で「/」で区切ったものを 1 つと数えた結果である。

¹⁴ 後述のとおり、ことわざ・格言は歴史的・社会的に安定した価値観をもつ。これに対して、慣用句はことわざ・格言ほどの価値観を伴わず、語句が比喩的、象徴的に用いられる。また、ことわざ・格言は 1 つの文として成立し、単独で使える点で慣用句と区別される。しかし、実際にはことわざ・格言と慣用句との判別は難しい場合があるため、慣用句とことわざ・格言の双方を掲載する辞典が多い。

表 1 各種慣用句辞典の収録数

番号	辞典名、編者、出版年、出版社	収録数
①	『用例でわかる慣用句辞典』改訂第2版、学研辞典編集部、2014、学研教育出版	約 3,000
②	『慣用句の辞典—日本語を使いさばく』、現代言語研究会、2007、あすとり出版	約 2,000
③	『日本語慣用句辞典』、米川明彦・大谷伊都子、2005、東京堂出版	1,563
④	『意味から引ける慣用句辞典』、丹野顯、1998、日本実業出版社	約 1,100
⑤	『使える慣用句事典—言いたい言葉がすぐに見つかる!』、日本語表現研究会、1997、PHP 研究所	約 1,150
⑥	『新選慣用句の辞典—気のきいた言葉 豊かな文章表現』、中嶋尚監修、1996、小学館	2,850
⑦	『慣用句の辞典』新装版、倉持保男・阪田雪子、1994、三省堂	約 3,500
⑧	『すぐに役立つ慣用句用例新辞典』、現代言語研究会、1993、あすとり出版	約 2,200
⑨	『例解慣用句辞典—言いたい内容から逆引きできる』、井上宗雄監修、1992、創拓社	約 3,700
⑩	『ルーツでなるほど慣用句辞典』、集英社辞典編集部、1991、集英社	約 2,300

佐藤（2007）は、次に示す5種類の資料¹⁵に、どのような慣用句が掲載されているかを調べ、その結果を『基本慣用句五種対照表』として整理した。

- ①金田一春彦・金田一秀穂監修『新レインボー小学国語辞典改訂第3版』学研、2005
- ②宮地裕編『慣用句の意味と用法』明治書院、1982
- ③米川明彦・大谷伊都子編『日本語慣用句辞典』東京堂出版、2005
- ④金田一秀穂監修『小学生のまんが慣用句辞典』学研、2005
- ⑤金田一京助編『小学館学習国語新辞典全訂第二版』小学館、2006

最新版（v0.95-2007年5月28日）『基本慣用句五種対照表』には3,628の表現が収録されており、それぞれ慣用句1,918、ことわざ344、四字熟語265、故事成語63、種別が不明なもの1,038である。さらに、橋本・河原（2008）が上記5文献中3文献以上で言及されている慣用句を抽出した結果、全部で926句¹⁶があるという。これらの慣用句はより基本的なものであると考えられる。

もちろん、この926句の慣用句はまったく問題がないわけではない。たとえば、「折り紙付き」という言葉がリストに挙がっているが、これは前に指摘したとおり、慣用句ではなく、複合語なのである。ただし、926句のうち、このような慣用句以外のものはごく一部に過ぎないため、ほとんどが慣用句と言って差し支えはないと考えられる。したがって、現

¹⁵ 掲載順は『基本慣用句五種対照表』によった。5種類の資料は小学生用の国語辞典2冊（①と⑤）、専門的な慣用句辞典2冊（③と④）、慣用句の言語学文献1冊（②）である。

¹⁶ 926句の内訳は、橋本・河原「OpenMWE for Japanese」<<http://openmwe.osdn.jp/wiki-j/#nab7f229>>（最終アクセス2015年6月27日）から確認した。詳細は資料1を参照されたい。また、5種類の資料における各慣用句の収録状況及び付与されたIDなどそのほかの情報は、『基本慣用句五種対照表』を参照されたい。

代日本語には、およそ 2,000 句の慣用句があり、うち 1,000 句近くが基本的なものであるという結論を導くことができる。

上に述べた慣用句の特徴は、慣用句の形式的・統語的・意味的側面に着目したものだが、音韻的側面はどのような特徴をもつのか。これについて、上記 926 句の慣用句のモーラ数を数えた。その結果を図 1 に示す。

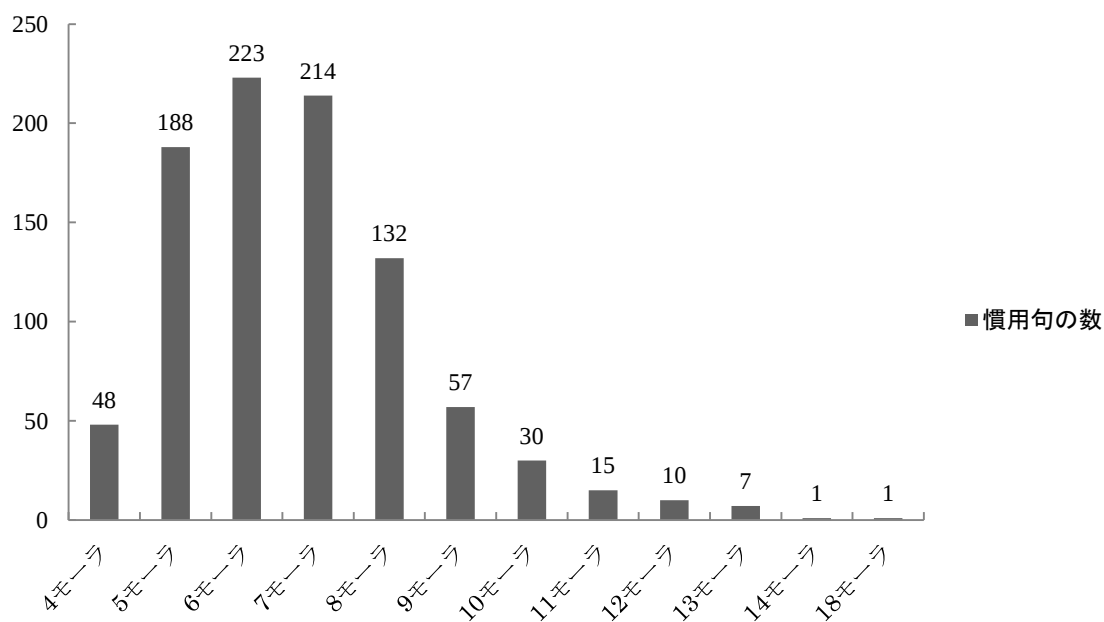


図 1 慣用句のモーラ数

図 1 から、6 モーラの慣用句が最も多く、7 モーラと 5 モーラの慣用句がそれに次ぐことが明らかになった。なぜこのような結果となったのかを明らかにするため、格助詞「が」、「に」、「を」を含む慣用句のみを取り出し、格助詞の前後に来る語のモーラ数を表 2 に整理した。

簡潔に述べると、格助詞の前後に 2 モーラ、あるいは 3 モーラの語が来ることが多いため、慣用句全体が 6 モーラになる確率が高い。また、「手」や「目」のような 1 モーラの身体部位詞を構成要素にもち、その後ろに 1 モーラの格助詞、さらに 3 モーラの形容詞や動詞が付くことが多いため、5 モーラの慣用句も少なくない。こうした理由により、慣用句のモーラ数は 5 モーラから 7 モーラになりやすい。特に指摘しておきたいのは、これらのうち動詞慣用句、特に格助詞「を」が使われるものがとりわけ多い、ということである。

慣用句が 7 モーラに収まることが多いもう 1 つの理由として挙げられるのが、リズムのよさである。リズムが良ければ言いやすく、記憶にも残りやすくなる。そして、それが繰り返し使用されると、慣用句として定着しやすいということが背景にある。

表 2 慣用句のモーラ数と構造

モーラ数	慣用句の構造	格助詞	例
5 モーラ 【180 句】 (そのほか 8 句を除く)	1 モーラ + 格助詞 + 3 モーラ 【 78 句】	が【20 句】	気が重い
		に【18 句】	気に障る
		を【40 句】	気を落とす
	2 モーラ + 格助詞 + 2 モーラ 【102 句】	が【20 句】	足が付く
		に【28 句】	板につく
		を【54 句】	あごを出す
6 モーラ 【183 句】 (そのほか 40 句を除く)	1 モーラ + 格助詞 + 4 モーラ 【 24 句】	が【 7 句】	気が置けない
		に【 4 句】	気に食わない
		を【13 句】	意を決する
	2 モーラ + 格助詞 + 3 モーラ 【113 句】	が【39 句】	足がすくむ
		に【16 句】	かさに懸かる
		を【58 句】	足を洗う
	3 モーラ + 格助詞 + 2 モーラ 【 46 句】	が【 6 句】	脂が乗る
		に【 8 句】	頭に来る
		を【32 句】	油を売る
7 モーラ 【151 句】 (そのほか 63 句を除く)	1 モーラ + 格助詞 + 5 モーラ 【 10 句】	が【 3 句】	気が遠くなる
		に【 2 句】	身につまされる
		を【 5 句】	気を取り直す
	2 モーラ + 格助詞 + 4 モーラ 【 47 句】	が【11 句】	当てが外れる
		に【 6 句】	鬼に金棒
		を【30 句】	足を引っ張る
	3 モーラ + 格助詞 + 3 モーラ 【 71 句】	が【13 句】	頭が下がる
		に【14 句】	小耳に挟む
		を【44 句】	異彩を放つ
	4 モーラ + 格助詞 + 2 モーラ 【 23 句】	が【 1 句】	波風が立つ
		に【 7 句】	一笑に付す
		を【15 句】	相づちを打つ
8 モーラ 【 75 句】 (そのほか 57 句を除く)	1 モーラ + 格助詞 + 6 モーラ 【 1 句】	が【 1 句】	手が付けられない
		に【 0 句】	該当なし
		を【 0 句】	該当なし
	2 モーラ + 格助詞 + 5 モーラ 【16 句】	が【 2 句】	首が回らない
		に【 3 句】	腹に据えかねる
		を【11 句】	息を吹き返す
	3 モーラ + 格助詞 + 4 モーラ 【20 句】	が【 3 句】	歯の根が合わない
		に【 4 句】	あっけに取られる
		を【13 句】	頭を抱える
	4 モーラ + 格助詞 + 3 モーラ 【30 句】	が【 7 句】	軍配が上がる
		に【 4 句】	やり玉に挙げる
		を【19 句】	青筋を立てる
	5 モーラ + 格助詞 + 2 モーラ 【 8 句】	が【 3 句】	かんこ鳥が鳴く
		に【 0 句】	該当なし
		を【 5 句】	横車を押す

そもそも言葉の本来の目的は、相手に言いたいことを伝えることである。したがって、簡潔で的確に意味を伝えることが大事である。場合によっては、慣用句を使うことで、長々と状況を説明せずに済むことがある。たとえば、「仕事中に無駄話などをして怠けるんじゃないよ」という意味を表すには、「油を売るんじゃないよ」と言えば意味が伝わる。このように、慣用句は比喩的な意味や評価的な意味を伴い、一般の語句より表現力が豊かでありながらも、一般の語句より簡潔で短い。このような特徴があるため、慣用句が文章や会話の中で使用され、人間の言語生活において大きな役割を果たしている。

1.2 慣用句に関する先行研究の概観

本節では、日本語慣用句の計量的・質的分析の予備的考察として、まず慣用句をめぐる先行研究を概観したい。慣用句の研究史を遡れば白石（1942）に行き着くと言われるが、現在行われている研究が本格的に始まったのは1970年代のことである。70年あまりの研究史を概観すると、おおよそ5つの段階に分けることができる。以下では、各段階において行われた研究を紹介する。なお、慣用句に関する主要研究一覧は添付資料2を参照。

1.2.1 慣用句研究の萌芽期

白石（1942:147）はまず、「慣用」という表現の用法を文献から確認している。概していえば、「慣用は文法に対して個々の事実であるが、同時にそのことは、慣用は文法に対して個別的であり、具体的である」、つまり、慣用は文法に基づく分析ができないものである。白石の説明を援用するならば、「慣用語」は慣用される語であり、その内容として以下のものが挙げられる（白石 1942:152-154）。

- ①日常的な使い方であり、挨拶のときなどに使う決まり文句。たとえば、「お供いたしましょう」、「ご一緒しましょう」。
- ②一般用語として固定し、特殊な語感を持つようになった官庁用語。たとえば、「児童」という用語は自由主義的な教育思潮の時代に固定した特殊の語感を持つ語。
- ③ある限られた文人社会におけるその社会特有の特殊な言い回し。たとえば、「秋の夕暮」、「春雨ぞ降る」という和歌の慣用的表現。
- ④学問の世界で固定して使用している学術用語。たとえば、「閉音節」という用語。
- ⑤ある個人が常用する語、またはある個人の愛用する特殊な造語。
- ⑥ある国語特有の言い回し、ひいてはその国語。

つまり、慣用語は習慣的に用いられ、固定され、特殊な語感や意味内容を持っているも

のを指すという。広義では、上記のものを含むが、狭義では⑥「ある国語特有の言い回し」のみを指す。なお、「慣用語」と「慣用句」の用語の区別について、白石（1942:155）は、慣用語が慣用句を意味することもあるが、語法の面から考えると問題になるのは、その名称はともかくとして、慣用句であると述べている。

また、狭義の慣用句について、白石（1950:43-44）は、意味の構成法を中心にして考えると、以下の4つがあると指摘している。

- ①全体の意味が構成要素の意味からだけでは理解できないもの。たとえば、「骨が折れる」、「腹が立つ」の意味は文字通りの意味から予測できない。
- ②全体の意味が構成要素の意味から理解できるものではあるが、構成要素の意味が抽象的で具象性をかいているため、両者が結びついてはじめて意味のはっきりするようなもの。たとえば、「気が利く」の「気」が指し示している意味は抽象的である。
- ③全体の意味は構成要素の意味から理解できなくはないが、一方の意味が語源的にはたとえから来たようなもので、両者が結びついてはじめて意味のはっきりするようなもの。たとえば、「つまらないことに半日をつぶす」の「つぶす」は語源的にたとえから来た意味を持っている。
- ④句の表す動作自身に、その目的や理由や結果を暗示する意味があるため、句にもおのずから、構成要素の語の意味以上のものが加わって来るもの。たとえば、「床に入る」は「寝る」、「頭をかく」は「恥ずかしく思って体裁を繕う」という目的が暗示されている。

確かに、白石は一連の研究で慣用句の問題を取り扱っており、慣用句研究に主導的な役割を果たした。しかし、一連の研究には慣用句研究への萌芽は認められるものの、慣用句の本質規定があいまいになっているため、それが開花するには至らなかったように思われる。後に慣用句研究が進むにつれて、慣用句に対する認識も変わりつつあるため、当時の研究と現在の研究との関連性と区別を明確にする必要があると考えられる。白石（1969）の『国語慣用句辞典』には、実際どのような言葉が慣用句として並べられているのか、ア行の見出し項目を取り出して以下に示してみよう。

- ①「（～に）あやかる」、「恐れる」、「おちついている」のような語
- ②「うかうかと」、「えへへえ」、「おぎゃあ（と泣く）」のような擬音語・擬態語
- ③「ありがとうございます」、「お寒い」、「お安い御用」のような敬語
- ④「ああ」、「あっ（と）」、「いいのさ」のような応答語
- ⑤「お変わりございませんか」のような挨拶用語
- ⑥「頭を使う」、「うまい話」、「うまくいく」のような連語
- ⑦「油を売る」、「馬が合う」、「大目に見る」のような慣用句

- ⑧「あいよりいであいより青し」、「一を聞いて十を知る（悟る）」、「負うた子に教えられて浅瀬（浅い瀬）を渡る」のようなことわざ・格言

ア行に収められたすべての項目を取り出したわけではないが、現在慣用句として扱わないものが散見していることを、垣間見ることができる。上述の表現には、後に待遇表現やオノマトペに統合されるものが多い。当初慣用句やイディオムといった用語は、言語のいろいろな現象を指しており、使う人によって、その指す範囲は必ずしも一定ではなかったと言えよう。

1.2.2 慣用句研究の模索期

70年代に入ると、慣用句の認定に関する研究が行われたが、この段階は慣用句研究の模索期というべき時期である。「慣用句 (idiom)」に相当する用語として、それまでには「慣用句」、「慣用語」、「慣用語句」、「熟語」、「イディオム」などがあり、用語が確定するには至らなかった。この段階においても依然として「慣用句」、「慣用語句」という呼び名が使用されている。また、「慣用的ないいまわし」、「慣用的なくみあわせ」という呼び名を使う研究者もいる¹⁷。しかし、そのなかでも「慣用句」という用語が多用され、一般的な言い方になる傾向が見られる。そして、この段階で最も議論がなされたのは、慣用句と周辺概念との区別についてである。慣用句と連語、ことわざ・格言の意味概念を記述することにより、慣用句というカテゴリーに属する対象を明確にしようとするものがほとんどである。

たとえば、宮地（1974:113-119）は成句を類型的形式として二文節以上からなる句や文などとみて、それを①格言・ことわざ、②慣用句、③連語成句に分類する。格言・ことわざは歴史的・社会的に安定した価値観を持つ成句のことである。慣用句は格言・ことわざほどの価値観を伴わず、語句が比喩的・象徴的に用いられ、全体として派生的な意味をもつ。また、連語成句と称したものは、一般の連語より凝結度の高い成句のことである。成句のなかで、格言・ことわざは固定的であり、最も制約が厳しい。慣用句はこれらに次ぐものと言える。連語成句は結びつく相手が必ずしも1つとは限らず、「愚痴をこぼす」とも、「愚痴を言う」とも言えるようにいくつかの相手がありうるため、成句のなかでは制約の最も緩やかなほうに属する形と言える。

また高木（1974）は、典型的な慣用句について、

①名づける意味のひとまとまり性

¹⁷ 奥田（1978:40-41）は、「手を焼く」や「焼きを入れる」のように、形式的には2つの単語から成り立っていても、意味的には分割できない慣用句のことを「慣用的ないいまわし」、「世話を焼く」や「愚痴をこぼす」のように、組み合わせた2つの単語のうちの1つが自由な意味を保存し、もう1つが慣用句に縛られた意味になっている慣用句のことを「慣用的なくみあわせ」と名付け、後述の宮地（1974）の言う「慣用句」と「連語成句」とを区別している。

- ②表現手段の固定性
- ③使用におけるできあい性（既成品性）
- ④表現＝文体論的な特徴

という 4 つの側面からその特徴を記述している。ほかにこの段階の主な研究として、白石（1977a）、白石（1977b）、宮地（1977）などがある。

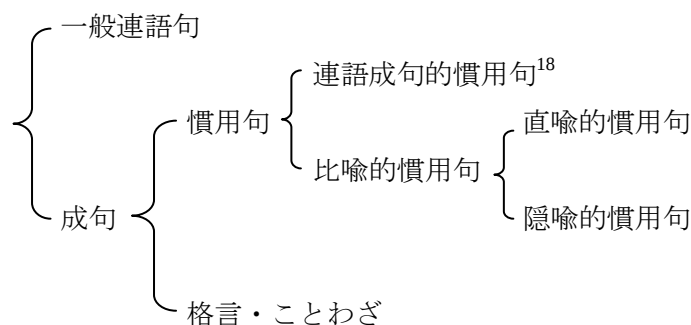
白石の研究では、慣用句には擬音語・擬態語、挨拶用語などの単語や文も含まれるため、それは言語体系の全部ということになる。それに対し、この段階の研究では、慣用句の本質規定は日本語体系の一部分に限定され、慣用句と周辺概念との区別化が試みられた。

1.2.3 慣用句研究の確立期

80 年代に入ると、初期に取り上げられた問題が整理され、慣用句の定義に対してもようやく共通の認識に至った。おそらくこの時期の最も功績の大きな研究は宮地（1982）であろう。日常ごく普通に使う慣用句に対して、具体的な文例に基づいて解説するほか、英語、中国語、フランス語、韓国語、タイ語の解釈も加え、対照言語学的な記述にまで手を広げた優れた研究である。

また、その中に収められた編者の「慣用句解説」では、「慣用句という用語は、一般に広く使われているけれども、その概念がはっきりしているわけではない。ただ、単語の 2 つ以上の連結体であって、その結びつきが比較的固く、全体で決まった意味を持つ言葉だという程度のところが、一般的な共通理解になっているだろう」（宮地 1982:238）というように慣用句の定義を述べている。この記述は後に多く引かれており、一般的に認められていると言えよう。本研究冒頭の慣用句の定義に対する解釈も宮地（1982）を踏襲している。

宮地（1982）はまた、上述の宮地（1974）の分類に対して修正を加え、連語成句を慣用句に入れている。つまり、慣用句には比喩的慣用句のほか、また連語成句的慣用句もある。その分類は以下のとおりである（便宜上、宮地の分類を横書きに直した）。



宮地（1982:238）より引用

¹⁸ 宮地の後の論文のなかで、「連語成句的慣用句」は「連語的慣用句」に改称された。

宮地（1982）は品詞別の特徴、語彙的な特徴、形式上の特徴、形式上の制約からみた特徴について、詳細に記述している。その後の慣用句研究で取り上げられる主要な問題がすでに言及されており、宮地（1982）の研究は慣用句研究に大きな影響を与えたと言えよう。

また、この時期において慣用句の構成や品詞性に着目した研究が行われた。なかには、慣用句論の様々な課題を論じた国広（1985）や、名詞と動詞の語結合を取り上げ、それらの語結合が表す意味と、語結合を構成する要素の意味との間のずれに着目し、これを慣用句、機能動詞結合、自由な語結合として区別した村木（1985）、動詞慣用句を句構成の形から考察した森田（1985）、形容詞慣用句について量的及び質的な調査を行った西尾（1985）、名詞慣用句とメタファーとの関わりを記述した大坪（1985）などがある。

1.2.4 慣用句研究の成長期

90年代に入ると多くの研究者が多彩なアプローチによって慣用句を取り上げ、慣用句は複数の分野の問題として一躍脚光を浴びるようになる。ここに、慣用句の研究は成長期に入ったと言える。まず認知言語学による慣用句の意味の解釈が注目される。慣用句は従来、言語研究の周辺的なものとされがちであり、理論的な研究が十分になされたとは言えない。80年代の認知言語学が意味論を飛躍的に発展させたため、それ以降は認知言語学による慣用句の意味に関する研究が始まった。

早くから中村（1977）は、固定連語は意味の抽象化により慣用句段階に進んだと指摘している。また、中村（1985）は身体部位詞を含む慣用句を取り上げ、その表す意味の抽象化のレベルと比喩性の関わりについて考察している。坂本（1982）は、慣用句も比喩もそれぞれの構成要素の意味を単に寄せ集めただけではその全体的な意味を得ることはできないという点では同じ条件にあるとみて、慣用句と比喩がいかんして関連付けられるかを考察している。糸山（1997）は隠喩・換喩・提喩に基づく慣用句の意味の成立を分析することにより、慣用句の体系的分類を行っている。

また、周知のとおり、慣用句には身体語彙を含むものが数多くある。従来の指摘によると、身体部位の本来の意味から別の意味への拡張には主に、比喩の生成プロセスとしてのメトニミーが関与している。これについて、有菌（2013）は「目」、「耳」、「鼻」を含む慣用句を取り上げながら、身体部位詞が行為のフレームに基づくメトニミーによって複数の意味に拡張していることを論じている。この論述により、身体部位詞はどのようなプロセスを経て基本義から派生義に拡張したのか、派生した意味同士には関連性が見られるのかななどの問題が解決できた。呉（2014b）は、「目」を含む中国語の慣用句や熟語を取り上げながら、有菌が提示した行為のフレームは中国語にも適用可能であることを検証した。

このように慣用句の定義と特徴、構成と品詞性、そして意味による議論が多くなされた中、一段落したかに見えていた研究は、外国人学習者が増えるにつれて、新たな展開を見

せる。外国人学習者向けの慣用句教育が国語における慣用句教育とともに検討されるようになってきた。国語における慣用句教育の研究には、小野ほか（1999）がある。

小野ほか（1999）では、小学校一年から六年までのテキストにおける慣用句の取り扱いを分析している。その結果、「小学校では、学年が上がるにつれて慣用句のレベルも高くなり、また単に暗記するものから意味を把握して使いこなせるようにするものへ、遊びながら学習するものから作文のなかで意識的に使用する学習へと変化していつている」（小野ほか 1999:71）ことが明らかにされた。教科書の分析から分かるように、どの学年においても、基本となるのは慣用句の意味と言葉の暗記であり、理屈なしに覚えさせようとするものがほとんどであるが、その原因は、「日常生活のなかで慣用句に触れる機会の多い日本語母語話者にとっては、語構成などから慣用句について学習していくよりも、その意味や使い方を暗記してしまう方が理解しやすい」（小野ほか 1999:70）ということである。

外国人学習者向けの慣用句教育について、中国を例に取り上げると、中国人日本語学習者に対する日本語慣用句の指導（韓 2005）や、慣用句の理解に見られる中国語の影響についての研究（薛・呉 2004）などがある。たとえば、韓（2005）では、教科書の実態及び日本語の慣用句に対する中国人日本語教師の指導法の実態と、日本語学習者の学習法の実態とを分析することにより、その問題点を教材、教師、授業のデザイン、日本語教育の環境の4つに分けて、その改善方法について提案している。

さらに、外国語の慣用句との対照研究も増えている。それらには、英語、中国語、ロシア語、タイ語など様々なものが見られるが、中国語との対照研究を例に取り上げると、主に同一の構成要素を含む慣用句を取り上げ、その数量や意味に注目したことが多い。

たとえば、支・吉田（2003）はまず日本語の「目」の意味と中国語の「眼」の意味について、

- ①視覚器官としての目から生じた意味
- ②目の形状から生じた意味
- ③接尾辞としての用法（日本語側のみ）
助数詞としての用法（中国語側のみ）

という3種類に大別している。次に、「目」を含む日本語の慣用句と「眼」を含む中国語の慣用句を対照した結果、「動物の視覚器官」という語義に由来する慣用句が最も多いことが、共通点として指摘されている。また、両言語の慣用句のニュアンスをプラス、マイナス、中立に分類すると、日本語の場合は、プラスのニュアンスを持つ句とマイナスのニュアンスを持つ句が相半ばするのに対し、中国語の場合は圧倒的にマイナスのニュアンスを持つ句が多いという。このように両者の異同を提示するところは興味深い。しかし、このような研究の多くは意味・用法にまで考察が及ぶことがまれで、ややもすれば慣用句の羅列にとどまる恐れがある。

1.2.5 慣用句研究の発展期

この時期には、まず、井門（2012）や 岡田・井門（2014）などによって、慣用句の意味解釈における語用論的推論からの議論がなされている。井門（2012）は、本来語レベルでの解釈を説明するために提案されたアドホック概念が、さらに大きな単位である句レベルでの解釈にも適用できるのか、イディオムを通して検討を加えた。

そして、コーパスによる慣用句の分析が始まっている。村田・山崎（2011）は慣用句を指標として文章資料のジャンルが判別できることを実証している。日本語学習者が文章ジャンルの違いをより一層意識化し、各ジャンルにおいて特徴的な表現を学んでいくことは中・上級レベル以降の学習の効率化につながると研究の意義付けをしている。このほか、慣用句のデータベースの作成やコーパスの構築など、工学的手法による多くの研究が見られる。

また、個別の慣用句を取り上げた、コーパスに基づく意味変化の研究としては、佐々木（2013）、岡田（2014）が挙げられる。佐々木（2013）は、日本語語彙体系の史的変遷に関する研究の一環として、「敷居が高い」という慣用句の意味・用法の変化について興味深い考察を行っている。この慣用句について、平成 20 年度（2008 年度）の「国語に関する世論調査」では、本来の意味である A と本来の意味と違う B の 2 つの意味を挙げている。

A 不義理や面目の立たないことがあって、その人の家に行きにくい。

B 高級すぎたり、上品過ぎたりして、入りにくい。

これに対して、佐々木（2013）は日本語本¹⁹などの記述を調べ、A、B のほかに、C を追加している。

C とつつきにくい、難しい、ハードルが高い（モノに対する用法）。

A→B→C のように用法が変化した理由として、佐々木（2013:4）は A「自分が作り出した不義理・不面目のために負い目を感じてどこかに行きにくい」という意味の「原因の作り手」の部分に変化して、B「場所そのものの持つ高級感や上品さが原因で劣等感を感じて店などに入りにくい」のような意味になり、さらに「敷居」によって示される空間の境界が単なる心理的障壁のみの意味に変化して C「難度・格などが原因でとつつきにくく敬遠される」という順で意味が抽象化されたのだと分析している。

また、これらの用法について、各種コーパスを利用し、江戸時代から現在までの出現数・

¹⁹ 新野（2011:2）は、現代日本語の意味を中心とした言語変化について論じるとき、「日本語本」という用語を「一般向けの、日本語について書かれた本」という意味で使用している。佐々木（2013）の言う「日本語本」もこの定義を踏襲していると見られる。

出現率の変化と実際の用法の変化を観察した結果、本来の意味である A よりもむしろ B、C の例のほうが優勢となっていることが明らかにされた。

上記に挙げた先行研究のほかに、文化庁が毎年実施する「国語に関する世論調査」においても、しばしば慣用句が取り上げられる。第 2 部事例研究において、二、三を例に、「国語に関する世論調査」の結果を検討する。

1.3 コーパス日本語学の発展

コーパス日本語学の研究史については、丸山（2013）が詳しい²⁰。コーパス日本語学の嚆矢は、1950 年代の国立国語研究所や計量国語学会による初期の調査・研究活動に求めることができる。しかしながら、そこで公開されたのは、語彙頻度表をはじめとする調査結果だけであり、集められた言語資料そのものが一般に公開されることはなかった。それからおよそ半世紀を経た 2011 年、約 1 億語の書き言葉を収録した BCCWJ が一般公開され、現代日本語の大規模な均衡コーパスに誰でもアクセスできるようになった。組織的に整備された大規模な日本語コーパスがはじめて研究者間で共有化されたという点において、コーパス日本語学は、現在、新たな段階を迎えているといつてよい（丸山 2013:105）。

丸山（2013）は、1950 年代以降における日本語コーパスの開発と利用の流れについて、時間軸に沿いながら、「黎明期（1950 年代～）」、「萌芽期（1980 年代後半～）」、「進展期（1990 年代後半～）」、「林立期（2000 年代前半～）」、「普及期（2000 年代後半～）」という 5 つの時期を区分した。各時期にどのような動きがあったかについては、丸山（2013:106-129）を要約して以下に列記しておく。

一、黎明期（1950 年代～）

1948 年に、国立国語研究所が文部省の機関として発足した。後の 1956 年、計量国語学会や言語学研究会が設立され、これらの研究機関や学会が行った活動のなかで、大量の日本語テキストや用例カードに基づく研究が進められた。この時期は日本語コーパスの「黎明期」として位置づけられる。

この時期において、国立国語研究所による日本語コーパスの開発と利用は、世界的に見てもきわめて質の高い成果を挙げていた。統計的無作為抽出によるコーパスの構築、活用形の違いや同語異語判別を踏まえた語彙頻度表の作成は、特記に価する。しかしながら、当時公開されたのはあくまでも調査や分析の結果だけであり、調査対象となったコーパスそのものを公開して研究者間で共有することはなかった。すなわち、この時期における日本語コーパスとは、ある調査・分析のために収集された言語資料の集積であって、研究者間で共有・再利用するという発想は当初はなかったものと考えられる。

²⁰ 詳しくは、前川喜久雄監修『講座日本語コーパス 1. コーパス入門』（朝倉書店、2013 年）の第 5 章「日本語コーパスの発展」（丸山岳彦執筆、pp. 105-133）を参照されたい。

二、萌芽期（1980 年代後半～）

1980 年代の後半に入ると、パーソナル・コンピュータの普及に伴い、日本語研究者でも個人でコンピュータを使える状況が生じてきた。さらに 1990 年代に入って電子テキストが流通し始めると、コンピュータと電子テキストを利用した定量的な言語研究が、研究者個人レベルでも試みられるようになってきた。この時期は日本語コーパスの「萌芽期」として位置づけられる。

この時期において、電子テキストを収録したフロッピーディスクや CD-ROM などが電子出版物として（あるいは出版物の付録として）出版された。また、電子ブック版の新聞記事データベースなど、様々な種類の電子テキストが流通し始めた。大量の電子テキストの普及は、日本語研究に新たな可能性をもたらした。しかしながら、これらの電子テキストを用いた分析結果が現代日本語の全般に通用する結果なのか、あるいは新聞など特定の分野に限定された結果なのかを、明確に位置づけることができなかった。また、1950 年代以降の国立国語研究所による定量的な調査・研究の手法が一般に普及することがなく、コンピュータを使いこなすための方法論の蓄積がなかったため、この時期における日本語コーパスの利用は、研究者自身が試行錯誤して取り組まなければならなかった。

三、進展期（1990 年代後半～）

1990 年代後半以降、Windows 95 の発売やインターネットの爆発的な普及に伴い、様々な電子テキストが各研究機関あるいは個人の研究者によって作成され、インターネット上で流通するようになった。また、既存の電子テキスト以外、言語研究を目的として作成されたコーパスの公開も始まった。この時期は日本語コーパスの「進展期」として位置づけられる。

この時期において、古典文学作品を電子化し、テキストデータを公開するという動きが研究者の間で広がっていった。また、『青空文庫』など一定の入力基準によって電子化したテキストデータを集積した電子図書館が開設されるようになった。萌芽期に比べ、古典テキストの拡充、電子図書館の整備、学習者コーパスの開発など、日本語コーパスへの取り組み方が多様化してきた。しかしながら、萌芽期と同様、流通したのはテキストデータのみであり、形態素解析されたデータを積極的に活用する形跡は見られない。

四、林立期（2000 年代前半～）

2000 年代に入ると、各研究機関や大学などで、個人の研究者が収集したデータを小規模なコーパスとしてまとめたものから、科研費などの研究予算によって開発した大規模なコーパスまで様々な日本語コーパスが作られるようになった。この時期は、多くのコーパスが各地に林立する状況となり、日本語コーパスの「林立期」と称される。

この時期において、『日本語話し言葉コーパス』（CSJ）や名大会話コーパスなど話し言葉

のコーパスが相次いで開発・公開された。これに対して、著作権の問題で書き言葉コーパスは断片的な資料しか整備されなかった。ほかにも、国立国語研究所『太陽コーパス』のような歴史コーパスの構築や、国会会議録検索システムのようなウェブコーパスの公開など、日本語研究におけるコーパスの応用可能性が広がってきた。

五、普及期（2000 年代後半～）

2000 年代の後半に入ると、日本語コーパスが学界内に広く普及し始めた。言語学系・日本語学系の学会で、日本語コーパスを使った研究が多く発表されるようになった。それと同時に、学会誌や商業誌においても日本語コーパスに関する特集号が企画・出版された。この時期は日本語コーパスの「普及期」と呼ばれる。

この時期において、最も注目されていたのは国立国語研究所の BCCWJ である。2006 年に開発が始まり、2011 年に公開されたこのコーパスは、5 年間の構築期間を経て、1 億語を超える書き言葉を収録した。その公開により、日本語の内省が効かない外国人研究者や、普段生の日本語資料に接する機会の少ない海外の日本語研究者に大きな利便性がもたらされた。書き言葉コーパスのほかにも、学習者コーパス、歴史コーパスやウェブコーパスなど多くの分野において重要な進展があった。

以上、丸山（2013）に記述された日本語コーパスの発展をまとめた。なお、コーパスを使った研究成果の一覧は田野村忠温ほか（2007）『コーパス日本語学ガイドブック』掲載の「コーパス日本語学研究文献目録」を参照されたい。同資料は、1. 一般論—コーパスの意義・特性など、2. コーパスに基づく事例研究（文法・語彙・意味、音韻、文字、その他）、3. コーパス—コーパス・設計・構築・共有など、4. コーパスの利用—手法・統計・著作権など、5. インターネットの利用、6. 論集・雑誌特集など、7. 書評という各分類に該当する、2007 年までのコーパス日本語学の研究文献を整理している。

1.4 慣用句研究におけるコーパス利用の可能性

これまでの慣用句に関する先行研究のなかで、コーパスを用いた研究がいくつか見られる。石田プリシラは一連の研究で、コーパスからの用例採集を行いつつ、統語論・意味論の立場から動詞慣用句や類義慣用句に対する分析を行っている。また、慣用句の事例分析として、前掲した佐々木（2013）、岡田（2014）が挙げられる。両論文はそれぞれ、ワークショップあるいは学会で発表し、予稿集に掲載されたものである。通時コーパスに基づく慣用句意味変化の研究として、慣用句の意味や用法は研究者の内省に頼る現状を打開し、コーパス利用の有効性を提示した先駆的な研究である。

慣用句研究が大規模コーパスの整備を背景に進展し、今後研究の向かっていく先には、複数の方向性が考えられるであろう。それらのうち次章以降に本研究がとる方向性について

て、以下に列記しておく。

まず考えられるのは、現在公開されているコーパスを慣用句の研究に効果的に利用するための研究である。先行研究において、慣用句使用頻度の研究にまだ空白があるといえる。従来は電子化された言語資料が乏しいため、手作業による用例採集に頼らざるを得なかった。そのため、数例を採集して慣用句の意味分析に用いることは可能であったが、慣用句が全体としてどのくらい使用されるか、どのような分野に使用されるか、その全貌はまだ明らかにされていない。現在、各種のコーパスが構築されているが、それらを慣用句の定量的な研究に積極的に利用しようとする動きは見られない。

そこで、本研究では、代表性を有する BCCWJ を慣用句使用度数の調査に利用する。BCCWJ は現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスであると言われ、様々な日本語学的な分析に活用されている。書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがった膨大なデータが格納され、書籍、新聞、雑誌データは、さらに図書館で利用されている日本十進分類法（NDC）で下位区分されている。たとえば、書籍の場合は 0. 総記、1. 哲学、2. 歴史、3. 社会科学、4. 自然科学、5. 技術・工学、6. 産業、7. 芸術・美術、8. 言語、9. 文学、n. 分類なしの 11 に分類される。つまりは、書籍データの各ジャンルにおける慣用句の使用度数を調査することが可能である。使用度数の調査により、実際の日常生活で多用される慣用句を抽出することができ、慣用句研究の空白を埋めることが期待される。

次に考えられるのは、これまで断片的に報告されてきた慣用句事例研究の成果を、整合性のある記述に取りまとめることである。通時コーパスに基づく慣用句の事例研究では、慣用句の意味・用法に見られる通時的な意味変遷が報告されているが、変遷の類型まではまだ言及されていない。前掲した「敷居が高い」（佐々木 2013）と「爪痕を残す」（岡田 2014）は、慣用句が別の意味に転移して使われている例である。慣用句の意味変遷にほかの例は見られるか、それを実証的に明らかにしていく積み重ねが必要であろう。さらに、なぜ意味変遷が起こるのか、その要因を明らかにし、慣用句のもつ特性を捉えていくことが必要であると考えられる。

そして最も急務であるのは、コーパスを活用した慣用句の研究成果を教育現場に還元し、貢献を図ることであろう。現在、コーパスを使った文法研究や、語彙研究（特にコロケーションや類義語をはじめとする単語の用法記述研究）、作文教育における日本語学習者の誤用分析研究が進むにつれて、コーパス日本語学が日本人の言語生活及び外国人学習者に対する日本語教育に大いに貢献している。

たとえば、日本語誤用コーパス（作文数 40、総文字数 20,089、総文数 654、誤用抽出数 1,059）というものが作成されている。これは、英国リーズ大学、ウクライナキエフ国立言語大学、台湾銘傳大学の日本語学科の作文の授業で執筆された日本語作文（作文数 373、文字数 161,533 字、執筆者総数 146 名）を収集したデータである。さらに、このデータから抽出した誤用を統語的・意味的に分類し、誤用の原因と正用に関する情報を付与した『オン

ライン日本語誤用辞典』²¹が制作され、オンラインで無料公開されている。

筆者が目標として想定するまとまった形での成果物には、日本語慣用句辞典がある。本研究の最後では、そうした認識に基づいて学習者向けの日本語慣用句辞典項目の試作を行う。また、本研究では広範囲にわたって高頻度で使われる慣用句を選定した。本論文に残された今後の研究課題として、これらの慣用句を中心に、その意味記述や用例採集を行ったうえでの、中国人日本語学習者用の慣用句用例検索システムやスマートフォンの日本語慣用句辞書アプリの開発がある。これらには、第二言語習得や対照言語学などに有用な資料としての役割が期待される。

²¹ http://cblle.tufs.ac.jp/lle/ja_wrong/ (最終アクセス 2016 年 6 月 21 日)

第2章 現代日本語における慣用句の使用度数

2.1 はじめに

慣用句辞典ではごくまれにしか使われない慣用句もよく使われる慣用句も等しく扱われている。しかし、実際の社会生活では使われる度合いは慣用句によって大きく異なる。そこで、本章では、どういった慣用句がどれくらいの頻度で、どのように使われているかを調査する。

調査対象は、佐藤（2007）と橋本・河原（2008）により選定された 926 句²²の慣用句である。調査資料として、BCCWJ²³と新聞コーパスを利用する。まず、BCCWJ から各慣用句の使用度数を集計し、度数順位に従い、複数のグループに区分する。それから、慣用句の使用度数を意味分野とあわせて観察し、どのような意味分野にどのような慣用句が分布するのか、それがどのくらい使用されるのか、ということを詳しく記述する。最後に、新聞コーパスから慣用句の使用度数を集計し、異なる資料における慣用句使用度数の分布差異を考察する。

2.2 BCCWJ における慣用句の使用度数

まず、BCCWJ のうち、書籍に該当するデータを使用する。書籍は、0. 総記、1. 哲学、2. 歴史、3. 社会科学、4. 自然科学、5. 技術・工学、6. 産業、7. 芸術・美術、8. 言語、9. 文学、n. 分類なしの 11 に分類されるが、本章の調査範囲とする文章資料は、書籍の中でジャンルが明示された 1. 哲学から 9. 文学までとし、0. 総記と n. 分類なしは除く。

上記各慣用句の使用度数を調査する前に、まず BCCWJ を慣用句の用例採集に利用する際の問題点を次に整理する。

- ①検索語が慣用句として使用されていない²⁴。
- ②同一の文中において検索語が複数の箇所に見れる。
- ③検索語に表記のゆれや用言の活用がある。
- ④検索語の構成要素間に別の要素が介入する。

²² 詳細は、1.1 を参照。

²³ Lin Wu（2016）で用いた BCCWJ モニター公開データ（2009 年度版）は、BCCWJ 一般公開版の構築中のデータの一部を研究利用目的で限定公開したものである。本章では、より一般性の高い知見を得るために、BCCWJ 一般公開版を調査資料として利用した。

²⁴ メタ言語的な例、文字通りの意味を表す例、作品名やそのほかの不適切な例と思われるものを指す。

⑤検索語が慣用句として使用されるが、その意味が多義的である。

⑥検索語が慣用句として使用されるが、その用法がいわゆる「誤用」とされる。

こうした問題点があるゆえに、検索結果は検索語の使用度数を反映できず、目視による精査が必要である。目視調査の際、①に該当するものは除外するが、②に該当するものは、それぞれ有効な使用度数とみなす。③は正規表現を使うことにより、できるだけ多くの用例を収集する²⁵。④は今回の調査では検討の対象外にした。

⑤と⑥は慣用句の意味・用法に関する問題である。926 句のうち、「口にする」、「口を利く」、「口を切る」、「調子に乗る」、「手にする」、「手を打つ」、「鼻に付く」、「間に合う」、「物にする」、「用を足す」の 10 句が多義性をもつ慣用句²⁶として認められた。これらの慣用句に対し、意味毎の使用度数を計算した。すなわち、実際の調査対象となる慣用句の数は延べ 936 句である。

「誤用」とされる慣用句²⁷を使用度数に数えるかどうかの問題があるが、言語資料を語彙調査に用いる場合、発話意図や誤用の理由などは確認できないため、本調査においては、誤用かどうかの判断は検討の対象外にし、すべて有効な用例に数える。

なお、BCCWJ では最大で 500 件しか表示できないため、用例が極めて多い慣用句に対し、そのすべての用例を精査することは不可能である。したがって、調査の際 500 件を超えるものは、表示した 500 件のうちの有効な用例数を調べ、そのパーセンテージを総件数にかけて有効な用例数を概算した。つまり、

$\frac{\text{有効な用例数}}{500 \text{ 件}} \times \text{総件数}$

で有効な用例数を求める。たとえば「手を延ばす」の場合、総件数は 986 件で、表示した 500 件のうち有効なものが 25 件ある。すなわち、 $25 \div 500 = 0.05$ という比率を求めることができる。さらに、 0.05×986 という計算により、有効な用例数を 49 例とした。

上記の調査基準に従いながら、各慣用句の使用度数を調査した。その結果に基づき、便宜上、延べ 936 句の慣用句をほぼ均等に配分するよう、以下の 5 つの区分を考えた。

²⁵ 実際の用例検索では、たとえば「有無を言わせず」の用例として、「有無を言わせない/有無を言わせなかった/有無を言わせぬ」といったものも取得された。ただし、検索可能な対象が正規表現のパターンに限られているため、データの集め方に限界がある。特に、緊密性の低い慣用句に対しては、助詞が変わることや間に別の要素が入ることが考えられるため、実際には拾い出されていないものがあるかもしれない。したがって、ここではデータをすべて予想通りに取得しているのではなく、原形に近いものしか取得していないと言わざるを得ない。

²⁶ 詳しくは 2.3 で考察する。

²⁷ 慣用句について、形式上の誤用と意味上の誤用がしばしば指摘される。詳細は文化庁「国語に関する世論調査」の結果を参照。

区分 1	ほとんど使わない慣用句	($0 \leq x < 12$, $n=184$, 全体の 19.7%)
区分 2	まれに使う慣用句	($12 \leq x < 24$, $n=188$, 全体の 20.1%)
区分 3	たまに使う慣用句	($24 \leq x < 40$, $n=188$, 全体の 20.1%)
区分 4	ときどき使う慣用句	($40 \leq x < 90$, $n=186$, 全体の 19.9%)
区分 5	よく使う慣用句	($x \geq 90$, $n=190$, 全体の 20.3%)

(x は各慣用句の使用度数、 n は各区分に含まれる慣用句の数を示す)

一般に語彙の使用度数分布は L 字型分布を示すことが知られているが、慣用句もその分布から外れない。慣用句の使用度数と数の分布状況の全体像をとらえるために、図 1 のような散布図²⁸を作成した。図 1 から、繰り返し使用される慣用句は特定のものに集中している一方、あまり使用されない慣用句が膨大にあることが分かった。慣用句の使用度数と数の分布形状は、一般語彙を対象とした語彙調査と同様の性質がみられる、いわゆる L 字型分布である。

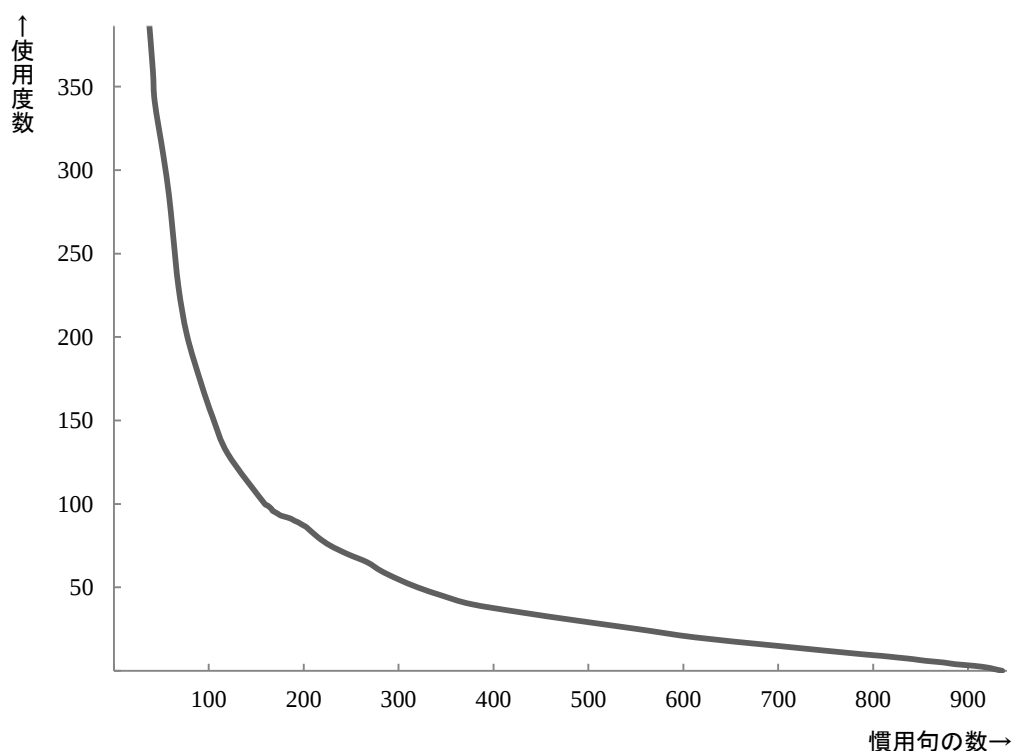


図 1 慣用句の使用度数と数の分布

²⁸ 作成方法として、得られた延べ 936 句の慣用句を使用度数順に並べかえ、10 回以上使用された慣用句が 787 句、15 回以上使用された慣用句が 698 句、20 回以上使用された慣用句が 613 句といったように、ほぼ等間隔で 50 組のデータを抽出した。これらのデータに基づき、慣用句の数を横軸とし、使用度数を縦軸として平滑線の散布図を作成した。

各区分の慣用句は以下のとおりである²⁹。多義性をもつ慣用句は、該当の意味を表す分類番号を記して区別した。なお、五十音順に整理した慣用句使用度数の区分は資料 1 を参照。

【区分 1】 ほとんど使わない慣用句 (0 ≤ 使用度数 < 12, 184 句)

赤子の手をねじる、赤子の手をひねる、あごを出す、足が出る、足が鈍る、足が速い、足が棒になる、味も素っ気も無い、足元に火が付く、足元を見る、足を棒にする、頭隠してしり隠さず、後は野となれ山となれ、あぶはち取らず、油を売る、油を絞る、ありのはい出るすき間もない、生き馬の目を抜く、息をつく暇もない、石にかじり付いても、石橋をたたいて渡る、一日の長、命の洗濯、今や遅しと、芋を洗うよう、いやでも応でも、上を下への大騒ぎ、牛の歩み、腕が上がる、腕が鳴る、腕に覚えがある、うなぎの寝床、うの目たかの目、海の物とも山の物とも付かない、大きな口をきく、大目玉を食う、お株を奪う、お先棒を担ぐ、お茶の子さいさい、鬼の目にも涙、尾ひれを付ける、重荷を下ろす、恩に着せる、恩をあだで返す、飼い犬に手をかまれる、顔がつぶれる、顔をつぶす、陰になりひなたになり、角が取れる、かゆい所に手が届く、我を折る、我を張る、気炎を上げる、気がもめる、気骨が折れる、肝が据わる、肝が太い、ぐうの音も出ない、臭い物にふたをする、口が減らない、口から先に生まれる、くちばしが黄色い、くちばしを入れる、口も八丁手も八丁、口を利く (2. 3522)、口を切る (2. 1553)、首が回らない、雲をつく、げたを預ける、志を遂げる、腰を折る、事と次第によっては、事によると、言葉に尽くせない、さばを読む、下にも置かない、地団太を踏む、十指に余る、春秋に富む、食指が動く、知らぬが仏、しりが重い、しりに火が付く、しり目にかける、心臓が強い、図に当たる、すねに傷を持つ、すねをかじる、隅に置けない、精が出る、竹を割ったよう、手綱を引き締める、盾を突く、玉にきず、駄目を押す、力を落とす、茶茶を入れる、長足の進歩、ちょうちんを持つ、血わき肉踊る、月とすっぽん、土が付く、つむじを曲げる、つめのあかほど、面の皮が厚い、手が上がる、手ぐすねを引く、手に汗を握る、手八丁口八丁、毒にも薬にもならない、トップをきる、とらの威を借るきつね、泥を吐く、度を過ごす、泣きの涙、何は無くとも、寝返りを打つ、願ったりかなったり、猫の手も借りたい、猫をかぶる、熱しやすく冷めやすい、年季を入れる、年貢の納め時、のれんを分ける、ばかになる、歯が抜けたよう、馬脚を現す、化けの皮がはがれる、はしにも棒にも掛からない、バスに乗り遅れる、旗色が悪い、バトンを渡す、鼻息が荒い、鼻が高い、鼻であしらう、鼻を折る、歯の根が合わない、腹が太い、腹を据える、火が消えたよう、ひざを交える、額を集める、ひとみを凝らす、日の出の勢い、不意を食う、風雲急を告げる、筆が立つ、筆を入れる、筆を加える、船をこぐ、へとも思わない、骨身にこたえる、骨身を惜しまない、骨身を削る、的を射る、水も漏らさぬ、みそを付ける、耳が早い、耳に挟む、耳をそろえる、虫が知らせる、胸くそが悪い、胸が膨らむ、胸がふさがる、芽が出る、目から鼻へ抜ける、目と鼻の間、目に角を立てる、目の黒いうち、目鼻が付く、焼きが回る、焼きを入れる、焼け石に水、やせても枯れても、矢の催促、有終の美を飾る、欲の皮が突っ張る、横車を押す、横やりを入れる、夜の日も寝ずに、夜も日も明けない、寄ると触ると、弱り目にたた目、らっぱを吹く。

²⁹ ここに掲げた慣用句の形態と表記は、佐藤 (2007) 『基本慣用句五種対照表』の代表表記に従う。

【区分2】 まれに使う慣用句（12≦使用度数<24、188句）

青筋を立てる、揚げ足を取る、明けても暮れても、あごで使う、足が付く、足元を見られる、後を引く、穴があったら入りたい、合わせる顔がない、泡を食う、息を凝らす、一から十まで、一事が万事、一家を成す、一矢を報いる、いばらの道、因果を含める、雨後の竹の子、後ろ指を指される、腕によりを掛ける、打てば響く、売り言葉に買い言葉、襟を正す、縁起を担ぐ、縁の下の方持ち、大きな顔をする、大見得を切る、鬼に金棒、折り紙付き、顔が売れる、顔が広い、顔から火が出る、顔に泥を塗る、顔向けができない、かさに懸かる、肩で風を切る、肩の荷が下りる、肩の荷を下ろす、角が立つ、金に糸目をつけない、かぶとを脱ぐ、かんこ鳥が鳴く、かんで含める、木で鼻をくくる、肝を冷やす、興に乗る、気を落とす、悔いを残す、くさびを打ちこむ、口がうまい、口が軽い、口が滑る、軍配が上がる、軍門に下る、けがの功名、けちが付く、犬猿の仲、けんもほろろ、口角泡を飛ばす、心が弾む、志を立てる、心に掛ける、心を鬼にする、ごまをする、最後を飾る、細大漏らさず、さい配を振る、三拍子そろう、思案に暮れる、しっぽを出す、しっぽをつかむ、自腹を切る、雌雄を決する、しり馬に乗る、すずめの涙、砂をかむよう、世話が焼ける、大事を取る、たがが緩む、高みの見物、立つ瀬がない、立て板に水、他人の空似、矯めつすがめつ、地に落ちる、血のにじむような、血も涙もない、調子に乗る（2. 1660）、つめに火をともし、手が出ない、手が離れる、手がふさがる、手に乗る、出鼻をくじく、手を取る、手を握る、堂に入る、どこ吹く風、どじを踏む、取る物も取りあえず、度を失う、なしのつぶて、何くれとなく、何はさておき、波風が立つ、名を売る、煮え湯を飲まされる、にしきを飾る、二足のわらじを履く、二の句がつけない、抜き足差し足、猫もしゃくしも、熱が冷める、熱を入れる、寝ても覚めても、乗り掛かった船、のるか反るか、場数を踏む、白紙に戻す、薄氷を踏む、破竹の勢い、はちの巣をつついたよう、発破をかける、鼻が利く、鼻に付く（2. 5040）、鼻を明かす、花を持たせる、歯にきぬを着せない、羽を伸ばす、腹が据わる、腹の虫が治まらない、腹を探る、はれ物に触るよう、ひざを乗り出す、引っ込みがつかない、一泡吹かせる、人聞きが悪い、一肌脱ぐ、人目をはばかり、人を食う、火花を散らす、火ぶたを切る、風前のともしび、不覚を取る、袋のねずみ、筆をふるう、踏んだりけったり、へそを曲げる、ぼろが出る、魔が差す、右に出る者がいない、水をあける、道草を食う、身に余る、身につまされる、耳が痛い、耳にたこができる、脈が有る、見るに忍びない、見るに見兼ねて、虫が好かない、虫ずが走る、虫の息、虫の居所が悪い、虫の知らせ、胸が躍る、胸がすく、胸がつぶれる、目が利く、目が肥える、目が据わる、目が高い、眼鏡にかなう、目が回る、目に物見せる、目の上のこぶ、目の中に入れても痛くない、目を皿のようにする、芽を吹く、目を細くする、もったいをつける、物は試し、やぶから棒、湯水のように使う、弓を引く、用を足す（2. 3400）、善かれあしかれ、我も我もと。

【区分3】 たまに使う慣用句（24≦使用度数<40、188句）

開いた口がふさがらない、あぐらをかく、足がすくむ、足元にも及ばない、足を洗う、味を占める、頭が上がらない、頭を痛める、頭をひねる、当てが外れる、後の祭り、危ない橋を渡る、脂が乗る、網を張る、暗礁に乗り上げる、息が合う、息が長い、意地になる、板につく、至れり尽くせり、一言

もない、一も二もなく、一糸乱れず、一杯食う、今か今かと、色を失う、後ろ髪を引かれる、うだつが上がらない、腕を磨く、うなぎ登り、うまい汁を吸う、馬が合う、裏をかく、運を天に任せる、押し合いへし合い、押しも押されもしない、お茶を濁す、同じ穴のむじな、重きを成す、及びもつかない、恩に着る、顔が利く、影も形もない、かさに着る、風の便り、片棒を担ぐ、活を入れる、かまを掛ける、堪忍袋の緒が切れる、気が置けない、気がとがめる、机上の空論、肝をつぶす、九死に一生を得る、気を回す、口が重い、口が堅い、口が悪い、首を切る、首を長くする、けたが違う、けりが付く、けんかを売る、声を限りに、声をのむ、心が動く、心に掛かる、心を配る、腰が低い、御多分に漏れず、小耳に挟む、先を争う、舌鼓を打つ、始末に負えない、白羽の矢が立つ、白を切る、死力を尽くす、白い目で見ると、辛酸をなめる、進退きわまる、水泡に帰す、図に乗る、青天のへきれき、背筋が寒くなる、背に腹は替えられない、相好を崩す、そでにする、太鼓判を押す、高根の花、宝の持ち腐れ、多勢に無勢、盾に取る、血が騒ぐ、血道を上げる、つるの一声、手がない、てこでも動かない、手塩に掛ける、手玉に取る、手を打つ (2. 3530)、手を広げる、手を回す、天びんに掛ける、峠を越す、年がいない、取って付けたよう、とらの子、泥を塗る、涙をのむ、鳴りをひそめる、難癖をつける、苦虫をかみつぶしたよう、にっちもさっちもいかない、抜き差しならない、猫の額、根に持つ、寝耳に水、根も葉もない、年がら年じゅう、のどから手が出る、背水の陣、ばかを見る、話に花が咲く、話の腰を折る、鼻に掛ける、鼻に付く (2. 3020)、鼻持ちならない、腹に据えかねる、腹を決める、腹を割る、万事休す、判で押したよう、一旗揚げる、人目を忍ぶ、火に油を注ぐ、火の海、火の車、氷山の一角、ピンからキリまで、棒に振る、ほうほうの体、ほごにする、骨を埋める、間が悪い、幕が開く、またに掛ける、まんじりとしめない、身が入る、右から左、水と油、水に流す、水の泡、水を打ったよう、身の毛がよだつ、耳が遠い、耳につく、身もふたもない、身を入れる、身を粉にする、胸が張り裂ける、胸に刻む、胸に迫る、胸を痛める、胸を躍らせる、胸を膨らませる、無用の長物、目頭が熱くなる、目からうろこが落ちる、目くじらを立てる、めどが付く、目にも留まらぬ、目の色を変える、目星を付ける、目も当てられない、目を回す、持ちつ持たれつ、元の本阿弥、物心がつく、物になる、矢面に立つ、やむにやまれず、やり玉に挙げる、指をくわえる、弱音を吐く、ろれつが回らない、若気の至り、わき目も振らず、渡りに船。

【区分 4】 ときどき使う慣用句 (40≦使用度数<90、186 句)

愛想を尽かす、赤の他人、挙げ句の果て、足音を忍ばせる、頭が痛い、頭が下がる、いい気になる、行き当たりばったり、息が切れる、息の根を止める、息を吹き返す、異彩を放つ、意地を張る、一か八か、一目置く、一笑に付す、居ても立っても居られない、意表をつく、いやが上にも、入れ替わり立ち替わり、動きが取れない、うつつを抜かす、腕を振るう、恨みを買う、うり二つ、雲泥の差、悦に入る、おうむ返し、大目に見る、おくびにも出さない、おくめんもなく、遅かれ早かれ、思うつぼ、尾を引く、音頭を取る、顔を曇らせる、影が薄い、かたずをのむ、型にはまる、肩身が狭い、肩をすぼめる、肩を並べる、肩を持つ、気が重い、気が気でない、気が抜ける、気が引ける、機先を制する、切っても切れない、きつねにつままれる、気に障る、気に留める、気に病む、着の身着のまま、気をもむ、空を切る、くぎを刺す、口に合う、口火を切る、口を切る (2. 3131)、口を割る、苦になる、首

にする、けちを付ける、血相を変える、けむに巻く、けりを付ける、業を煮やす、心が痛む、心が通う、心に留める、心を打つ、心を砕く、心を許す、腰が抜ける、腰を抜かす、言葉を返す、言葉を濁す、探りを入れる、さじを投げる、舌を巻く、しのぎを削る、しびれをきらす、しゃくにさわる、心血を注ぐ、是が非でも、先見の明、先手を打つ、そ知らぬ顔、高をくくる、だだをこねる、棚に上げる、たもとを分かち、たんかを切る、知恵を絞る、血が通う、調子に乗る (2. 3041)、血を分ける、手が空く、手に余る、手に付かない、手も足も出ない、手を借りる、手を切る、手を下す、手をこまねく、手を尽くす、手を延ばす、頭角を現す、度肝を抜く、突拍子もない、とどのつまり、取り付く島がない、取るに足りない、長い目で見ると、何食わぬ顔、波に乗る、名を成す、似たり寄ったり、似ても似つかない、二の足を踏む、抜け目がない、願ってもない、熱に浮かされる、熱を上げる、根掘り葉掘り、音を上げる、根を張る、歯が立たない、鼻を突く、幅を利かせる、羽目を外す、腹をくくる、びくともしない、引けを取る、一筋縄では行かない、ひとたまりもない、人目を引く、一役買う、非の打ち所がない、日の目を見る、ピリオドを打つ、日を追って、不幸中の幸い、筆を執る、ペソをかく、骨が折れる、骨を折る、本腰を入れる、枚挙にいとまがない、幕を開ける、幕を閉じる、負けず劣らず、磨きを掛ける、水を差す、水に向ける、身に覚えがない、身になる、耳に入れる、耳をそばだてる、見様見まね、見る影もない、身を立てる、虫がいい、胸が一杯になる、胸が詰まる、胸を打つ、目がくらむ、目が覚める、目がない、メスを入れる、目に余る、目に触れる、目を覆う、目をくまらす、目を覚ます、目を白黒させる、目を注ぐ、目をつぶる、目を盗む、元も子もない、物を言わせる、らく印を押される、らちが明かない、路頭に迷う、輪を掛ける。

【区分5】 よく使う慣用句 (使用度数≥90、190句)

相づちを打つ、足を伸ばす、足を運ぶ、足を引っ張る、頭に来る、頭を抱える、頭をもたげる、あつけに取られる、跡を絶たない、案の定、息が詰まる、息を殺す、息を詰める、息をのむ、息を引き取る、いざという時、意地が悪い、命を懸ける、嫌気が差す、嫌と言うほど、意を決する、有無を言わせず、多かれ少なかれ、後れを取る、お目にかかる、思いも掛けない、思いも寄らない、顔を出す、掛け替えのない、肩を落とす、気が利く、気が済む、気が付く、気が強い、気が遠くなる、聞き耳を立てる、気に入る、気に掛かる、気に掛ける、気に食わない、気にする、気になる、きびすを返す、肝に銘じる、脚光を浴びる、気を失う、気を配る、気を付ける、気を取られる、気を取り直す、口にする (2. 3331)、口にする (2. 3100)、唇をかむ、口を利く (2. 3100)、口をそろえる、口を出す、口をつぐむ、口をとがらせる、口を挟む、首になる、首をかしげる、首を突っ込む、首をひねる、工夫を凝らす、群を抜く、声を掛ける、声を立てる、声を潜める、小首をかしげる、心を痛める、心を奪われる、心を込める、腰を据える、異にする、生計を立てる、精を出す、世話を焼く、背に向ける、底を突く、端を発する、血がつながる、力を入れる、力を貸す、血の気が引く、宙に浮く、注目を浴びる、手が掛かる、手が込む、手が付けられない、手が届く、手に入れる、手に負えない、手にする (2. 3700)、手にする (2. 3392)、手を合わせる、手を入れる、手を打つ (2. 3084)、手を掛ける、手を貸す、手を差し伸べる、手を出す、手を付ける、手を抜く、手を引く、手を焼く、手を休める、床に就く、とてつもない、とどめを刺す、途方に暮れる、途方もない、取り返しがつかない、取りも直さず、流れを

くむ、何が何でも、何かにつけて、何はともあれ、名もない、根を下ろす、念を押す、拍車をかける、ばつが悪い、話にならない、鼻を鳴らす、腹が立つ、腹を立てる、歯を食い縛る、人目に付く、百も承知、不意を突く、ふに落ちない、変哲もない、間が抜ける、間に合う (2. 1660)、間に合う (2. 1931)、真に受ける、まゆをひそめる、見切りをつける、身にしみる、身に付く、身に付ける、耳にする、耳に入る、耳を疑う、耳を貸す、耳を傾ける、耳を澄ます、身を固める、身を引く、実を結ぶ、身をもって、身を寄せる、胸が痛む、胸をなで下ろす、胸を張る、目に浮かぶ、目にする、目に付く、目に留まる、目に入る、目に見えて、目もくれない、目を疑う、目を奪う、目を落とす、目を掛ける、目を配る、目を凝らす、目を背ける、目を付ける、目を通す、目を離す、目を光らす、目を引く、目を丸くする、目を見張る、目をむく、目をやる、物にする (2. 3050)、物にする (2. 3700)、物を言う、役に立つ、やむを得ず、やむを得ない、用を足す (2. 5710)、世を去る、レッテルをはる、訳は無い、我に返る、我を忘れる。

2.3 考察

本節では、各区分に含まれる慣用句がどのような意味分野に分布しているのかを考察する。考察の際、『分類語彙表一増補改訂版』(以下、『分類語彙表』と略す)を意味分野の分類基準として利用する。

以下、少し長くなるが、その概要をまとめる³⁰。同書は、現代の日常社会で用いられる約 96,000 語を収録し、分類番号を用いてそれぞれの分類項目の体系的位置付けを示したところに特徴がある。分類の各項目には、たとえば「1. 2340」のように類を整数位に置いて小数点以下 4 桁の分類番号が付されている。この数字全体あるいはその一部分が、全体の中に占める個々の分類項目の位置付けを示している。

まず「1. 体の類」、「2. 用の類」、「3. 相の類」、「4. その他の類」と文法機能によって大きく 4 類に分ける。体の類は、名称を表す語で、名詞の類。用の類は、存在・活動を叙述する語で動詞の類。相の類は、状態を叙述する語で、形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の類。その他の類は、一部の副詞、接続詞、感動詞である。分類番号の整数位が上記の類の区分に対応する。

更に、体・用・相の各類の中には、大きな意味的まとまりとして、「1. 1 抽象的關係」、「2. 2 人間活動の主体」、「3. 3 人間活動—精神および行為」、「4. 4 生産物および用具」、「5. 5 自然物および自然現象」という 5 つの部門が設けられる。ただし、「2. 用の類」と「3. 相の類」は「2. 人間活動の主体」と「4. 生産物および用具」の部門が欠如する。部門は、小数点以下 1 桁目の数字で表される。

それから、体・用・相の各類の中に、ほぼ同様の分類項目が設けられ、同様の順に配列される。さらに部門をより具体的に細分するものとして、中項目が設けられている。これは小数点以下 1 桁目と 2 桁目を合わせた部分に相当する。

³⁰ 詳細は『分類語彙表』の「まえがき」(pp. 3-8)を参照。

表 1 に示すのは、『分類語彙表』における調査対象の収録状況である。具体的に見ると、調査対象とする慣用句のなかで、830 句が『分類語彙表』に収録されている。ただし、助詞の脱落や助詞の変化など差が見られる慣用句もある。たとえば、「手ぐすねを引く」と「血が通う」は『分類語彙表』では、「手ぐすね引く」(2. 3520 応接・送迎)と「血の通った」(3. 3020 好悪・愛憎)の形で収録される。こうした場合は「手ぐすね引く」のコードを「手ぐすねを引く」、「血の通った」のコードを「血が通う」に付与した。ほかにも、「ありのはい出るすきもない」(3. 1341 弛緩・粗密・繁簡)のコードを調査対象となる慣用句「ありのはい出るすき間もない」に付与したり、「腰を折る[話の～]」(2. 3100 言語活動)のコードを調査対象となる慣用句「話の腰を折る」に付与したりするなど、調整を加えることがある。

表 1 『分類語彙表』における調査対象の収録状況

異なり =926	『分類語彙表』にあるもの=830	2 つ以上のコードが付されるもの=213 句	多義的なもの=10 句	延べ=936 (10×2+203+617+96)
			一義的なもの=203 句	
		1 つのコードが付されるもの=617 句		
	『分類語彙表』にないもの=96			

慣用句コード付けの問題点は主として、複数のコードが付される慣用句 (213 句)³¹と『分類語彙表』にない慣用句 (96 句) が挙げられる。以下、具体例を通してそれぞれの問題点を提示しつつ、解決策を考える。

複数のコードが付される慣用句は、同形異義・多義の慣用句で、意味の多様化を反映する。田島 (2015:1、2016a:1、2016b:54) が指摘するように、文脈によって 1 つのコードでは表せない語に別のコードを付けて区別したということは、プラスに評価できるが、難しい問題がある。どのコードが当該の文脈で適当なのか、判断が非常に難しいことがたくさんある。本研究の場合、すべてのコードを採用するならば、慣用句の用例判断に揺れが多く生じてしまう。そのため、本研究では、そうした慣用句をできるだけ 1 つのコードで表す方針を採る。詳しくは以下の 3 種類である。

① 『分類語彙表』では、文字通りの意味と比喩的意味にそれぞれコードが付される。本研究では、比喩的意味をとった (下線部)。

【焼きを入れる】

2. 3820 製造工業

2. 3682 賞罰

【指をくわえる】

2. 3393 口・鼻・目の動作

2. 3430 行為・活動

³¹ それぞれ 2 つのコードが付される慣用句が 173 句、3 つのコードが付される慣用句が 30 句、4 つのコードが付される慣用句が 7 句、5 つのコードが付される慣用句が 3 句である。

【弓を引く】	
2. 3851 練り・塗り・撃ち・録音・撮影	<u>2. 3543 争い</u>
【弱り目にたたり目】	
3. 1302 趣・調子	<u>3. 3310 人生・禍福</u>
【レットルをはる】	
2. 3102 名	<u>2. 3066 判断・推測・評価</u>

② 慣用句の比喩的意味に複数のコードが付されるが、実際の用例においては、あまり区別する必要がない。あるいは、区別が難しいと思われる。たとえば、慣用句「赤の他人」には「1. 2020 自他」と「1. 2210 友・なじみ」の2つのコードが付されるが、実際の用例ではその判別が難しい。このような慣用句に対し、慣用句辞典³²を調べ、意味を1つのコードで表すことにした（下線部）。なかには、「目頭が熱くなる」、「目を掛ける」、「やり玉に挙げる」のように、小数点3桁目以降微差があるものが多い。つまり、コードが複数付されるが、それぞれ「類」、「部門」、「中項目」まで一致しているため、どちらを採用しても考察結果は変わらないのである。

【愛想を尽かす】	
2. 3500 交わり	<u>2. 3020 好悪・愛憎</u>
【牛の歩み】	
1. 1526 進退	<u>1. 1913 速度</u>
【目頭が熱くなる】	
2. 3030 表情・態度	<u>2. 3002 感動・興奮</u>
【目を掛ける】	
2. 3680 待遇	<u>2. 3650 救護・救援</u>
【やり玉に挙げる】	
2. 3682 賞罰	<u>2. 3683 脅迫・中傷・愚弄など</u>

③ 慣用句の比喩的意味に複数のコードが付され、慣用句辞典の解釈に照らし合わせてみると、多義性をもつ慣用句として、それぞれの意味を区別する必要がある。

【口にする】	
2. 3100 言語活動	2. 3331 食生活
【口を利く】	
2. 3100 言語活動	2. 3522 仲介
【口を切る】	
2. 1553 開閉・封	2. 3131 話・談話
【手にする】	
2. 3700 取得	2. 3392 手足の動作
【用を足す】	
2. 3400 義務	2. 5710 生理

³² 主に米川明彦・大谷伊都子編『日本語慣用句辞典』（東京堂出版、2005）を利用した。適宜、そのほかの慣用句辞典や国語辞典をも参照した。

一方、『分類語彙表』にない慣用句に対しては、次の解決策を考えた。

④ 形式的に近い慣用句のコードを付与する。

調査対象とした慣用句（『分類語彙表』にないもの）	『分類語彙表』にあるもの
【足が棒になる】→2. 1522 走り・飛び・流れなど	【足を棒にする】2. 1522
【足元を見られる】→2. 3683 脅迫・中傷・愚弄など	【足もとを見る】2. 3683
【興に乗る】→2. 3011 快・喜び	【興に乗ずる】2. 3011
【悔いを残す】→2. 3041 自信・誇り・恥・反省	【悔いを千歳に残す】2. 3041
【手綱を引き締める】→2. 3000 心	【手綱を締める】2. 3000

⑤ 慣用句の主要構成要素によってコードを付与する。品詞に合わせ、整数部分を調整することがある。

調査対象とした慣用句（『分類語彙表』にないもの）	『分類語彙表』にあるもの
【上を下への大騒ぎ】→1. 3380 いたずら・騒ぎ	【大騒ぎ】1. 3380
【売り言葉に買い言葉】→1. 3100 言語活動	【売り言葉】 / 【買い言葉】1. 3100
【声を潜める】→2. 5030 音	【潜める】2. 5030
【生計を立てる】→2. 3710 経済・収支	【生計】1. 3710
【火の海】→1. 5161 火	【火】1. 5161

⑥ 類義語³³（場合によっては反義語）のコードを付与する。

調査対象とした慣用句（『分類語彙表』にないもの）	『分類語彙表』にあるもの
【白い目で見る】→2. 3683 脅迫・中傷・愚弄など	【白眼視する】2. 3683
【先手を打つ】→2. 3542 競争	【先手を取る】2. 3542
【身を引く】→2. 3430 行為・活動	【身を投じる】2. 3430
【弱音を吐く】→2. 3031 声	【音を上げる】2. 3031
【らっぱを吹く】→2. 3100 言語活動	【ほらを吹く】2. 3100

これらの基準に従い、各慣用句に対してコード付けを行った。五十音順に整理した各慣用句の分類番号は添付資料 1 を参照。

なお、上記の基準を併用する場合がある。たとえば、「手を打つ」には、「2. 3084 計画・案」、「2. 3392 手足の動作」、「2. 3530 約束」、「2. 3531 交渉」、「2. 3532 賛否」の 5 つのコードが付される。「2. 3392 手足の動作」は文字通りの意味に付されたコードで、除外する。『日本語慣用句辞典』を調べると、「(1) 事前にまたは発生した問題を解決するために適当な手段や方策を講じる。(2) 提示された事柄に合意する。契約が成立する。」という二義が取り

³³ 前掲『日本語慣用句辞典』には「類句」の欄が設けられており、類義語の判断は同書によった。適宜、そのほかの慣用句辞典や国語辞典をも参照した。

上げられる（米川・大谷 2005:271）。前者に対応するのは「2. 3084 計画・案」で、後者に対応し得るのは「2. 3530 約束」、「2. 3531 交渉」、「2. 3532 賛否」である。3つのコードは中項目まで一致しており、いずれのコードにしても調査結果は変わらない。ここでは、「2. 3530 約束」にした。すなわち、「手を打つ」には「2. 3084 計画・案」と「2. 3530 約束」の2つのコードがある。

以下、意味分野別構造分析法を用い、類、部門、中項目を中心に慣用句の意味分野を考察していく。意味分野別構造分析方法（The Structural Analysis of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories）は田島（1992）により提唱された分析方法で、語彙の構成要素である個々の語を意味分野別に分けて、語彙全体の構造を分析する方法である。具体的には『分類語彙表』の意味分類を基準にして研究対象語彙の個々の語に意味コードを付けてコード毎に、あるいは、いくつかのコード毎に集計して、どのような意味分野にどのような語があるのか、言い換えれば意味分野別の語彙構造を観察する分析法である（宋 2003:85）。

なお、『分類語彙表』では分類番号によって表される意味的範疇を広い概念から類、部門、中項目、分類項目の順に分類したものの、便宜上、2. 3. 1 では類の調査結果のみを提示し、2. 3. 2 では部門の調査結果のみを提示する。また、2. 3. 3 では中項目の調査結果を提示する。分類項目の総数は 252 個³⁴に達したため、調査結果の掲載は割愛した。詳細は添付資料 1 を参照。

2. 3. 1 類からみる各区分の慣用句

表 2 は、各区分における類ごとの慣用句の数及びその割合である。なお、区分 1～区分 3 は比較的使用度数の少ないもので、区分 4 と区分 5 は比較的使用度数の多いものであると考えられるため、以下の表においては、両者の間は破線で示した。

表 2 各区分における類ごとの慣用句とその割合

区分 類	区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	合計
1.	13 (7.1%)	20 (10.6%)	18 (9.6%)	10 (5.4%)	1 (0.5%)	62 (6.6%)
2.	109 (59.2%)	121 (64.4%)	119 (63.3%)	131 (70.4%)	157 (82.6%)	637 (68.1%)
3.	58 (31.5%)	46 (24.5%)	51 (27.1%)	44 (23.7%)	28 (14.7%)	227 (24.3%)
4.	4 (2.2%)	1 (0.5%)	0	1 (0.5%)	4 (2.1%)	10 (1.1%)
合計	184 (100%)	188 (100%)	188 (100%)	186 (100%)	190 (100%)	936 (100%)

【注】 1. 体の類 2. 用の類 3. 相の類 4. その他の類

³⁴ それぞれ体の類が 52 項目、用の類が 129 項目、相の類が 66 項目、その他の類が 5 項目である。詳細は資料 3 を参照されたい。

まず、全体から見ると、「2. 用の類」(637 句、68. 1%) の慣用句の割合が最も高く、その次は「3. 相の類」(227 句、24. 3%)、「1. 体の類」(62 句、6. 6%)、「4. その他の類」(10 句、1. 1%) の順となっている。前掲『日本語慣用句辞典』の「慣用句概説」では、同書に掲載される 1,563 句のうち、80%以上が動詞慣用句であると述べている(米川・大谷 2005:540)。2 つのデータに差があるのは、『分類語彙表』において慣用句は構成要素の品詞にとらわれず、文法的な機能により適切な類に配置されたからである。

一例を挙げると、『日本語慣用句辞典』では、「はしにも棒にも掛からない」という慣用句を動詞慣用句として取り上げているのに対し、『分類語彙表』では、それを相の類(3. 1346 難易・安危)に分類している。実際の用例を確認すると、BCCWJ の書籍サブコーパスには、「箸にも棒にもかからない連中がずらり」といる(『司馬遼太郎全講演』司馬遼太郎)や、「箸にも棒にもかからんものがあるぜ」(『風々院風々風々居士—山田風太郎に聞く』山田風太郎)などの 4 例があり、いずれも連体修飾節に現れている。『日本語慣用句辞典』では、こういった動詞中心のものを動詞慣用句として扱っているため、動詞慣用句の割合が高くなるのである。

なお、『分類語彙表』において、体・用・相・その他の類に収録された延べ語数³⁵の割合は、それぞれ 67. 3%、22. 5%、9. 3%、0. 9%を占めるのに対し、慣用句は 9 割以上用・相の類に集中する。語彙全体に占める慣用句の位置付けはやや特殊なものであると言えよう。

次いで、区分からみると、各区分のうち、「2. 用の類」の慣用句が、最も高い割合を占めているのは区分 5 の 82. 6%、最も低い割合を占めているのは区分 1 の 59. 2%であった。そのほかの区分における「2. 用の類」の慣用句の割合は 63. 3%~70. 4%であり、全体としては、使用度数が多くなるにつれて、割合が高くなる傾向にある。それに伴う形で、「3. 相の類」における各区分の慣用句は、使用度数が多くなるにつれて、割合が低くなる傾向にある。また、「1. 体の類」において、慣用句の割合は 0. 5%~10. 6%であった。一方、「4. その他の類」において、慣用句の割合は 0~2. 2%であった。

以上、類からみた結果、第一に全体として、「2. 用の類」の慣用句の割合が最も高く、次いで「3. 相の類」、「1. 体の類」、「4. その他の類」の順となっていること、第二にいずれの区分においても、最も多いのは「2. 用の類」の慣用句であり、さらに使用度数が多くなるにつれ、その割合が増加することが分かった。

2. 3. 2 部門からみる各区分の慣用句

表 3-1 から表 3-3 に示すのは、体・用・相の各類における各部門の慣用句及びその割合である。

³⁵ 詳細は、体の類 64,457、用の類 21,605、相の類 8,879、その他の類 870、全体 95,811 という内訳となる。

表 3-1 各区分における部門ごとの慣用句とその割合―「1. 体の類」

区分 部門	区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	合計
1. 1	8 (61.5%)	7 (35.0%)	8 (44.4%)	2 (20.0%)	1 (100%)	26 (41.9%)
1. 2	0	0	1 (5.6%)	1 (10.0%)	0	2 (3.2%)
1. 3	4 (30.8%)	12 (60.0%)	5 (27.8%)	7 (70.0%)	0	28 (45.2%)
1. 4	1 (7.7%)	0	3 (16.7%)	0	0	4 (6.5%)
1. 5	0	1 (5.0%)	1 (5.6%)	0	0	2 (3.2%)
合計	13 (100%)	20 (100%)	18 (100%)	10 (100%)	1 (100%)	62 (100%)

【注】 1. 1 抽象的關係 1. 2 人間活動の主体 1. 3 人間活動—精神および行為

1. 4 生産物および用具 1. 5 自然物および自然現象

表 3-2 各区分における部門ごとの慣用句とその割合―「2. 用の類」

区分 部門	区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	合計
2. 1	24 (22.0%)	9 (7.4%)	15 (12.6%)	24 (18.3%)	22 (14.0%)	94 (14.8%)
2. 3	85 (78.0%)	107 (88.4%)	103 (86.6%)	102 (77.9%)	128 (81.5%)	525 (82.4%)
2. 5	0	5 (4.1%)	1 (0.8%)	5 (3.8%)	7 (4.5%)	18 (2.8%)
合計	109 (100%)	121 (100%)	119 (100%)	131 (100%)	157 (100%)	637 (100%)

【注】 2. 1 抽象的關係 2. 3 人間活動—精神および行為 2. 5 自然物および自然現象

表 3-3 各区分における部門ごとの慣用句とその割合―「3. 相の類」

区分 部門	区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	合計
3. 1	21 (36.2%)	14 (30.4%)	26 (51.0%)	22 (50.0%)	16 (57.1%)	99 (43.6%)
3. 3	34 (58.6%)	32 (69.6%)	23 (45.1%)	22 (50.0%)	12 (42.9%)	123 (54.2%)
3. 5	3 (5.2%)	0	2 (3.9%)	0	0	5 (2.2%)
合計	58 (100%)	46 (100%)	51 (100%)	44 (100%)	28 (100%)	227 (100%)

【注】 3. 1 抽象的關係 3. 3 人間活動—精神および行為 3. 5 自然物および自然現象

上記の表から、「1. 1 抽象的關係」と「1. 3 人間活動—精神および行為」に含まれる慣用句の割合が多いことが明らかにされた。「2. 用の類」では、「2. 3 人間活動—精神および行為」に含まれる慣用句の割合が「2. 1 抽象的關係」に含まれる慣用句の割合より高く、いずれの区分においても両者に大きな差が見られる。一方、「1. 体の類」と「3. 相の類」では、慣用句が「1. 1 抽象的關係」と「1. 3 人間活動—精神および行為」に集中することが分かるが、どちらの割合が高いかについては区分によって異なり、一概には言えない。

体・用・相の各類における各部門の慣用句をまとめ、その他の類と合わせて示すと、表 4 になる。また、各区分を縦軸、各部門に含まれる慣用句の割合を横軸にして表すと、図 2 になる。

表 4 部門からみる各区分の慣用句

区分 部門	区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	合計
.1	53 (28.8%)	30 (16.0%)	49 (26.1%)	48 (25.8%)	39 (20.5%)	219 (23.4%)
.2	0	0	1 (0.5%)	1 (0.5%)	0	2 (0.2%)
.3	123 (66.8%)	151 (80.3%)	131 (69.7%)	131 (70.4%)	140 (73.7%)	676 (72.2%)
.4	1 (0.5%)	0	3 (1.6%)	0	0	4 (0.4%)
.5	3 (1.6%)	6 (3.2%)	4 (2.1%)	5 (2.7%)	7 (3.7%)	25 (2.7%)
4.	4 (2.2%)	1 (0.5%)	0	1 (0.5%)	4 (2.1%)	10 (1.1%)
合計	184 (100%)	188 (100%)	188 (100%)	186 (100%)	190 (100%)	936 (100%)

【注】.1 抽象的關係 .2 人間活動の主体 .3 人間活動—精神および行為
.4 生産物および用具 .5 自然物および自然現象 4. その他の類

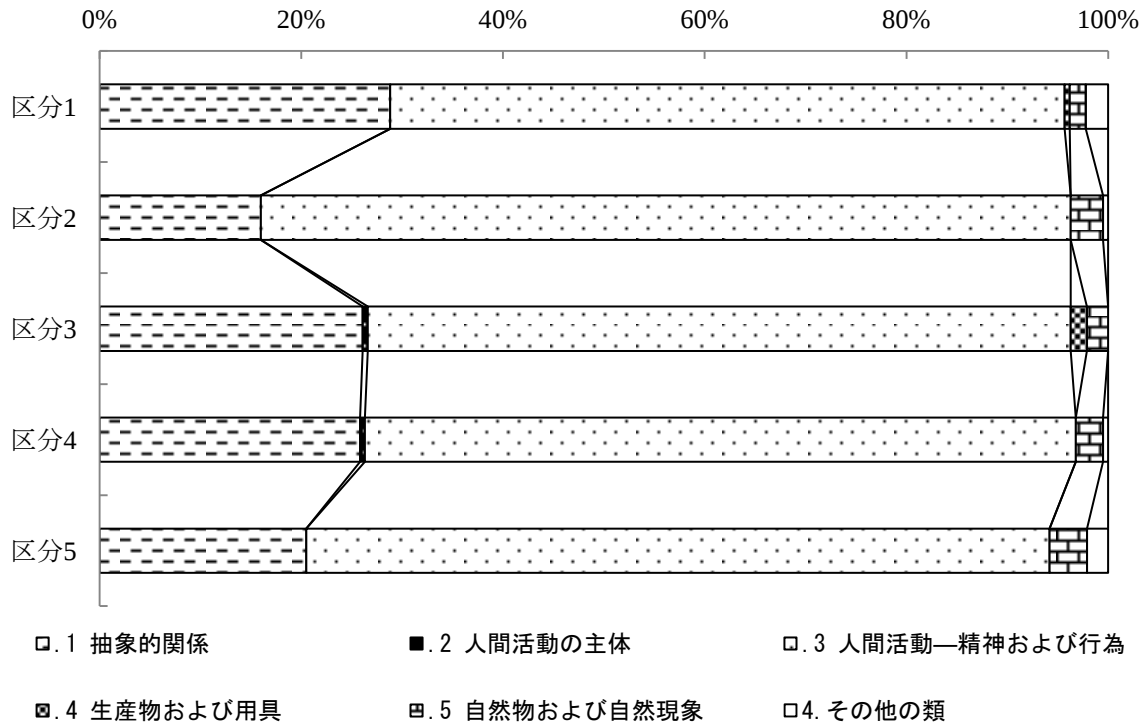


図 2 部門からみる各区分の慣用句

まず、全体から見ると、「.3 人間活動—精神および行為」に含まれる慣用句の割合が最も高く（676 句、72.2%）、次いで「.1 抽象的關係」（219 句、23.4%）、「.5 自然物および自然現象」（25 句、2.7%）、「.4 生産物および用具」（4 句、0.4%）、「.2 人間活動の主体」（2 句、0.2%）の順となっている。

林（2009:41）³⁶によると、『分類語彙表』に収録した各部門の慣用句の語数は多い順に、「.3 人間活動—精神および行為」40,092 語、「.1 抽象的關係」25,823 語、「.5 自然物および自然現象」11,893 語、「.4 生産物および用具」9,280 語、「.2 人間活動の主体」8,273 語である。それゆえ、慣用句のこうした順位は必然的な結果かもしれないが、慣用句の場合 7 割強が「.3 人間活動—精神および行為」という部門に集中することが興味深い。

また、前述したように、『分類語彙表』には、上記の 5 部門が設けられているが、「2. 用の類」と「3. 相の類」では、「.2 人間活動の主体」と「.4 生産物および用具」の部門が欠如する。慣用句が「2. 用の類」と「3. 相の類」に集中して分布することを踏まえると、「.2 人間活動の主体」と「.4 生産物および用具」の慣用句が極端に少ない原因が分かる。

次いで、各区分からみると、「.3 人間活動—精神および行為」に最も多くの慣用句が集中し、その割合は 66.8%～80.3%である。次いで、「.1 抽象的關係」にも多くの慣用句が集中し、その割合は 16.0%～28.8%である。総じていえば、およそ 7 割～8 割の慣用句が「.3 人間活動—精神および行為」を表すもので、およそ 2 割～3 割の慣用句が「.1 抽象的關係」を表すものである。なお、使用度数の増加に伴い、「.3 人間活動—精神および行為」を表す慣用句の割合が多くなる一方で、「.1 抽象的關係」を表す慣用句の割合が少なくなる傾向にある。

また、「.5 自然物および自然現象」は 3 類に共通した部門であるが、各区分の「.5 自然物および自然現象」に含まれる慣用句の割合が 1.6%～3.7%であり、極めて少ないことが判明した。

以上のように部門からみた結果、第一に体・用・相の各類において、多くの慣用句は「.1 抽象的關係」と「.3 人間活動—精神および行為」の 2 部門に分布するが、どちらが多いかについては区分によって異なること、第二に全体として、「.3 人間活動—精神および行為」に含まれる慣用句が最も多く、「.1 抽象的關係」に含まれる慣用句がそれに次ぐ。「.2 人間活動の主体」、「.4 生産物および用具」、「.5 自然物および自然現象」に含まれる慣用句が非常に少ないこと、第三に各区分において、およそ 7 割～8 割の慣用句が「.3 人間活動—精神および行為」を表すもので、およそ 2 割～3 割の慣用句が「.1 抽象的關係」を表すものであることが、判明した。

2.3.3 中項目からみる各区分の慣用句

表 5-1 から表 5-4 に示すのは、各中項目の慣用句である。

³⁶ 林（2009）の数え方によると、5 つの部門の総語数は 95,361 とあり、その他の類 877 語を含め、『分類語彙表』には合計して 96,238 語がある。『分類語彙表』の前書きに書かれた延べ 95,811 という語数と少々食い違いが出ているが、大差ではないので、各意味分野の語数の分布の特徴を考察するのに差し支えはないと考えられる。各部門に含まれる語数の割合は、「.3 人間活動—精神および行為」41.7%、「.1 抽象的關係」26.8%、「.5 自然物および自然現象」12.4%、「.4 生産物および用具」9.6%、「.2 人間活動の主体」8.6%である。

表 5-1 各区分における中項目ごとの慣用句―「1. 体の類」

類	部 門	区 分 中項目	区 分					合計
			区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	
1. 体 の 類	1. 1	1. 10 事柄	0	0	0	0	0	0
		1. 11 類	0	2	1	0	0	3
		1. 12 存在	0	0	0	0	0	0
		1. 13 様相	1	2	1	0	0	4
		1. 14 力	1	1	0	0	0	2
		1. 15 作用	1	1	3	0	0	5
		1. 16 時間	2	0	1	1	1	5
		1. 17 空間	0	0	0	0	0	0
		1. 18 形	0	0	0	0	0	0
		1. 19 量	3	1	2	1	0	7
	1. 2	1. 20 人間	0	0	0	0	0	0
		1. 21 家族	0	0	0	0	0	0
		1. 22 仲間	0	0	1	1	0	2
		1. 23 人物	0	0	0	0	0	0
		1. 24 成員	0	0	0	0	0	0
		1. 25 公私	0	0	0	0	0	0
		1. 26 社会	0	0	0	0	0	0
		1. 27 機関	0	0	0	0	0	0
	1. 3	1. 30 心	1	7	1	4	0	13
		1. 31 言語	0	2	2	1	0	5
		1. 32 芸術	0	0	0	0	0	0
		1. 33 生活	2	2	0	1	0	5
		1. 34 行為	0	1	1	1	0	3
		1. 35 交わり	0	0	0	0	0	0
		1. 36 待遇	1	0	0	0	0	1
		1. 37 経済	0	0	1	0	0	1
	1. 4	1. 38 事業	0	0	0	0	0	0
		1. 40 物品	0	0	3	0	0	3
		1. 41 資材	0	0	0	0	0	0
		1. 42 衣料	0	0	0	0	0	0
		1. 43 食料	0	0	0	0	0	0
		1. 44 住居	1	0	0	0	0	1
		1. 45 道具	0	0	0	0	0	0
		1. 46 機械	0	0	0	0	0	0
	1. 5	1. 47 土地利用	0	0	0	0	0	0
		1. 50 自然	0	0	0	0	0	0
		1. 51 物質	0	0	1	0	0	1
		1. 52 天地	0	0	0	0	0	0
		1. 53 生物	0	0	0	0	0	0
		1. 54 植物	0	0	0	0	0	0
		1. 55 動物	0	0	0	0	0	0
		1. 56 身体	0	0	0	0	0	0

		1. 57 生命	0	1	0	0	0	1
合計			13	20	18	10	1	62

【注】 1. 1 抽象的關係 1. 2 人間活動の主体 1. 3 人間活動—精神および行為
1. 4 生産物および用具 1. 5 自然物および自然現象

表 5-1 「1. 体の類」において、「1. 30 心」(13 句)に含まれる慣用句が最も多く、その次は「1. 19 量」(7 句)、「1. 15 作用」(5 句)、「1. 16 時間」(5 句)、「1. 31 言語」(5 句)、「1. 33 生活」(5 句)の順となっている。「体の類」の慣用句はほとんど使用度数の少ないものであるため、使用度数の少ない慣用句もこれらの中項目に分布していると言えよう。

表 5-2 各区分における中項目ごとの慣用句—「2. 用の類」

類	部 門	区 分 中項目	区 分					合 計
			区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	
2. 用 の 類	2. 1	2. 10 真偽	0	0	0	0	0	0
		2. 11 類	0	0	0	3	5	8
		2. 12 存在	5	3	4	3	5	20
		2. 13 様相	2	1	3	5	1	12
		2. 14 力	0	0	1	0	1	2
		2. 15 作用	9	4	7	10	8	38
		2. 16 時間	5	1	0	2	1	9
		2. 17 空間	0	0	0	1	0	1
		2. 19 量	3	0	0	0	1	4
	2. 3	2. 30 心	38	41	63	65	84	291
		2. 31 言語	10	10	5	10	9	44
		2. 32 芸術	3	0	0	0	1	4
		2. 33 生活	3	5	10	4	12	34
		2. 34 行為	8	13	3	6	6	36
		2. 35 交わり	11	15	10	7	6	49
		2. 36 待遇	11	19	11	10	6	57
		2. 37 経済	1	4	1	0	4	10
		2. 38 事業	0	0	0	0	0	0
	2. 5	2. 50 自然	0	1	0	1	1	3
		2. 51 物質	0	0	0	0	0	0
		2. 52 天地	0	0	0	0	0	0
		2. 56 身体	0	0	0	0	0	0
		2. 57 生命	0	4	1	4	6	15
合計			109	121	119	131	157	637

【注】 2. 1 抽象的關係 2. 3 人間活動—精神および行為 2. 5 自然物および自然現象

表 5-2 「2. 用の類」において、「2. 30 心」(291 句)に含まれる慣用句が最も多く、その次は「2. 36 待遇」(57 句)、「2. 35 交わり」(49 句)、「2. 31 言語」(44 句)、「2. 15 作用」(38 句)の順となっている。使用度数の多い慣用句は「2. 30 心」(149 句)、「2. 31 言語」(19 句)、

「2.15 作用」(18 句)、「2.33 生活」(16 句)、「2.36 待遇」(16 句)に集中するが、使用度数の少ない慣用句は「2.30 心」(142 句)、「2.36 待遇」(41 句)、「2.35 交わり」(36 句)、「2.31 言語」(25 句)、「2.34 行為」(24 句)に集中する。

表 5-3 各区分における中項目ごとの慣用句―「3. 相の類」

類	部 門	区 分 中項目	区 分					合 計
			区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	
3. 相 の 類	3. 1	3.10 真偽	0	0	0	0	1	1
		3.11 類	2	1	5	5	0	13
		3.12 存在	1	0	3	1	2	7
		3.13 様相	11	3	3	7	5	29
		3.14 力	1	1	0	2	0	4
		3.15 作用	2	2	5	2	1	12
		3.16 時間	3	3	8	3	1	18
		3.17 空間	0	0	0	0	0	0
		3.18 形	0	0	0	0	0	0
		3.19 量	1	4	2	2	6	15
	3. 3	3.30 心	12	19	9	14	8	62
		3.31 言語	3	6	5	2	1	17
		3.33 生活	5	1	3	4	0	13
		3.34 行為	10	3	2	1	1	17
		3.35 交わり	0	1	1	0	0	2
		3.36 待遇	2	1	2	1	2	8
		3.37 経済	2	1	1	0	0	4
	3. 5	3.50 自然	0	0	1	0	0	1
		3.51 物質	0	0	0	0	0	0
		3.52 天地	0	0	0	0	0	0
		3.53 生物	0	0	0	0	0	0
		3.56 身体	1	0	0	0	0	1
		3.57 生命	2	0	1	0	0	3
合 計			58	46	51	44	28	227

【注】 3.1 抽象的關係 3.3 人間活動—精神および行為 3.5 自然物および自然現象

表 5-3 「3. 相の類」において、「3.30 心」(62 句)に含まれる慣用句が最も多く、その次は「3.13 様相」(29 句)、「3.16 時間」(18 句)、「3.31 言語」(17 句)、「3.34 行為」(17 句)の順となっている。使用度数の多い慣用句は「3.30 心」(22 句)と「3.13 様相」(12 句)に集中するが、使用度数の少ない慣用句は「3.30 心」(40 句)、「3.13 様相」(17 句)、「3.34 行為」(15 句)、「3.16 時間」(14 句)、「3.31 言語」(14 句)に集中する。

表 5-4 「4. その他の類」において、「4.31 判断」(7 句)に含まれる慣用句が最も多く、そのほかの慣用句は「4.11 接続」(3 句)に含まれる。

表 5-4 各区分における中項目ごとの慣用句―「4. その他の類」

類	区 分 中項目	区 分			区 分		合計
		区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	
4. その他 の類	4. 11 接続	0	1	0	0	2	3
	4. 30 感動	0	0	0	0	0	0
	4. 31 判断	4	0	0	1	2	7
	4. 32 呼び掛け	0	0	0	0	0	0
	4. 33 挨拶	0	0	0	0	0	0
	4. 50 動物の鳴き声	0	0	0	0	0	0
合計		4	1	0	1	4	10

また、慣用句はすべての意味分野に分布するわけではなく、慣用句が現れない中項目も多々ある。たとえば、三類に共通する中項目として、「空間」、「物質」、「天地」が挙げられる。『分類語彙表』は体・用・相三類相互参照の必要から、原則として共通の項目名と項目番号が付される。したがって、体・用・相の各類における各中項目の慣用句をまとめ、その他の類と合わせて示すと表 6 になる。

表 6 各中項目の慣用句

部 門	区 分 中項目	区 分			区 分		合計
		区分 1	区分 2	区分 3	区分 4	区分 5	
. 1	10 事柄	0	0	0	0	1	1 (0.1%)
	11 類	2	3	6	8	5	24 (2.6%)
	12 存在	6	3	7	4	7	27 (2.9%)
	13 様相	14	6	7	12	6	45 (4.8%)
	14 力	2	2	1	2	1	8 (0.9%)
	15 作用	12	7	15	12	9	55 (5.9%)
	16 時間	10	4	9	6	3	32 (3.4%)
	17 空間	0	0	0	1	0	1 (0.1%)
	18 形	0	0	0	0	0	0
	19 量	7	5	4	3	7	26 (2.8%)
. 2	20 人間	0	0	0	0	0	0
	21 家族	0	0	0	0	0	0
	22 仲間	0	0	1	1	0	2 (0.2%)
	23 人物	0	0	0	0	0	0
	24 成員	0	0	0	0	0	0
	25 公私	0	0	0	0	0	0
	26 社会	0	0	0	0	0	0
	27 機関	0	0	0	0	0	0
. 3	30 心	51	67	73	83	92	366 (39.1%)
	31 言語	13	18	12	13	10	66 (7.1%)
	32 芸術	3	0	0	0	1	4 (0.4%)
	33 生活	10	8	13	9	12	52 (5.6%)

	34. 行為	18	17	6	8	7	56 (6.0%)
	35. 交わり	11	16	11	7	6	51 (5.4%)
	36. 待遇	14	20	13	11	8	66 (7.1%)
	37. 経済	3	5	3	0	4	15 (1.6%)
	38. 事業	0	0	0	0	0	0
. 4	40. 物品	0	0	3	0	0	3 (0.3%)
	41. 資材	0	0	0	0	0	0
	42. 衣料	0	0	0	0	0	0
	43. 食料	0	0	0	0	0	0
	44. 住居	1	0	0	0	0	1 (0.1%)
	45. 道具	0	0	0	0	0	0
	46. 機械	0	0	0	0	0	0
	47. 土地利用	0	0	0	0	0	0
. 5	50. 自然	0	1	1	1	1	4 (0.4%)
	51. 物質	0	0	1	0	0	1 (0.1%)
	52. 天地	0	0	0	0	0	0
	53. 生物	0	0	0	0	0	0
	54. 植物	0	0	0	0	0	0
	55. 動物	0	0	0	0	0	0
	56. 身体	1	0	0	0	0	1 (0.1%)
	57. 生命	2	5	2	4	6	19 (2.0%)
4.		4	1	0	1	4	10 (1.1%)
合計		184	188	188	186	190	936 (100%)

【注】 1. 1 抽象的關係 1. 2 人間活動の主体 1. 3 人間活動—精神および行為
1. 4 生産物および用具 1. 5 自然物および自然現象 4. その他の類

表 6 から分かるように、「心」に含まれる慣用句の割合が最も高く、4 割近くを占める。具体的にみると、「心」において、区分 1 には 51 句、区分 2 には 67 句、区分 3 には 73 句、区分 4 には 83 句、区分 5 には 92 句がある。それぞれが各区分の慣用句総数に占める割合は 27.7%、35.6%、38.8%、44.6%、48.4%であり、いずれも 2 割以上となり、慣用句の使用度数の増加と共に、その割合も増加傾向にあると言えよう。

「心」に含まれる慣用句が最も多い原因としては 2 つ考えられる。1 つめは、『分類語彙表』のなかで収録された語彙自体、「心」を表すものが最も多いからである。林 (2009:41) によると、「30 心」を表す語が 11,879 語で、1 割強と分かる。2 つめは、「気」、「心」、「腹」、「胸」といった語が慣用句の構成要素として多く使用されるからである。「腹」や「胸」は心が宿る場所で、「気」や「心」と同様に、心の状態や動きを表すとされる。この 2 点を踏まえると、慣用句には全体として、「心」を表すものが多く存在する。

なお、「心」に次ぐのは、「言語」(7.1%)、「待遇」(7.1%)、「行為」(6.0%)、「作用」(5.9%) の 4 つである。その割合は 5.9%~7.1%であり、決して高いとは言えない。特に注意されたいのは、全体としては「心」、「言語」、「待遇」、「行為」、「作用」に含まれる慣用句の割合が高いが、区分ごとに見ても同様の結果が提示されることである。言い換えれば、使用度

数の多い慣用句はこれらの中項目に分布するが、使用度数の少ない慣用句もこれらの中項目に集中する。具体的に見ると、使用度数の高い慣用句の多くは、「心」(175 句)、「言語」(23 句)、「作用」(21 句)、「生活」(21 句)、「待遇」(19 句)に分布する。一方で、使用度数の低い慣用句の多くは、「心」(191 句)、「待遇」(47 句)、「言語」(43 句)、「行為」(41 句)、「交わり」(38 句)に分布する。また、「形」、「人間」、「事業」、「資材」、「生物」などを表す慣用句が見られなかった。

したがって、中項目からみた結果、第一に体・用・相の各類において、「心」に含まれる慣用句が最も多いこと、第二に全体として「心」、「言語」、「待遇」、「行為」、「作用」に含まれる慣用句の割合が高いこと、第三に使用度数の多い慣用句が「心」、「言語」、「作用」、「生活」、「待遇」に集中するのに対し、使用度数の少ない慣用句が「心」、「待遇」、「言語」、「行為」、「交わり」に集中することが明らかになった。

慣用句意味分類の分布状況を確認したところ、全体として抽象的なものを表す慣用句が多い。これは、外界に存在する物体や景色といった具体的存在を用いて、思いや感情といった抽象的存在を表すという人間の思考パターンによるものと考えられる。

2.4 BCCWJ と新聞記事を用いた調査結果の相関分析

以上、BCCWJ を調査資料として、どのような意味分野にどのような慣用句が集中するのか、それがどのくらい使用されるのかについて考察した。では、慣用句の使用度数について、ほかの言語資料ではどうなるのか。以下では、新聞記事を比較の対象として取り上げ、新聞記事データベースにおける慣用句の使用度数を調査し、BCCWJ と新聞記事を用いた調査結果の相関係数 (correlation coefficient) を算出することにより、両者の相関の強度を分析する。

同様に、佐藤 (2007) と橋本・河原 (2008) により選定された 926 句 (延べ 936 句) の慣用句を調査対象とする。調査資料として、朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』にアクセスし、1986 年 1 月 1 日から 2015 年 12 月 31 日まで 30 年間の記事を利用する。各慣用句の使用度数を調査する前に、まず新聞記事データベースを慣用句の用例採集に利用する際の問題点を次に整理する。

- ①著作権の関係で記事の本文が表示できない。
- ②検索語が慣用句として使用されていない³⁷。
- ③同一の記事において検索語が複数の箇所に現れる。
- ④検索語が複数の記事により同様の形で取り上げられる。
- ⑤検索語に表記のゆれや用言の活用がある。

³⁷ 2.2 と同様に、メタ言語的な例、文字通りの意味を表す例、作品名やそのほかの不適切な例と思われるものを指す。

- ⑥検索語の構成要素間に別の要素が介入する。
- ⑦検索語が慣用句として使用されるが、その意味が多義的である。
- ⑧検索語が慣用句として使用されるが、その用法がいわゆる「誤用」とされる。

こうした問題点があるゆえに、新聞記事データベースを利用した検索結果は、検索語の使用度数を表すのではなく、あくまで記事の件数を表すものである。同様に、調査に当たっては、目視で用例を確認し、①と②に該当するものを除外する。③と④に該当するものは、異なり用例数を記録する形で、重複のものを省略し、異なるものを加算する。また、⑤～⑧の問題への対処法は本章 2.2 に従う³⁸。

ところが、本調査で対象とした慣用句には用例が極めて多いものがある。目視調査の際は、すべての用例を精査するには膨大な時間を要する。したがって、BCCWJ を用いた調査と同様に有効な用例数を概算することにした。具体的には、ヒットした記事数が 100 件以下のものは全部チェックしたが、100 件を超えるものは、先頭 50 件と後尾 50 件をそれぞれ調べ、そのパーセンテージをヒットした記事の総件数にかけて有効な用例数を概算した。つまり、

$$\frac{\text{先頭 50 件の有効な用例数} + \text{後尾 50 件の有効な用例数}}{100 \text{ 件}} \times \text{ヒットした記事の総件数}$$

で有効な用例数を求める。

2.4.1 調査結果の概要

上記の調査基準に従いながら、各慣用句の使用度数を調査した。その結果に基づき、便宜上、延べ 936 句の慣用句を以下の 5 つに区分できる。

区分 1	ほとんど使わない慣用句	($0 \leq x < 100$ 、 $n=187$ 、全体の 20.0%)
区分 2	まれに使う慣用句	($100 \leq x < 260$ 、 $n=190$ 、全体の 20.3%)
区分 3	たまに使う慣用句	($260 \leq x < 650$ 、 $n=186$ 、全体の 19.9%)
区分 4	ときどき使う慣用句	($650 \leq x < 1,700$ 、 $n=188$ 、全体の 20.1%)
区分 5	よく使う慣用句	($x \geq 1,700$ 、 $n=185$ 、全体の 19.8%)
(x は各慣用句の使用度数、n は各区分に含まれる慣用句の数を示す)		

³⁸ 新聞記事データベースでは、正規表現が使えないため、第 2 部事例研究に見るような無効な用例が多く存在する。検索のときは、可能な表記や活用を考慮に入れ、できるだけ多くの用例を収集し、そこから有効なものを拾い出した。

各区分の慣用句は以下のとおりである。多義性をもつ慣用句は、該当の意味を表す分類番号を記して区別した。本章 2.2 と同じ区分に含まれる慣用句は下線を引いて示す。なお、五十音順に整理した慣用句使用度数の区分は資料 1 を参照。

【区分 1】 ほとんど使わない慣用句 (0 ≤ 使用度数 < 100、187 句)

青筋を立てる、赤子の手をねじる、赤子の手をひねる、あごで使う、あごを出す、足音を忍ばせる、足が速い、足が棒になる、足元に火が付く、足を棒にする、頭隠してしり隠さず、後は野となれ山となれ、穴があったら入りたい、あぶはち取らず、油を売る、油を絞る、ありのはい出るすき間もない、泡を食う、息をつく暇もない、一家を成す、一杯食う、今や遅しと、芋を洗うよう、いやでも応でも、色を失う、因果を含める、上を下への大騒ぎ、牛の歩み、腕が鳴る、うの目たかの目、海の物とも山の物とも付かない、運を天に任せる、大きな口をきく、大見得を切る、おくめんもなく、お茶の子さいさい、鬼の目にも涙、尾ひれを付ける、恩に着せる、恩に着る、飼い犬に手をかまれる、顔がつぶれる、顔から火が出る、顔向けができない、陰になりひなたになり、かさに懸かる、肩で風を切る、かぶとを脱ぐ、かまを掛ける、我を折る、我を張る、気がもめる、気骨が折れる、肝が太い、ぐうの音も出ない、口が軽い、口が減らない、口から先に生まれる、くちばしが黄色い、くちばしを入れる、口も八丁手も八丁、口を切る (2. 1553)、口を切る (2. 3131)、口を割る、雲をつく、けちが付く、声をのむ、志を遂げる、事と次第によっては、ごまをする、細大漏らさず、さばを読む、下にも置かない、十指に余る、しっぽを出す、しっぽをつかむ、始末に負えない、春秋に富む、知らぬが仏、しり馬に乗る、しりが重い、しり目にかける、心臓が強い、すずめの涙、砂をかむよう、すねに傷を持つ、隅に置けない、精が出る、世話が焼ける、そでにする、他人の空似、矯めつすがめつ、茶茶を入れる、長足の進歩、ちょうちんを持つ、つむじを曲げる、つめに火をともし、つめのあかほど、面の皮が厚い、手が上がる、てこでも動かない、出鼻をくじく、手を取る、どじを踏む、とらの威を借るきつね、取り付く島がない、取る物も取りあえず、泥を吐く、度を過ごす、泣きの涙、何くれとなく、何は無くとも、二の句がつけない、抜き足差し足、寝返りを打つ、猫もしゃくしも、猫をかぶる、年季を入れる、年貢の納め時、乗り掛かった船、のるか反るか、のれんを分ける、ばかになる、歯が抜けたよう、馬脚を現す、化けの皮がはがれる、はしにも棒にも掛からない、はちの巣をつついたよう、鼻が利く、話の腰を折る、鼻であしらう、鼻を明かす、鼻を折る、鼻を鳴らす、歯にきぬを着せない、歯の根が合わない、腹が太い、腹の虫が治まらない、ひざを乗り出す、額を集める、人聞きが悪い、ひとみを凝らす、日の出の勢い、不意を食う、袋のねずみ、筆が立つ、筆を加える、船をこぐ、へとも思わない、ほうほうの体、骨身にこたえる、骨身を惜しまない、ぼろが出る、耳が早い、耳をそろえる、虫が知らせる、虫が好かない、虫ずが走る、虫の居所が悪い、虫の知らせ、胸くそが悪い、胸が膨らむ、目が利く、目が据わる、目から鼻へ抜ける、目と鼻の間、目に角を立てる、目に物見せる、目の上のこぶ、目の中に入れても痛くない、芽を吹く、目を細くする、もったいをつける、物になる、物は試し、焼きが回る、焼きを入れる、やせても枯れても、矢の催促、やぶから棒、欲の皮が突っ張る、横車を押す、夜の目も寝ずに、夜も日も明けない、寄ると触ると、弱り目にたたり目、らっぱを

吹く。

【区分2】 まれに使う慣用句（100≦使用度数<260、190句）

揚げ足を取る、明けても暮れても、足が出る、味も素っ気も無い、後を引く、危ない橋を渡る、網を張る、合わせる顔がない、生き馬の目を抜く、息が長い、息を凝らす、意地が悪い、石にかじり付いても、石橋をたたいて渡る、一から十まで、一事が万事、一も二もなく、命の洗濯、腕が上がる、腕に覚えがある、打てば響く、うなぎの寝床、馬が合う、売り言葉に買い言葉、おうむ返し、大きな顔をする、大目玉を食う、おくびにも出さない、お先棒を担ぐ、同じ穴のむじな、鬼に金棒、重きを成す、重荷を下ろす、及びもつかない、恩をあだで返す、顔に泥を塗る、顔をつぶす、影も形もない、かさに着る、風の便り、肩の荷を下ろす、角が取れる、金に糸目をつけない、かんで含める、堪忍袋の緒が切れる、気炎を上げる、気がとがめる、木で鼻をくくる、気に病む、きびすを返す、肝が据わる、肝をつぶす、興に乗る、気を落とす、臭い物にふたをする、口が堅い、口が滑る、口が悪い、唇をかむ、口を利く（2. 3522）、首が回らない、軍門に下る、けがの功名、けたが違う、けんかを売る、けんもほろろ、口角泡を飛ばす、声を限りに、声を立てる、小首をかしげる、心が弾む、志を立てる、心に掛ける、腰が抜ける、腰が低い、腰を折る、言葉に尽くせない、思案に暮れる、地団太を踏む、しゃくにさわる、雌雄を決する、食指が動く、白を切る、しりに火が付く、進退きわまる、図に当たる、図に乗る、すねをかじる、たがが緩む、高みの見物、竹を割ったよう、多勢に無勢、立つ瀬がない、手綱を引き締める、立て板に水、盾に取る、玉にきず、たんかを切る、血も涙もない、血わき肉踊る、血を分ける、月とすっぽん、土が付く、手がふさがる、手ぐすねを引く、手に汗を握る、手八丁口八丁、手を打つ（2. 3530）、堂に入る、毒にも薬にもならない、年がよいもない、取って付けたよう、とどのつまり、取るに足りない、度を失う、何食わぬ顔、何はさておき、難癖をつける、煮え湯を飲まされる、苦虫をかみつぶしたよう、抜け目がない、願ったりかなったり、猫の手も借りたい、熱しやすく冷めやすい、熱に浮かされる、根に持つ、年がら年じゅう、旗色が悪い、破竹の勢い、鼻が高い、鼻に掛ける、鼻に付く（2. 5040）、鼻持ちならない、花を持たせる、羽を伸ばす、羽目を外す、腹が据わる、腹に据えかねる、腹を探る、腹を据える、はれ物に触るよう、火が消えたよう、引っ込みがつかない、一泡吹かせる、一旗揚げる、人目を忍ぶ、人目をはばかり、非の打ち所がない、ピンからキリまで、風雲急を告げる、へそを曲げる、骨身を削る、間が抜ける、間が悪い、またに掛ける、まんじりとしめない、右から左、右に出る者がいない、水も漏らさぬ、水を打ったよう、みそを付ける、道草を食う、身の毛がよだつ、耳に入れる、耳にたこができる、耳につく、身もふたもない、脈が有る、見るに忍びない、見るに見兼ねて、虫の息、胸がつぶれる、胸がふさがる、眼鏡にかなう、目にも留まらぬ、目の黒いうち、目鼻が付く、目星を付ける、目も当てられない、目をくらます、目を皿のようにする、目を白黒させる、目を回す、湯水のように使う、弓を引く、用を足す（2. 3400）、善かれあしかれ、横やりを入れる、若気の至り、我も我もと。

【区分3】 たまに使う慣用句（260≦使用度数<650、186句）

開いた口がふさがらない、赤の他人、挙げ句の果て、足が付く、足元にも及ばない、足元を見られる、

足元を見る、足を洗う、味を占める、頭が上がらない、当てが外れる、いい気になる、行き当たりばったり、息の根を止める、息を殺す、息を詰める、意地になる、意地を張る、至れり尽くせり、一か八か、一言もない、一日の長、一笑に付す、いばらの道、今か今かと、いやが上にも、雨後の竹の子、後ろ髪を引かれる、後ろ指を指される、うだつが上がらない、うつつを抜かす、腕によりを掛ける、うまい汁を吸う、有無を言わせず、恨みを買う、うり二つ、雲泥の差、悦に入る、お株を奪う、押し合いへし合い、押しも押されもしない、遅かれ早かれ、思うつぽ、顔が売れる、顔が利く、片棒を担ぐ、肩をすばめる、肩を持つ、角が立つ、かゆい所に手が届く、かんこ鳥が鳴く、気が置けない、気が利く、聞き耳を立てる、机上の空論、機先を制する、きつねにつままれる、気に障る、肝を冷やす、口がうまい、口が重い、口をとがらせる、首を長くする、げたを預ける、けちを付ける、血相を変える、けりが付く、犬猿の仲、心が通う、心に掛かる、心を鬼にする、心を配る、心を許す、腰を抜かす、御多分に漏れず、言葉を返す、小耳に挟む、さい配を振る、先を争う、探りを入れる、さじを投げる、死力を尽くす、白い目で見ると、水泡に帰す、是が非でも、背筋が寒くなる、背に腹は替えられない、先見の明、相好を崩す、そ知らぬ顔、宝の持ち腐れ、だだをこねる、盾を突く、力を落とす、血の気が引く、血のにじむような、血道を上げる、調子に乗る (2.1660)、つるの一声、手が空く、手が離れる、手玉に取る、手に乗る、手も足も出ない、手を切る、手を下す、手を焼く、天びんに掛ける、峠を越す、床に就く、突拍子もない、取りも直さず、泥を塗る、なしのつぶて、波風が立つ、名を売る、名を成す、にしきを飾る、二足のわらじを履く、似たり寄ったり、にっちもさっちもいかない、似ても似つかない、抜き差しならない、猫の顔、熱が冷める、熱を上げる、寝ても覚めても、根掘り葉掘り、根も葉もない、のどから手が出る、場数を踏む、ばかを見る、薄氷を踏む、バスに乗り遅れる、ばつが悪い、バトンを渡す、鼻息が荒い、鼻に付く (2.3020)、万事休す、判で押したよう、ひざを交える、ひとたまりもない、一肌脱ぐ、人を食う、火に油を注ぐ、火ぶたを切る、百も承知、不意を突く、風前のともしび、不覚を取る、筆を入れる、ふに落ちない、踏んだりけったり、ペソをかく、魔が差す、負けず劣らず、水の泡、身に余る、耳が痛い、耳に挟む、耳をそばだてる、見る影もない、身を入れる、身を粉にする、身を立てる、胸が躍る、胸がすく、胸が張り裂ける、胸を躍らせる、無用の長物、目がくらむ、目が肥える、目がない、目からうろこが落ちる、目くじらを立てる、目の色を変える、目を注ぐ、元の本阿弥、物心がつく、やむにやまれず、指をくわえる、らく印を押される、らちが明かない、ろれつが回らない、わき目も振らず、我を忘れる。

【区分 4】 ときどき使う慣用句 (650≦使用度数<1,700、188 句)

愛想を尽かす、相づちを打つ、あぐらをかく、足がすくむ、足が鈍る、頭に来る、頭をひねる、頭をもたげる、あつけに取られる、後の祭り、脂が乗る、息が合う、息が切れる、息が詰まる、異彩を放つ、板につく、一目置く、一糸乱れず、一矢を報いる、居ても立っても居られない、嫌と言うほど、入れ替わり立ち替わり、意を決する、うなぎ登り、裏をかく、縁起を担ぐ、縁の下力持ち、多かれ少なかれ、大目に見る、お茶を濁す、思いも掛けない、折り紙付き、顔が広い、顔を曇らせる、かたずをのむ、型にはまる、肩の荷が下りる、肩身が狭い、活を入れる、気が重い、気が気でない、気が済む、気が遠くなる、気が引ける、切っても切れない、気に食わない、気に留める、着の身着のまま、

九死に一生を得る、気を取り直す、気を回す、悔いを残す、くさびを打ちこむ、口に合う、口を利く
 (2. 3100)、首にする、首を切る、首を突っ込む、軍配が上がる、けむに巻く、けりを付ける、業を煮やす、声を潜める、心が動く、心に留める、心を奪われる、最後を飾る、三拍子そろう、自腹を切る、しびれをきらす、白羽の矢が立つ、心血を注ぐ、辛酸をなめる、青天のへきれき、世話を焼く、先手を打つ、大事を取る、高根の花、高をくくる、棚に上げる、駄目を押す、たもとを分かち、血が通う、血が騒ぐ、血がつながる、地に落ちる、調子に乗る (2. 3041)、手が込む、手が付けられない、手が出ない、手がない、手塩に掛ける、手に余る、手に付かない、手をこまねく、手を握る、手を回す、手を休める、度肝を抜く、どこ吹く風、とどめを刺す、途方もない、とらの子、何かにつけて、何はともあれ、鳴りをひそめる、願ってもない、熱を入れる、音を上る、歯が立たない、発破をかける、話に花が咲く、鼻を突く、幅を利かせる、腹を決める、腹をくくる、腹を割る、びくともしない、一筋縄では行かない、人目を引く、火の海、火の車、ピリオドを打つ、目を追って、不幸中の幸い、筆を執る、筆をふるう、変哲もない、棒に振る、ほごにする、骨が折れる、骨を埋める、骨を折る、枚挙にいとまがない、幕が開く、的を射る、真に受ける、まゆをひそめる、身が入る、水と油、水に流す、水を向ける、身に覚えがない、身につまされる、身になる、耳が遠い、耳に入る、耳を疑う、耳を貸す、身を固める、虫がいい、胸が一杯になる、胸が詰まる、胸に迫る、胸を痛める、胸を膨らませる、目が覚める、目頭が熱くなる、芽が出る、目が回る、目に余る、目に触れる、目もくれない、目を疑う、目を覆う、目を落とす、目を掛ける、目を配る、目を覚ます、目を盗む、目を丸くする、目をむく、持ちつ持たれつ、元も子もない、物にする (2. 3050)、物を言わせる、矢面に立つ、焼け石に水、やり玉に挙げる、有終の美を飾る、用を足す (2. 5710)、弱音を吐く、レッテルをはる、路頭に迷う、訳は無い、渡りに船、我に返る、輪を掛ける。

【区分5】 よく使う慣用句（使用度数≥1,700、185句）

足を伸ばす、足を運ぶ、足を引っ張る、頭が痛い、頭が下がる、頭を痛める、頭を抱える、跡を絶たない、暗礁に乗り上げる、案の定、息をのむ、息を引き取る、息を吹き返す、いざという時、命を懸ける、意表をつく、嫌気が差す、動きが取れない、腕を振るう、腕を磨く、襟を正す、後れを取る、お目にかかる、思いも寄らない、尾を引く、音頭を取る、顔を出す、影が薄い、掛け替えのない、肩を落とす、肩を並べる、気が付く、気が強い、気が抜ける、気に入る、気に掛かる、気に掛ける、気にする、気になる、肝に銘じる、脚光を浴びる、気を失う、気を配る、気を付ける、気を取られる、気をもむ、空を切る、くぎを刺す、口にする (2. 3331)、口にする (2. 3100)、口火を切る、口をそろえる、口を出す、口をつぐむ、口を挟む、苦になる、首になる、首をかしげる、首をひねる、工夫を凝らす、群を抜く、声を掛ける、心が痛む、心を痛める、心を打つ、心を砕く、心を込める、腰を据える、異にする、事によると、言葉を濁す、舌鼓を打つ、舌を巻く、しのぎを削る、生計を立てる、精を出す、背を向ける、底を突く、太鼓判を押す、端を発する、知恵を絞る、力を入れる、力を貸す、宙に浮く、注目を浴びる、手が掛かる、手が届く、手に入れる、手に負えない、手にする (2. 3700)、手にする (2. 3392)、手を合わせる、手を入れる、手を打つ (2. 3084)、手を掛ける、手を貸す、手を借りる、手を差し伸べる、手を出す、手を尽くす、手を付ける、手を抜く、手を延ばす、手を引く、

手を広げる、頭角を現す、トップをきる、とてつもない、途方に暮れる、取り返しがつかない、長い目で見ると、流れをくむ、何が何でも、涙をのむ、波に乗る、名もない、二の足を踏む、寝耳に水、根を下ろす、根を張る、念を押す、背水の陣、白紙に戻す、拍車をかける、話にならない、腹が立つ、腹を立てる、歯を食い縛る、引けを取る、人目に付く、一役買う、日の目を見る、火花を散らす、氷山の一角、本腰を入れる、幕を開ける、幕を閉じる、間に合う (2. 1660)、間に合う (2. 1931)、磨きを掛ける、見切りをつける、水をあける、水を差す、身にしみる、身に付く、身に付ける、耳にする、耳を傾ける、耳を澄ます、見様見まね、身を引く、実を結ぶ、身をもって、身を寄せる、胸が痛む、胸に刻む、胸を打つ、胸をなで下ろす、胸を張る、目が高い、メスを入れる、めどが付く、目に浮かぶ、目にする、目に付く、目に留まる、目に入る、目に見えて、目を奪う、目を凝らす、目を背ける、目を付ける、目をつぶる、目を通す、目を離す、目を光らす、目を引く、目を見張る、目をやる、物にする (2. 3700)、物を言う、役に立つ、やむを得ず、やむを得ない、世を去る。

2.4.2 二種のデータに関する相関分析

以下に言う二種のデータとは、BCCWJを用いたデータと新聞記事データベースを用いたデータのことを指す。本節では、この二種のデータ間の関連を分析する。まず、二種のデータにおける各区分の慣用句の数を表7に示す。たとえば、BCCWJを用いた調査では、区分1に含まれる慣用句の数は全部で184句である。この184句は同時に、新聞を用いた調査の各区分にも含まれる。具体的にみると、区分1には111句、区分2には52句、区分3には13句、区分4には6句、区分5には2句が含まれる。便宜上、表7では、BCCWJにおける各区分にa、新聞記事における各区分にbを付け加えて区別する。

表7 二種のデータにおける各区分の慣用句数

二種のデータ		BCCWJ 調査					新聞各区分の総数
		区分 1a	区分 2a	区分 3a	区分 4a	区分 5a	
新聞調査	区分 1b	111	58	12	5	1	187
	区分 2b	52	64	51	17	6	190
	区分 3b	13	39	65	54	15	186
	区分 4b	6	22	48	67	45	188
	区分 5b	2	5	12	43	123	185
BCCWJ 各区分の総数		184	188	188	186	190	936

表7の対角線上に位置するデータ（太字で表示する部分）、つまり、二種のデータにおいて同じ区分に属する慣用句の数を見ると、区分1aと区分1bは111句、区分2aと区分2bは64句、区分3aと区分3bは65句、区分4aと区分4bは67句、区分5aと区分5bは123句である。本章2.4.1に掲げた各区分に含まれる慣用句のうち、下線を引いたものがこれらの慣用句に対応する。

表7の数値を横に見るのは、新聞調査におけるある区分の慣用句がBCCWJ調査においてどのように分布するのかを示すものであり、縦に見るのは、BCCWJ調査におけるある区分の慣用句が新聞調査においてどのように分布するのかを示すものである。

すると、対角線上の数値を横に見ても縦に見てもほかの数値より大きいことが明らかになり、二種のデータで慣用句が同一の区分に属する傾向が強いことが示唆される。言い換えれば、ある慣用句に対し、もしBCCWJにおける使用度数が多ければ、新聞記事データベースにおける使用度数も多く、逆にもしBCCWJにおける使用度数が少なければ、新聞記事データベースにおける使用度数も少ない。

しかし、これはあくまでも直感的な判断であり、二種のデータがいったいどこまで関連するかという説明まではできない。そこで、以下では、その関連の強度を相関係数（ここでは、 ρ_{xy} で表示する）で求め、数値化することにより、どの程度の関連があるかを議論する。相関係数は、共分散（covariance）をX、Yの標準偏差（standard deviation）で割って、すなわち、

$$\rho_{xy} = \frac{\text{Cov}(XY)}{\sqrt{D(X)}\sqrt{D(Y)}}$$

で求める。シュワルツの不等式により、得られた ρ_{xy} は $-1 \leq \rho_{xy} \leq 1$ とされる。

なお、相関係数の評価は以下のとおりである。

- (i) $\rho_{xy} = -1$ 完全な負の相関
- (ii) $-1 < \rho_{xy} \leq -0.7$ 強い負の相関
- (iii) $-0.7 < \rho_{xy} \leq -0.4$ かなりの負の相関
- (iv) $-0.4 < \rho_{xy} \leq -0.2$ やや相関あり
- (v) $-0.2 < \rho_{xy} < 0$ ほとんど相関なし
- (vi) $\rho_{xy} = 0$ 相関なし

(vii) $0 < \rho_{xy} < 0.2$ ほとんど相関なし

(viii) $0.2 \leq \rho_{xy} < 0.4$ やや相関あり

(ix) $0.4 \leq \rho_{xy} < 0.7$ かなりの正の相関

(x) $0.7 \leq \rho_{xy} < 1$ 強い正の相関

(xi) $\rho_{xy} = 1$ 完全な正の相関

相関係数を算出するため、まず、表 7 の数値を総数 936 で割って確率を算出する。表 8 に示すのは、その結果である（計算式から出た結果は小数点以下 3 桁表示、以下同様）。次いで、区分 1 から区分 5 まで順に 0、1、2、3、4 という値を付与する。

表 8 各数値の確率

X/Y	0	1	2	3	4	
0	0.119	0.062	0.013	0.005	0.001	0.200
1	0.056	0.068	0.054	0.018	0.006	0.203
2	0.014	0.042	0.069	0.058	0.016	0.199
3	0.006	0.024	0.051	0.072	0.048	0.201
4	0.002	0.005	0.013	0.046	0.131	0.198
	0.197	0.201	0.201	0.199	0.203	1.000

表 8 の数値に基づき、相関係数を算出する。

$$\rho_{xy} = \frac{\text{Cov}(XY)}{\sqrt{D(X)}\sqrt{D(Y)}} = 0.726$$

算出した相関係数は上記（x） $0.7 \leq \rho_{xy} < 1$ 強い正の相関という範囲に含まれる。よって、 X と Y が代表する二種のデータは強い正の相関があると言ってよい。

以上、相関分析を行った結果、新聞記事を用いた調査結果は BCCWJ を用いた調査結果と関連が強く、異なるレジスター間には慣用句使用度数の分布差異がほとんど見られないことが結論付けられる。

2.5 本章のまとめ

本章では、まず書籍コーパスから 936 句の慣用句の使用度数を調査した。度数順位に従い、ほとんど使わない慣用句からよく使う慣用句まで 5 つに区分し、各区分に含まれる慣用句の意味分野を観察した。その結果、慣用句は全体としても各区分においても、用の類（動詞の類）、そして「人間活動—精神および行為」という部門に集中することが分かった。また使用度数を考慮しつつ意味分野を詳細に記述することにより、どの意味分野にどのような慣用句が分布するのか、それがどのくらい使用されるのか、を提示した。

次いで、新聞記事を資料とし、同様の分析手法を用いて調査した。二種の調査結果に対し、相関係数を算出することにより、書籍・新聞という異なるレジスターによる慣用句使用度数の分布差異が見られるかどうか、を検討した。

結果として、相関係数が 0.7 を超え、2 つのデータには強い正の相関があることが示唆された。それに基づき、片方の資料における使用度数が多いと、もう片方の資料における使用度数も多く、異なるレジスター間の分布差異が見られないことが確認された。

第3章 現代日本語における基幹慣用句の選定

3.1 はじめに

第2章では、考察の際、ジャンルという要因は検討の対象外だったため、使用度数が多いがある特定のジャンルにしか使われない慣用句、あるいは、使用度数が少ないが複数のジャンルにわたって広く使われる慣用句は存在するのか、もし存在するならば、どのくらいあるのか、といった課題が残された。本章では、この課題に取り組むべく、基幹慣用句の選定を目的とし、慣用句の「広さ」と「深さ」を分析する。

具体的には、第2章で得られた BCCWJ 書籍コーパスジャンル毎の各慣用句の使用度数をデータとして利用し、慣用句がいくつのジャンルにわたって出現するかを表す「広さ」と、使用度数の多少を表す「深さ」を指標として、慣用句の基幹度を測る。

3.2 基幹慣用句とは

本研究では、「基幹語彙」という概念にのっとり、慣用句という集合の中で基幹部として存在するものを「基幹慣用句」と呼ぶことにする。基幹慣用句の選定に先立ち、まず「基幹語彙」及びそれに関連する諸概念を整理しておきたい。

「基幹語彙」というのは、林（1971）による造語である。林（1971:2）が新聞の語彙調査から基本語彙を求めようとしたとき、それまでおおざっぱに基本語彙と言われた概念を細かく分けて、次の5つの概念を立てた。

- ① 基礎語彙 意味の論理的分析によって求められた半人工的な語彙
- ② 基本語彙 特定目的のための「〇〇基本語彙」
- ③ 基準語彙 標準的社会人としての生活に必要な語彙
- ④ 基調語彙 特定作品の基調を作るのに働く語彙
- ⑤ 基幹語彙 ある語集団の基幹部として存在する語彙

「基幹語彙」がほかの概念から区別される特徴として、林（1971:10-11）は以下のように述べている。

基礎語彙から基準語彙までは、いずれも、指定する一群の語によって、何か大きな働きをさせようとする功利性を、土台にもっている。基幹語彙は、こういう功利性を

全く除き去ったところに成立する概念である。

(中略) 基幹語彙とは、ある語集団の中に、その集団の骨格のような部分として、その集団をささえる基幹的部分として、現に存在する、語の部分集団を呼ぶ。基幹語彙が基礎語彙から基準語彙までのものと大いに違うところは、要請によって空に描き出される仮設的存在ではなく、現に実在する実体であることである。

林 (1971:11) は、1つの語彙調査を縦に見るとともに、いくつもの語彙調査を横に見て、どこでもよく使われている語ほど、全資料内でそれだけ基幹的存在だという考え方を示した。つまり、「基幹語彙」は、調査された言語資料の中で、多方面にわたって高頻度で用いられている語の集合を言う。

本研究に言う「基幹慣用句」は、林 (1971) の「基幹語彙」に対する概念に従うゆえ、「基幹慣用句」が意味するもの、また、その選定に用いられた言語資料の中で、複数のジャンルにわたって高頻度で用いられる慣用句のことである。

3.3 選定基準

3.3.1 林 (1971) による選定基準

林 (1971) では、1966 年の朝日・毎日・読売 3 紙を語彙調査した「新聞語彙調査」全データの 3 分の 1 に当たるデータ (長単位延べ 68 万、異なる長単位約 10 万) を使用し、度数 10 以上の 5,417 語を対象として、1,004 語の新聞基幹語彙が示された。

具体的には、話題別の 12 区分 (政治・外交・経済・労働・社会・国際・文化・地方・スポーツ・婦人家庭・芸能・広告) に注目して「層別」と呼び、10~12 層に使われる「極めて広い」語から、1~2 層にしか使われない「狭い」語まで、語が使われる幅の広さを 4 段階に分ける。また、各層での使用度数を語の使われ方の「深さ」とし、使用度数を 6 段階に分け、最も度数の高い階級を 6 点、最も度数の低い階級を 1 点として、12 層の階級点数の合計で「深さ」を設定し、「深い」、「中位」、「浅い」の 3 群に分ける。集計した結果、次の 5 区画に入る 1,004 語を新聞基幹語彙とした。

- 【A1】極めて幅が広く、深さも深いもの 162 語
- 【A2】極めて幅が広く、深さ中位のもの 229 語
- 【A3】極めて幅が広く、深さは浅いもの 198 語
- 【B1】かなり幅が広く、深さが深いもの 10 語
- 【B2】かなり幅が広く、深さ中位のもの 405 語

林 (1971:27) は、【A1】、【A2】、【B1】に属する語が基幹度の高い語であること、【A3】に属する語は浅くても幅広く存在するため、やはり基幹度が高いと見るべきこと、そして、

【B2】に属する語の基幹度も高く評価してよいことを主張している。

3.3.2 土屋（1992）による選定基準

一方、土屋(1992)は、高等学校の社会科教科書 5 冊(延べ語数 211,244、異なり語数 13,041)を対象として、基幹語彙を選定した。具体的には、教科書 5 科目(倫理社会、政治経済、日本史、世界史、地理)をそのまま採用して 5 層に分けて「広さ」とする。また、「深さ」は、使用度数を採らず、各教科書の累積使用率³⁹の平均値を計算し、各語の「深さ」の度合いとする。平均累積使用率の分布を見ることによって、上位何パーセントまでに含まれる語がどの程度あるかが分かる。平均累積使用率 75%までを「深い」語、97.5%までを「中位」の語、100%までを「浅い」語として判断した。その結果、2,061 語を社会科基幹語彙の候補として取り出した。

上記 2 つの先行研究における基幹語彙の選定基準では、1 つの共通点が見られる。すなわち、語の使われ方の「広さ」と「深さ」に注目する点である。両者はともに語がいくつかの層にわたって出現することを「広さ」の尺度として使用するが、「深さ」の尺度においては、両者に食い違いが見られる。前者は、各語の使用度数を手掛かりにするのに対し、後者は各教科書の累積使用率の平均値を手掛かりにする。その理由として、後者は、生の使用度数は調査集団の大きさに左右されやすいからであると述べる。つまり、生の使用度数を「深さ」の尺度とすると、各分野で幅広く使われる低頻度の語が資料間の規模の差によって選定の対象から除外される可能性が高いからである。各語の累積使用率の平均値を計算して、それを「深さ」の尺度とすると、資料間の規模の差による問題をある程度補うことができると思われる(金 2003:73-74)。

林(1971)が提示した「広さ」を測る基準と、土屋(1992)が提示した「深さ」を測る基準に従った実証的な研究として、金(2003)が挙げられる。金(2003)では、日本語と韓国語の「基幹語彙」が選定され、さらに比較語彙論の立場から両言語の対照研究がなされている。

3.3.3 本研究で用いた選定基準

これらの先行研究を踏まえ、本研究においても「広さ」と「深さ」の尺度を設定する。本研究は対象を慣用句という調査資料に出現した一部の語彙に絞ったため、土屋(1992)のような累積使用率の計算が難しいと思われる。したがって、「深さ」の尺度は林(1971)に基づきながら若干の調整を加えることにする。

各慣用句の使用度数に関するデータは、第 2 章で得られたデータを使用する。なお、第 2 章で使用した BCCWJ の書籍サブコーパスは、3 種類のデータからなっている。同じ書籍データではあるが、それぞれ母集団が異なる。1 つめは、出版サブコーパス・書籍で、2001

³⁹ 使用度数を延べ語数で割ったものを使用率という。採集された語を使用率の多い順に並べて使用率を累積させていくと、上位何パーセントまでに含まれる語であるかが分かる。これがその語の累積使用率になる。

年から 2005 年に日本国内で出版された全書籍からコーパス収録条件⁴⁰で絞り込んだ約 32 万冊が母集団である。2 つめは、図書館サブコーパス・書籍で、東京都内の自治体ごとに ISBN により管理されている蔵書データを利用して、13 自治体以上に共通して所蔵されている書籍からコーパス収録条件で絞り込んだ約 38 万冊が母集団である。ISBN の付与が普及した 1986 年から 2005 年刊行の書籍を対象とした。3 つめは、1976 年から 2005 年版の『出版年鑑』及び『出版指標年報』に掲載されたベストセラーリスト上位 20 位に挙げられた書籍約 950 冊を対象としている（村田・山崎 2011:76-77）。

この書籍サブコーパスは、日本十進分類法（NDC）で 0. 総記、1. 哲学、2. 歴史、3. 社会科学、4. 自然科学、5. 技術・工学、6. 産業、7. 芸術・美術、8. 言語、9. 文学、n. 分類なしの 11 に分類されるが、本研究では、ジャンルが明示された 1. 哲学から 9. 文学までを調査範囲とし、0. 総記と n. 分類なしは除くことにする。以下、表 1 において、本調査で利用した中納言 BCCWJ（通常版）媒体ごとのジャンル別語数⁴¹を示す。

表 1 書籍サブコーパス媒体ごとのジャンル別語数

NDC	出版・書籍	図書館・書籍	特定目的・ ベストセラー	合計
0. 総記	772,760	624,450	94,094	1,491,304
1. 哲学	1,507,725	1,484,705	309,214	3,301,644
2. 歴史	2,520,070	3,179,128	220,009	5,919,207
3. 社会科学	7,359,793	5,870,947	411,888	13,642,628
4. 自然科学	2,701,476	1,737,772	59,661	4,498,909
5. 技術・工学	2,342,557	1,641,476	94,681	4,078,714
6. 産業	1,234,687	950,369	40,347	2,225,403
7. 芸術・美術	1,708,758	2,170,715	197,911	4,077,384
8. 言語	492,975	447,808	42,053	982,836
9. 文学	6,802,589	11,147,690	2,188,986	20,139,265
n. 分類なし	1,108,893	1,122,803	83,417	2,315,113
合 計	28,552,283	30,377,863	3,742,261	62,672,407

表 1 から分かるように、調査資料の中では、9. 文学の語数が最も多く、8. 言語の語数が最も少ない。前者の語数が後者の 20 倍以上となり、9. 文学と 8. 言語における慣用句の使用度数も当然両者の大きさに左右されやすい。もしそこから得られた使用度数をそのまま使うと、8. 言語のような語数の少ないジャンルで使われる低頻度の慣用句が選定の対象から除外されるかもしれない。したがって、各ジャンルに現れる使用度数の重要性を等しくし

⁴⁰ 書き言葉コーパスの設計と目的に照らして、以下のような書籍は対象外とした。40 ページ以下の書籍、ページ数情報のない書籍（ランダムサンプリングの際にページ情報を利用するため）、官公庁刊行物のうち流通していないもの、学習試験図書、電子資料、地図資料、写真集、漫画などである（村田・山崎 2011:87）。

⁴¹ この語数は、コーパスの構築に際して使われている解析の言語単位である「短単位」で数えたものである。詳細は、<https://maro.ninjal.ac.jp/wiki/index.php?BCCWJ%2F%E7%9F%AD%E5%8D%98%E4%BD%8D%E8%AA%9E%E6%95%B0> を参照。

なければならない。

その解決策として、各ジャンルにおける各慣用句の PMW 頻度⁴²を算出し、この指標によって 5 段階に分ける。すなわち、10 回以上を最高グループとし、これを階級 4 とする。7～9 回が次のグループで、これを階級 3 とする。同様に、4～6 回を階級 2、1～3 回を階級 1、0 回を階級 0 とする。ジャンル毎に見る各階級に属する慣用句の数を一覧表にすると、表 2 になる。

表 2 ジャンル毎に見る各階級に属する慣用句の数

ジャンル 階級	BCCWJ における書籍データのジャンル								
	1. 哲学	2. 歴史	3. 社会 科学	4. 自然 科学	5. 技 術・工学	6. 産業	7. 芸 術・美術	8. 言語	9. 文学
4 (10 回以上)	20	18	15	12	11	16	21	16	45
3 (7～9 回)	13	10	7	5	6	6	8	12	25
2 (4～6 回)	41	28	12	20	22	26	30	35	55
1 (1～3 回)	340	447	306	183	183	218	330	278	465
0 (0 回)	522	433	596	716	714	670	547	595	346
合計	936	936	936	936	936	936	936	936	936

次に、各慣用句に属する階級の数そのまま点数として付与する。つまり、階級 4 の慣用句は 4 点、階級 0 の慣用句は 0 点となる。そうすると、各慣用句はジャンル毎に点数をもち、最高点数は 4 点、最低点数は 0 点となる。各慣用句に対し、ジャンル毎の点数を合計すると、すべての慣用句は 0 点（いずれのジャンルにおいても階級 0 に属する慣用句）から 36 点（いずれのジャンルにおいても階級 4 に属する慣用句）までの点数が付与される。

さらに、林（1971）を参考にし、「広さ」と「深さ」の尺度を設定する。「広さ」は 4 段階に分け、7～9 ジャンルを「かなり広い」、4～6 ジャンルを「広い」、2～3 ジャンルを「狭い」、0～1 ジャンルを「かなり狭い」とする。一方で、各慣用句に付与された点数をもとにして「深さ」を設定する。19～36 点までを「深い」、10～18 点までを「中位」、0～9 点までを「浅い」とする。

3.4 調査結果の概要

表 3 に示すのは、慣用句の「広さ」と「深さ」の分布状況である。林（1971）が指定した 5 つの区画に属する 199 句の慣用句は基幹慣用句として選定できる。なお、【B1】、【C1】、【C2】、【D1】、【D2】の慣用句がないことと、【B2】の慣用句が少ないことは、使用度数の多い慣用句は、多くのジャンルにまたがって使われる傾向があり、少数のジャンルにおいて高頻度で使われることがない、ということを意味する。言い換えれば、よく使われる慣

⁴² PMW (per million words) 頻度とは、100 万語当たりの頻度である。

用句はジャンル毎の使用差がない。

一方で、【B3】、【C3】、【D3】に 700 句以上の慣用句が含まれることと、【A3】に 94 句の慣用句しか含まれないことは、使用度数の少ない慣用句は、特定のジャンルにおいて使われる傾向があり、多くのジャンルにわたって低頻度で使われることがあまりない、ということの意味する。言い換えれば、あまり使われない慣用句はジャンル毎の使用差がある⁴³。

表 3 慣用句の「広さ」と「深さ」の分布状況

広さ 深さ	A かなり広い (7～9 ジャンル)	B 広い (4～6 ジャンル)	C 狭い (2～3 ジャンル)	D かなり狭い (0～1 ジャンル)
1 深い (19～36 点)	【A1】 30 句	【B1】 0 句	【C1】 0 句	【D1】 0 句
2 中位 (10～18 点)	【A2】 74 句	【B2】 1 句	【C2】 0 句	【D2】 0 句
3 浅い (0～9 点)	【A3】 94 句	【B3】 205 句	【C3】 207 句	【D3】 325 句

冒頭で言及した課題の結論を言うと、使用度数が多いが、少数のジャンルにしか現れない慣用句は【C1】と【D1】に属するもので、今回の調査では該当する慣用句が見当たらなかった。一方、使用度数が少ないが、複数のジャンルにわたって広く使用される慣用句は【A3】と【B3】に属するもので、合わせて 299 句あった。

選定された基幹慣用句を以下に示す。多義性をもつ慣用句は、該当の意味を表す分類番号を記して区別した。

【A1】 かなり幅が広く、深さが深いもの (30 句)

足を運ぶ、お目にかかる、顔を出す、気が付く、気に入る、気にする、気になる、気を配る、気を付ける、口にする (2. 3100)、声を掛ける、異にする、力を入れる、手に入れる、手にする (2. 3700)、手にする (2. 3392)、手を出す、手を付ける、腹を立てる、間に合う (2. 1660)、身に付く、身に付ける、耳にする、耳を傾ける、目にする、目に付く、目に入る、役に立つ、やむを得ず、やむを得ない。

【A2】 かなり幅が広く、深さ中位のもの (74 句)

相づちを打つ、あっけに取られる、案の定、いざという時、命を懸ける、多かれ少なかれ、後れを取る、思いも掛けない、思いも寄らない、掛け替えのない、気が利く、気が済む、気に掛かる、気に掛ける、脚光を浴びる、気を取られる、口にする (2. 3331)、口を利く (2. 3100)、口を出す、口を挟む、

⁴³ 本章の主旨は基幹慣用句の選定にあるため、【C3】と【D3】に属する慣用句のジャンル毎の使用差については言及するにとどめておく。今後、別の機会に詳しく論じたい。

首をかしげる、首をひねる、工夫を凝らす、群を抜く、心を込める、端を発する、宙に浮く、注目を浴びる、手が掛かる、手が届く、手に負えない、手を合わせる、手を打つ (2. 3084)、手を掛ける、手を貸す、手を差し伸べる、手を抜く、とてつもない、途方に暮れる、途方もない、取り返しがつかない、取りも直さず、流れをくむ、何が何でも、根を下ろす、念を押す、拍車をかける、話にならない、腹が立つ、枚挙にいとまがない、間に合う (2. 1931)、まゆをひそめる、身にしみる、耳に入る、耳を貸す、耳を澄ます、実を結ぶ、身をもって、身を寄せる、胸を張る、目に浮かぶ、目に留まる、目に見えて、目を凝らす、目を付ける、目を通す、目を離す、目を引く、目を見張る、目をやる、物にする (2. 3050)、物を言う、世を去る、訳は無い。

【A3】 かなり幅が広く、深さは浅いもの (94 句)

足を伸ばす、足を引っ張る、頭が下がる、頭に来る、頭を抱える、跡を絶たない、息が詰まる、息を吹き返す、意地が悪い、一目置く、意表をつく、嫌と言うほど、意を決する、有無を言わせず、大目に見る、遅かれ早かれ、尾を引く、かたずをのむ、型にはまる、肩身が狭い、肩を並べる、気が強い、気が遠くなる、切っても切れない、気に食わない、肝に銘じる、気をもむ、口をそろえる、苦になる、首になる、心に留める、心を奪われる、心を砕く、腰を据える、心血を注ぐ、生計を立てる、精を出す、是が非でも、世話を焼く、背を向ける、先見の明、底を突く、だだをこねる、棚を上げる、知恵を絞る、手が込む、手が付けられない、手を入れる、手をこまねく、手を尽くす、手を引く、手を焼く、手を休める、頭角を現す、度肝を抜く、とどのつまり、長い目で見ると、何かにつけて、何はともあれ、波に乗る、名もない、似ても似つかない、ばつが悪い、幅を利かせる、歯を食い縛る、一役買う、日の目を見る、百も承知、変哲もない、骨が折れる、幕を開ける、幕を閉じる、磨きを掛ける、見切りをつける、身に覚えがない、見様見まね、身を引く、虫がいい、胸をなで下ろす、目がない、目に触れる、目を奪う、目を掛ける、目を配る、目を背ける、目をつぶる、目を盗む、目を光らす、物にする (2. 3700)、用を足す (2. 5710)、らく印を押される、らちが明かない、レッテルをはる、我を忘れる。

【B2】 幅が広く、深さ中位のもの (1 句)

息をのむ。

3.5 考察

以下、『分類語彙表』を意味分野の分類基準として利用し、基幹慣用句がどのような意味分野に分布するのかを考察する。図 1 に示すのは、基幹慣用句における類と部門の分布状況である。

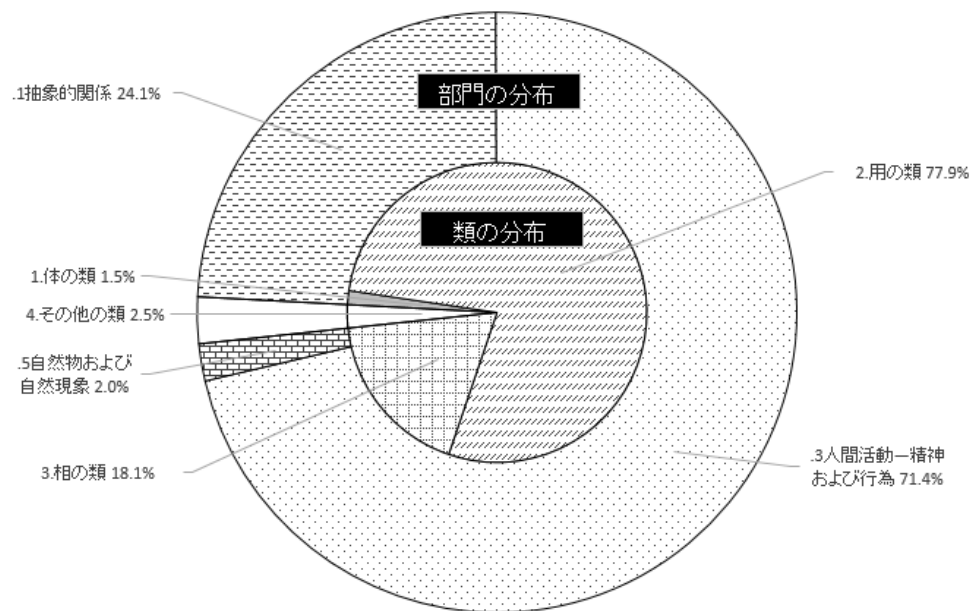


図 1 基幹慣用句における類と部門の分布

まず、類から見ると、「1. 用の類」が 3 句 (1.5%)、「2. 用の類」が 155 句 (77.9%)、「3. 相の類」が 36 句 (18.1%)、「4. その他の類」が 5 句 (2.5%) ある。つまり、動詞の類に含まれる慣用句の割合が最も高く、次いで形容詞・形容動詞・副詞・連体詞の類、一部の副詞・接続詞・感動詞の類、名詞の類の順となっている。

次いで、体・用・相三類に含まれる 194 句を部門から見ると、「1. 1 抽象的關係」が 48 句 (24.1%)、「3. 人間の活動—精神および行為」が 142 句 (71.4%)、「5. 自然物および自然現象」が 4 句 (2.0%) ある。一方、「2. 人間の活動の主体」と「4. 生産物および用具」に含まれる慣用句がなかった。つまり、「3. 人間の活動—精神および行為」に含まれる慣用句の数が最も多く、その次は「1. 抽象的關係」、「5. 自然物および自然現象」の順となっている。

最後に、中項目から基幹慣用句を観察する。各中項目に含まれる慣用句の数を一覧表に示すと、表 4 になる。表 4 から「心」、「作用」、「生活」、「言語」に含まれる基幹慣用句が多いことが分かった。第 2 章で考察したように、「心」に含まれる慣用句が最も多い原因としては 2 つ考えられる。1 つめは、『分類語彙表』のなかで収録された語彙自体、「心」を表すものが最も多いからである。林 (2009:41) によると、「心」を表す語が 11,879 語で、1 割強と分かる。2 つめは、慣用句全体として「心」を表すものが最も多いからである。これはまた、「気」、「心」、「腹」、「胸」といった語が慣用句の構成要素として多く使用されることに起因する。「腹」や「胸」は心が宿る場所で、「気」や「心」と同様に、心の状態や動きを表すとされる。この 2 点を踏まえると、基幹慣用句にも、当然「心」を表すものが多く存在することとなるだろう。

表 4 基幹慣用句における中項目の分布

部門 【総数】	中項目	数	部門 【総数】	中項目	数
. 1 【 48 句】	10 事柄	1	. 5 【4 句】	50 自然	0
	11 類	6		51 物質	0
	12 存在	7		52 天地	0
	13 様相	7		53 生物	0
	14 力	1		54 植物	0
	15 作用	11		55 動物	0
	16 時間	7		56 身体	0
	17 空間	0		57 生命	4
	18 形	0	4. 【5 句】		5
	19 量	8	合計		199
. 3 【142 句】	30 心	95	. 1 抽象的關係		
	31 言語	10	. 3 人間活動—精神および行為		
	32 芸術	1	. 5 自然物および自然現象		
	33 生活	11	4. その他の類		
	34 行為	7			
	35 交わり	5			
	36 待遇	9			
	37 経済	4			
	38 事業	0			

以上、選定された基幹慣用句に対し、類・部門・中項目という 3 つの面から意味分野を考察した。基幹慣用句と対立の立場に位置するのは、表 3 の【D3】に相当する一群の慣用句（少数のジャンルにしか低頻度で使用されない慣用句）で、0 点の慣用句 178 句、1 点の慣用句 146 句、2 点の慣用句 1 句という内訳となっている。

以下、これらの慣用句を掲げた上で、その性格を分析する。

【D3】 かなり幅が狭く、深さが浅いもの (325 句)

青筋を立てる、赤子の手をねじる、赤子の手をひねる、揚げ足を取る、あごで使う、あごを出す、足音を忍ばせる、足が付く、足が出る、足が鈍る、足が速い、足が棒になる、味も素っ気も無い、足元に火がく、足元を見る、足を棒にする、頭隠してしり隠さず、後は野となれ山となれ、穴があったら入りたい、危ない橋を渡る、あぶはち取らず、油を売る、油を絞る、網を張る、ありのはい出るすき間もない、合わせる顔がない、泡を食う、生き馬の目を抜く、息が切れる、息をつく暇もない、石にかじり付いても、石橋をたたいて渡る、一日の長、一矢を報いる、一杯食う、命の洗濯、今や遅しと、芋を洗うよう、いやでも応でも、因果を含める、上を下への大騒ぎ、牛の歩み、後ろ指を指される、腕が上がる、腕が鳴る、腕に覚えがある、腕によりを掛ける、打てば響く、うなぎの寝床、うの目たかの目、海の物とも山の物とも付かない、大きな顔をする、大きな口をきく、大目玉を食う、お株を

奪う、お先棒を担ぐ、お茶の子さいさい、鬼の目にも涙、尾ひれを付ける、重荷を下ろす、恩に着せる、恩に着る、恩をあだで返す、飼犬に手をかまれる、顔が売れる、顔がつぶれる、顔から火が出る、顔に泥を塗る、顔向けができない、顔を曇らせる、顔をつぶす、陰になりひなたになり、かさに懸かる、肩で風を切る、肩の荷を下ろす、肩をすぼめる、角が取れる、金に糸目をつけない、かぶとを脱ぐ、かまを掛ける、かゆい所に手が届く、我を折る、我を張る、気炎を上げる、気がとがめる、気がもめる、木で鼻をくくる、気骨が折れる、肝が据わる、肝が太い、興に乗る、気を落とす、悔いを残す、ぐうの音も出ない、空を切る、臭い物にふたをする、口がうまい、口が軽い、口が滑る、口が減らない、口から先に生まれる、口が悪い、くちばしが黄色い、くちばしを入れる、口も八丁手も八丁、口を利く (2. 3522)、口を切る (2. 1553)、首が回らない、雲をつく、軍門に下る、けがの功名、げたを預ける、けちが付く、犬猿の仲、けんもほろろ、口角泡を飛ばす、声を限りに、声をのむ、志を遂げる、腰を折る、事と次第によっては、事によると、言葉に尽くせない、言葉を濁す、細大漏らさず、三拍子そろう、思案に暮れる、下にも置かない、地団太を踏む、十指に余る、しっぽを出す、しっぽをつかむ、春秋に富む、食指が動く、知らぬが仏、白羽の矢が立つ、しりが重い、しりに火が付く、しり目にかける、死力を尽くす、心臓が強い、すずめの涙、図に当たる、すねに傷を持つ、すねをかじる、隅に置けない、精が出る、世話が焼ける、相好を崩す、そでにする、大事を取る、たがが緩む、立つ瀬がない、手綱を引き締める、立て板に水、盾を突く、他人の空似、玉にきず、矯めつすがめつ、駄目を押す、力を落とす、血も涙もない、茶茶を入れる、調子に乗る (2. 1660)、長足の進歩、ちょうちんを持つ、血わき肉踊る、月とすっぽん、土が付く、つむじを曲げる、つめに火をともし、つめのあかほど、面の皮が厚い、手が上がる、手がふさがる、手ぐすねを引く、手に汗を握る、手に乗る、手八丁口八丁、手を取る、手を握る、堂に入る、毒にも薬にもならない、どこ吹く風、どじを踏む、取って付けたよう、トップをきる、とらの威を借るきつね、泥を吐く、度を失う、度を過ぎ、泣きの涙、何はさておき、何は無くとも、名を売る、煮え湯を飲まされる、にしきを飾る、抜き足差し足、寝返りを打つ、願ったりかなったり、猫の手も借りたい、猫をかぶる、熱が冷める、熱しやすく冷めやすい、熱を入れる、年季を入れる、年貢の納め時、乗り掛かった船、のれんを分ける、ばかになる、歯が抜けたよう、馬脚を現す、白紙に戻す、薄氷を踏む、化けの皮がはがれる、はしにも棒にも掛からない、旗色が悪い、破竹の勢い、はちの巣をつついたよう、発破をかける、バトンを渡す、鼻息が荒い、鼻が利く、鼻が高い、鼻であしらう、鼻に付く (2. 5040)、鼻を折る、歯にきめを着せない、羽を伸ばす、歯の根が合わない、腹が据わる、腹が太い、腹の虫が治まらない、腹を探る、腹を据える、火が消えたよう、ひざを乗り出す、ひざを交える、額を集める、引っ込みがつかない、一泡吹かせる、人聞きが悪い、一肌脱ぐ、ひとみを凝らす、人目をはばかり、人を食う、日の出の勢い、不意を食う、風雲急を告げる、風前のともしび、不覚を取る、袋のねずみ、筆が立つ、筆を入れる、筆を加える、筆をふるう、船をこぐ、踏んだりけったり、へそを曲げる、へとも思わない、骨身にこたえる、骨身を惜しまない、骨身を削る、骨を埋める、魔が差す、的を射る、右から左、右に出る者がいない、水も漏らさぬ、水を打ったよう、みそを付ける、道草を食う、身に余る、耳が早い、耳にたこができる、耳に挟む、耳をそばだてる、耳をそろえる、脈が有る、見るに見兼ねて、虫が知らせる、虫が走る、虫の息、虫の知らせ、胸くそが悪い、胸が躍る、胸がすく、胸がつぶれる、胸が

膨らむ、胸がふさがる、目が肥える、目が据わる、目が高い、芽が出る、目が回る、目から鼻へ抜ける、目と鼻の間、目に角を立てる、目に物見せる、目の上のこぶ、目の黒いうち、目の中に入れても痛くない、目鼻が付く、芽を吹く、目を細くする、もったいをつける、物は試し、焼きが回る、焼きを入れる、焼け石に水、やせても枯れても、矢の催促、やぶから棒、有終の美を飾る、湯水のように使う、弓を引く、欲の皮が突っ張る、横車を押す、横やりを入れる、夜の日も寝ずに、夜も日も明けない、寄ると触ると、弱り目にたたり目、らっぱを吹く、我も我もと。

【D3】の慣用句を類から見ると、「1. 体の類」が 27 句(8.3%)、「2. 用の類」が 206 句(63.4%)、「3. 相の類」が 87 句(26.8%)、「4. その他の類」が 5 句(1.5%)である。なお、各部門と中項目に含まれる慣用句の内訳は表 5 に示す。

表 5 【D3】に属する慣用句における中項目の分布

部門 【総数】	中項目	数	部門 【総数】	中項目	数
. 1 【 71 句】	10 事柄	0	. 4 【 1 句】	40 物品	0
	11 類	4		41 資材	0
	12 存在	9		42 衣料	0
	13 様相	19		43 食料	0
	14 力	3		44 住居	1
	15 作用	15		45 道具	0
	16 時間	12		46 機械	0
	17 空間	0		47 土地利用	0
	18 形	0	. 5 【10 句】	50 自然	2
	19 量	9		51 物質	0
. 2 【 0 句】	20 人間	0		52 天地	0
	21 家族	0		53 生物	0
	22 仲間	0		54 植物	0
	23 人物	0		55 動物	0
	24 成員	0		56 身体	1
	25 公私	0		57 生命	7
	26 社会	0	4. 【5 句】		5
	27 機関	0	合計		325
. 3 【238 句】	30 心	106	. 1 抽象的關係		
	31 言語	30	. 2 人間活動の主体		
	32 芸術	3	. 3 人間活動—精神および行為		
	33 生活	15	. 4 生産物および用具		
	34 行為	29	. 5 自然物および自然現象		
	35 交わり	18	4. その他の類		
	36 待遇	31			
	37 経済	6			
	38 事業	0			

第2章に述べたように、慣用句は全体的に、「1.1 抽象的關係」と「1.3 人間活動—精神および行為」という2部門には集中して分布するが、「1.2 人間活動の主体」、「1.4 生産物および用具」、「1.5 自然物および自然現象」という3部門にはあまり分布しない。それゆえ、基幹慣用句も【D3】に属する慣用句も当然、表4と表5が示したとおり、部門1と部門3に集中し、部門2、部門4と部門5には集中しないのである。

慣用句の構成要素からみると、文章語や現在では使われなくなる古い言い方が存在するのが特徴である。そのうち、「春秋に富む」、「とらの威を借るきつね」や「薄氷を踏む」など中国語に出典があるものもあれば、「軍門」、「三拍子」や「手綱」など特定の分野にしか用いられていない用語もある。また、「後ろ指」、「地団太」や「煮え湯」など慣用句にしか現れない語もある。【D3】に属する慣用句の使用度数が少なく、少数のジャンルにしか使われないのは、このような語を構成要素にもつからであろう。

この結論を裏付ける事例研究として、呉（2010）と呉（2013）がある。呉（2010）と呉（2013）は、類義の慣用句として「怒り」を表すものを取り上げ、コーパスに基づく使用実態調査と母語話者を対象にした使用意識のアンケート調査を行った結果、使用実態調査で使用度数の少ない慣用句、及び使用意識調査で馴染みの薄い慣用句には共通点が見られることを指摘した。すなわち、「怒髪冠を衝く」や「怒髪天を衝く」のように中国の古典に出自すること、または、「柳眉を逆立てる」や「眦を決する」のように現在では使われなくなる古い語が含まれることである。

一方、基幹慣用句（特に【A1】、【A2】に属する慣用句）の構成要素を見ると、このような語がほとんど含まれず、「顔」、「手」や「目」などの身体部位名詞と、「入れる」、「掛かる」、「掛ける」や「付ける」などの日常よく用いられる動詞が含まれる。ここから、慣用句の基幹度は、構成要素に左右されやすいことがうかがわれる。

3.6 本章のまとめ

以上、慣用句がいくつの層にわたって出現するかを「広さ」、どのくらい使われるかを「深さ」として設定し、慣用句の基幹度を測った。その結果に基づき、基幹慣用句とその反対の立場に位置する慣用句について、意味分野別に分析した。そして、慣用句の構成要素から両者を比べ、基幹度の高低の理由を探った。なお、本章では、調査対象とした慣用句の一部のみを掲げたが、そのほかの慣用句の基幹度については資料1を参照されたい。

従来、語の基本度についてはいくつかの考え方がある。林（1971）が提唱した「基幹語彙」のほかに、意味・用法からみて重要と思われる語も基本的な語であるという考え方が示されている。この意味・用法を考えて選ぶ方法は、選定者の主観によって偏る可能性がある反面、満遍なく語を収集することができる（荻野 2007:47-48）。これに反して、本研究ではより客観的に選定するため、慣用句の使用度数と使われるジャンルを選定の要因として考慮に入れたが、調査の便宜を図り、最初から調査対象を 936 句の慣用句に絞った

め、広く慣用句を集めたとは言えない。また、調査資料が書籍に限定されたため、資料によって偏りが出ることも考えられる。

今後の課題として、書籍コーパスから得られた基幹慣用句を現代日本語における基幹慣用句の候補として扱う一方で、その他の資料における使われ方や意味・用法からみて重要と思われる慣用句についても検討を試みる。このように、客観的な選定方法と主観的な選定方法を併用することによって、現代日本語における基幹慣用句を補いたい。

その一環として、第2部では、使われ方の変化をめぐって、「国語に関する世論調査」や新聞報道などで特に注目を集めている慣用句について、意味・用法の点から事例研究を行う。

第 2 部

事例研究編

第4章 慣用句の意味拡大 (1)

4.1 はじめに

第2部第1章で述べたように、「敷居が高い」という慣用句は、「不義理や面目の立たないことがあって、その人の家に行きにくい」という意味を表す用法から、「とつつきにくい、難しい、ハードルが高い」というモノに対する用法へと変化していた(佐々木 2013)。一方、「爪痕を残す」という慣用句は、何らかの被害や悪影響が残ることを意味するものであったが、近年「好印象、悪印象問わず、相手に自分のことを記憶させる」という新しい意味が報告されている(岡田 2014)。

「敷居が高い」、「爪痕を残す」は意味の転移という意味変化の1つの類型としてまとめられる。では、意味の拡大や意味の縮小というほかの類型における慣用句の意味変化の例はあるのだろうか。第2部では、文化庁「国語に関する世論調査」の結果や普段から意味や用法の面で懸念のある慣用句の使用現象を出発点として、意味の拡大と意味の縮小が見られる慣用句をいくつか取り上げながら事例研究を行っていく。

まず、本章では、意味拡大の例として「鳥肌が立つ」という慣用句を取り上げる。現代日本語において、「鳥肌が立つ」はよく見聞きする慣用句である。これは本来、寒気や恐怖、あるいは不快感などのために、人の皮膚が毛をむしりとった後の鶏の皮の表面のようにぶつぶつになる現象を指す。しかし、近年では、感動や興奮した場合にも「鳥肌が立つ」という表現が用いられる。小林(2007)によると、これは1980年代から広まり始めた用法であるという。しかし、これまでのところ、具体的な調査研究はまだなされていない。

鳥肌を立たせる原因として、寒さや恐怖などのネガティブな原因と、感動などのポジティブな原因が挙げられる。『日本国語大辞典第2版』によると、「鳥肌が立つ」の初出は室町時代初期に成立した『源氏物語』の注釈書『河海抄』(1362頃)であり、寒いときに使われる表現であるという。また、筆者が近代以降の国語辞典における「鳥肌」の記述を調査したところ、「鳥肌」という言葉は当初、もっぱら寒さを表していたことが判明した。それらの辞書記述を踏まえ、ここでは寒さという原因をネガティブな原因から独立させ、本来の用法とする。つまり、「鳥肌が立つ」という慣用句に見られる多様な用法は次の三種類に大別できる。

I 本来の用法

II ネガティブな用法

III ポジティブな用法

このうち、Ⅱネガティブな用法とは、否定的な意味に使用される用法で、その下位分類として、恐怖や不快などが挙げられる。また、Ⅲポジティブな用法とは、肯定的な意味に使用される用法で、その下位分類として、感動や興奮などが挙げられる。ⅠとⅡは従来、正しいとされる用法、いわゆる「正用」、Ⅲはしばしば「誤用」と指摘される用法である。はたしてこの言葉は、Ⅰ本来の用法からⅡネガティブな用法、さらにⅢポジティブな用法へと意味変化の方向性を見せているのか。そして、日常よく見聞きするのはどちらの用法であるのか、こうした疑問が本研究の出発点である。

この疑問を解決するためには、「鳥肌が立つ」という慣用句が現在、どのように使用されているのか、またその意味・用法はどのような変遷を経てきたのかを調査する必要がある。そこで、本章では「鳥肌が立つ」という慣用句の使用状況を調査し、その意味・用法の変遷を辿ることを研究目的とする。なお、本章は、日本語における「正用」や「誤用」について結論を出そうとするものではない。あくまでこの表現の使用実態を明かすことが本章の主題である。

以下では、まず、「鳥肌が立つ」の用法に関する世論調査の結果を再検討し、各種辞書の記述を確認することにより、初出例をさかのぼる（第2節）。ついで、新聞記事データベースとBCCWJ（第3節・第4節）、近代語のコーパス（第5節）から用例採集を行い、各種の意味・用法について例示しつつ検討した上で、この表現の使用状況及びその変化を探る。最後に、このような意味・用法の広がりが発生・定着した原因について、調査結果を踏まえ、言語変化の側面からの分析を試みる（第6節）。

4.2 「国語に関する世論調査」の結果及び各種辞書における意味記述

「鳥肌が立つ」に関する興味深いデータとして、平成13年度（2001年度）の文化庁「国語に関する世論調査」がある。「a 余りのすばらしさに鳥肌が立った」、「b 余りの恐ろしさに鳥肌が立った」という2つの言い方のどちらを使うかを尋ねた結果、

aの方を使う	22.8%
bの方を使う	46.8%
どちらも使う	17.8%
どちらも使わない	11.7%

ということが分かった。およそ半数の人が「鳥肌が立つ」を従来 of 正しいとされる使い方で使用しているが、それとは異なる意味で使用する人も2割以上いる。このデータを年齢別に示すのが図1である（数値はパーセンテージを示す）。

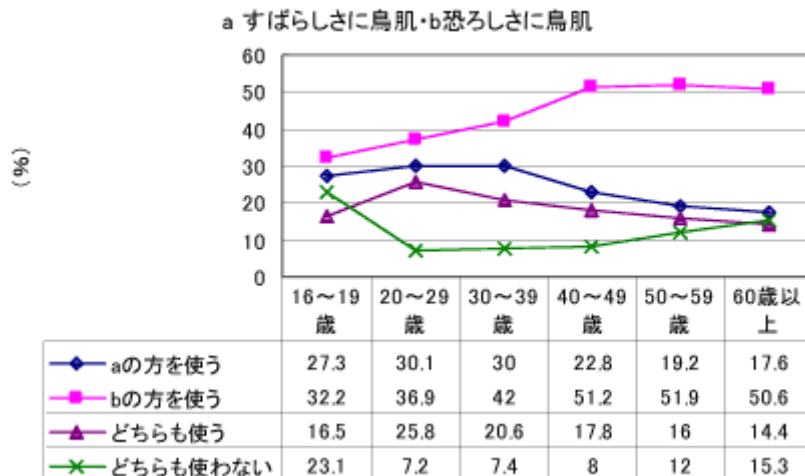


図1 「鳥肌が立つ」の使用意識（年齢別）

文化庁「平成13年度『国語に関する世論調査』の結果について」より転載

図1からすべての世代において、bの使用率がaを上回ることが分かった。つまり、aをⅢポジティブな用法、bをⅡネガティブな用法とすれば、いずれの世代においても、「鳥肌が立つ」はネガティブな用法として使用される傾向が強いことを示唆する調査結果である。言い換えれば、従来正しいとされる使い方が優位に立つということになる。

ところが、10代では、aとbの使用率はそれぞれ3割前後占めており、大差はあまり見られないが、上の世代に向かって（図を左から右に向かって）見ていくと、全体的にはaの使用率が低くなる反面、bの使用率が高くなる傾向にあり、使用率の差が大きくなる。特に、高年層では、半分を超える人がbを使うのに対して、aの使用率は2割以下となり、使用率に大きな差が見られる。

この図を逆に右から左に向かって見ていくと、従来の使い方であるbの使用率は下がっている。つまり、高齢の世代の人たちに比べて若年の世代の人たちはbのように使わなくなっている。これに反して、従来の使い方とは異なる用法であるaの使用率は年代が下るにつれて上昇している。つまり、高齢の世代の人たちに比べて若年の世代の人たちはaのように使う傾向が強い。要するに、「鳥肌が立つ」のポジティブな用法の浸透率は若い世代においてより高いということが窺われる。

平成13年度の「国語に関する世論調査」は、「鳥肌が立つ」をポジティブな用法で使うか、それともネガティブな用法で使うか、それを問うことにより、この慣用句の使用意識を調査しているのである。そこから得たデータを再検討した結果、従来の使い方とは異なる意味で使用する人が2割以上存在し、特に若い世代において、浸透率が高いことが分かった。では、各種辞書における記述はどうなっているのか。

まず、専門の慣用句辞典における記述を確認する。近年刊行されているほとんどの慣用句辞典に「鳥肌が立つ」という項目が収録されているが、感動したときに使えるかどうか

に関しては、解説の相違が見られる。たとえば、北原保雄編、加藤博康著『明鏡ことわざ成句使い方辞典』（大修館書店、2007 年）では、「鳥肌が立つ」という項目を立て、

使い方 寒さや恐怖、不快感などのために、皮膚に鳥の毛をむしった跡のようなぶつぶつが浮き出る。ぞっとする感を強調するという。「寒くて―」「恐ろしい話を聞かされて**鳥肌が立った**」「恐怖感に襲われて**鳥肌が立った**」◆「鳥肌^{たぎ}立つ」とも。「鳥肌」は、立毛筋が収縮して毛が立つことによって起こる現象。

誤用 最近、感情が高まるときの形容に使う例が多くなっているが、本来の用法ではない。「×感動〔興奮〕のあまり鳥肌が立った」

と述べている。

一方、米川明彦・大谷伊都子編『日本語慣用句辞典』（東京堂、2005 年）に次のような記述がある。

恐怖や寒さなどから、毛をむしり取った鶏の皮のように皮膚にぶつぶつができる。最近では強い感動を受けた時にも使う。

この記述法は、事実上、感動したときに使う「鳥肌が立つ」を新しい用法として容認する立場になっている。同書には用例として、恐怖の用法と感動の用法を各 1 例ずつ挙げている。用例は次のとおりである。

- ①木谷恭介『京都小町塚殺人事件』（2002）「鳥肌の立つ戦慄が背筋を走った」
- ②内田康夫『秋田殺人事件』（2002）「鳥肌が立つような感動とはこういうことを言うのだろう」

次に、大型、中型及び小型の国語辞典において、「鳥肌が立つ」はどのように記述されているかを調べる。大型の国語辞典として、『日本国語大辞典第 2 版』を取り上げる。同書には「とりはだ（鳥肌）」の下位項目として「とりはだが立（た）つ」を立てて、次のように解説する。

「とりはだだつ（鳥肌立）」に同じ。＊河海抄（1362 頃）一七「さむき時鳥はだの立を云也、詩に鶏皮と云是也」＊匠材集（1597）一「いららきたる とりはたのたつかほをいふなり」＊不在地主（1929）＜小林多喜二＞一〇「健は身体に鳥膚が立つ程興奮を感じた」

これによると、「鳥肌が立つ」の初出は室町時代初期に成立した『源氏物語』の注釈書『河

海抄』(1362 頃)であり、寒いときに使われる表現である。小林多喜二(1903-1933)の『不在地主』(1929)に見える興奮の用例が興味深い。

中型の国語辞典として新村出編『広辞苑』(岩波書店)を取り上げる。初版は 1955 年、第 6 版(2008 年)が最新版で、約 24 万項目(第 6 版)を収録する。第 6 版(2008 年 1 月 11 日第 1 刷、机上版)では、「とりはだ(鳥肌)」の下位項目として「鳥肌が立つ」を立て、以下のように述べる。

寒さや恐怖・興奮などの強い刺激によって、鳥肌が生ずる。総毛立つ。肌に栗を生ずる。仙源抄「いららき。さむくて鳥肌のたちたるけしき也」。「数学と聞くだけで鳥肌が立つ」▷近年、感動した場合にも用いる。「名演奏に鳥肌が立った」

次に、小型の国語辞典としては、『新明解国語辞典』を取り上げる。初版が 1972 年、最新版は 2012 年の第 7 版で、77,500 語以上(第 7 版)を収録する。第 7 版(2012 年 1 月 10 日、第 1 刷)では、

慣用句「鳥肌が立つ」は、本来の寒さや恐ろしさでぞっとする意から転じて、「負けたと思っていた味方チームが九回裏に逆転満塁ホームランを打ったのを見て鳥肌が立った」などとひどく感激する意に用いることがある。規範的な立場からは容認されていない。

とのように、具体的な用法を明示しながら解説を行っている。

上述の各種国語辞典の記述を確認したところ、「鳥肌が立つ」は一般的に寒さや恐怖の表現として使われているが、最新版の中型と小型の国語辞書では、感動や感激の用法が追加されるようになったことが分かった。

以下、見出し語「鳥肌」の有無、説明文における寒さの用法の有無、ネガティブな用法の有無、ポジティブな用法の有無、「鳥肌が立つ」の立項の有無に着目し、明治以降の国語辞典における「鳥肌」の意味記述を表 1 に整理する⁴⁴。

「とりはだ」の欄の○は見出し語として立項されていること、○の後に付する(鳥肌)や(鳥膚)はその表記、「寒さ」、「恐怖」、「興奮」の欄の○は言及されていること、△は用法が「鳥肌」の解釈には見えないが、「鳥肌が立つ」の解釈や例文に見えること、「鳥肌が立つ」の欄の○は「鳥肌が立つ」が立項されていること、△は立項されていないが、掲載した用例に見えることを示す。

⁴⁴ 明治以前の国語辞典にも、『日葡辞書』(1603-1604)など「鳥肌」という項目を収録するものがある。『邦訳日葡辞書』(岩波書店、1980 年)を参照すると、その解釈は以下のとおりである。

Torifada トリハダ(鳥肌)羽根をむしり取ったあとの、鶏やその他の鳥の肌。また、比喩。羽根をむしり取られた鳥の肌のように、寒さのためにぶつぶつになっている人体の皮膚、または、一部。その鳥は、肌の毛の部分、すなわち、羽根を引きぬかれたところが、ぶつぶつにふくれあがっているのである。

表 1 国語辞典における「鳥肌」の記述

刊行年	書名	とりはだ	寒 さ	恐 怖	興 奮	—が 立つ
1884—85	『ことばのその』	—	—	—	—	—
1888	『漢英対照いろは辞典』	○（鳥膚）	○	—	—	—
1888	『ことばのはやし』	○	—	—	—	—
1889—91	『言海』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1892—93	『日本大辞書』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1894	『日本大辞林』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1896	『日本大辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1896	『帝国大辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1898—99	『ことばの泉』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1911	『辞林』改訂版	○（鳥肌）	○	—	—	—
1915—28	『大日本国語辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1925	『広辞林』新訂版	○（鳥肌）	○	—	—	—
1927	『改修言泉』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1932—37	『大言海』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1935	『辞苑』	○（鳥肌）	○	○	—	—
1936	『大辞典』	○（鳥肌）	○	○	○	—
1943	『明解国語辞典』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1949	『言林』	○（鳥肌）	○	—	—	—
1954	『辞海』縮刷版	○（鳥膚・鳥肌）	○	○	—	—
1955	『広辞苑』第 1 版	○（鳥肌）	○	—	—	—
1963	『岩波国語辞典』第 1 版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1969	『広辞苑』第 2 版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1971	『岩波国語辞典』第 2 版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1972	『新明解国語辞典』初版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1973	『広辞林』第 5 版	○（鳥膚・鳥肌）	○	○	—	○
1974	『新明解国語辞典』第 2 版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1976	『広辞苑』第 2 版補訂版	○（鳥肌）	○	○	—	—
1978	『学研国語大辞典』初版	○（鳥膚・鳥肌）	△	△	—	○
1979	『岩波国語辞典』第 3 版	○（鳥肌）	○	○	—	○
1981	『新明解国語辞典』第 3 版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1983	『広辞苑』第 3 版	○（鳥肌）	○	○	—	△
1986	『岩波国語辞典』第 4 版	○（鳥肌）	○	○	—	○
1988	『学研国語大辞典』第 2 版	○（鳥肌・鳥膚）	△	△	—	○
1988	『大辞林』初版	○（鳥肌）	○	○	—	○
1989	『新明解国語辞典』第 4 版	○（鳥肌）	△	△	—	○
1991	『講談社国語辞典』第 2 版	○（鳥肌・鳥膚）	○	○	—	○
1991	『広辞苑』第 4 版	○（鳥肌）	○	○	—	△
1992	『三省堂国語辞典』第 4 版	○（鳥肌・鳥膚）	○	○	—	○
1994	『岩波国語辞典』第 5 版	○（鳥肌）	○	○	○	○
1995	『大辞林』第 2 版	○（鳥肌）	○	○	—	○
1997	『新明解国語辞典』第 5 版	○（鳥肌）	△	△	—	○

1998	『広辞苑』第5版	○（鳥肌）	○	○	—	△
2000	『岩波国語辞典』第6版	○（鳥肌）	○	○	○	○
2001	『日本国語大辞典第2版』	○（鳥肌）	○	○	△	○
2005	『新明解国語辞典』第6版	○（鳥肌）	△	△	—	○
2006	『大辞林』第3版	○（鳥肌）	○	○	○	△
2008	『広辞苑』第6版	○（鳥肌）	△	△	△	○
2009	『岩波国語辞典』第7版	○（鳥肌）	○	○	○	○
2012	『新明解国語辞典』第7版	○（鳥肌・鳥膚）	△	△	△	○

明治以降の国語辞典に関する調査から次の点が分かった。

(1) 『ことばのその』以外、すべての辞典に「とりはだ」の項目が見える。その表記は「鳥肌」か「鳥膚」とするが、前者のほうが多く見られる。

(2) 「鳥肌」という言葉の意味について、ほとんどの辞書において、寒さを表す用法が取り上げられている。これに対し、ネガティブな用法は1935年『辞苑』以降の辞典から取り上げられるようになった。1990年代後半から、ポジティブな用法も少しずつ辞書に追認される傾向を見せている。

(3) 「鳥肌が立つ」が立項されるようになったのは1972年『新明解国語辞典』初版が最初であり、Ⅰ本来の用法とⅡネガティブな用法が見える。

辞書の記述からみれば、「鳥肌」という言葉は当初、もっぱら寒さを表していたが、1930年代後半から恐怖などのネガティブな用法も表すようになった。ポジティブな用法はそれよりさらに遅れている。では、「鳥肌が立つ」の意味・用法は構成要素「鳥肌」の意味・用法に左右されつつ変遷してきたのであろうか。次節以降では、各種データベースを用いて、この表現の意味・用法の経年変化を調査したい。

4.3 新聞記事データベースを利用した使用実態調査

4.3.1 調査概要

本節では、利用できる代表的な新聞記事データベースのなかから、朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』に絞り込み、「鳥肌が立つ」の用例を調査分析する。まず、1986年から2015年まで30年間の記事を対象に、表記のゆれと動詞の活用形を考慮して「鳥肌が立+鳥肌がた+鳥膚が立+鳥膚がた+とりはだが立+とりはだがた+トリハダが立+トリハダがた」⁴⁵で検索したところ、1,872件がヒットした。

この1,872件というのは、ヒットした記事の総件数を表すものであり、用例の異なり数を数えたものではない。たとえば、同一の記事において、見出しと本文の複数の箇所に検索

⁴⁵ これらの表記のなかで、最も多いのは「鳥肌が立」（1,553件）で、「鳥肌がた」（309件）がそれに次ぐ。

語が現れたり、同じ出来事が複数の記事に取り上げられたりする場合がある。したがって、重複した用例を除外するなど手作業で用例を整理した。その結果、用例は全部で 1,911 例に達した。このなかで、見出しに検索語が見えるが、著作権などの関係で本文を表示できないため、意味・用法の確認ができないもの 1 例、以下のようなメタ言語的な例 37 例を除くと、残り 1,873 例となる（下線は筆者による、以下同様）。

- (1) サッカーの試合で「ゴールが決まって鳥肌が立った」と選手やサポーターが話します。でも辞書では「鳥肌が立つ」とは「寒さや恐怖などで人の皮膚が毛をむしりとした鳥の肌のようになること」。読者の方からも誤用との指摘があります。では、興奮や感動で鳥肌が立つことはないのでしょうか。（2005/01/30 朝刊）

このような用例は「鳥肌が立つ」という言葉の意味自体を問題にする記事であるため、研究対象から除外する。

「鳥肌が立つ」は如何なる用法として使用されているか、これについて判断する際、筆者はまず各種の用法と共起する主なキーワードを以下のように分類・整理した（下位分類の用法は＜ ＞で示す）。

I 本来の用法

＜寒さ＞：「寒い」、「冷え切る」、「冷え込む」、「冷氣」など

II ネガティブな用法

＜恐怖＞：「恐ろしい」、「危険」、「恐怖（感）」、「怖い」など

＜嫌悪感・抵抗感＞：「嫌」、「嫌い」、「嫌悪感」、「不快」など

＜衝撃＞：「あきれる」、「（良くない意味で）驚き」、「衝撃（的）」など

＜緊張＞：「緊張（感）」など

その他：「気持ち悪さ」、「不安」、「恥ずかしさ」、「退屈」、「絶望」、「悔しさ」

III ポジティブな用法

＜驚き＞：「（良い意味で）驚き」、「意外」、「（良い意味で）衝撃」など

＜感動・感激＞：「感慨深い」、「感激」、「感動」など

＜興奮＞：「快感」、「興奮」、「ドキドキ」、「奮い立つ」など

＜すばらしさ＞：「圧倒される」、「美しい」、「すごい」、「すばらしい」、「絶妙」など

＜達成感＞：「～してよかった」、「できた瞬間」など

＜喜び＞：「うれしい」、「歓喜」、「たのしい」、「喜び」など

そして、以下の作業手順に沿って、用例分析を行った。

まず、Ⅰ本来の用法、Ⅱネガティブな用法、Ⅲポジティブな用法のどれに当てはまるかを判断する。次いで、下位分類の用法を分析する際、前後の文脈に上記のキーワードが現れた場合はそれに従う。もし、前後の文脈に上記のキーワードが現れない場合、筆者が記事の全文や関連する記事を読み、どちらの用法に近いかを判断する。

なお、用法分類の際は、あくまで前後文脈に出現したキーワードを優先させた。以下のように、同じ甲子園開会式の入場行進で、選手それぞれが違う意味合いで「鳥肌が立つ」を用いる場合、(2)をⅢの用法（興奮）、(3)をⅡの用法（緊張）とそれぞれ判断した。

- (2) 開会式が終わって仲間のもとに戻ってきた△△、〇〇両選手は「選手宣誓を聞きながら鳥肌がたってしまった。県大会と比べて拍手の音も観客の人数も全然違う」と興奮がまだ冷めない口ぶりだった。(1996/08/09 朝刊)
- (3) 大阪大会の準決勝で延長十回裏に逆転サヨナラ勝ちの本塁を踏んだ△△君は「選手宣誓が終わって観客席からの拍手を聞いたとたん、全身に鳥肌が立った。すごく緊張していた。(後略)」と、笑顔をのぞかせていた。(1996/08/09 朝刊)

4.3.2 各種用法の用例

この1,873例に出現した「鳥肌が立つ」の意味・用法について分析すると、まず以下のような記事が見える。

- (4) 今年の夏、二度、鳥肌が立った。(2005/12/27 朝刊)

この「二度」とは、同年8月20日の甲子園で駒大苫小牧が57年ぶりの連覇を達成した瞬間と2日後の8月22日「野球部長が生徒に暴力をふるったらしい」と知ったときであるという内容が続きの文から分かった。対象語は、「連覇を達成した瞬間の喜び」というⅢの用法と「暴力をふるったと知ったときの衝撃」というⅡの用法の両方が読み取られる。このように、ⅡとⅢ両方の用法として使用される例がわずかながら7例あった。

この7例を対象外として除き、残りの1,866例には、Ⅰが47例、Ⅱが338例、Ⅲが1,481例ある。表2は各種用法の用例数を年別にまとめたものである。

表2 各種用法の年間用例数

年	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	対象外	年間総数
1986	0	0	2	0	2
1987	0	1	1	0	2
1988	0	6	1	0	7
1989	1	2	6	0	9
1990	1	7	9	0	17
1991	1	7	5	1	14

1992	0	3	11	0	14
1993	3	6	12	0	21
1994	2	10	21	0	33
1995	0	15	19	0	34
1996	2	9	25	1	37
1997	1	14	43	1	59
1998	1	17	65	1	84
1999	3	14	46	1	64
2000	3	19	79	13	114
2001	3	16	59	0	78
2002	0	18	71	0	89
2003	2	12	70	2	86
2004	2	17	73	3	95
2005	3	14	73	7	97
2006	4	15	63	8	90
2007	1	14	68	1	84
2008	1	12	79	1	93
2009	3	11	71	1	86
2010	3	11	76	0	90
2011	2	10	73	1	86
2012	1	14	92	1	108
2013	1	14	100	2	117
2014	1	22	77	0	100
2015	2	8	91	0	101
総数	47	338	1,481	45	1,911
割合	2.5%	17.7%	77.5%	2.4%	100%

時間の経過に伴う各種用例数の変化は図2のとおりである。

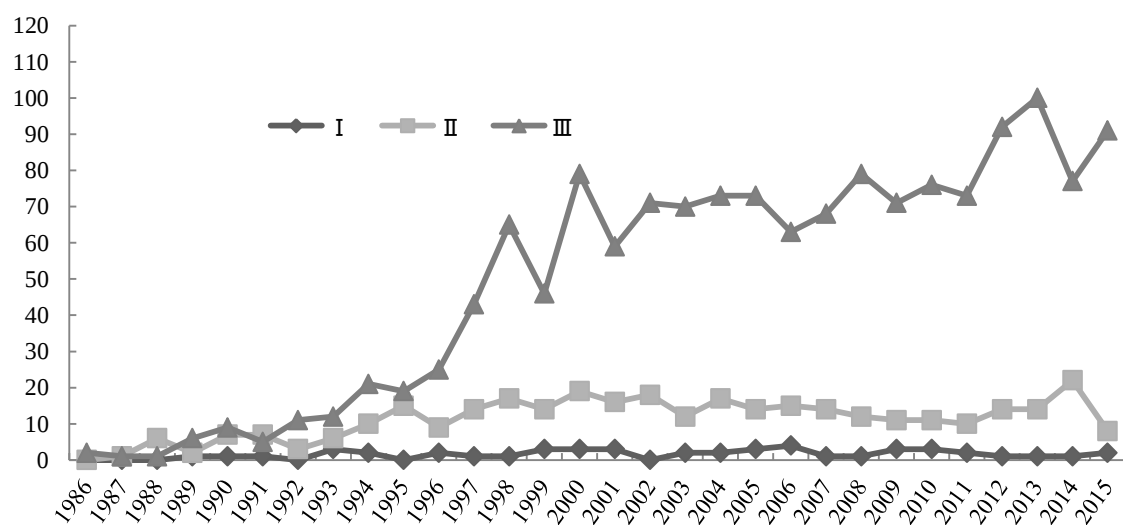


図2 新聞記事データベースにおける各種用法の年間用例数推移

まず、Ⅰ本来の用法として使用されている記事は極めて少なく、全体の 2.5%を占める。毎年の用例数は 0 例から 4 例の間で変動し、激しい用例数の増減は見られない。この 47 例の中には、主に次のような例が多い。

- (5) 記者も水球歴 10 年のプライドをかけて応じるが、全身が震えて、うまくボールを受け取れない。海から上がると、芯まで冷え切った体は赤くなり、鳥肌が立ったままだった。(2010/01/06 朝刊)

これは長崎市の皇后島（通称ねずみ島）に約 100 年続く正月行事、寒中水泳「泳ぎ初め式」が行われたときの記事であった。午前 10 時すぎ、12 度の水温という過酷な状況で、海で立ち泳ぎをしながら水球ボールのパス回しをする。強い寒さに刺激され、身体に鳥肌が立ったことは想像に難くない。つまり、これは実際に、身体に起こった生理現象を指す用例である。ほかの用例もすべて同様に、寒さを感じるとき、身体に「鳥肌が立つ」という現象自体を表現している。

Ⅱ ネガティブな用法の用例数は全体的に不規則な傾向を呈しているが、2000 年あたりをピークにやや減少する傾向にあると言えよう。内容としては、以下のような恐怖を感じるときに使用される記事が数多くある。

- (6) 「あの時の恐怖は今も忘れられない。思い出だけで鳥肌が立つくらいだ」。鹿児島市喜入支所嘱託職員の△△さん（61）は、未知との遭遇を回想する。(2010/06/19 朝刊)

Ⅱの下位分類に位置する用例をみると、戦争や地震、津波などの被害状況や事件を实际目にしたときの恐怖、あるいはテレビの映像を見た時の衝撃、または苦手なものを見たとき、苦手なものや音を聞いたときに生じる嫌な気持ちを表す用例が数多く見られる。特に恐怖に使われている用例が 117 例（34.6%）と最も多く、衝撃を表す用例（96 例、28.4%）、嫌悪感を表す用例（54 例、16.0%）が続く。

しかし、Ⅱの用法が使用されるとき、実際に身体に鳥肌が立ったのかを判断することは難しい。たとえば、次の 2 例はどうだろうか。

- (7) 昆虫や両生類が大の苦手、ただで鳥肌が立つという松山市内の主婦（37）。小学生と幼稚園児がアマガエルを 10 匹捕まえて帰り、自宅で「飼う」と言い出したので驚いた。(1998/08/19 朝刊)
- (8) 企画したのは東北公益文科大学生らによる「選挙で GO！～一票いれとく？～」実行委員会。代表の同大 3 年△△さん（22）が、今春の酒田市長選で友人ら 20 人に投票の有無を尋ねたら「政治と聞いただけで鳥肌が立つ」「面倒くさい」などの理由で、

全員が棄権していたのに驚いたのがきっかけだった。(2003/10/20 朝刊)

苦手な昆虫を見たとき、実際嫌悪感で身体に鳥肌が立つかもしれないが、果たして政治を嫌がる人は、「政治」と聞くだけで鳥肌が立つのであろうか。政治に対する抵抗感があるため、「政治」と聞くだけで嫌な気持ちが生じる。その嫌悪感は、まるで身体に鳥肌が立ったときと同じような異様な感覚である。したがって、実際鳥肌が立たなくても「鳥肌が立つ」という表現を用いて、人あるいは物事に対する抵抗感や嫌悪感を示しているのではないと思われる。

一方、Ⅲポジティブな用法に使用されている用例数は 77.5%と最も多く、全体の約 8 割を占める。この用法は 30 年の間で、著しく増加しており、現在ではほかの用法より圧倒的に多い。この用法の用例数が最も多い 2013 年には、年間用例総数 117 例のうち、対象外の例が 2 例、Ⅰが 1 例、Ⅱが 14 例、Ⅲが 100 例と全体の 85.5%を占める。

このようにそれぞれの年において、ⅡとⅢのどれが優位に立つ用法であるかを見比べた結果、およそ 1990 年代からⅢの用法がⅡの用法を上回り、そのうち、Ⅲの用法が大幅に増加し、現在では「鳥肌が立つ」という慣用句の主要な用法になったことが分かる。前節で取り上げた「国語に関する世論調査」が行われた 2001 年時点では、すでにⅢの用例数がⅡの用例数を超え、使用実態調査は使用意識調査と異なる結果となった。

内容としては、以下のようなすばらしさを表す記事が多く見られる。

- (9) 尾張徳川家 19、20、21 代当主の各夫人の、明治、大正、昭和と三世代にわたるひな壇飾りにずらりと並んだ人形は 150 体超。2 人は「すごい、鳥肌が立ってきた」とその迫力に圧倒された。(2011/03/02 朝刊)

これはひな祭り前日の記事である。「すごい、鳥肌が立ってきた」と発した 2 人は、あるアイドルグループのメンバーであった。2 人は名古屋市の徳川美術館で開かれる特別展「尾張徳川家の雛まつり」を見てまわり、いかにも華やかで、愛らしい、大名家ならではの雛人形の世界に圧倒された。このように、すばらしい芸術品や美しい景色に圧倒されるとき、そして、球児が甲子園のグラウンドに入った瞬間、迫ってくるようなスタンドや客席の雰囲気、演奏や歌を聴いて知らず知らずのうちに感動を覚えたときに「鳥肌が立つ」という表現がよく用いられる。これらの「すばらしさ」を表す用例は合わせて 714 例 (48.2%) ある。ほかにも感動を表す例が 254 例 (17.2%)、喜びを表す例が 225 例 (15.2%)、そして興奮を表す例が 183 例 (12.4%) ある。

さらに、Ⅲポジティブな用法は、競技試合に関する記事において使用率が非常に高いことも、今回の調査を通して明らかになった。Ⅲの用例には 2 例のうち 1 例が競技試合に関わる記事であると言い切っても過言ではない。今回『聞蔵Ⅱビジュアル』を用いた調査結果では、Ⅲの用法に使用されている 1,481 例のうち、野球の試合に関する記事が 577 例、サ

ッカーや水泳などそのほかの競技試合に関する記事が 272 例あり、合わせて 849 例となる。

Ⅲ ポジティブな用法の用例が非常に多く見られるが、しかし、これらの用例については、多くの場合が単なる強調表現であるとも考えられ、実際、身体に鳥肌が立ったかどうかの判断は難しい。たとえば、以下の 2 例を見てみよう。

(10) 溶岩が崩れ、白煙が沢づたいに走った。(中略) 狭い道路をトラックで走っていた△△さん(57)は「白煙に気が動転して、バックのまま約 200 メートル走って逃げた。思い出しても鳥肌が立つ」と語った。(1991/05/24 夕刊)

(11) <フリービット社長 △△(41)>
初代総合政策学部長だった〇〇は、会いにいくとすぐ、自分の名刺に「この学生にご引見ください」と紹介文を書き添えて渡してくれた。「君たちは未来からの留学生だ」という〇〇の言葉は、「今、思い出しても鳥肌が立つメッセージ」という(2013/07/29 週刊)

例(10)は、1991年5月24日の朝、長崎県雲仙・普賢岳が噴火した記事である。溶岩が崩れ、白煙が沢づたいに走ったのを見て、慌てて避難するふもとの住民たちが「鳥肌が立つ」と語った。つい当日発生したばかりの噴火を思い出すと、そのすさまじい光景がありありと目に浮かぶ。ここの「鳥肌が立つ」というのは、身体に実際起こった現象かもしれない。

しかし、例(11)で語り手が思い出すのは、慶應義塾大学に在学したとき、初代総合政策学部長からの熱いメッセージであった。20年くらい前のメッセージを今思い出してもパワーを感じ、身体に鳥肌が立つような感じがする。ここの「鳥肌が立つ」というのは単なる強調表現であるとも考えられる。

では、Ⅲの用法がいつごろから現れたのか。今回の調査範囲で検索したところ、次の記事がもっとも古いものであった。

(12) 地域の再開発で揺れる青森・下北半島の人々を追ったドキュメンタリー映画「六ヶ所人間記」を見て、鳥肌が立つ感動を覚えた。感動は他人にも伝えたい。(1986/07/19 夕刊)

ここまでは1986年以降の記事を対象に検索したが、1986年以前の記事はどうであろうか。1879年～1989年の記事を「見出しとキーワード」で検索したところ、見出しとキーワードに「鳥肌が立」の例はなかった。なお、表記を変換し、「鳥肌がた」/「鳥膚が立」/「鳥膚がた」/「とりはだが立」/「とりはだがた」/「トリハダが立」/「トリハダがた」で検索してもヒットはなかった。

一方、「鳥肌」/「鳥膚」/「とりはだ」/「トリハダ」のみを検索語として、「見出しとキ

ワード」で検索した結果、5 件の該当があった。これらの例に対し、紙面イメージ (PDF) の表示から「鳥肌」の意味・用法が確認できた。以下、明治・大正、昭和 (戦前)、昭和 (戦後) に分け、用例の見出しのみを示す。

○1879 年～1926 年 明治・大正

該当なし

○1926 年～1945 年 昭和 (戦前)

(13) いれずみオリンピック 鳥肌 だって寒うはない<写> (1936/08/21 東京夕刊)

○1945 年～1989 年 昭和 (戦後)

(14) トリハダ __聴診器 (1965/06/28 東京朝刊)

(15) 日系人強制収容補償めぐり対立 恥ずかしくて鳥肌 ハヤカワ上院議員 苦労知らぬと激怒 マツイ下院議員__大戦時の日系人補償問題 (1982/12/16 東京朝刊)

(16) 冷房病対策 冷やし過ぎは禁物です 鳥肌 立ったら危険信号__金曜ひろば (1984/07/06 東京朝刊)

(17) 「鳥肌の立つ」番組を期待__TV 時評 (1989/12/24 東京朝刊)

明治・大正期に用例が見当たらず、初出は 1936 年である。初出例は見出しからも分かるが、寒さを感じる時に使う本来の用法である。念のため、紙面イメージの PDF 表示を確認すると、江戸彫勇会刺青競艶納涼会で中老の男性たちが名主瀧の涼風に鳥肌立ちながらも、ご自慢のいれずみをすっぱりと見せびらかすという内容であった。やはり、寒さを表す用法であることに間違いない。

続く 4 件の例は 1945 年以降に出現したものである。例 (14) は生れつき、鳥の皮のようにざらざらしている皮膚のことを指す。本調査で取り上げてきた対象とは別の用法であるため、ここでは除外する。

例 (15) は、米議会において、強制収容の補償問題をめぐり、日系政治家間で熱い対立が生じ、補償要求を主張する側がいる一方で、「補償請求するなんて恥ずかしくて鳥肌が立つ」と反対発言をする人もいるという記事である。この「鳥肌が立つ」は「恥ずかしくて鳥肌が立つ」とあるから、Ⅱネガティブな用法であると判断する。

また、例 (16) の本文に「鳥肌が立つのは温度が低すぎるという危険信号」とあり、Ⅰ本来の用法であると判断する。

例 (17) の本文⁴⁶に、「若手製作者の実験室であることは構わないが、ほとんどが口あた

⁴⁶ これは 1989 年 12 月 24 日付けの記事であり、PDF で表示した紙面イメージの本文に「鳥肌が立つ」が現れたため、本来は 1986 年～2015 年の記事を対象に検索するときもヒットするはずである。しかし、実際検索をかけたときは、この記事はヒットしなかった。1989 年の記事を対象に、『鳥肌の立つ』番組で検索したところ、この記事の見出しがグリーンで表示し、著作権などの関係で本文が表示できないことに

りのいい映像の冒険で終わっているのが残念である。願わくば、90年代はTVの時代と予感させるような、鳥肌が立つような、番組の出現を期待したい」とある。当時のテレビ放送の現状に対する批判と今後の番組への期待が読み取られる。「鳥肌が立つ」は「すばらしさで鳥肌が立つ」という意味合いを持ち、Ⅲポジティブな用法である。

以上、朝日新聞記事データベースを用いて検索可能な範囲の記事を見たところ、「鳥肌が立つ」という慣用句が最初に現れたのは1982年12月16日付けの記事である。ただし、それ以前には「鳥肌立つ」（1936年8月21日付けの記事）という慣用句の変異形⁴⁷で現れ、Ⅰ本来の用法として使われていた。なお、「鳥肌が立つ」がⅢポジティブな用法で使用される初出例はやはり、1986年7月19日付けの記事であることに変わりはない。

4.3.3 調査結果

朝日新聞の記事データベースを利用し、「鳥肌が立つ」という慣用句に見られる各種の意味・用法に使用される用例数の比較や用例数の推移について考察を加えた結果、以下のことが分かった。

第一に、Ⅰ本来の用法の使用率が極めて低く、Ⅱネガティブな用法の用例数も比較的に少ない反面、現在ではⅢポジティブな用法が全体の約8割を占め、圧倒的に多い。新聞記事データベースを利用した使用実態調査は「国語に関する世論調査」による使用意識調査と異なる結果となっている。かつて誤用扱いされていたⅢポジティブな用法は、現在では、もはや市民権を得た用法として広く使用されていることが分かった。

第二に、Ⅱネガティブな用法の下位分類として、恐怖感を表す用例が約三分の一を占め、衝撃、嫌悪感を表す用例が続いている。一方、Ⅲポジティブな用法の下位分類として、すばらしさを表す用例が最も多く、全体の半分近くある。感動、喜び、興奮を表す用例が続いている。これらの用法に使用される「鳥肌が立つ」は必ずしも実際の生理現象を表すとは限らず、単なる強調表現であるとも考えられる。

第三に、Ⅲポジティブな用法は、競技試合に関する記事において使用率が非常に高いこと、特に、日本人は野球を好み、紙面に登場する機会が多かったためか、野球の試合に関する記事によく出現することが明らかになった。

第四に、複合語「鳥肌立つ」が1936年8月21日付けの記事に現れ、Ⅰ本来の用法として使用されたことがあるが、「鳥肌が立つ」という慣用句自身が最初に現れたのは1982年

なっている。そのため、テキスト本文の検索ができず、上記1,872件の記事には含まれていない。

⁴⁷ 慣用句の変異形については石田（1998）を参照。慣用句は形式的に固定しており、定まった形として使用されるが、形式上の変化を全く示さないわけではない。たとえば、「目が覚める」、「口を出す」、「耳に挟む」には、それぞれ構造あるいは構成要素が部分的に異なる複合語や慣用句（「目覚める」、「口出し」、「小耳に挟む」）がある。これらの複合語や慣用句のように、ある慣用句と形式的かつ意味的に対応関係にある表現形式を「慣用句の変異形」と呼ぶ。石田は、部分的に一致する2つ（以上）の表現形式は、語彙体系のレベルでは同等の資格を持ち、互いが互いの変異形であるとして、これを共時的な視点から検討している。本研究もまた、共時的な観点から、2つの表現は、互いが互いの変異形の関係にあるものとして、これを「変異形」と表現する。

12月16日付けの記事である。この慣用句がⅢポジティブな用法として初めて使用されるのは1986年7月19日付けの記事であり、およそ90年代以降Ⅲの用法がⅠとⅡの用法を上回り、増加していったことが分かった。

最後に、Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの用法はいずれも瞬間的な感情に対して用いることが多いが、しかし、「鳥肌が立ちっぱなし」や「ずっと鳥肌が立っていた」という例も数例見つかった。これらの用例はすべて競技試合に関する記事であり、Ⅲの用法として使用されていることが分かる。また、Ⅰの用例は発話文⁴⁸に出現することがないが、ⅡとⅢの用法に関してみれば、発話文に出現することが多い。

以上、新聞記事データベースを利用し、現代日本語における用例を中心に分析を行った結果、いくつかの結論に至った。しかし、このような調査結果は新聞記事データベースという調査材料の性質によるものなのであろうか。新聞記事データベースによる調査結果は現代日本語全般に共通する特徴を反映しているのか。次節では、この調査結果と対比させるべく、BCCWJの用例についても調査分析を行いたい。

4.4 BCCWJの用例

BCCWJから用例収集を行った結果、「鳥肌が立」が32例、「鳥肌がた」が11例、「とりはだかた」が2例、「トリハダが立」が1例、全部で46例ある。

表3 BCCWJの調査結果

	書籍	Yahoo！知恵袋	合計	割合
Ⅰ 寒さ	9	1	10	21.7%
Ⅱ 恐怖	9	1	10	21.7%
嫌悪感	4	4	8	17.4%
気持ち悪さ	1	3	4	8.7%
衝撃	2	1	3	6.5%
緊張	1	0	1	2.2%
Ⅱ合計	17	9	26	56.5%
Ⅲ すばらしさ	2	3	5	10.9%
感動	2	1	3	6.5%
驚き	1	0	1	2.2%
Ⅲ合計	5	4	9	19.6%
その他	1	0	1	2.2%
総計	32	14	46	100%

用例の出典は出版物として刊行された書籍やWEB上の文書（Yahoo！知恵袋Q&A掲示板）

⁴⁸ ここに言う「発話文」とは、実際の会話のなかで発話された文のことを指す。今回の調査で、対象語はよく発話に出現し、それが複数の記事によって取り上げられることがある。

のテキストである。また、書籍の刊行年代は1991年～2005年のものが多いが、1982年（Ⅰ寒さの用法）と1984年（Ⅱ恐怖の用法）も各1例ずつ見つかった。Yahoo!知恵袋は、すべて2005年のものである。表3は書籍とYahoo!知恵袋を区別しつつ、意味・用法の分類を行ったものである。なお、用法の判断基準は新聞記事データベースと同様である。書籍に見える用例の一部を挙げておく。

Ⅰ 寒さを表す例

- (18) 「初夏とは言え、夜は冷えます」

「いらないわよ」

突っ撥ねたが彼女の二の腕には鳥肌が立ち、寒さを我慢しているのが見え見えである。(高里椎奈 2001『本当は知らない 薬屋探偵妖綺談』)

Ⅱ 恐怖を表す例

- (19) 部屋が歪んでいる。奥行きが倍にもなって、天井が頭にくっつきそうな低さに垂れ下がって来る。押し潰される！恐怖に鳥肌が立った。(赤川次郎 1984『華麗なる探偵たち』)

Ⅲ すばらしさを表す例

- (20) 甘ったるい声から哀しみを堪えたような迫真の声に微妙に変化するあたりに鳥肌がたつ。(林晃三 2003『中島みゆき歌でしか言えない世界』)

新聞記事データベースによる調査結果との比較にあたって、まず、対象語が発話文に出現しているのか、それとも発話文以外の文に出現しているのか。引用符を目印に、発話文を探した結果、以下の2件が見つかった。

- (21) 姿月たちはそのときに「鳥肌が立つほど感動しました」と目を潤ませていたけれど、それだけインパクトがあった訳である（扉写真）。(植田紳爾 2002『宝塚百年の夢』)
- (22) 彼は一日めから「鳥肌が立つくらい感動」して必要最小限の授業を受ける以外の時間は、生活リハビリクラブのボランティアとして、送迎の車の運転までこなし始める。(三好春樹 1998『じいさん・ばあさんの愛しかた』)

前引例(21)の引用符は姿月たちの発話であると判断できるが、例(22)のものは前の文脈に「彼」の発話らしきものが見当たらず、「彼」やほかの人の会話をそのまま引用したとは考えにくい。文中の引用符は、ほかの文の引用であることを示すために付けられたとも、文章を強調するために付けられたとも考えられる。いずれにせよ、この2例の用例総数に占める割合からみれば、発話文における出現率が新聞記事データベースよりはるかに

低い。

各種用法について、Ⅱネガティブな用法は最も用例数が多く、26件と全体の56.5%を占める。次いで、Ⅰの用例が10件(21.7%)、Ⅲの用例が9件(19.6%)ある。各種用法の用例数順位は新聞記事データベースを利用した調査結果と異なる。

Ⅱの用法について、新聞記事データベースでは、17.7%と2割を切ったが、BCCWJでは、用例数が逆転し、半数以上を占める結果となった。Ⅲの用法について、新聞記事データベースでは、8割近くを占めるが、BCCWJでは、2割を切った形となり、両者には大きな開きがある。

新聞記事データベースの用例に発話文が多く引用されることから考えると、この差異は話し言葉と書き言葉という2つの言葉がそれぞれ持っている特徴によるものであろうか。ふつう書き言葉が規範性を持ち、話し言葉はコミュニケーションの場に依存することが多く、規範からの逸脱が少なくないと思われる。したがって、書き言葉となると、本章冒頭に触れたこの言葉の「正用」が比較的に意識され、「誤用」の出現率が下がるのではないかと考えられる。

このほかに、用例のレジスターによる差異も考えられる。競技試合に関する記事では、Ⅱの用例数よりⅢの用例数が圧倒的に多い。その結果、全体の用例におけるⅢの用例数も多くなった。しかし、BCCWJでは、競技試合を素材にした用例が見つからず、Ⅲの用例数が少なくなることが予測される。

新聞記事データベースとBCCWJとの調査結果に共通して言えるのは、Ⅱの下位分類として、恐怖を表す例が最も多いことである。Ⅲの下位分類において、すばらしさを表す用例が最も多いが、しかし、BCCWJの場合は、Ⅲの用法の用例総数が少ないため、すばらしさという用法の優勢は新聞記事データベースほど反映されていない。

総じていえば、二種のコーパスを用いた調査結果が大きく異なり、それぞれのコーパスが持つ特性が反映されている。書き言葉では、ⅠとⅡの用法が8割前後を占め、「鳥肌が立つ」という表現が本来正しいとされる使い方で使用されていることが窺われる。しかし、書き言葉と話し言葉を一括してみると、Ⅲの用法が8割近く占め、優位に立つ用法となる。

ところが、この慣用句の意味変化の方向性について、筆者はⅠ本来の寒さを表す用法から恐怖などのⅡネガティブな用法に派生し、さらにⅢポジティブな用法へと広がってきたと想定したが、新聞記事データベースにおける各種用法の用例の初出年代はそれほど離れておらず、BCCWJにおける用例数も少ないため、今回の調査でこれを裏付けるデータは得られなかった。

この慣用句の意味・用法がどのような変遷を経てきたのかについて解明するためには、調査資料を増やししながら年代をさかのぼり、その使用例について通時的な視点から更なる調査分析が必要である。次節では、この点について検討を加えたい。

4.5 近代の用例

『青空文庫』を用いて近代の用例を調査した⁴⁹。表記のゆれを含めた詳細を表4に示す。

表4 『青空文庫』における「鳥肌が立つ」の用例

	鳥肌が立	鳥膚が立	鳥肌/鳥 膚がた	とりはだ が立/た	トリハダ が立/た	合計
I	3	0	0	0	0	3
II	3	0	0	0	0	3
III	0	1	0	0	0	1
総計	6	1	0	0	0	7

明治期から昭和戦前までの使用例が少なく、そのうちI本来の用法が3例、IIネガティブな用法が3例、IIIポジティブな用法が1例ある。各種用法について、1例ずつ挙げておく。

I 本来の用法

- (23) 岳の方から薄ら冷い風が吹いて、汗にふやけた五体に鳥肌が立つ、妖しげなヒトデの形をした雲が高い鱗雲の下をのろのろ^は匍いまわるのが不気味だ、急いで出懸る。
(木暮理太郎1915『黒部川奥の山旅』)

II ネガティブな用法

- (24) それを得意気に言った時の・お前のうすっぺらな・やにさがった顔付を思出し、お前の年齢と経験とを併せて考えると、本当に己は、恥ずかしい^{おれ}のを通り越して、ゾッと鳥肌が立って来るよ。全く。(中島敦1942『狼疾記』)

III ポジティブな用法

- (25) 健は身体に鳥膚が立つ程興奮を感じた。(小林多喜二1929『不在地主』)

『不在地主』は『中央公論』の1929(昭和4)年11月号に掲載された作品である。この用例は『日本国語大辞典第2版』にも掲載されている。

なお、「鳥肌」を含む用例のなか、「鳥肌になる」、「鳥肌立つ」、「鳥肌だつ」、「鳥肌立てる」、「鳥肌を立てる」、「鳥肌の立つ(思い)」などがあり、「鳥肌」と一緒に使用する表現はバリエーションに富む。このなかで複合語「鳥肌立つ」/「鳥肌だつ」が合わせて20件あり、そのほかの用法を除いた17例のうち、6例がI本来の用法、11例がIIネガティブな用法として使用されており、IIIの用例が見られなかった。

⁴⁹ 調査対象は昭和20年以前の作品と断定できるものに限定した。最終アクセス2014年11月24日。

現代語のコーパスに比べ、近代語のコーパスに出現した用例数は極めて少ない。7例のうち、Ⅰの用例が3例と約半数を占める。Ⅱの用例が3例あり、Ⅲの用例がわずか1例しかなかった。近代日本語において、「鳥肌が立つ」はほとんどⅠかⅡの用法として使用されていることが明らかになった。

4.6 本章のまとめ

本章では、「鳥肌が立つ」の意味・用法について考察し、この慣用句は本来の寒さを表す意味から広がり、ネガティブな用法を表すようになった。その後、年代が下るにつれ、書き言葉では、本来の用法とネガティブな用法がまだ正しい用法として意識されているが、話し言葉では、比喻や誇張表現としてのポジティブな用法が比較的多く使用されていることを示した。

そもそも鳥肌が立つという生理現象の起因として、最も想起されやすいのはおそらく寒気であろう。これは、人間の肌を、毛をむしり取ったあとの鳥の肌にとえた表現である。しかし、そのような鳥の肌ははしたなく、良いものとは思えない。寒さで鳥肌が立つとき、皮膚が反射的に収縮し、ある種の妙な気持ちも伴うため、次第にネガティブな用法も生じてきた。また、個人差はあるかもしれないが、感動や興奮したときに鳥肌が立つこともある。医学的にも、感情が動けば交感神経が反応することで説明がつく。

また、「鳥肌が立つ」は体の内側で起こる感情の変化で、「ドキドキする」、「ワクワクする」、「涙がこぼれる」など感情を表に出す表現と区別される。「鳥肌が立つ」に代わる適切な別の言葉を見つけるのは難しく、「鳥肌が立つ」を使用することにより、言葉の隙間を埋めようとしたものと考えられる。つまり、興奮を感じるときに「鳥肌が立つ」を用いるのは、言語内的な要素からみて合理的である。

さらに、Ⅲの使用者の属性から言語外的な要素を探りたい。新聞記事を用いた調査では、Ⅲの用法はおよそ1990年代以降急激に増加したことが分かった。執筆する記者が30歳くらいとすると、生まれたのは、1960年前後になる。おそらく昭和30年代以降に生まれた記者がインパクトのある表現を求め、第一線で記事を書くようになってから、後に広く使われるようになったのではないと思われる。

慣用句「鳥肌が立つ」に関連する表現として、構成要素が単独で使用される場合の「鳥肌」やインターネット用語と思われる「鳥肌モノ/鳥肌もの」、及び類義語の「総毛立つ」などがあるが、これらの表現はどのような使われ方をしているのか。

まず、新聞記事データベースにおいて、これらの表現の用例数が「鳥肌が立つ」より圧倒的に少ないことが確認される。ヒットした用例のなかでは、「甲子園で満塁ホームランなんて、それ自体が宝物みたいなもの。またまた、鳥肌だ。」(2008/08/04 朝刊)、「逆転シーンは鳥肌モノ。今後もグルージャを応援し続けます」(2004/05/10 朝刊)、「全身が総毛立つような、演奏していて涙があふれてくるような感動のステージを経験して、すっかりティ

ンパニのとりこになってしまった」(2007/02/17 夕刊)といったすばらしさや感動による用法が見られる。いずれも 2000 年以降の記事に出現し、ポジティブな用法として使用されることから、「鳥肌が立つ」と関連している可能性が示唆される。ただ今回の調査範囲では、このような例が少ないため、「鳥肌が立つ」との関係を検討することはできなかった。今後の課題として、ほかのコーパスによる補充調査を行い、慣用句「鳥肌が立つ」とそれに関連する諸表現を併せて検討していく。

第5章 慣用句の意味拡大 (2)

5.1 はじめに

日々刻々と変化する社会のなかで、人々の言語意識も変化するものである。日本語を問題にして考える場合にも、それらの状況への十分な認識が必要である。本章は、このことを念頭に置き、意味拡大のもう 1 つの事例として慣用句「足を洗う」を取り上げ、意味・用法を中心とした言語変化⁵⁰の要因に関する考察を加える。

筆者が「足を洗う」という表現に興味を持ったきっかけは、手元にある二冊の辞書を調べ、その記述の食い違いに気付いたことである。まず、米川明彦・大谷伊都子編 (2005:15-16) 『日本語慣用句辞典』では、「好ましくない職業・事柄・生活を断って離れてよい状態になる。好ましくない事柄は必ずしも社会的評価によるものではなく、話者の評価による。心理的にきっぱりと離れてという意識が強い時には、一般的には好ましくないとは考えられないことにも使う」という解説がなされる。そして、後者の例文として 2 例確認される。

一方、北原保雄編 (2007:12) 『明鏡ことわざ成句使い方辞典』では、この慣用句を解釈した後、「単に離れる意で使うのは不適切」と指摘し、誤用例として、「制作部から足を洗って、経理部に異動になりました」と「教育の世界から足を洗ってもうだいぶたつ」の 2 例を挙げる。つまり、この慣用句は悪事をやめる意味のほかに、ただ仕事をやめる意で使えるかどうかについて、両辞典で相反する解説がなされる。

この食い違いは伝統的な形式と新来の形式の対立である。通常は前者が社会的に優位な立場にあり、日本語の規範を支配しているため、日本語教育のなかではその規範に従って伝統的な形式が扱われることが多い。言語変化によって生じつつある新たな形を日本語教育に導入するか否かは、学習者のニーズや置かれた環境との関連で決める必要がある⁵¹。中国人の日本語学習者からみると、日本語の「足を洗う」は中国語の「洗手不干」⁵²に相当すると思われるため、悪事以外に使用するのは不自然に感じられるかもしれない（少なくとも、筆者の語感では、中立的な要素における「足を洗う」の使用に抵抗を覚える）。そうすると、この表現の意味・用法を考察し、学習者に説明する必要がある。

用例を調査したところ、悪事以外に使用するものも多く見られた。それは、社会状況の

⁵⁰ 「ことばの意味と形式の結びつきは恣意的であるという、ことばのもつ根元的な特徴を背景にして、言語は、つねに変化の可能性をもっている。現代日本語のなかでも、現在、さまざまなレベルで変化が進行しつつある。」(『新版日本語教育事典』の「現代の言語変化」の項、渋谷勝己執筆、pp.464-465) たとえば、音声面や文法面などで変化が起こっているが、本研究は意味・用法を中心とした言語変化に着目したい。

⁵¹ 詳細は、『新版日本語教育事典』の「現代の言語変化」の項を参照されたい。

⁵² これは「手を洗ってもうしない」という意味から転じて、悪事から手を引くことを表す四字熟語である。窃盗などの犯罪に使うのが一般的な用法である。

移り変わりとそれに伴う人々の言語意識の変化に応じて言葉も変化するからである。特に慣用句の場合は、社会習慣や文化と結びついて生まれる表現形式である。慣用句が社会のなかで使われる以上、社会の変化が慣用句のあり方に影響を与える。本章では、悪事にしか使用できないはずの慣用句「足を洗う」が悪事以外にも使用できるように用法が拡大したことを一種の言語変化として捉え、用例分析を通してその要因を探る。

以下、分析の手順として、まず、代表的な国語辞典の意味記述を確認することにより、「足を洗う」の意味・用法を分類する（第2節）。次いで、各種コーパスからの用例採集を行った上で、「足を洗う」の意味・用法を例示しつつ検討し、この表現の使用実態を探る（第3節・第4節）。そして、言語変化の要因を解明し（第5節）、全体の内容をまとめる（第6節）。

5.2 「足を洗う」の意味・用法の分類

「足を洗う」という表現を『日本国語大辞典第2版』は、「(汚れた足を洗うように) 悪事や、好ましくない職業の世界から抜け出すことにいう語」と解説した上で、さらに2つの意味を取り上げる⁵³。

①娼妓、芸人などが、勤めをやめて堅気になる。(例文省略)

②世間の人のいやがるような、良くない仕事をやめる。好ましくない行為をやめる。

現代では、煩わしい仕事などをやめる場合にも用いる。(例文省略)

これを見ると、意味が2つに細分化されているが、しかし、①が②の一部として含まれるとも考えられ、その違いはあまり明確ではない。また、この区分はほかの国語辞典の多くでは採用されていない。たとえば、『広辞苑』第6版⁵⁴などこれに相当する語義を1つにまとめる辞典が少なくない。本論の趣旨からこうした区分の必要が認められないため、以下においては、この解釈を第一義として取り扱い、「足を洗う①」と表記する。

しかし、この慣用句は日常の使用に伴い、意味・用法が変化し、現在では、次節以降に見るような豊富な実例があり、その意味・用法は「足を洗う①」が示唆するような語義に帰納することができない。この点に関して、新村出編（2008:44）『広辞苑』第6版は、「単にある職業をやめることにもいう」と解説している。この語義の「足を洗う①」との関係

⁵³ 詳細は、『日本国語大辞典第2版』を参照。意味・用法に関する解釈のほかに、慣用句の由来に関する情報もよく辞書に記述される。今回の調査対象「足を洗う」という慣用句の由来について、諸説が見られる。おそらくこの慣用句は汚れた足を洗い清めることに由来することは間違いないだろうが、誰が汚れた足を洗い清めるのかという点については、諸説がある。一説によれば、僧が一日の托鉢のあと、寺へ入るために足を洗うことから出たという。これをインドの托鉢僧と特定する説もある。もう一説は、中国古典の「洗足」や「濯足」を語源とするものである。また、客が旅館に入る前に足の汚れを洗うことから由来したという説もある。ここでは、その由来について言及するにとどめておく。

⁵⁴ その解釈は、「賤しい勤めをやめて堅気になる。悪い所行をやめてまじめになる。また、単にある職業をやめることにもいう。」とある。

は同辞典では明記されないが、これが「足を洗う①」から意味・用法が派生したことは明白であろう。以下では、この表現が派生した意味・用法をも視野に入れ、「足を洗う②」と表記する。つまり、慣用句「足を洗う」には以下の2つの意味が含まれる。

足を洗う①：悪事やよくない仕事をやめる

足を洗う②：現在の職業をやめる

ただし、このように分類すると、「足を洗う①」と「足を洗う②」とは、排他的な関係としてではなく、むしろ「足を洗う①」が「足を洗う②」の意味領域に含まれる分類となる。したがって、ここでは、用例分類上の便宜を考え、この2つの意味を排他的な関係に位置付けるため、「足を洗う②」の指す「現在の職業」を「悪事やよくない仕事とは言えない職業」に限定することにする。つまり、上記2つの意味に若干修正を加え、

足を洗う①：悪事やよくない仕事をやめる

足を洗う②：悪事やよくない仕事とは言えない、現在の職業をやめる

と考えるのが説明のためには適当なようである。たとえば、「裏社会から足を洗う」なら「足を洗う①」と考えるのが妥当であるが、「政界から足を洗う」ならむしろ「足を洗う②」が妥当であろう。

5.3 現代語における用例

表1 現代日本語における「足を洗う」の用例

	朝日	毎日	読売	BCCWJ	合計
用例の異なり数 (記事数)	837 (793)	505 (481)	525 (487)	114 (—)	1,981
除外した用例	78	48	56	10	192
文字通りの意味	243	151	174	46	614
「足を洗う①」	336	197	185	39	757
「足を洗う②」	169	107	94	18	388
そのほか	11	2	16	1	30

表1に示したのは、新聞記事データベース及びBCCWJから採集した現代日本語における「足を洗う」の用例数である⁵⁵。いずれのコーパスにおいても、「足を洗う」という表現を慣

⁵⁵ 表1において、除外した用例は、「手足を洗う」、「手足を洗濯物で縛る」、「足を洗い清める」、「能力不足

用句として使用する割合が約半分を占める結果となっている。さらに、慣用句として使用する時、3 例に 1 例は「足を洗う②」の意味に用いられている。「足を洗う②」の正誤はともかく、それが新聞記事や小説において一定の頻度で出現していることは事実である。

もう 1 つの特徴として注目されたいのは、新聞記事データベースにおいて、「足を洗う①」と「足を洗う②」はいずれも発話文⁵⁶に多く出現することである。その原因は報道記事に引用文が多用されるからである。人物の会話を直接、あるいは間接引用したと容易に観察できる用例もあれば、断片的な引用やどちらか不明のものもある。発話文が豊富なものには、新聞記事のほかにも小説もあると思われるが、BCCWJ においてはそのような特徴が反映されなかった。それはおそらく母集団の大きさ⁵⁷によると考えられる。

以下、用例分析は朝日新聞記事データベース『聞蔵Ⅱビジュアル』から得たものを中心に行う。用例は同新聞 1986 年から 2015 年までの 30 年間の記事から検索したものである。表記のゆれと動詞の活用形を考慮して「足を洗+足をあら+あしを洗+あしをあら+アシを洗+アシをあら」で検索したところ、著作権の関係で本文を表示できない記事 1 件を除き、全部で 793 件の記事がヒットした。しかし、この数字はあくまでも記事の総件数を表すものであり、「足を洗う」の用例数を数えたものではない。たとえば、同一の記事において、複数の箇所に検索語が異なる意味として現れることや同じ出来事が複数の記事により取り上げられることがある。

表 1 に示したとおり、筆者が目視で用例を確認し、異なり数を数えたところ、全部で 837 例という数にのぼった。そのなかで、除外した用例が 78 例、「足の汚れを洗い落す」という文字通りの意味に使用されるものが 243 例、「足を洗う①」が 336 例、「足を洗う②」が 169 例、そのほかが 11 例であった。

数々の用例はその文脈に応じて様々な使われ方をしているが、比較的頻繁に現れる用法とそうでないものがあることもこの表現の使用実態である。事例においては書き手、または話し手がどのような意図をもって「足を洗う」という慣用句を用いているか判然としな

をあらわにした」など別語の一部で不適例と見るべきものである。また、そのほかの用例として、メタ言語的なもの、意味不明のもの、判断にゆれが生じるもの、そして本章で取り上げる意味とはまったく別の意味を表すものが挙げられる。このほか、著作権などの関係で本文を表示できない記事は、朝日新聞に 1 件、読売新聞に 102 件あった。

⁵⁶ 朝日新聞の場合、引用符を目印に、そこから断片的な引用や不明のものを除いた結果、「足を洗う①」が 128 例、「足を洗う②」が 59 例であった。しかし、この数字の中には人物の会話ではなく、手紙から引用したとも考えられる例もあるため、正確な数字を出すにはまだ検討の余地がある。

⁵⁷ 同様に数えた結果、BCCWJ における発話文に出現した「足を洗う①」が 4 例（2 つの文学作品から 2 例ずつ）、「足を洗う②」がなかった。この点について、まず新聞記事データベースと BCCWJ は母集団の大きさが異なることを断っておきたい。新聞の種類や年によって大きさは異なるが、最近の新聞 1 年分の記事はおおよそ 6,000 万字（120 メガバイト）ある（田野村 2009 : 26）のに対し、BCCWJ は合計 1 億 430 万語からなる。「文字数」と「語数」とは異なる単位であるため、厳密な比較を行うには、単位を揃えなければならないが、おおざっぱに言うと、新聞記事データベース 30 年間の文字数は BCCWJ より大きいことが予想されよう。ところが、上に述べた特徴が反映されなかった理由として、母集団の大きさよりもレジスターの特徴のほうが大きな影響を与えていると思われる。すなわち、新聞における引用文と小説等における発話文との相違によるものである。本章では、このようなレジスターによる使用差については言及するにとどめておく。

い場合もある。もとよりこの慣用句は比喻から生まれたものであるため、比喻的に用いる場合、その使われ方を網羅するのは事実上不可能である。以下では、「足を洗う①」、「足を洗う②」のなかで目立つタイプを抽出して記述する。

5.3.1 「足を洗う①」の用例

実例からみると、「＜動作主＞が＜対象＞から/の足を洗う」という文型をとるものが多い。これは、「足を洗う②」でも「政界から足を洗う」などの例があるから、「足を洗う①」の固有の特徴ではない。＜対象＞に当たる要素を整理した結果、「足を洗う①」は暴力団・やくざ（139）⁵⁸と共起することが最も多く、強盗・スリ・泥棒（38）、競馬・パチスロ・パチンコ・ポーカー・マーじゃんといったギャンブルに関わる用語（19）がそれに次ぐことが明らかになった。ほかに総会屋（9）、暴走族（7）など比較的多く共起する要素もあるが、ほとんどの要素（「愛人暮らし」、「アウトローの世界」、「核実験」など）は使用度数⁵⁹が1回のみとなっている。

このように、＜対象＞に当たる要素は、頻繁に用いられるものから1回しか現れないものまで様々ある。ここでは、それらの要素が繰り返され定着する度合いを「定着度」として捉える。すると、使用度数の多少から＜対象＞に当たる要素の定着度が窺われる。すなわち、使用度数の多い要素は想起されやすく、定着度が高いが、使用度数の少ない要素は想起されにくく、定着度が低い。以下、(1)～(6)は3例ずつ使用度数の多い例と使用度数の少ない例に対応する。

- (1) 十日午前九時二十分ごろ、三十歳くらいの男性の声で「ヤクザから足を洗うことにした。JR 上尾駅東口のロッカーにけん銃を入れた。他の者に使われるとまずいので、警察で処分してくれ」と上尾署に通報があった。（1995/11/11 朝刊）
- (2) 福岡県の大物女性スリ（69）が、足を洗う覚悟をした。意を決して 202 件、総額 1 千万円の余罪を自供し、罪を償うと誓った。（2002/07/02 朝刊）
- (3) 結婚してからはパチンコから完全に足を洗った。（2014/11/21 週刊）
- (4) 「貧乏床屋の跡継ぎで、上の学校へ行くどころじゃねえさ」。（中略）ただ、35 歳で「貧乏床屋」の足を洗い、7、8 年、織物行商の旅に出て書いた小説「狐と狸」は 2 度映画化。（1991/08/10 夕刊）
- (5) おかげで私は、長い浪人生活の足を洗うことが出来たわけだ。（2000/11/19 朝刊）
- (6) 借金潰けの農業から足を洗いたいためでもある。（1991/09/13 朝刊）

⁵⁸ 括弧内の数字は用例数を示したものである。なお、「暴力団」、「ヤクザ」、「極道」のような類似の要素は同じ項目内にまとめた。また、それらの変形（「ヤクザ稼業」、「ヤクザ社会」、「ヤクザ生活」、「ヤクザ組織」、「ヤクザの世界」、あるいは、「やくざ」という語の表記をカタカナにするかひらがなにするか）は使い分けられているようにも見えないため、筆者は「暴力団・やくざ（139）」のように、そういった多様なものを一括りにしてまとめた。

⁵⁹ 本調査では、全ての用例が「＜動作主＞が＜対象＞から/の足を洗う」という文型をとるわけではないため、この文型をとらない用例に対しては、前後の文脈を踏まえ、この文型に復元する処置を講じた。

「足を洗う①」の用例には、次の2つのタイプがあり、区別しなければならない。＜対象＞と悪事の結びつきを手掛かりに分類すると、1つめは、＜対象＞が悪事と結びつきやすく、否定的な意味を表すタイプである（例1～3）。2つめは、＜対象＞が悪事と結びつきにくく、必ずしも否定的なものではないが、修飾語の力を借りて否定的なものに傾くタイプである（例4～6）。

たとえば、例（4）の「床屋」は「ヘアサロン」や「美容室」に比べ、おしゃれではないというマイナスなイメージをもつが、言葉自体は否定的な意味をもたない。「貧乏」と連結してはじめて否定的な評価に移行する。それに加え、（作家の熊王徳平が）貧乏床屋の跡を継ぐことで、（小学校卒業後）上の学校へ行くことができなかった。床屋をやめて作品作りに集中するのは、「よくない仕事を離れてよい状態になる」という慣用句辞典の解説に合致する。

上に挙げた例のほかにも、「悪徳業者」、「お酒一辺倒」、「大量飲酒の習慣」、「負の資産」など連語関係を含む要素が見られる。これらの要素は否定的な意味をもつ修飾語によって修飾され、否定的な状態へ移行してしまい、「足を洗う①」と共起できるようになる。その一方で、前掲した例（1）～（3）は常に社会的評価がよくないため、修飾語に依存する必要がない。定着度が高いのはこの原因によると考えられる。

5.3.2 「足を洗う②」の用例

「足を洗う②」について、＜対象＞に当たる要素を整理した結果、政治（25）と共起することが最も多く、役者・映画・俳優といった芸能界関係の用語（16）、サッカー・水泳・野球といったスポーツ関係の用語（14）がそれに次ぎ、これらの要素は定着度が高い。

一方、使用度数が1回の要素が多く見られ、内容にも様々なバリエーションがある。ビジネスや株式投資、証券会社など具体的な仕事を指す用語以外にも、「ハトレースの趣味」や「アユ釣り」のような趣味を表す用語、及び「馬」、「熱帯魚」、「電気」のような趣味として時間や精力を費やしてきたと想定できる用語、そして、「九州」、「カンボジア」、「港」のような地名や場所を表す用語がある。以下、（7）～（12）は3例ずつ使用度数の多い例と使用度数の少ない例に対応する。

- （7）市長選への出馬を要請する6万人を超す署名に心が動いた。「負けたら、政治から足を洗う」と周りに宣言。（2003/04/22 朝刊）
- （8）黒沢さんの「酔いどれ天使」が出た時には、打ちのめされた思いで、「こんな見事な作品はぼくには撮れない。もう映画から足を洗おうか」と真剣に悩んだりしました。（1991/03/22 夕刊）
- （9）この四年後のメキシコを最後に、飯島は短距離ランナーから足を洗った。（1994/02/07 夕刊）
- （10）《万歳の声と拍手に送られて乗転者はうれしそうに小倉駅から去ってゆく。駅頭では

残留組に、君も早く九州から足を洗って戻ってこいとか言い合う。「半生の記」》
(2009/09/05 朝刊)

- (11) この二、三年、は虫類に関する問い合わせはなくなり、熱帯魚から足を洗った客も多い。客単価はピーク時から半減。(1998/01/11 朝刊)
- (12) 「うどんから足を洗ってくれ」(中略) 2代目の常勤社長には無類のうどん好きが就いた。(2013/05/06 朝刊)

同様に、＜対象＞と悪事の結びつきを手掛かりにして、2つのタイプに分けることができる。1つめは、＜対象＞が悪事と結びつきにくく、否定的な意味を表す修飾関係が希薄になったタイプである(例7～9)。例(7)の連語関係を復元すると、「負けたら、プレッシャーのある政治から足を洗う」という一文になる。政治は通常、よくない仕事とは思えない。それにもかかわらず、あえて「政治から足を洗う」と表現するのは、話し手自身が好ましくないと強く主張しようとしているからである。

2つめは＜対象＞が悪事と結びつかず、話者の意図により否定的な意味に移行するタイプである(例10～12)。例(10)の「九州」は悪事やよくない仕事へと連想できない。そこには書き手自身の判断が働いており、修飾関係がなくても、悪事やよくないことを訴えようとしている。九州は東京から遠く離れるから、それが好ましくないのかもしれない。しかし、これが話し手の意図した内容と同一であるという保証はない。このタイプの例のなかには、かなりの推論を巡らしてはじめて内容が想定できる用例が少なくない。上に挙げた例のほかにも、「山」、「大学」などがある。これらの要素は話し手や書き手自身の判断によりよくないとされ、「足を洗う②」と共起できるようになる。

また、「足を洗う②」には、“足を洗う”や「足を洗う」のように、引用符やかぎかっこでくくって表記するものが数例ある。

- (13) △△さんは1990年代、スターごとに自発的につくられるファンクラブに入って活動。3年前「足を洗う」まで、1カ月公演で20回、多いときは毎日見ていたという。
(2011/08/31 夕刊)
- (14) △△さん(五八)はアイスホッケー選手として高校時代から社会人一年目まで国体に五回出場し、早大時代には大学選手権で優勝した経歴の持ち主だ。その後、仕事が忙しくなり「足を洗っていた」が、十三年ほど前、四十歳以上を対象にした東京都のリーグに入り、現役にカムバックした。(2000/05/27 夕刊)

これらの例で言及したファンクラブで活動すること、アイスホッケー選手として活躍することは好ましくないことや状態とは言えない。したがって、「足を洗う」に引用符がつけられる。これは、書き手側に本来の用法である「足を洗う①」に合致しないことがまだ意識されているからである。結局、「足を洗う②」は十分な例があり、一般の国語辞典が認知

する語義である一方で、本来の用法の外延であるという意識も依然として生きているという興味深い状態にあると言える。

5.4 「足を洗う」の歴史的変遷

5.4.1 近世までの用例

まず、『日本古典文学』と『嚟本』を調査し、近世までの用例を観察する。その結果、前者には18例、後者には5例があった⁶⁰。この23例のうち、不適例として除外されたものが2例、文字通りの意味に使用されるものが18例、「足を洗う①」が3例、「足を洗う②」の用例がなかった。以下、「足を洗う①」の3例を引用する。

- (15) 凡而、ことの十分なるは、欠るの兆、九分なるは充るの首なれば、八の数^{すう}を以て、永久^{えいきう}の嘉瑞^{かすい}とし、ものゝめでたき極位^{ごくゐと}与^あする事は、先大江都^{おほゑど}の八百八町、長^{とこしなへ}にし
て尽ず。(中略) 予が膝栗毛も此八編^{ひざくりげ}に至^{いたつ}て足^{あし}を洗^{あら}ひ、引込思案^{ひっこみじあん}の筆^{ふで}をおくこと、(後略) (十返舎一九 1802-1822 『東海道中膝栗毛』)
- (16) 嗟呼^{あゝ}疔癰^{かんしやく}のしのびごま、看官^{みるひと}汐合^{しほあひ}のほどをはかりて、よろしくおかぶらの足^{あし}を洗^{あら}ひ、
引込時^{ひっこむじ}ぶんの間^まを見合せ、野暮^みと化物^{あはせ}にたとへらるゝことなかれ。(為永春水 1832-1833 『春色梅兒譽美』)
- (17) 一晚に、三千両は愚^{おろ}かな事、千両でもかためちゃア、滅多^{めつた}に盗めるものじゃアねへ。
そこでこゝが止時^{やめどき}と、仲間の者にも分^わけてやり、足^{あし}を洗^{あら}つて其金^{そのかね}から、思い附^{おもひつ}いて
の貸附會所^{かしかいしよ}。(河竹黙阿弥 1859 『小袖曾我薊色縫』)

この3例において、＜対象＞に当たる要素は「引込思案の筆」、「遊郭」と「盗人」である。例(15)は「足を洗う①」のタイプ2、例(16)と(17)は「足を洗う①」のタイプ1に含まれる。

また、『日本国語大辞典第2版』に掲載された用例のうち、近世までのものとして次の3例が挙げられる。例(18)の＜対象＞は「げす」で、当時げすは低い身分とされるゆえ、「足を洗う①」のタイプ1に含まれる。例(19)と(20)の＜対象＞に当たる要素を原文から確認すると、それぞれ「女郎買をして金を使う野暮」と「唄妓」(げいしゃ)であり、「足を洗う①」のタイプ1に含まれる。

- (18) 「げすがさぶらいに足をあらうて、上らうまじりをするぞ」(玉塵抄 1563)
(19) 「若い内にちっと修行して見て早く足を洗ふがいい」(滑稽本・浮世床 1813-1823)

⁶⁰ 日本古典文学大系(岩波書店)と嚟本大系(東京堂出版)の用例検索については、国文学研究資料館の『大系本文データベース』検索システムを利用させていただいた。引用にあたっては、原本に基づき、ルビを付けるなど私意に改めた箇所があることを断っておきたい。

- (20) 「私（わちき）が足を洗って素人（しろうと）にさへなりゃア」（人情本・春色梅美 婦禰 1841-1842 頃）

今回の調査範囲で、「足を洗う①」の初出例は例（18）であり、タイプ 1 に含まれる。なお、タイプ 2 の初出例は例（15）である。

5.4.2 近代の用例

次いで、近代の用例を調査することにより、「足を洗う②」の初出例にまで遡る。表 2 に示したとおり⁶¹、近代語のコーパスにおける「足を洗う」の有効な用例数が少なく、「足を洗う②」の意味に用いられる用例の割合が非常に低い。該当の 3 例はそれぞれ『青空文庫』、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』から検出した。

表 2 近代語における「足を洗う」の用例

	青空	太陽	女性	明六	国民	合計
用例数	66	14	6	0	1	87
除外した用例	1	1	1	0	0	3
文字通りの意味	37	7	3	0	0	47
「足を洗う①」	27	5	1	0	1	34
「足を洗う②」	1	1	1	0	0	3

- (21) 外国文書の翻訳、それが彼の担当する日々の勤務であった。足を洗おう、早く——この思想は近頃になって殊に烈しく彼の胸中を往来する。（島崎藤村 1907『並木』）
- (22) 政黨は二十年間に於て種々に變遷したり。中にも伊藤公が政友會を組織したる、西園寺侯が政黨首領となれる如きあり。日本政黨の開山と仰がるゝ板垣大隈二伯の却つて足を洗ひ、全たく黨界と交渉なきに至れるごとき、變遷の最も著るしきものとす。（浅田江村「政治、外交」『太陽』1909 年 04 号）
- (23) 最初は天職と信じた教師も、年が年中紋切形で、幕なしにやつてゐてはウンザリ

する事なきにあらず。（中略）『皆さん。わかつた方は手をお上げなさい』なんかと云つても居れぬ。こゝに誘ふ水あらば、運ぶに任せておさらば、さらばと、學校から足を洗ふて、家庭の人となるのである。（河岡潮風「御茶の水評判記」『女学世界』1909 年 03 号）

この 3 例において、＜対象＞に当たる要素は「外国文書の翻訳」、「政党」と「学校」で

⁶¹ 青空、太陽、女性、明六、国民はそれぞれ『青空文庫』、『太陽コーパス』、『近代女性雑誌コーパス』、『明六雑誌コーパス』、『国民之友コーパス』の略である。

ある。前に修飾関係が見当たらないが、例（21）は「煩わしい外国文書の翻訳仕事」、例（22）は「離合集散の激しい政党」、例（23）は「ウンザリする学校」のように復元でき、「足を洗う②」のタイプ 1 に含まれる。なお、調査範囲で「足を洗う②」の初出例は例（21）であり、タイプ 1 に含まれる。

5.5 「足を洗う②」の生じた原因

前述したように、＜対象＞に当たる要素を整理した結果、いくつかの目立つタイプが認められた。これらのタイプはそれぞれ独立しているものではなく、むしろ互いに連続性を帯びている。次の図 1 に示す（実線の楕円は使用度数が多く定着度が高いもの、点線の楕円は使用度数が少なく定着度が低いものを示す）。

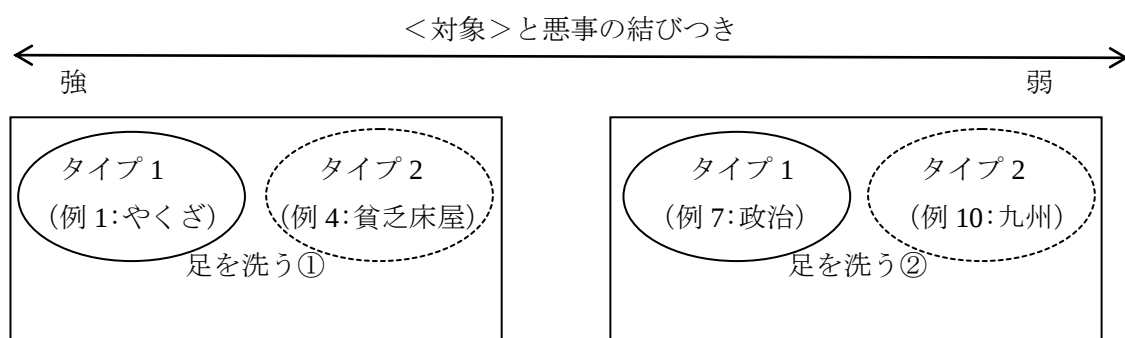


図1 4つのタイプからみる「足を洗う」の用例

前述のとおり、「足を洗う①」は＜対象＞が悪事と結びつきやすく、否定的な意味を表すタイプ 1 と、＜対象＞が悪事と結びつきにくく、必ずしも否定的なものではないが、修飾語の力を借りて否定的なものに傾くタイプ 2 に分けられる。「足を洗う②」は＜対象＞が悪事と結びつきにくく、否定的な意味を表す修飾関係が希薄になったタイプ 1 と、＜対象＞が悪事と結びつかず、否定的な意味を表す修飾関係の復元が困難で、話者の意図により否定的な意味に移行するタイプ 2 に分けられる。

図 1 では、悪事との結びつきが強い＜対象＞と悪事との結びつきが弱い＜対象＞が 1 つのベクトルの端と端に位置する。強弱の判断基準は「足を洗う」の意味分類によって異なる。「足を洗う①」は社会的評価に基づき判断される。社会的評価により悪事との結びつきが強いと判断される場合、＜対象＞の定着度が高い（タイプ 1）。結びつきが弱い、否定的な意味をもつ修飾語に修飾されて否定的な意味へ移行する場合、＜対象＞の定着度が低い（タイプ 2）。一方、「足を洗う②」は心理的評価に基づき判断される。話し手の意図した内容がより簡単に復元できる場合、＜対象＞の定着度が高い（タイプ 1）。話し手の意図した内容を復元するのが困難な場合、＜対象＞の定着度が低い（タイプ 2）。

言語内的な要素から解釈すると、社会的評価はともかくとして、心理的にきっぱりと離

りたいという話者の意識が強い時、「足を洗う②」にもそれなりの合理性があるということである。その結果、最初は修飾語に依存しつつ特定の文脈のみで起こった変化が、徐々にスケールを広げて全般的な変化になっていったであろう。

意味変化の方向性は様々であり、そこから一般性を見出すのは難しいが、「足を洗う」という表現に関して言えば、この言葉は、ある限定された特殊な意味・用法から一般的な意味・用法に広がっていく方向性を見せる。限定された特殊な意味とは、もともと、娼妓など特殊な仕事に使用され、好ましくないという価値判断を含んでいたことを指す。それが、現在、好ましいという価値判断を含む仕事にも使用できるようになった。

この変化は、あるとき突然、言語社会の全体にわたって発生するわけではない。やはり、最初是一部の話し手が新しい用法を導入し、徐々にほかの話し手にそれが広がっていったのであろう。たとえば、前掲（21）は島崎藤村による用例であるが、同じく島崎藤村によるほかの用例が『日本国語大辞典第2版』から見つかった。「何時（いつ）まで政界に泳いで居る積りは無いのです。一日も早く足を洗ひたいと」（『破戒』1906）とあり、これが「足を洗う②」の代表例である。島崎藤村によるこの2例は出現年代もかなり近い。島崎藤村はこの「一部の話し手」（この場合は書き手である）と言えよう。一部の話し手が新しい用法を広げたというのは、言語外的な要素による言語変化のプロセスである。

もう1つの言語外的な要素は社会的側面から考えなければならない。どのような仕事であってもよいことばかりというわけではない。たとえそれが好きな仕事であっても、いつの間にかいやになってしまうことがある。5.3.2に見てきたように、「足を洗う②」は政界・芸能界・スポーツ界などに頻繁に使用される傾向がある。新聞記事データベースはこういった分野の記事に集中しがちなため、ここでは用例数の多寡は問題にせず、前後の文脈にどのような共通性が見られるかということを考えてみたい。

まず、これらの仕事はヤクザや強盗とは正反対で、華やかな仕事である。給与が高く、社会になんらかの貢献、あるいは影響を与える。しかし、華やかな仕事だからこそ世間に注目され、ちょっとしたミスで世間からバッシングを受けることもある。こういう仕事に携わる人たちはストレスもたまる。給与が高いとはいえ、それなりに仕事のペースも早く、自分の家族や趣味などを犠牲にする覚悟も必要である。冒頭に言及したように、慣用句は社会や文化と深く関わっている。「足を洗う②」という用法は、現在私たちが置かれた社会的状況を背景にして生じてきたものであると思われる。

5.6 本章のまとめ

用例分析から明らかになったことを次にまとめる。

第一に、この慣用句について、悪事やよくない仕事をやめる意味で用いられる用法を「足を洗う①」、悪事とは言えない、ただ現在の職業をやめる意味で用いられる用法を「足を洗

う②」と区別するならば、現代日本語においては、およそ 3 例に 1 例が「足を洗う②」の用法で用いられることが分かった。

第二に、「足を洗う①」は暴力団・やくざと共起することが最も多く、泥棒・強盗・スリ、ギャンブル類の用語がそれに次ぐ。「足を洗う②」は政治と共起することが最も多く、芸能界、スポーツ関係の用語がそれに次ぐ。なお、＜対象＞に当たる要素の度数順位は表 3 のとおりである（上位と下位それぞれ一部のみ示す）。

表 3 ＜対象＞に当たる要素の度数順位

■「足を洗う」①	■「足を洗う」②
暴力団・やくざ (139)	政治 (25)
強盗・スリ (38)	芸能界 (16)
ギャンブル (19)	スポーツ界 (14)
総会屋 (9)	株 (9)
売春・性産業 (8)	ビジネス・投資 (6)
暴走族 (7)	サラリーマン (4)
麻薬 (5)	農業 (4)
⋮	⋮
愛人暮らし (1)	稲作 (1)
アウトローの世界 (1)	飲酒後のラーメン (1)
討ち死に族 (1)	カード (1)
お酒一辺倒 (1)	介護 (1)
財政難 (1)	競走馬の生産 (1)
精神の弛み (1)	土 (1)
タバコ (1)	ヒマラヤ (1)
遊興、放蕩 (1)	港 (1)

第三に、「足を洗う②」の成立は、この表現そのものにある合理性という言語内的な要素、及び使用者属性の変化や社会的評価という客観的判断から話者の心理的評価という主観的判断へと判断基準が移行するという言語外的な要素に起因する。

第6章 慣用句の意味縮小

6.1 はじめに

本章では、意味縮小の事例として慣用句「まんじりともせず」を取り上げる。そのために、まずこの慣用句の構成要素「まんじり」に着目する。現代語において、「まんじり」は通常、(1)のように用いられる。

- (1) それは1時間ほど続いただろうか。そのうち、何事もなかったかのように、夫はベッドに滑り込み、眠りに落ちた。一体夫になにがあつたのか？こっちは眠れなくなってしまう、そのまま、まんじりともしないで夜を明かしたのだった。(朝日2014/10/16 夕刊)

(1)の「まんじり」は「ちょっと眠るさま」を表し、打消しの語を伴うことにより、「少しも眠らない」という慣用句としての意味を表すようになる。

ところが、『日本国語大辞典第2版』⁶²を調べ、「まんじり」の初期の例を見てみると、次のようなものが見つかる。

- (2) どうでまんじりと泣かしては下さるまい。(並木正三 1770『歌舞伎・桑名屋徳蔵入船物語』)
- (3) もう帰るか、もう帰るか、と待つ間を独兀然(マンジリ)としてゐる。(尾崎紅葉 1896『多情多恨』)

この2例において「まんじり」は肯定形式の動詞⁶³と結びつき、「ちょっと眠るさま」と

⁶² 同辞典(小学館、2001年12月20日第2版第12巻第1刷)はこの言葉について、

『副』(多く「と」を伴って用いる)①ちょっと眠るさまを表わす語。普通「まんじりともしない」などの形で打消を伴って用い、少しも眠らないことを強調する。(用例略)②ある行為を思う存分に、あるいはじっくりとするさまを表わす語。じっと。まじまじ。(用例略)③落ち着きなく何も手につかないでいるさまを表わす語。(用例略)

というように、3つの意味をあげて説明する。

⁶³ (2)の文末に打消しの推量助動詞「まい」が現れるが、これは文全体「まんじりと泣かして下さる」という相手の行為に対する打消しの推量であり、「まんじり」と結びつくのは肯定形式の「泣かして下さる」ということに留意する必要がある。調べたところ、(2)はこの意味に使用される最古の用例である。「まんじり」が「じっと」と意味的に結びつく萌芽は近世においてすでに見られるといえよう。ただし、同辞典が引用した、同様の意味として使用されるほかの2例やコーパスから検索した用例などは、明治以降のものであること、特に、明治期に入ると、この意味に使用される場合、「見る」、「見つめる」、「見守る」といった見る動作との共起が最も多いことなどをふまえると、江戸期に見られるこの1例は、この用法における典型的なものではないことが推察されよう。

いう意味として見受けられない。同辞典の解釈によると、(2)は「ある行為を思う存分に、あるいはじっくりとするさま」、(3)は「落ち着きなく何も手につかないでいるさま」を表すとされる。

近世・近代において、「まんじり」は必ずしも打消しの語を伴わなかったことがうかがわれる。特に近代において、肯定と結びつき、(2)のように使用される例が多く見られる。しかし、現代語の用例を調査すると、(1)のように「まんじりともせず」という慣用句の形で使用されるものが多く、(2)、(3)のように肯定形式の動詞と結びつくものがほとんど見当たらない。

「まんじり」が現代語と異なる用法を持った語であったことは、これまでの先行研究にはまだ指摘されていない。ただし、関連する研究として中里(2002)があげられる。中里は、オノマトペの多義性と意味変化を分析するために、「まじまじ」を例として取り上げ、その多義が派生しさらに解消されていく過程を考察し、その過程において、「まんじり」がどのように関わったのかを明らかにしている。また、すでに江戸時代に、「まんじりとも…(打消し)」という用法が成立していた可能性があることも指摘されている。ただし、考察の中心は「まじまじ」という語にあり、「まんじり」について、若干の用例は取り上げられたものの、その意味変化に関する十分な考察はなされていない。

先行研究をふまえると、「まんじり」の意味変遷も「まじまじ」と同様の過程を経たと考えられる。つまり、類義語「まじまじ」と意味を分担することにより、もともと派生した多義が解消されたと考えられる。本章では、「まじまじ」との関係を含め、「まんじり」の意味変遷の過程を考察したい。これは「まんじり」そのものの語史的な調査だけにとどまらず、慣用句「まんじりともせず」の意味・用法、そしてその成立とも関連する問題である。その成立過程において、類義語間での意味分担が起こると考えられ、その意味で類義語間の意味変遷を考察する意義がある。

本章では、用例採集のために、各種コーパスを利用する。それに先立ち、まず調査の対象となる語を明確にしなければならない。国語辞書の記述によると、「まんじり」は通常、打消しの語を伴って用いるとされる。また、慣用句辞典を参照すると、「まんじりともせず」を見出し項目として立てるものもあれば、「まんじりもしない」を見出し項目として立てるものもある。辞書に掲載された用例には、「まんじりともせず」と「まんじりもしない」の両方が現れ、さらにその変種である「まんじりもしなかった」(過去)や「まんじりともできない」(可能)などがある。

用例における「まんじり」と結びつく形式の多様性を概観するために、調査に際しては、「まんじり」(または「マンジリ」)のみを検索語とする。そこから収集した用例に対し、「まんじり」と結びつく動詞が肯定形式と否定形式のどちらで現れるかによって分類した上で、意味による分類をも試みる。なお、前掲した(3)のように漢字表記されている例もまれにはあるかもしれない。しかし、そういう場合、ルビがなければ、読みが特定できないため、漢字表記は検索語から除いた。

本章の内容は次のとおりである。まず、第 2 節で「まんじり」が（直接的に、あるいは間接的に）結びつく動詞の形式とそうした結びつきの表す意味という 2 つの面から現代語における用例を分類し、第 3 節で「まんじり」の歴史的変遷を明らかにする。次いで、第 4 節で「まじまじ」との関係を視野に入れ、「まんじり」の意味変遷の背景と慣用句「まんじりともせず」の成立過程を考察する。それから、第 5 節で本章の考察結果をまとめる。

6.2 現代語における用例

「まんじり」の歴史について見ていく前に、議論の前提として、現代語の「まんじり」の用法をおさえておきたい。「まんじり」は現代語においては、慣用句のなかでしか使われない言葉であり、単語としての意味を問うことが難しく、品詞性も問いにくいと思われる。そのため、現代語における「まんじり」の意味・用法を考察したものはまだ見られない。ただし、慣用句「まんじりともせず」の使用に関する意識調査が文化庁によって行われた。その結果によると、「まんじりともせず」という慣用句について、半数以上が（ア）「じっと動かないで」の意味として捉えていることが分かった。「まんじりともせず」がどちらの意味を表すと思うかという問いに対して、以下の結果が得られた（数値はパーセンテージを示す）。

まんじりともせず 【例文：まんじりともせずその時間を過ごした。】

- （ア）じっと動かないで51.5
- （イ）眠らないで28.7
- （ウ）（ア）と（イ）の両方.....3.4
- （エ）（ア）や（イ）とは全く別の意味4.6
- （オ）分からない..... 11.7

文化庁「平成 25 年度『国語に関する世論調査』の結果の概要」より

（イ）「眠らない」というのは、「眠ろうと思ったが、眠れない」という意味で、基本的には動かないでいるため、（ア）と（イ）の意味は排他的な関係ではなく、重なっている部分がある。それに、例文には「夜」ではなく、「その時間」とだけあり、わざと（ア）に誘導するように問題が作られていると言わざるを得ない。したがって、実際の用例ではどうなっているのかを確認する必要がある。

一方、現代日本語における「まんじり」の意味について、種々の国語辞典の解説はかなりの一致を示すのであるが、必ずしもそうでない点も見られる。新村出編『広辞苑』第 6 版（岩波書店、2008 年 1 月 11 日第 1 刷、机上版）と松村明編『大辞林』第 3 版（三省堂編修所、2006 年 10 月 27 日第 1 刷）は、①ちょっと眠るさま、②じっと（見つめるさま）という二義を挙げ、上に挙げた『日本国語大辞典第 2 版』の①、②とほぼ同じ説明である。

これと大同小異の説明をするものに、山田忠雄ほか編『新明解国語辞典』第7版⁶⁴（三省堂、2012年1月10日第1刷）がある。

①の意味のみを取り上げるものに、西尾実ほか編『岩波国語辞典』第7版（岩波書店、2009年11月20日第1刷）、山田俊雄ほか編『新潮国語辞典—現代語・古語』第2版（新潮社、1995年11月10日第1刷）、金田一春彦ほか編『学研国語大辞典』第2版（学習研究社、1988年2月10日第1刷）、北原保雄編『明鏡国語辞典』第2版（大修館書店、2010年12月1日第1刷）などがある。これらはいずれも説明文に「ちょっと」（または「とろとろと」）、「眠る」、「さま」（または「様子」）という語を含むところが共通している。また、「普通打ち消しを伴って使う」とのように注を加えるものもある。これとは多少とも異なる説明をする辞典として次のようなものがある。

まんじり（副） まんじりともしない句（ひと晩じゅう）少しもねむらない。

見坊豪紀ほか編『三省堂国語辞典』第7版（三省堂、2014年1月10日第1刷）

同書には「まんじり」に対する解説は見られないが、その下位項目として「まんじりともしない」を立てて解説する。「（ひと晩じゅう）」という時間に注目した補足説明を加えており、ほかの辞典が多く、「少しも眠らない」との解釈のみをしているなかで異質である。

ところで、『日本国語大辞典第2版』はこの言葉の意味を3つに分けて説明するが、この解釈の仕方はほかの国語辞典においてはあまり見られなかった⁶⁵。

では、実際の用例において、「まんじり」はどのような形で現れ、どのような意味を表しているのだろうか。以下、新聞記事データベースおよびBCCWJから現代語における「まんじり」の用例を採集し、結びつく動詞の形式とそうした結びつきの表す意味という2つの面から整理する。

新聞記事データベースでは、メタ言語的な用例や、著作権の関係で内容が表示できない記事を除き、用例の異なり数を数えた結果、朝日新聞128件の記事から127例、毎日新聞109件の記事から104例、読売新聞95件の記事から95例が得られた⁶⁶。そして、BCCWJでは、30例が得られ、用例総数は全部で356例となる。

このなかで、結びつく動詞が肯定形式で現れたのは、次の1例のみである。

⁶⁴ 同辞典の解釈は以下のとおりである。

まんじり③（副） —と①「ひと寝入りすることの意」〔否定表現と呼応して〕一睡もしない様子を表わす。「心配のあまり、彼はその晩—ともぐできなかった（しなかった）」②大きく目を見開いて対象を見つめる様子。「思わず—と相手の顔を見た」

⁶⁵ 調査範囲内では、松村明監修・小学館大辞泉編集部編『大辞泉』第2版下巻（小学館、2012年11月7日第1刷）及び小野正弘編『擬音語・擬態語4500 日本語オノマトペ辞典』（小学館、2007年10月31日初版第1刷）が『日本国語大辞典第2版』の解釈を踏襲しているようである。

⁶⁶ メタ言語的な用例とは、「まんじり」という語の意味・用法を問題にする用例である。たとえば、「文化庁の国語世論調査で、『世間ずれ』や『まんじりともせず』などの慣用句が本来とは違う意味で使われていることが明らかになった。」（朝日2014/09/25朝刊）のような例で、朝日新聞に1件、毎日新聞に1件、読売新聞に5件、あわせて7件の記事があった。また、読売新聞には、著作権の関係で内容が表示できない例が19件あり、それらも除外した。

- (4) 合併による在任特例の期間満了を受け、衆院選投開票日の 11 日に告示される大仙市議選。新定数は 146 から大幅に減って 30 となるが、現職ら総勢 69 人が名乗りを上げた。(中略) しかし選挙日程を決めた後に衆議院が解散、公示以降は候補予定者の活動が制限されてきた。前哨戦もなく、候補予定者たちはまんじりと告示の日を待っている。(読売 2005/09/11 東京朝刊)

『日本国語大辞典第 2 版』の解釈に照らし合わせてみると、ここの「まんじり」は「③ 落着きなく何も手につかないでいるさま」の意味に最も近い。

上記 356 例における「まんじり」の結びつく形式は、表 1 の示したとおりである。

表 1 現代日本語における「まんじり」の結びつく形式

まんじりー	朝日	毎日	読売	BCCWJ	合計
ともしない(で)	18	17	19	5	59
ともしなかった	8	9	2	6	25
ともしませんでした	1	1	0	0	2
ともせず(に)	87	61	58	16	222
ともせぬ	3	1	1	1	6
ともできず	1	1	1	0	3
ともできない／出来ない	4	0	4	0	8
ともできなかった／出来なかった	2	7	7	2	18
ともできぬ	0	1	1	0	2
ともできませんでした／出来ませんでした	0	1	1	0	2
そのほか ⁶⁷ (肯定 1 例、否定 8 例)	3	5	1	0	9
合計	127	104	95	30	356

表 1 から見ると、否定形式の動詞との結びつきは形態上にバリエーションがあり、連用修飾語として「まんじりともせず(に)」の形で使うことが最も多く、連体修飾語として「まんじりともしない」や「まんじりともできない」の形で使うこともある。一方、述語として「まんじりともしなかった」や「まんじりともできなかった」の形で使うことが少ない。

冒頭で見たように、「まんじりともせず」は「少しも眠らない」という慣用句としての意味を表すとされる。しかし、実際の用例においては、必ずしもそうではなく、『国語世論調査』が指摘するような「誤用」も散見するのである。具体的には以下のような用例があった。

⁶⁷ そのほかは、「まんじりとできない夜」(朝日 2000/01/31 朝刊)、「まんじりと何もせず」(朝日新聞デジタル 2011/06/17)、「まんじりと寝られなかった」(朝日 2015/07/21 朝刊)、「まんじりともして^{ママ}いなかった」(毎日 1989/06/13 東京夕刊)、「まんじりともしない日々」(毎日 1989/07/01 東京夕刊)、「まんじりともして^{ママ}いられなかった」(毎日 1997/12/04 地方版/栃木)、「まんじりともしらんにか^{ママ}ったから」(毎日 1998/11/10 地方版/福島)、「まんじりとも出来ねうち」(毎日 1999/11/09 地方版/福島)、及び前掲した例 (4)「まんじりと告示の日を待っている」(読売 2005/09/11 東京朝刊) の 9 例である。

- (5) 私の講演の後、平和創作劇「I PRAY」が上演されました。(中略) 4歳から高校生まで、30人ほどの子どもや若者が真剣に演じていました。私はまんじりともせず、彼らの演技を注視し続けました。(朝日 2015/02/14 朝刊)
- (6) 長女の通う幼稚園の運動会。開始 1 時間以上前から、お父さんたちがわが子の姿を好位置でビデオに収めようと、園庭に三脚を立てて場所取り▼まんじりともせずにビデオを回す様子は、まるで事件現場か記者会見場のよう。(毎日 1997/12/02 地方版/大阪)
- (7) 一方、現場周辺では、照りつける日差しの中、同製錬所の従業員ら約三十人がまんじりともせず捜査員らの動きを見守っていた。ある男性従業員は「早く原因が分かれば良いが、それほど簡単ではないのでは」と言い、別の従業員も「当分、仕事が手に着きそうにない」と不安そうに話した。(読売 2002/07/27 大阪朝刊)
- (8) 解放が決まり次第、外務省からの連絡を受けることになっている△△広報室長は、6日午前 1 時になっても、都内の自宅で、テレビのニュースにまんじりともせず見入っていた。(朝日 1990/11/06 朝刊)
- (9) 岡崎城を望む風光明媚(めいび)な土地に居住して 40 年余りですが、かつてない豪雨が 8 月 29 日未明にありました。(中略) 暗い中、外に出れば危険が伴うので、まんじりともせずテレビの予報にかじりついていました。(毎日 2008/09/06 中部朝刊)
- (10) 昨年末ニューヨーク・タイムズスクエアの映画館でスパイク・リー監督の「マルコム X」を見た。深夜 11 時から 3 時間以上の長編だったが、館内を埋めたほぼ満員の観客はまんじりともせず画面を見つめていた。(読売 1993/02/09 東京夕刊)

「少しも眠らない」の意味を表すものを①、「じっと(見つめる)」の意味を表すものを②と表記する⁶⁸ならば、(5)～(10)は 3 例ずつ②と①～②に対応する。「①～②」というのは、少なくとも筆者の感覚では分類に困難さを覚え、単独の意味カテゴリーに分類できなかったものである。

まず、文末の動詞が表す内容や該当箇所の直前に現れる時間を示す表現からみれば、(5)～(7)の「まんじりともせず」は「じっと」の意味として使用され、本来「まんじり(と)」の形で使うべきであろう。

また、(8)～(10)の「まんじり」は、「本来寝るべき時間を眠らないで過ごす」という意味では①として捉えられるが、しかし、その一方で、時間の幅がひと晩じゅうに至っておらず、さらに「見入る」、「かじりつく」、「見つめる」との動詞から、「じっと」の意味を表す可能性も捨てきれない。したがって、①の意味と②の意味の双方を担っている可能性

⁶⁸ 前述のように、『日本国語大辞典第 2 版』が取り上げる意味③について言及した国語辞典はあまり多くない。それに加え、同辞典が掲載した意味③の用例は、漢字表記「兀然」を「まんじり」と読ませたやや特殊なものと感じられるため、ここでは、意味分類にあたっては、意味①と意味②のみを取り上げることにする。

があると判断した。ただし、このような誤用例は用例総数に占める割合が非常に低い。以下、各種コーパスにおける意味別の用例数と割合を表 2 に示す。

表 2 意味による用例の分類

	朝日	毎日	読売	BCCWJ	合計 (比率)
①	105	99	87	23	314 (88.5%)
②	14	3	4	7	28 (7.9%)
①～②	7	2	3	0	12 (3.4%)
そのほか ⁶⁹	1	0	0	0	1 (0.3%)
合計	127	104	94	30	355 (100%)

否定形式の動詞と結びつく用例を分類したところ、およそ 9 割が正用されることが分かった。では、実例が書き手によって正しく表現されるにもかかわらず、その意味が読み手に誤解される理由は何であろうか。

この点について考えるとき、まず新聞記事は特定の人によって執筆されることに多少の注意が必要である。また、新聞の紙面に掲載された記事に対しては、文章表現や用字用語の正確性を審査する作業があり、ある程度の誤用を防ぐことができる。

ところが、読み手は不特定の人であり、書かれた言葉を正確に理解できるかどうかは個人個人のリテラシーによる。実際、多くの用例においては、かりに「まんじりともせず」を「じっと（見つめる）」の意味として理解しても文全体の意味がまったく通じないわけではない。言い換えれば、「じっと（見つめる）」の意味に間違えて理解される文脈が整っている。さらに、文脈から離れて考えてみると、否定形式の「まんじりともせず」が、本来肯定形式の「まんじり」の意味に誤解されるのは、「瞬きもせず」、「瞬きもしない」など⁷⁰の使い方からの類推が影響しているとも考えられる。

6.3 「まんじり」の歴史的変遷

6.3.1 近世までの用例

まず、『大系本文データベース』を用いて、近世までの用例を観察する。調査の結果、『日本古典文学』と『嚟本』からそれぞれ 2 例ずつ見付き、あわせて 4 例となり、江戸以降のものに限られる（前期に 1 例、後期に 3 例）。

⁶⁹ そのほかの用例は「昨夜はまんじりともせずよく眠る」（朝日 2014/09/26 朝刊）という 1 例である。これは、同新聞が「まんじりともせず」に関する国語世論調査の結果を取り上げた翌日に投稿された川柳である。投稿者はまさに、その誤用を念頭に置いて使用している。ただし、これは川柳という文芸作品に観察された特殊な例ということに留意する必要があるゆえ、そのほかの用例として取り扱った。

⁷⁰ これらの表現は、否定形式で「じっと（見つめる）」という肯定の意味を表す。ただし、これはあくまで筆者の推測にとどまり、このような類推が実際、機能しているかどうかについてはまだ検証していない。

- (11) 詞 コリャうん^{たち}達。まだ市五郎三藏が舟は見えいろ。心^{もと}許なかばい。心^{たま}魂切りや夜^{ざと}敏く成って。身だまんじりともせない。首^{しゅび}尾^びよからうば筑^{ちく}前^{ぜん}さなへ此の船^{まは}廻し。(近松門左衛門 1718『博多小女郎波枕』)
- (12) 客 けぶにむせながら、エヘン／＼。ゆふべからまんじりともしねへから。ト又ねぶる(山東京伝 1790『傾城買四十八手』)
- (13) あか^{ちやうけへ}手めへ、ゆふべハ女郎買^{ちやうけへ}にいつて仕合だ。うちでハ大さわぎをやらかしたハくろ^{くろ}なげに あか^{あか}どろぼうがはいつたと、となりうらのぶちめが、ほへ出しやアがつて、おいらもしろめも、けさまでほへつゞけで、まんじりともしねへと、はなしながらろじの戸をあけて、サアはいりや。(十返舎一九 1816 頃『落咄熟志柿』)
- (14) まことに夢ごゝちにて、しつかりふんどしにゆひつけ、ひよつと追^{おひ}はぎに取られハしまいかと用心(十二才)して、そう／＼とび帰り、供^{とも}べやにねたところが、ひよつとなかまにしられたら取られハしまいかと、夜^{よる}もしつかりだいてねて、まんじりともせず。(瓢亭百成 1813『百生瓢』)

この4例はいずれも「まんじり+否定」の形で現れ、「少しも眠らない」という意味で使われることが分かる。今回の調査範囲では、例(11) 近松門左衛門(1718)『博多小女郎波枕』に見られるものが最も早い。

これらの用例のほかに、辞書を頼りに探した次の1例⁷¹もあった。

- (15) 年^{とし}寄っても女^{をんな}の留守^{るす}、寝^ねても夜^よの目^めをまんじりとも、明^{あけ}六つ五つ四つに過^すぐれば、(近松門左衛門 1719『傾城島原蛙合戦』)

(15)の原文を確かめると、後文からも「まんじり」と結びつく否定形式の動詞が見当たらない。これは、肯定表現で「眠らない」という意味を表したものとも、「まんじりともせず」を言いさしたものと解釈できる。したがって、近松全集や、近松と同時期あるいはそれ以前の歌舞伎の台帳、『大系本文データベース』未収録の滑稽本、人情本にも手を広げて調査する必要がある。本研究では、その必要性に言及するにとどめておき、詳細は今後の課題としたい。

ここに挙げた例だけを見ると、「まんじり+否定」の形式で「すこしも眠らない」の意味を表したものが多く、江戸後期から否定との共起のほうが多くなったことが示唆される。中里(2002)では、江戸時代において「まんじりとも…(打消し)」という用法がすでに成立したことが述べられている⁷²。本調査でも同様の結果が得られ、さらに成立時期を江戸後

⁷¹ 『日本国語大辞典第2版』などに引用される例である。

⁷² 中里では、江戸時代において、前掲した例(12)の1例しか見つからず、この言葉の成立時期についてはあくまで推測の段階にとどまっているが、今回はコーパスを利用することで、より多くの用例を収集することができ、中里の推測が裏付けられた。また『日葡辞書』(1603-1604)が「まんじり」を見出し項目として立てていないことから、おそらく「まんじり」は江戸時代以前にはまだ成立していなかったと考え

期に特定することができた。

6.3.2 近代の用例

次いで、小説コーパスを用いて、近代の用例を調査する。表3は『青空文庫』における「まんじり」の使用状況をまとめたものである（1860年代から1910年代生まれの作家の作品を対象とした）。

表3 『青空文庫』における「まんじり+肯定/否定」

意味（用例総数）	結びつく形式	用例数
眠らない（25）	まんじり+肯定	0
	まんじり+否定	25
じっと（見つめる）（10）	まんじり+肯定	6
	まんじり+否定	4

「眠らない」の意味を表すときは、もっぱら「まんじり+否定」の形式で現れることが明らかにされた。これは、そのまま江戸後期の用法を踏襲したと見られる。一方で、「じっと（見つめる）」の意味を表す場合、例（16）のように「まんじり+肯定」の形式で現れるものもあれば、例（17）のように「まんじり+否定」の形式で現れるものもある。

（16）乳の香りする息を吐き吐き、春の光の下の海といふ晴れがましい極彩の魔女の衣裳を、不思議な様にマンジリ目を開いて見成つてゐたのである……（福士幸次郎 1929『地方主義篇』）

（17）いきなり、脇へ腰をかけられた前川も、二人の連れも妖精じみて、美しい少女へ、マンジリともしない眼を向けていた。（菊池寛作品の初出年代不明『貞操問答』）

つまり、この時期の文学作品においては、「まんじり」の本来の用法を引き継ぎ、否定形式で正しく使用した例が多いが、それと同時に、肯定形式に新しい意味が生まれた（例16）。その結果、本来の否定形式をもって新しい意味を表わす（例17）、いわゆる「誤用」が見え始めた。総じていえば、多義が発生したことにより、形式と意味の対応に多様性が見られる時期であった。特に、（17）のような使い方は今日にまで生き残っている。

6.4 「まじまじ」との関係

では、なぜ「まんじり」が「まんじりともせず」の形になって定着し、句全体で「すこしも眠らない」の意味になったのであろうか。それは「まじまじ」の変化と関係があると

られよう。

考えられる。「まじまじ」という言葉は、『日葡辞書』（1603-1604）に取り上げられることから、すでに江戸以前から見られた形式であると言えよう。『邦訳日葡辞書』の「マジマジトシテ」（まじまじとして）の項には次のように書いてある。

副詞。何一つとして心を配ることもなく、非常にのんびりとしていること。また、眠ろうとして眠れないで臥していること。

これを見ると、「まじまじとして」は当時、「じっと（見つめる）」という意味に関わっていないことが分かる。しかし、現代日本語において、この言葉はもっぱら「じっと（見つめる）」の意味を表すことが朝日新聞記事データベースの用例から分かった⁷³。

中里（2002:269）は近世・近代の文学作品⁷⁴から収集した「まじまじ」の用例を意味によって分類し、「まんじり」と対照させながら「まじまじ」の意味変遷を辿った。表4は中里の調査結果を横書きになおしたものである（例文の出典は省略する）。

表4 中里（2002）による調査結果の再整理

	江戸		明治・大正	
	まじまじ	まんじり	まじまじ	まんじり
A 眠れず	2	0	15	15
B 平然	11	0	4	0
C 見つめる	0	0	46	5
D もじもじ	5	0	24	0

（中里 2002:269、一部変更）

江戸時代において「まじまじ」はまだ「見つめる」の意味に用いられていないことが用例によって裏付けられた。そして「平然」という意味に偏っていることも用例によって明らかにされた。前述のように、江戸時代における「まんじり」は主に打消しの表現を伴い、「すこしも眠らないさま」を表すとされてきた。すなわち、近世において「まんじり」と「まじまじ」はほぼ意味を分担している状況であった。しかし、近代に入ると、両者に重なる意味領域（中里の言う意味Aと意味C）が見られた。

中里は、「まんじり」が「A 眠れず」の意味に偏っていくことで、「まじまじ」は「C みつ

⁷³ 同新聞の用例を調査したところ、301件の記事から307例が得られた。不適切な用例1例、メタ言語的な用例3例、さらに重複した用例2例は除き、有効な用例の異なり数は全部で301例となる。このうち、「じっと（見つめる）」の意味として使用されるものは292例であった。なお、「まじまじ（と）」は「見つめる」、「眺める」、「見る」、「見入る」、「のぞきこむ」、「観察する」のような見る動作を表す動詞と多く共起することも明らかになった。

⁷⁴ 作品の本文は、明治・大正期は「CD-ROM版新潮文庫明治の文豪」「CD-ROM版新潮文庫大正の文豪」及び「明治文学全集」（筑摩書房）によった。江戸期は、日本古典文学大系（岩波書店）、新日本古典文学大系（岩波書店）、有朋堂文庫によった（中里2002）。なお、これらの意味を表すとき、「まんじり」は肯定形式の動詞と結びつくのか、それとも否定形式の動詞と結びつくのかという問題について、中里の意味分類では特に言及されていない。

める」の意味に偏っていき、多義が解消されていくと論述したうえで、さらに音韻面・形態面と意味内容の結びつきという視点⁷⁵からその原因を解釈している。すなわち、「まじまじ」に対して「まんじり」は撥音が挿入された強調形で、より音象徴性が薄れており、その意味では一般語彙に近付いているため、慣用化した用法も成立しやすいと考えられる。また、語基が共通する一群のオノマトペは語基の共通性により共通する意味を持ちながら、それぞれの語形態に応じて意味を分け持つことがある。そして、その語形態による意味の分担が多義性の解消に関連している（中里 2002:272-273）。しかし、中里（2002）では全体の用例数の比較にとどまり、意味の具体的な移行過程は示されていない。

まず、両者の用例数を量的に比べてみると、表 5 に示すように、全体として「まじまじ」のほうが多い。

表 5 「まじまじ」と「まんじり」の用例数比較

各種データ	まじまじ	まんじり
中里による調査（江戸）	18	0
中里による調査（明治・大正）	89	20
『青空文庫』（1860 年代～1910 年代生まれの作家の作品）	321	35
朝日新聞記事データベース	301	127

次いで、『青空文庫』から得たデータに対し、具体的な意味の移行過程を観察する。表 6 に示すのは、『青空文庫』における 1860 年代生まれの作家の作品から 1910 年代生まれの作家の作品までに見られる「眠らない」の意味に関わる「まんじり」（「まんじり＋否定」）と「まじまじ」⁷⁶の用例推移である（数値は、同年代生まれの作家の作品から検索した用例総数に占める割合である。なお、一は同時代生まれの作家の作品から用例が見られないこと、0 は作品から用例が見られるが、該当の意味として使用される用例がないことをそれぞれ示す）。

表 6 『青空文庫』における用例推移

	まんじり	まじまじ
1860 年代	100%	50.0%
1870 年代	37.5%	5.2%
1880 年代	66.7%	0
1890 年代	83.3%	6.3%
1900 年代	100%	2.0%
1910 年代	—	0

⁷⁵ 「まじまじ」は「まじ」の疊語であるのに対し、「まんじり」は「ん」が「まじ」の間に挟まれ、「り」が接尾で付く形である。両者は意味的には関連しているが、形態論的に比較対象になるかどうか、まだ検討の余地がある。

⁷⁶ 『青空文庫』から検索した「まじまじ」の用例数も同様に翻訳作品を除外した結果である。

表 6 に示されるように、1860 年代生まれの作家の作品では、「まんじり」はもっぱら「眠れない」の意味を表しており、「まじまじ」は半数の用例が「眠れない」の意味を表している。2 つの表現に重なる意味領域が見られる。

しかし、1870～1880 年代生まれの作家の作品を見ると、「まんじり」の使用に多様性が見られた結果、「眠れない」の意味を表す用例の割合がいったん下降したあと、再び上昇する傾向を見せた。一方で、「まじまじ」は意味の多義性（表 4 の「C 見つめる」）が生じた結果、「眠れない」の意味を表す用例の割合が急低下した。1880 年代生まれの作家の作品を見ると、「まじまじ」はもっぱら「眠れない」以外の意味を表していることが分かった。

1890 年代以降生まれの作家の作品においては、「眠れない」という意味を表す「まじまじ」の用例の割合が依然として低く、さらに低くなる傾向にあった。一方で、「眠れない」という意味に関わる「まんじり」の用例の割合が多くなりつつある。つまり、「まんじり」が「眠れない」という意味を表すことによって、もともと「眠れない」という意味を表す「まじまじ」は押しやられ、主に「眠れない」以外の意味⁷⁷を表す表現へと変化していったと考えられる。

「まじまじ」は「まんじり」より早く成立した言葉である。初期の「まじまじ」は「眠れない」の意味をも表していたが、形態で関連する「まんじり」の出現によって、その意味が「まんじり」に移行した。その後、否定形式と結びつく「まんじり」が定着し、「まじまじ」の意味の一部を受け持っていく形で現在まで残っている。つまり、「まんじりともせず」という慣用句の成立は、類義語「まじまじ」の意味の一部を分け持つことに関連性がある。

6.5 本章のまとめ

以上、各種コーパスからの用例を手掛かりにして、「まんじり」がどのような通時的変化を経てきたのか、「まじまじ」との関係も含めて考察した。本章で分かったことを以下のよう

第一に、「まんじり」は近世前期から近松門左衛門による 2 例が見られ、「まんじりともせない」と「まんじりとも」で現れ、「すこしも眠れない」という意味を表していた。後者が前者を言いさしたものと解釈できるため、さらなる調査が必要である。近世後期において「まんじり+否定」の形式が成立した。一方で、「まんじり+肯定」の形式は「じっと」と意味的に結びつく萌芽が見られた。

第二に、近代に入ると、「まんじり」の用法に多様性が見え始めた。否定形式の動詞と結びつき、「少しも眠れない」という意味を強調する用法が主流であり、近世の用法をそのまま受け継いだと見られる。一方で、肯定形式で使われる新しい用法が多くなり、「じっと

⁷⁷ 「眠れない」以外の意味とは、中里（2002）の言う「C 見つめる」、「D もじもじ」のことを指す。

（見つめる）」の意味を表していた。その結果、本来の否定形式で新しい意味を表す用例が見え始め、用法が一定しない時期があった。その後、徐々に否定形式の動詞と結びつき、「眠れない」の意味を表す用法が再び目立つようになった。

第三に、現代日本語では、「まんじり」はもっぱら「まんじりともせず」や「まんじりもしない」といった否定形式で使用されている。ところが、用例における「まんじり＋否定」の意味は必ずしも「少しも眠らない」という意味を表しているとは限らない。「まんじりともせず」を用いて、本来その肯定形式が表すはずだった「じっと（見つめる）」の意味を表す用例も見られる。

第四に、「まんじり」の意味・用法については「まじまじ」の意味と考え合わせる必要がある。「まじまじ」は「まんじり」と共通した語基を持つが、その成立は「まんじり」より早い。初期の「まじまじ」は「眠れない」、「平然としている」の意味を表していたが、「まんじり」が現れるとともに、「眠れない」という一部の意味を「まんじり＋否定」に移行させた。意味の移行プロセスに多様性が見られる時期を除いてみると、「眠れない」の意味を表す「まじまじ」の減少に伴う形で、「眠れない」の意味に関わる「まんじり」が増加しており、「まんじり」と「まじまじ」の用法変化に相互関係が見られる。

「まんじり」の意味変遷の過程を、コーパスによって跡付けたところ、その過程で、「まじまじ」の意味の一部を受け持ったり、新しい意味が生まれて表現形式と意味の対応に多様性が見られたりと、意味や用法を変化させていることが分かった。そして、「まじまじ」との意味分担を有しつつ、打消しの語と結びつき、「まんじりともせず」の形で定着していく方向に進んできたことも分かった。これは、ある言葉は特定の意味内容と表現形式に多用され、語の本来の意味よりも慣用句の構成要素として限定されていくためである、と考えられる。

第7章 日本語教育への応用に向けた展望

7.1 慣用句研究と日本語教育

事例研究では、3つの慣用句を取り上げ、コーパスから採集した用例を分析することにより、それらの意味・用法を明らかにした。各種コーパスを総合的に通時コーパスとして捉え、意味・用法に通時的変化が見られることを指摘した。類型として、意味の拡大と意味の縮小が考えられる。意味の拡大タイプ（「鳥肌が立つ」と「足を洗う」）は、慣用句の意味・用法が一部の使用者により拡大され、同時にその使用度数も増加し、やがて大勢の人々にも使用されるようになったものである。一方、意味の縮小タイプ（「まんじりともせず」）は、多義性をもつ構成要素が特定の表現形式と意味内容に多用されると同時に、多義性が解消され、慣用句の構成要素として限定されていくものである。また、意味の転移については、第1章に引用した佐々木（2013）と岡田（2014）がある。ただし、慣用句は長い間に決まった意味として使用され、このような意味変化が起こることはまれである。今後、3つの類型に当てはまるほかの慣用句はないか、事例調査を積み重ねていく。

こうしたミクロな調査を通して、コーパスは慣用句の研究にも有効であることが検証された。しかし、コーパスを利用した慣用句の研究はデータの集計だけにとどまるべきではない。コーパスから獲得した情報がどのように利用されるのか、という応用的な問題の解決が大いに期待される。

田野村（2009:22）がコーパスをコロケーションの研究に利用するときに指摘したように、コーパスから得られた情報の用途として、1つには語義の精密な分析・記述のための考察材料として利用できることが挙げられる。2つめは、辞書の編集、外国語の教育・学習、母国語の運用といった実用的な分野で利用できることである。田野村（2009）が提示した2種類の用途はコロケーションに限られたものではなく、慣用句ないし一般語彙にも適用可能である。

では、コーパスを活用した研究はどこまで進んでいるのか。砂川（2010:100）によれば、英語を学習するための辞書では、*Collins Cobuild English Dictionary*、*Longman Dictionary of Contemporary English*、*Oxford Advanced Learner's Dictionary*、*Cambridge International Dictionary of English* など、コーパスを活用した辞書が数多く刊行されている。一方、日本語教育において、コーパスを活用した辞書の研究は緒に就いたばかりであることが指摘される。その原因は、英語に比べ日本語学習者の数は限られており、商業ベースの採算が合わないため、費用と労力の掛かる大規模な辞書の編集はまだ着手されていないという点に求められている。

砂川 (2010:100) は、また、「これまでに刊行された辞書は、初級から中級の学習者を対象としたものがほとんどで、語彙数が極めて限られている。上級・超級レベルの学習者を対象とした辞書がないわけではないが、コロケーションや文型などに特化した特殊な目的を持つものだけで、上に挙げた英語辞書に匹敵する本格的な日本語学習辞書はまだ世に出ていない。また、これまでに刊行された日本語学習辞書にコーパスが利用されているものは存在しない。」と述べている。

日本語教育における慣用句辞書の編集状況に目を向けると、やはりコーパスを利用したものは存在しない。現代日本語における慣用句の数や日本で出版された専門の日本語慣用句辞典の収録数については、すでに第 1 章で整理した。慣用句の数は調査範囲や調査方法により、結果が大きく異なる。これまでに刊行された慣用句辞典を見てみると、1,100 句から 3,700 句までとあり、収録数に大差がつく。母語話者は普段の生活経験から慣用句を自然に習得できるが、外国人学習者にとっては、大量の慣用句をすべて習得するのは不可能なことである。「外国語」の欄を設けて見出しの慣用句が対応する英語・中国語・韓国語を示す辞書もあるが、多くの辞書に関しては、やはり学習者が慣用句を理解・使用しやすくするには、例文の選択や語義の記述において、もっと配慮する必要があると感じられる。

学習者に向けた辞書編集の最近の状況について、砂川 (2010:100-101) は、「最近は、ビジネスのために日本語を使ったり、大学や大学院進学のために日本語を必要としたりする上級・超級レベルの日本語学習者が増えつつある。(中略) このような状況の下で、中・上級レベルの学習者に向けた辞書の編集が急がなければならないことは明らかである。」と指摘する。これまでのところ、学習者に必要な語彙表の作成 (橋本 2008、橋本 2009)、コロケーションの用法記述 (田野村 2009、田野村 2010) や類義語調査の事例研究 (砂川 2010) など、日本語学習辞書編集に役立つ研究としての基礎研究が進められている。また、近年の大規模なコーパスとその活用法が整備されることで、様々な研究成果が世に出ている⁷⁸。今後、コーパスを生かした研究がさらに進んでいき、学習者たちに利便性を提供することが期待される。

そこで、本章では、コーパスから抽出した慣用句に関する情報を慣用句辞典の作成に活用する場合、どのような問題点があるのかを検討し、事例研究の結果をまとめつつ、問題点を整理したい。

⁷⁸ たとえば、中俣尚己『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』(2014 年、くろしお出版) は、BCCWJ を調査したデータをもとに、93 項目の文法コロケーションの使用について、詳細に記述している。数々の面白いデータを記載することで、日本語の文法記述をもっと豊かにすることができるという方向性が示された。

7.2 コーパス利用による慣用句意味記述の有効性

7.2.1 「鳥肌が立つ」がどのような用法として使用されるか

「鳥肌が立つ」の用法について、朝日新聞 30 年分の記事を調査した結果、寒さという本来の用法が全体の 2.5%、恐怖などのネガティブな用法が 17.7%、すばらしさなどのポジティブな用法が 77.5%を占めることが判明した。ところが、BCCWJの用例を調査した結果では、ネガティブな用法の用例数が最も多く、全体の 56.5%を占める。次いで、本来の用法が 21.7%、ポジティブな用法が 19.6%を占めており、新聞記事データベースとは異なる調査結果が示唆された。これに対しては、田野村（2009）が主張するように、辞書記述においては、統計的な厳密さを重視する意味は乏しく、コーパスから得られる情報を適宜参考にするという姿勢でよいのである。

では、それぞれの意味の下位分類に関する情報はどうかであろうか。次に示す表 1 は、朝日新聞における慣用句「鳥肌が立つ」の各種用法の下位分類に位置する用法の度数順位である。

表1 「鳥肌が立つ」はどういう意味によく使用されるか

■ I 本来の用法	■ II ネガティブな用法	■ III ポジティブな用法
47 寒さ	117 恐怖	714 すばらしさ
	96 衝撃	254 感動
	54 嫌悪感	225 喜び
	40 緊張	183 興奮

この度数順位から「鳥肌が立つ」を用いて何を表現する機会が多いかという事実が整理された。しかし、こうした順位が明らかになっても、学習者は上位のものを学び、下位のものを無視すればよいというわけではない。こうした表現をすべて理解した上で、実際に使用するとき、場面によって使う表現を選ぶ必要がある。だからといって、この順位は無意味なわけではない。辞書や日本語教科書の例文を用意する際には、同類の表現なら、使用頻度の高いものを選ぶようにするのが望ましいであろう。

また、新聞には政治、社会、国際などいろいろな面名があるが、「鳥肌が立つ」という慣用句はよく野球やサッカーなどスポーツに関する記事に使用されることが分かった。コーパスからのアプローチで、母語話者の直観に頼ることなく、現実に使われている言語資料からの実証的な証拠が得られる。こうした事実も用例の選択に反映させるとよいであろう。

第 4 章では、この慣用句の通時的変化にも着目したが、このような情報は有用であろうか。たとえば、III ポジティブな用法は 1990 年代以降急激に増加し、定着する方向で進んできた。III は本来の用法ではなく、後から生まれた用法ということは、非母語話者にとって自明であるわけではないから、その意味変遷の調査は必要である。ただし、こうした情報

は用例に反映させるまでもないが、慣用句の解説で若干言及すればよいと考える。

7.2.2 「足を洗う」がどの要素と共起するか

第5章では、「足を洗う」について用例調査を行った。用例に現れた「足を洗う」の意味を分類するために、悪事やよくない仕事をやめる意味で用いられる用法を「足を洗う①」とし、悪事とは言えない、ただ現在の職業をやめる意味で用いられる用法を「足を洗う②」と区別することにした。3例に1例が「足を洗う②」の意味として使用されるという割合からみれば、各種新聞記事データベースとBCCWJの調査結果は一致している。

この慣用句は<動作主>が<対象>から/の足を洗うという文型でよく現れる。「足を洗う」を一般の連語として使用する場合、名詞「足」に先行する修飾語は「足」の持ち主である（たとえば、ペットや人間など）。しかし、慣用句として使用する場合、「足」の前に先行する名詞は職業を表す可能性が高い。母語話者はこの文型を文法の知識から判断できるが、学習者にとっては、想定できないかもしれない。したがって、文型に関する情報も辞書記述に反映させるべきであろう。

では、この文型をとる場合、あるいは、この文型に復元する場合、<対象>に当たる要素には、どのようなものが考えられるのであろうか。次の表2に示すのは、朝日新聞における慣用句「足を洗う」と共起する要素の度数順位である。

表2 「足を洗う」とよく共起する要素

■足を洗う①	■足を洗う②
139 暴力団・ヤクザ	25 政治
38 強盗・スリ・泥棒	16 芸能界関係の用語
19 ギャンブル類の用語	14 スポーツ関係の用語

第5章で言及したように、「足を洗う」は中国人の学習者からみると、悪事以外に使用するのは不自然に感じられてしまう。また、こうした用法は誤用であると指摘する辞書もある。このような使用意識や規範的な記述と、現実に使われている言語資料からの実証的な証拠とを対比させることができる。このような比較は、言語の使い方について、どこで誤解するかを指摘するために興味深いだけではない。コーパスに基づく証拠によって、学習者により有益で、より正確な辞書、そして教材を開発することができる。

ところが、「足を洗う②」がこの慣用句の本来の用法ではないことが意味変遷のプロセスから明らかにされた。「足を洗う①」と「足を洗う②」の割合からみると、確かに前者の用例が後者より多く見られ、まだ本来の用法のほうが優位に立つことが示唆される。しかし、「足を洗う②」は一時的な用法ではなく、その成立過程には言語内的な要素と言語外的な要素が関与している。それゆえ、本来の用法から外れた用法とはいえ、これから消滅してしまうことは考えられない。この用法は誤用であると決めつけるより、むしろ、これが本

来ない用法として生まれ、現在使用されていると記述したほうがよいと思われる。

7.2.3 「まんじりともせず」にはどのような形式上の変種があるか

「まんじりともせず」という慣用句はあまり使用されず、その意味は母語話者にもよく誤解される。第 6 章の考察によって、この慣用句は長い間、意味・用法を変化させてきたことが分かった。しかし、現在実際使用される意味は限られており、意味変遷に関する情報は学習者用の辞書記述には無用であることは明らかである。

慣用句は、定まった形式で使用されるが、まったく変化を示さないわけではない。肯定形式で現れるか、否定形式で現れるか、あるいは使役形で現れるか、受身形で現れるかといった問題が問われる。間違った形で使用すると、意味が通じず、不自然な日本語になってしまう。「まんじりともせず」の場合、各種新聞記事データベース及び BCCWJ から用例採集を行った結果、ほぼすべての用例が否定形式で現れることが分かった。これは、辞書記述に不可欠な情報である。

また、否定形式で現れる場合、複数の変種が認められる。表 3 に示すのが、上記コーパスから採集した用例に現れるこの慣用句の変種の順位である。

表 3 慣用句「まんじりともせず」の変種

■まんじりー

222	ともせず (に)
59	ともしない (で)
25	ともしなかった
18	ともできなかった

分析した例のなかで、「まんじりともせず (に)」が最も多く使用され、「まんじりともしない (で)」がそれに次ぐ。慣用句の形式に関して、母語話者は普段の生活経験から習得できるが、学習者にとっては最初から分かることではないので、辞書記述に明記する必要がある。

このように、コーパスから得られた情報は大きな手掛かりとなり、慣用句の意味記述や例文選択に役立ち、辞書記述へ応用できる。コーパスに基づく実証的な分析により、自然な文脈における現実の使われ方を記述し、規範的な使われ方と対比させることができる。そして、個人の母語話者の意味・用法に対する内省に頼ることなく、学習者が出会う可能性の高い意味・用法を示すことができる。

一方、意味・用法に関する情報以外にも、コーパスから様々な示唆が得られた。たとえば、「足を洗う①」の用例数の年間推移を図 1 に示すことができる。

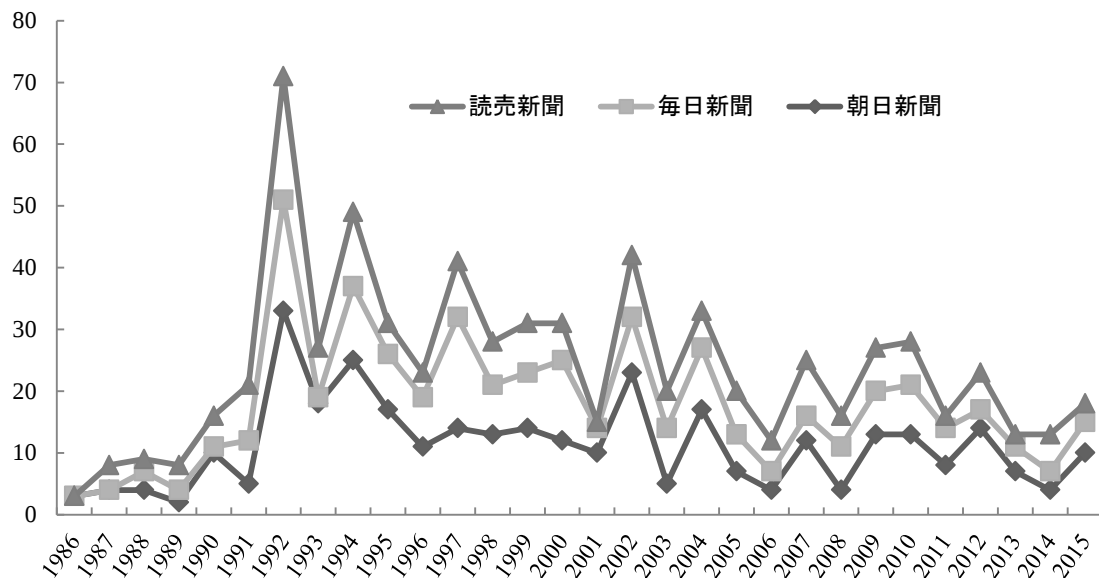


図1 「足を洗う①」用例数の年間推移

図1 から分かるように、朝日新聞だけでなく、ほかの二社においても、毎年の用例数が増加したり、減少したりするなかで、1992年の用例数が最も多い。以下の例を手掛かりとして、その原因を考えたい。

- (1) 同本部に暴力団組員だという匿名の男から「来月1日に暴力団新法が施行され、警察の取り締まりが厳しいので、これを機会に足を洗いたい。銃を福岡駅のコインロッカーに入れている」と電話があったため、捜査員が駅管理者にロッカーを開けさせたところ、布で巻いて紙袋に入れた銃を発見した。(1992/02/20 朝刊)

1992年3月1日に暴力団対策法が施行され、朝日新聞記事データベースにヒットした1992年の記事には、警察相談電話に暴力団員本人やその家族、知人からの電話が殺到したというものが多い。また、警察の厳しい取り締まりに追い詰められ、暴力団員が動揺して暴力団をやめようと、駅のロッカーに銃を入れたとの事件も立て続けに報道されていた。この年には、暴力団対策法施行で暴力団の様変わりが目立ち始めた。暴力団を抜けた組員の就職が決まるなど、警察と市民をあげての支援活動もあいまって、同様のケースが非常に多い年であった。言語の使用状況は社会に連動して常に変化していることが示唆される。第5章で挙げた例(1)のように、翌年以降も同様の事件が報道されていた。そのような社会状況を背景にして考えると、1992年が用例数のピーク時であることも理解できる。

新聞記事データベースを利用して調査を行う際、ある年において用例が急激に増えたりすることは、当時の社会問題を反映した結果であると考えられる。こうして考えれば、暴

力団・やくざと共起する「足を洗う①」の用例数(139)は多少割引して考えるべきかもしれない。後藤(1993)と後藤(1995)が指摘したように、このことは新聞をこの種の調査の資料に使う際の1つの限界を示すものである。新聞記事データベースは言語学的な配慮をした上で構築されたコーパスではないため、新聞の特徴として、政治・経済・社会など特定の分野に関係する特定の表現が集中して現れる傾向を示すことがあるなど、デメリットが皆無というわけではない。しかし、「足を洗う」という表現に関する調査から、言語が社会と密接に関わっているということが示唆され、学習者用の辞書を考えれば、このような情報も有用である。

7.3 慣用句辞典項目の試作

以上の調査結果を反映させた学習者用慣用句辞典の項目を試作する。なお、以下に挙げたすべての用例は、調査結果をもとに筆者が考えた作例である。

【鳥肌が立つ】とりはだがつ

例文

- 1) あまりの寒さに**鳥肌が立つ**。
- 2) 恐ろしい画像を一目見ただけで全身に**鳥肌が立った**。
- 3) 災害の風景を目の当たりにして、**鳥肌が立った**。
- 4) 黒板をひっかく音を聞くと、背筋がぞっとして**鳥肌が立つ**。
- 5) 彼らのすばらしいパフォーマンスを見て**鳥肌が立った**。
- 6) 試合終了2秒前、ゴールが決まって勝った瞬間、感動で**鳥肌が立つ**ようだった。
- 7) 念願の入団が叶った選手は、インタビューで「小さいころから目指していたプロ野球のチームに指名された瞬間、**鳥肌が立った**」と喜びを抑えきれない。

解説

人間の皮膚が毛をむしりとった後の鶏の皮の表面のように、ぶつぶつになる現象を指す。1)のように、寒さを感じるときに使うのが本来の用法である。現在では、2)、3)、4)のように、恐怖、衝撃、嫌悪感といったネガティブな感情の表現に使ったり、5)、6)、7)のようにすばらしさ、感動、喜びといったポジティブな感情の表現に使ったりする。また、実際にぶつぶつになる現象は起こらなくても、それと似た感覚を覚えるとき、一種の比喻表現として使うこともある。

朝日新聞記事では、全体の8割弱がポジティブな用法を表し、そのうち、半数以上がスポーツに関する報道記事に現れる。特に、日本人が好む野球の試合に関する記事に使われることが非常に多い。しかし、あくまでも新聞記事の場合であり、文学作品ではやはり本

来の用法とネガティブな用法に多く使用される。

【足を洗う】あしをあらう

例文

- 1) やくざから足を洗ってまっとうな生活をする。
- 2) あの大物スリが足を洗う前に、総額1千万円を盗んだとは本当に驚いた。
- 3) 結婚を機にパチンコから完全に足を洗った。
- 4) 市長選で落選が決まった田中氏は、支持者に「政治の道から足を洗う」と引退を表明した。
- 5) 自分が納得のいくラストシーンを演じて、きっぱりと俳優から足を洗おうと決心する。
- 6) 彼は以前、サッカー選手として3年ほどプレーしたが、浮き沈みが激しい競技の世界から早めに足を洗うことを決め、サラリーマンに転身した。

解説

足の汚れを洗い落すことから転じて、悪事やよくない仕事をやめる意を表す。本来は1)、2)、3)のように、暴力団・ヤクザ、強盗・スリ・泥棒、ギャンブルにかかわる用語に限られる用法であったが、現在はただ話者が心理的に嫌になった職業にも使える。この場合、4)、5)、6)のように、政治、芸能界関係、スポーツ関係の仕事によく使われる。

文型 <動作主>が<対象>から足を洗う
<動作主>が<対象>の足を洗う

【まんじりともせず】

例文

- 1) 大地震の後、被災地の人々はまんじりともせず一夜を過ごし、離れた家族の安否を心配していた。
- 2) 夜中の喧騒で目が覚めてしまい、そのまま、まんじりともせず夜を明かした。
- 3) 商売に失敗し、多額の借金を抱えた彼は、この数カ月、逃亡、自殺といった言葉が脳裏に浮かび、まんじりともしない夜が続いていた。
- 4) 旅客機墜落の知らせは、無事の知らせを待ってまんじりともしなかった家族や親族の人たちを悲しみのどん底に突き落とした。
- 5) 翌朝に大事な会議があつて、緊張と心配で一夜まんじりともできなかった。

解説

ひと晩中すこしも眠らない。現代日本語では、必ず否定形式で使用する。多くは連用修飾語として「まんじりともせず (に)」の形で使うが、連体修飾語として「まんじりともしない」や「まんじりともできない」の形で使うこともある。

ここでは使用実態と使用規範の関係に着目し、3つの慣用句のみを取り上げたが、学習者の利便性に供するための慣用句の意味記述をするには、今後、事例研究を積み重ね、話し言葉と書き言葉のバランス、日本語の難易度、話題やジャンルのバランスなど様々な点を考慮する必要がある。

結論 全体のまとめと今後の展望

1 全体のまとめ

一般的に慣用句と言われるものは、小説や新聞においても、ネット上のブログや日常会話においても幅広く使われており、人間の言語生活において大きな役割を果たす豊かな表現である。

しかし、慣用句は意味と文法の面で不規則なものが多く、一般性が見出しにくいと考えられるため、従来の言語学において、慣用句は周辺的な現象として位置づけられる傾向がある⁷⁹。それゆえ、日本語の慣用句と、英語・中国語・韓国語などそのほかの言語の慣用句との対照研究が行われてきており、異なる言語の慣用句間の共通点と相違点を提示することで、慣用句の文化的な面が注目された。

筆者も修士課程の研究生時代から、なぜ日本語にも中国語にも身体部位詞を含む慣用句が多いのか、数多くある慣用句のうち、どの慣用句がよく理解・使用されているのか、という素朴な疑問を抱いていた。この疑問に対し、「手」や「目」という身体部位詞を含む日本語と中国語の慣用句を対象にして、認知意味論の立場から身体部位詞の意味拡張を分析した。また、「怒り」を表す日本語と中国語の慣用句をピックアップし、類義慣用句の使用頻度について意識調査と実態調査を行った。

これらの考察を通して、慣用句の意味と数量の面では、未研究の分野として残される問題がまだ多いことに気付いた。現在、これらの問題を素通りしたうえで、日本語教育や国語教育における慣用句の問題が取り上げられているのに対して、現代日本語における慣用句の意味と数量を調べるのが先決と考えたのが、本研究の出発点である。そこで、本研究は、その基礎的な研究として、各種コーパスを利用しながら以下のことを行った。

- (1) 慣用句の使用度数と意味分野の把握
- (2) 現代日本語における基幹慣用句の選定
- (3) 慣用句の通時的変化に見られる類型や要因の発見
- (4) 個別の慣用句の意味・用法に関する記述

⁷⁹ これにはいくつかの理由がある。まず、個々の慣用句はあまり頻繁に使われていない。また、意味と文法の面で不規則的なものが多く、一般性が見出しにくいと考えられがちである。さらに、言語学においては言葉の「創造性」の面、特に人間が文法の規則と単語をほぼ自由に組み合わせることにより無限の文を作り出すことができるという現象が重視され、「慣用性」の面、つまり、慣用句のようなあらかじめ形作られた表現の性質や振る舞いには、注目が行きにくいからである（石田 2015:v）。

(1) については、1,000 句近くの慣用句の意味分野を、『分類語彙表』から調査した。そして、書籍と新聞コーパスからこれらの慣用句の使用度数を調査し、使用度数を考慮しつつ意味分野を詳細に記述することにより、どの意味分野にどのような慣用句が分布するのか、それがどのくらい使用されるのか、を提示した。また、使用度数の分布状況をもとにして、相関係数を算出することにより、書籍と新聞という異なるレスターには慣用句使用度数の分布差異があまり見られないことを明らかにした。

(2) については、書籍のうち、各ジャンルにおける各慣用句の使用度数を把握するとともに、全体的に使用度数が多くても少数のジャンルにしか高頻度で使用されない慣用句や、全体的に使用度数が少なくても複数のジャンルにわたって低頻度で広く使用される慣用句を確認し、複数のジャンルにわたって高頻度で使用される慣用句を基幹慣用句として選定した。基幹慣用句がその反対の立場に位置する慣用句、つまり、少数のジャンルにおいて低頻度で使用される慣用句と区別される背景に、慣用句の構成要素が大きく影響することを提示した。

(3) については、調査資料とした各種コーパスを総合的に通時コーパスとして捉えると、調査対象とした慣用句の意味・用法に通時的変化が見られることを指摘した。類型として、先行研究で考察した「敷居が高い」、「爪痕を残す」のような意味の転移のほかにも、意味の拡大と意味の縮小という 2 つのタイプが見出された。意味・用法を中心とした言語変化の要因を探ると、言語内的な要素と言語外的な要素が影響を与えていることが分かった。

(4) については、「鳥肌が立つ」、「足を洗う」、「まんじりともせず」を取り上げ、それぞれの意味・用法を通時的に考察した。

「鳥肌が立つ」は 1362 年ごろ『河海抄』（室町時代初期に成立した『源氏物語』の注釈書）に寒さの表現として使われ始め、1929 年ごろまでには、寒さや恐怖の表現として認識され、1929 年に小林多喜二『不在地主』に興奮の表現としてはじめて使われたことを明らかにした。寒さを表す用法を本来の用法、恐怖を表す用法をネガティブな用法、興奮を表す用法をポジティブな用法とするならば、新聞では、ポジティブな用法はおよそ 1990 年代以降ネガティブな用法を上回り、その後広く定着したことを明らかにした。

「足を洗う」は通常、好ましくないことをやめる表現とされてきたが、1900 年代島崎藤村『破戒』、『並木』に好ましいことをやめる表現として使われ始め、それ以降用例数が徐々に増加し、現在の新聞では、およそ 3 例に 1 例が好ましいことに使用されることを解明した。実際の用例に基づく好ましいことと、好ましくないことの度数順位を提示することにより、＜動作主＞が＜対象＞から/の足を洗うという文型をとる場合、「足を洗う」とよく共起する＜対象＞を見出した。

「まんじりともせず」については、その構成要素「まんじり」がどのような意味・用法

を担っているのか、それが類義語「まじまじ」の意味・用法とどう関連するのかを明らかにすることにより、「まんじりともせず」が慣用句として成立した理由を通時的に考察した。結果として、「まんじり」は「まじまじ」との意味分担を有しつつ、否定形式の動詞と結びつき、「まんじりともせず」の形で定着したことを述べた。それにより、ある言葉は特定の意味内容と表現形式に多用されると、慣用句の構成要素として限定されやすい、という見解を提示した。

2 課題と展望

まず、今後の課題として、以下の作業を行いたい。

(1) BCCWJ と新聞コーパスに基づく慣用句用例データベースの構築

本研究で調査した慣用句の読み方・モーラ数・意味分類・使用度数・基幹度のほか、今後、BCCWJ と新聞コーパスを利用し、慣用句の用例採集を行う（現段階では、BCCWJ から約 9,100 例を採集した）。特に、本研究で抽出した基幹慣用句に対し、どのような文脈においてどのように使用されるのかについて、代表的な用例を抽出しながら詳細に記述する。

(2) そのほかのコーパスによる慣用句の補充調査

本研究では、書籍と新聞コーパスを中心に調査を行ったが、今後、補充調査として会話コーパスやテレビ放送、雑誌コーパスなど現代日本語を反映したそのほかのコーパスも利用する。

(3) 日中慣用句パラレルコーパスの構築

本研究では、日本語の慣用句に焦点を当てたが、今後中国語の慣用句との対応関係を示すため、パラレルコーパスの構築を試みたい。かつては、対照言語学的方法による慣用句の研究が注目されていたが、今日の慣用句対照研究には、意味・用法に関する実態が必ずしも十分に把握されていないことや、語彙的な特徴を認識するうえで方法論的な行き詰まりが生じ、慣用句の羅列にとどまっていること、といった問題が見られ、日本語の慣用句と外国語の慣用句に関する対照研究は停滞している感がある。日中慣用句のパラレルコーパスを構築すれば、慣用句の日中対照研究に新たな展開をもたらすことであろう。

(4) 慣用句の意味変遷の一般的な傾向・類型の発見と理論化

本研究で取り上げた慣用句以外、意味変遷が起こった慣用句はほかにもある。今後、研究対象を増やし、各類型に該当する慣用句を整理していきたい。意味変遷の一般的な傾向や類型を発見し、理論化を試みる。意味変遷は慣用句だけでなく、一般語彙にも関連する問題である。慣用句の意味変遷と一般語彙の意味変遷には、どのような共通点と相違点が

見られるのか、今後一般語彙とも関連付けながら調査を深めていく。

以上の研究により、現代日本語における慣用句を全面的に記述することができれば、本研究成果の教育実践への反映と応用の方向、そして、社会的価値と波及効果において、以下のようなことが期待できる。

(1) 慣用句辞典の収録項目に有用な情報を提供できる。

現在、刊行されている慣用句辞典を調べると、その収録項目は 1,000 句から 3,000 句まであり、驚くほどの差がある。慣用句でないものが散見したり、あまり使われない慣用句が見られたりするという問題があるため、こうした慣用句辞典は、必ずしも外国人の日本語学習者のニーズに合わせて作られたものとは言えない。本研究は、慣用句のなかには、どのような慣用句が様々な分野において多用されるか、という情報を提供することができる。それにより、慣用句辞典の収録項目を、学習者が普段の日常生活で出会う機会の多い慣用句に絞ることができる。

(2) 慣用句の意味記述をより精緻で適切なものにできる。

従来の慣用句に関する調査では、本来の意味とは異なる意味で使用されるものを誤用と決めつける傾向がある。そのような慣用句について、慣用句辞典においてもしばしば相反する解釈がなされる。本研究では、慣用句が本来の意味とは異なる意味で使用される現象を一種の言語変化として捉え、いくつかの慣用句を例に、その使用実態を通時的に考察することにより、意味変遷の過程を跡付けた。使用実態調査を通して、慣用句の意味・用法は必ずしも永久不変なものではないことが裏付けられた。この考察により、慣用句辞典における慣用句の意味記述をより精緻で適切なものにすることができる。

(3) 教科書における慣用句の用例選択へ示唆を与えることができる。

筆者が慣用句の習得・指導の現状について、中国人の日本語学習者を対象としたアンケート調査を実施したところ、慣用句に関する指導不足が浮き彫りになった。教師が教科書に載っている慣用句を教え、学習者がそれをひたすら暗記する、というのが現状である。ところが、調査協力者たちが使用している教科書には、慣用句の場合、簡単な意味解釈と古い用例や難しい用例など数例しか掲載されていない。

今後の大学日本語教科書編集では、より高い頻度でより広く使われている慣用句を優先して扱う必要があると思われる。グローバル化が進む現代社会が求める日本語人材ニーズを満たすためには、日本語の読み書きや文法、文型だけではなく、母語話者の日常生活でよく使われる慣用句などレベルの高い言葉の習得にも力を入れるべきである。暗記させるよりも様々な場面で使用される用例を理解したうえで、学習者自分で用例を作れるようになることが大事である。本研究の慣用句用例データベースは、実際に現代日本語において

使用される慣用句の用例を提供できる。

(4) 国語教育・日本語教育における慣用句指導の基礎的な資料として利用できる。

文化庁「国語に関する世論調査」の結果によると、日本語ネイティブの人も慣用句の意味・用法や表記を間違えることが分かる。本研究で作成した慣用句データベースには、慣用句の表記・読み方・意味分類・使用例など豊かな情報が含まれており、今後、日本人の児童や学生、ないしは社会人にも応用可能である。また、日本語教育における慣用句指導にも役立てるはずである。特に、本研究で選定した基幹慣用句は多方面にわたって高頻度で使用されるものであり、学習者がこれらの慣用句を覚えれば、文章理解力と文章表現力の向上が期待できる。

(5) 慣用句の対照言語学的な研究に有効な視点を提供できる。

本研究により、現代日本語における基本慣用句の意味分野の分布状況が明らかになった。また、慣用句の使用度数と使われるジャンルを手掛かりにして選定された基幹慣用句にどのようなものがあるか、を分析することにより、日本の気候風土や生活習慣が深く関連することが明らかになった。これを視点として、異なる言語の慣用句との対照研究が可能になる。相違点と共通点がともに多く見られる中国語の慣用句との対照研究は、その有力な候補になると考えられる。

参考文献

- 飛鳥博臣（1982）「日本語動詞慣用句の階層性」『月刊言語』十周年記念臨時増刊号 Vol. 11No. 13pp. 72-100
- 有蘭智美（2013）「行為のフレームに基づく『目』、『耳』、『鼻』の意味拡張—知覚行為から高次認識行為へ—」『名古屋学院大学論集言語・文化篇』第25巻第1号 pp. 123-141
- 石田プリシラ（1998）「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』5 pp. 43-56
- 石田プリシラ（1999）「動詞慣用句の慣用性の度合—統語的固定性を目安として—」『筑波応用言語学研究』6 pp. 69-83
- 石田プリシラ（2000）「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』7 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会 pp. 24-43
- 石田プリシラ（2004）「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法—統語的操作を手段として—」『国語学』55（4）日本語学会 pp. 42-56
- 石田プリシラ（2015）『言語学から見た日本語と英語の慣用句』開拓社
- 井門亮（2012）「イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』10 学習院大学 pp. 1-15
- 大坪喜子（1985）「名詞慣用句—特に隠喩的慣用句について—」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 54-61
- 岡田祥平（2014）『『爪痕を残す』の『新用法』について』『日本語学会 2014 年度秋季大会 予稿集』日本語学会 pp. 185-192
- 岡田聡宏・井門亮（2014）「省略語・イディオム解釈とアドホック概念」『言語・文化・社会』12 学習院大学 pp. 1-29
- 荻野綱男（2007）『現代日本語学入門』明治書院
- 奥田靖雄（1978）「語彙的な意味のあり方」松本泰丈編『日本語研究の方法』むぎ書房 pp. 29-44
- 小野米一・王婉瑩・松田知子・田原佳世・ジェビットスーザン・張海蓉（1999）「身体語彙を含む日本語の慣用句—中国語・英語との対照を通して—」『語文と教育』13 鳴門教育大学国語教育学会 pp. 66-84
- 小柳昇「オンライン日本語誤用辞典（公開版 Ver. 1.1）」＜http://cblle.tufts.ac.jp/lle/ja_wrong/＞（最終アクセス 2016 年 6 月 21 日）
- 韓美齡（2005）「中国人日本語学習者に対する日本語慣用句の指導について—教科書の実態と学生の誤用分析から慣用句の教え方へ—」『福岡教育大学国語科研究論集』46 福岡教育大学国語国文学会 pp. 89-108
- 金直洙（2003）「日韓『基幹語彙』の比較研究—選定および意味分野別構造の分析を中心に

- 一」『語彙研究』創刊号語彙研究会 pp. 67-84
- 国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 4-14
- 国立国語研究所編（2004）『分類語彙表—増補改訂版』国立国語研究所資料集 14 大日本図書株式会社
- 小林賢次（2007）「すばらしい演技に鳥肌が立つ」北原保雄編著『問題な日本語 その3』大修館書店 pp. 40-43
- 後藤斉（1993）『『神話』の比喩的用法について—コーパス言語学からのアプローチ—』『東北大言語学論集』2pp. 1-16
- 後藤斉（1995）「言語研究のためのデータとしてのコーパスの概念について—日本語のコーパス言語学のために—」『東北大言語学論集』4 pp. 71-87
- 呉琳（2010）「アンケート調査からみた『怒り』を表す慣用句の使用頻度—中国語と対照しながら—」『日本語文学』第47輯韓国日本語文学会 pp. 141-157
- 呉琳（2013）「『怒り』を表す慣用句の使用頻度の中日対照」『漢日語言対比研究論叢』第4輯北京大学出版社 pp. 244-259
- 呉琳（2014a）「類義の慣用句に関する意味分析—『怒り』を表す中日慣用句を例に—」『漢日語言対比研究論叢』第5輯北京大学出版社 pp. 187-200
- 呉琳（2014b）「身体部位詞の多義性とその習得—視覚器官〈目〉の日中対照を通して—」『言語文化教育研究』第12巻言語文化教育研究会 pp. 187-197
- 呉琳（2015a）「新聞記事データベースを利用した『鳥肌が立つ』の使用実態調査」『研究論集』第15号北海道大学大学院文学研究科 pp. 93-108
- 呉琳（2015b）「〈足を洗う〉という表現が語る言語変化—コーパスによるアプローチ—」『言語文化教育研究』第13巻言語文化教育研究会 pp. 134-148
- 呉琳（2016a）「副詞『まんじり』の通時的考察」『Japanese Language Variation and Change Conference 2016「再考ことばの時空間」』国立国語研究所時空間変異研究系公開研究発表会予稿集 pp. 15-24
- 呉琳（2016b）「コーパス利用による慣用句意味記述の有効性」『応用日語教育展望未来的創新策略—創系20周年記念研討会—大会論文集』銘傳大学応用日語学系 pp. 60-67
- 呉琳（2016c）「慣用句『鳥肌が立つ』の使用実態調査—近現代の用例を中心に—」『日中語彙研究』第5号愛知大学中日大辞典編纂所 pp. 47-72
- 呉琳（2016d）「BCCWJにおける慣用句の使用度数及び意味分野」『語彙研究』13号語彙研究会 pp. 43-50
- 呉琳（2016e）「BCCWJを用いた基幹慣用句の選定」『研究論集』第16号北海道大学大学院文学研究科 pp. 99-113
- 呉琳（2017a）「日本語の慣用句に関する研究の概観」『日中語彙研究』第6号愛知大学中日大辞典編纂所（校正中）
- 呉琳（2017b）「新聞記事における基本慣用句の様相」『跨文化交際与日語教育』黒竜江人民

出版社（印刷中）

- 坂本勉（1982）「慣用句と比喩—慣用化の度合の観点から—」『言語学研究』1pp. 1-21
- 佐久間淳一・加藤重広・町田健（2004）『言語学入門』研究社
- 佐々木文彦（2013）「コーパスを利用した言葉の意味・用法の変化の研究—『敷居が高い』を例に—」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』2013年9月国立国語研究所 pp. 1-10
- 佐々木瑞枝（1995）「日本語の慣用句」水谷修・佐々木瑞枝・細川英雄・池田裕編『日本事情ハンドブック』大修館書店 pp. 42-43
- 佐藤理史編（2007）『基本慣用句五種対照表』名古屋大学大学院工学研究科佐藤理史研究室
- 支洪濤・吉田則夫（2003）「身体部位名称を含む慣用句についての日中対照研究—『目』の場合—」『研究集録』第124号岡山大学教育学部 pp. 93-100
- 渋谷勝己（2005）「現代の言語変化」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店 pp. 464-465
- 白石大二（1942）「慣用と慣用語—国語慣用語論覚書—」国語学振興会編『現代日本語の研究』白水社 pp. 145-167
- 白石大二（1950）『日本語のイディオム』三省堂
- 白石大二（1969）『国語慣用句辞典』東京堂
- 白石大二（1977a）「慣用句とその種類—高田与清『松屋筆記』を手がかりとして—（＜特集＞日本語の表現—慣用語句、特別な言いまわし—）」『日本語教育』33号日本語教育学会 pp. 11-22
- 白石大二（1977b）『国語慣用句大辞典』東京堂
- 杉本武（2010）「コーパスを使った文法研究」砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹編『日本語教育研究への招待』くろしお出版 pp. 177-192
- 砂川有里子（2010）「コーパスを活用した日本語教育研究—日本語学習辞書編集に向けて—」砂川有里子・加納千恵子・一二三朋子・小野正樹編『日本語教育研究への招待』くろしお出版 pp. 99-119
- 薛鳴・呉月新（2004）「慣用句の理解に見られる母国語の影響—中国人日本語学習者の場合—」『中京学院大学研究紀要』12（1・2）中京学院大学 pp. 13-22
- 宋正植（2003）「比較語彙研究の方法論—意味分野別構造分析法について—」『語彙研究』創刊号語彙研究会 pp. 85-98
- 高木一彦（1974）「慣用句研究のために」『教育国語』38号むぎ書房 pp. 2-21
- 田島毓堂（1992）「語彙論の課題—集团的規範と個別的実現—」『名古屋大学国語国文学』71 pp. 1-13
- 田島毓堂（2000）「意味分野別構造分析法—語彙研究法としての—」『名古屋大学文学部研究論集』文学46号 pp. 83-97
- 田島毓堂（2003）「語彙論の対象」『語彙研究』創刊号語彙研究会 pp. 111-118

- 田島毓堂（2015）『『分類語彙表』元版と新版のコードの比較（中間報告）』『語彙研究』12号語彙研究会 pp. 1-8
- 田島毓堂（2016a）『『分類語彙表』元版・新版のコードの比較―類差のある場合―』『語彙研究』13号語彙研究会 pp. 1-14
- 田島毓堂（2016b）『『分類語彙表』元版・新版のコードの比較』『名古屋大学文学部研究論集』文学62号 pp. 53-68
- 田中章夫（2002）『近代日本語の語彙と語法』東京堂出版
- 田野村忠温・服部匡・杉本武・石井正彦（2007）『コーパス日本語学ガイドブック』特定領域研究「日本語コーパス」平成19年度研究成果報告書
- 田野村忠温（2009）「コーパスからのコロケーション情報抽出―分析手法の検討とコロケーション辞典項目の試作―」『阪大日本語研究』21 大阪大学大学院文学研究科日本語学講座 pp. 21-41
- 田野村忠温（2010）「日本語コーパスとコロケーション―辞書記述への応用の可能性―」『言語研究』138 日本言語学会 pp. 1-23
- 土屋信一（1992）「基幹語彙の探索」『文化言語学 その提言と建設』三省堂 pp. 743-754
- 中里理子（2002）「オノマトペの多義性と意味変化―近世・近代の『まじまじ』を例に―」『上越教育大学研究紀要』第22巻第1号上越教育大学 pp. 268-282
- 中俣尚己（2014）『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版
- 中村明（1977）「語の意味と固定連語の扱い（＜特集＞日本語の表現―慣用語句、特別な言いまわし―）」『日本語教育』33号日本語教育学会 pp. 43-54
- 中村明（1985）「慣用語句と比喻表現」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 28-36
- 新野直哉（2011）『現代日本語における進行中の変化の研究―「誤用」「気づかない変化」を中心に―』ひつじ書房
- 西尾寅弥（1985）「形容詞慣用語」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 45-53
- 橋本力・河原大輔「OpenMWE for Japanese」＜<http://openmwe.osdn.jp/pukiwiki-j/#nab7f229>>（最終アクセス 2015年6月27日）
- 橋本力・河原大輔（2008）「日本語慣用語コーパスの構築と慣用語曖昧性解消の試み」『情報処理学会研究報告自然言語処理（NL）』2008-NL-186 一般社団法人情報処理学会 pp. 1-6
- 橋本直幸（2008）『『日本語教育版分類語彙表』作成の試み』山内博之編『日本語教育スタンダード試案 語彙』ひつじ書房 pp. 9-92
- 橋本直幸（2009）「BCCWJを利用した日本語教育語彙リスト作成の試み」『特定領域「日本語コーパス」平成20年度公開ワークショップ（研究成果報告会）予稿集』pp. 183-190
- 林四郎（1971）「語彙調査と基本語彙」『電子計算機による国語研究Ⅲ』国立国語研究所報告39 秀英出版 pp. 1-35
- 広瀬英史（2003）「研究対象としての語彙―総体としての語彙―」『語彙研究』創刊号語彙

研究会 pp. 119-128

文化庁（2001）平成 13 年度「国語に関する世論調査」の結果について<http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/h13/>（最終アクセス 2017 年 1 月 28 日）

文化庁（2013）平成 25 年度「国語に関する世論調査」の結果の概要<http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/kokugo_yoronchosa/pdf/h25_chosa_kekka.pdf>（最終アクセス 2016 年 12 月 23 日）

丸山岳彦（2013）「日本語コーパスの発展」前川喜久雄監修『講座日本語コーパス 1. コーパス入門』朝倉書店 pp. 105-133

宮地裕（1974）『成句』の分類『語文』第 32 輯大阪大学国文学研究室編輯 pp. 113-121

宮地裕（1977）「慣用句と連語成句（＜特集＞日本語の表現—慣用語句、特別な言いまわし—）」『日本語教育』33 号日本語教育学会 pp. 1-10

宮地裕（1982）『慣用句の意味と用法』明治書院

村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』1 月号 Vol. 4 明治書院 pp. 15-27

村田年・山崎誠（2011）「『手』の慣用句を指標とした文章ジャンルの判別—現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて—」『日本語と日本語教育』39 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要 pp. 75-88

榎山洋介（1997）「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』第 80 号 pp. 29-43

榎山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』（シリーズ・日本語のしくみを探る 5）研究社

森田良行（1966）「慣用的な言い方」『講座日本語教育第 2 分冊』早稲田大学語学教育研究所 pp. 61-78

森田良行（1985）「動詞慣用句」『日本語学』1 月号 Vol. 4 明治書院 pp. 37-44

林彦伶（2009）「『分類語彙表』における各意味分野の語数」『語彙研究』7 号語彙研究会 pp. 40-47

Lin Wu（2016）“Frequencies and Semantic Category Distribution of Idioms in Japanese” *Journal of the Graduate School of Letters*, Vol. 11, Hokkaido University, pp. 75-82

【主な辞書・辞典類】

井上宗雄（1992）『例解慣用句辞典—言いたい内容から逆引きできる—』創拓社

小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』初版小学館

学研辞典編集部（2014）『用例でわかる慣用句辞典』改訂第 2 版学研教育出版

北原保雄編・加藤博康著（2007）『明鏡ことわざ成句使い方辞典』大修館書店

北原保雄編（2010）『明鏡国語辞典』第 2 版大修館書店

金田一春彦・池田弥三郎編（1988）『学研国語大辞典』第 2 版学習研究社

倉持保男・阪田雪子（1994）『慣用句の辞典』新装版三省堂
 倉持保男・阪田雪子編集（1998）『三省堂慣用句便覧』三省堂出版
 見坊豪紀・市川孝・飛田良文・山崎誠・飯間浩明・塩田雄大編（2014）『三省堂国語辞典』
 第7版三省堂
 現代言語研究会（1993）『すぐに役立つ慣用句用例新辞典』あすろ出版社
 現代言語研究会（2007）『慣用句の辞典—日本語を使いさばく—』あすろ出版社
 集英社辞典編集部（1991）『ルーツでなるほど慣用句辞典』集英社
 新村出編（2008）『広辞苑』第6版机上版岩波書店
 丹野顯（1998）『意味から引ける慣用句辞典』日本実業出版社
 土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
 中嶋尚監修（1996）『新選慣用句の辞典—気のきいた言葉 豊かな文章表現—』小学館
 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編（2009）『岩波国語辞典』第7版岩波書店
 日本国語大辞典第2版編集委員会小学館国語辞典編集部（2000-02）『日本国語大辞典第2
 版』小学館
 日本語表現研究会（1997）『使える慣用句事典—言いたい言葉がすぐに見つかる！—』PHP
 研究所
 松村明編（2006）『大辞林』第3版三省堂編修所
 松村明監修・小学館大辞泉編集部編（2012）『大辞泉』第2版下巻小学館
 山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之編（2012）
 『新明解国語辞典』第7版三省堂
 山田俊雄・築島裕・小林芳規・白藤禮幸編（1995）『新潮国語辞典—現代語・古語—』第2
 版新潮社
 米川明彦・大谷伊都子（2005）『日本語慣用句辞典』東京堂出版

【使用テキスト】

河竹黙阿弥作・浦山政雄・松崎仁校注（1961）「小袖曾我薊色縫」『歌舞伎脚本集下』日本
 古典文学大系 54 岩波書店
 山東京伝作・水野稔校注（1958）「傾城買四十八手」『黄表紙洒落本集』日本古典文学大系
 59 岩波書店
 式亭三馬作・中野三敏・神保五弥・前田愛校注（1971）『洒落本滑稽本人情本』日本古典文
 学全集 47 小学館
 十返舎一九作・麻生磯次校注（1958）『東海道中膝栗毛』日本古典文学大系 62 岩波書店
 十返舎一九作・武藤禎夫編（1979）「落咄熟志柿」『噺本大系』第15巻東京堂出版
 為永春水作・国民図書株式会社編（1928）「春色梅美婦禰」『為永春水集』近代日本文学大
 系第20巻国民図書株式会社
 為永春水作・中村幸彦校注（1962）『春色梅兒譽美』日本古典文学大系 64 岩波書店

近松門左衛門作・国民図書株式会社編（1928）「傾城島原蛙合戦」『近松門左衛門集下』近代日本文学大系第7巻国民図書株式会社

近松門左衛門作・重友毅校注（1958）「博多小女郎波枕」『近松浄瑠璃集上』日本古典文学大系49 岩波書店

瓢亭百成作・武藤禎夫編（1979）「百生瓢」『嚟本大系』第15巻東京堂出版

【使用データベース・コーパス】

■上古・中古・中世・近世を中心とするもの

- ・国文学研究資料館『大系本文（日本古典文学・嚟本）データベース』

■明治～昭和戦前を中心とするもの

- ・インターネット図書館『青空文庫』
- ・国立国語研究所『近代語のコーパス』

■昭和戦後～今日を中心とするもの

- ・国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』
- ・新聞記事データベース

朝日新聞社『聞蔵Ⅱビジュアル』

毎日新聞社『毎索（マイサク）』

読売新聞社『ヨミダス歴史館』

添付資料

資料1 基本慣用句一覧

以下の表において、番号は五十音順に並べた慣用句の通し番号を示す。慣用句の表記は佐藤（2007）『基本慣用句五種対照表』の代表表記に従う。慣用句の前に付く○は『分類語彙表』において複数の意味分類番号が付される慣用句、◎はそのなかで多義性をもつ慣用句、また、△は収録されていない慣用句をそれぞれ示す。なお、慣用句の使用度数及び基幹度の区分は以下のとおりである。【A1】、【A2】、【A3】、【B1】、【B2】に属する慣用句は、基幹慣用句として選定されたものである。

慣用句使用度数の区分

- 区分1 ほとんど使わない慣用句
- 区分2 まれに使う慣用句
- 区分3 たまに使う慣用句
- 区分4 ときどき使う慣用句
- 区分5 よく使う慣用句

慣用句基幹度の区分

- 【A1】 かなり幅が広く、深さが深い慣用句
- 【A2】 かなり幅が広く、深さ中位の慣用句
- 【A3】 かなり幅が広く、深さは浅い慣用句
- 【B1】 幅が広く、深さが深い慣用句
- 【B2】 幅が広く、深さ中位の慣用句
- 【B3】 幅が広く、深さは浅い慣用句
- 【C1】 幅が狭く、深さが深い慣用句
- 【C2】 幅が狭く、深さ中位の慣用句
- 【C3】 幅が狭く、深さは浅い慣用句
- 【D1】 かなり幅が狭く、深さが深い慣用句
- 【D2】 かなり幅が狭く、深さ中位の慣用句
- 【D3】 かなり幅が狭く、深さは浅い慣用句

番号	慣用句・読み方	モーラ数	分類 番号	使用度数区分		基幹 度
				BCCWJ	新聞	
1	○【愛想を尽かす】あいそをつかす	7	2. 3020	区分 4	区分 4	【B3】
2	△【開いた口がふさがらない】 あいたくちがふさがらない	12	2. 3002	区分 3	区分 3	【C3】
3	【相づちを打つ】あいづちをうつ	7	2. 3132	区分 5	区分 4	【A2】
4	【青筋を立てる】あおすじをたてる	8	2. 3012	区分 2	区分 1	【D3】
5	【赤子の手をねじる】あかごの手をねじる	9	3. 1346	区分 1	区分 1	【D3】
6	【赤子の手をひねる】あかごの手をひねる	9	3. 1346	区分 1	区分 1	【D3】
7	○【赤の他人】あかのたにん	6	1. 2210	区分 4	区分 3	【B3】
8	【あぐらをかく】あぐらをかく	6	2. 3391	区分 3	区分 4	【B3】
9	【揚げ足を取る】あげあしをとる	7	2. 3135	区分 2	区分 2	【D3】
10	【挙げ句の果て】あげくのはて	6	1. 1651	区分 4	区分 3	【B3】
11	【明けても暮れても】あけてもくれても	8	3. 1600	区分 2	区分 2	【C3】
12	【あごで使う】あごでつかう	6	2. 3630	区分 2	区分 1	【D3】
13	【あごを出す】あごをだす	5	2. 3003	区分 1	区分 1	【D3】
14	△【足音を忍ばせる】あしおとをしのばせる	10	2. 1210	区分 4	区分 1	【D3】
15	△【足がすくむ】あしがすくむ	6	2. 3012	区分 3	区分 4	【C3】
16	○【足が付く】あしがつく	5	2. 3613	区分 2	区分 3	【D3】
17	【足が出る】あしがでる	5	2. 1931	区分 1	区分 2	【D3】
18	△【足が鈍る】あしがにぶる	6	2. 1583	区分 1	区分 4	【D3】
19	【足が速い】あしがはやい	6	3. 5710	区分 1	区分 1	【D3】
20	△【足が棒になる】あしがぼうになる	8	2. 1522	区分 1	区分 1	【D3】
21	○【味も素っ気も無い】あじもそっけもない	9	3. 1331	区分 1	区分 2	【D3】
22	△【足元に火が付く】あしもとにひがつく	9	2. 1611	区分 1	区分 1	【D3】
23	【足元にも及ばない】あしもとにもおよばない	11	3. 1584	区分 3	区分 3	【C3】
24	△【足元を見られる】あしもとをみられる	9	2. 3683	区分 2	区分 3	【C3】
25	【足元を見る】あしもとをみる	7	2. 3683	区分 1	区分 3	【D3】
26	【足を洗う】あしをあらう	6	2. 3311	区分 3	区分 3	【C3】
27	○【味を占める】あじをしめる	6	2. 3470	区分 3	区分 3	【C3】
28	△【足を伸ばす】あしをのばす	6	2. 1522	区分 5	区分 5	【A3】
29	○【足を運ぶ】あしをはこぶ	6	2. 1522	区分 5	区分 5	【A1】
30	【足を引っ張る】あしをひっぱる	7	2. 3683	区分 5	区分 5	【A3】
31	【足を棒にする】あしをぼうにする	8	2. 1522	区分 1	区分 1	【D3】
32	○【頭が上がらない】あたまがあがらない	9	3. 3021	区分 3	区分 3	【C3】
33	【頭が痛い】あたまがいたい	7	3. 3014	区分 4	区分 5	【B3】
34	△【頭隠してしり隠さず】 あたまかくしてしりかくさず	13	3. 1210	区分 1	区分 1	【D3】
35	【頭が下がる】あたまがさがる	7	3. 3021	区分 4	区分 5	【A3】
36	【頭に来る】あたまにくる	6	2. 3012	区分 5	区分 4	【A3】
37	【頭を痛める】あたまをいためる	8	2. 3013	区分 3	区分 5	【C3】
38	【頭を抱える】あたまをかかえる	8	2. 3014	区分 5	区分 5	【A3】
39	【頭をひねる】あたまをひねる	7	2. 3061	区分 3	区分 4	【B3】
40	【頭をもたげる】あたまをもたげる	8	2. 1210	区分 5	区分 4	【B3】
41	【あつけに取られる】あつけにとられる	8	2. 3002	区分 5	区分 4	【A2】

42	【当てが外れる】あてがはずれる	7	2. 3066	区分 3	区分 3	【C3】
43	【後の祭り】あとのまつり	6	3. 1660	区分 3	区分 4	【B3】
44	△【後は野となれ山となれ】 あとはのとなれやまとなれ	12	3. 3420	区分 1	区分 1	【D3】
45	【跡を絶たない】あとをたたない	7	3. 1504	区分 5	区分 5	【A3】
46	【後を引く】あとをひく	5	2. 1240	区分 2	区分 2	【C3】
47	【穴があったら入りたい】 あながあったらはいりたい	12	3. 3041	区分 2	区分 1	【D3】
48	【危ない橋を渡る】あぶないはしをわたる	10	2. 1346	区分 3	区分 2	【D3】
49	【あぶはち取らず】あぶはちとらず	7	3. 3710	区分 1	区分 1	【D3】
50	○【脂が乗る】あぶらがのる	6	2. 3050	区分 3	区分 4	【C3】
51	【油を売る】あぶらをうる	6	2. 1600	区分 1	区分 1	【D3】
52	【油を絞る】あぶらをしばる	7	2. 3682	区分 1	区分 1	【D3】
53	○【網を張る】あみをはる	5	2. 3613	区分 3	区分 2	【D3】
54	【ありのはい出るすき間もない】 ありのはいでるすきまもない	13	3. 1341	区分 1	区分 1	【D3】
55	【合わせる顔がない】あわせるかおがない	9	3. 3041	区分 2	区分 2	【D3】
56	【泡を食う】あわをくう	5	2. 3013	区分 2	区分 1	【D3】
57	【暗礁に乗り上げる】あんしょうにのりあげる	10	2. 1526	区分 3	区分 5	【C3】
58	【案の定】あんのじょう	5	4. 3120	区分 5	区分 5	【A2】
59	【いい気になる】いいきになる	6	2. 3041	区分 4	区分 3	【B3】
60	○【行き当たりばったり】いきあたりばったり	9	3. 3045	区分 4	区分 3	【B3】
61	【生き馬の目を抜く】いきうまのめをぬく	9	2. 3421	区分 1	区分 2	【D3】
62	【息が合う】いきがあう	5	2. 3500	区分 3	区分 4	【B3】
63	【息が切れる】いきがきれる	6	2. 5710	区分 4	区分 4	【D3】
64	【息が詰まる】いきがつまる	6	2. 5710	区分 5	区分 4	【A3】
65	【息が長い】いきがながい	6	3. 1600	区分 3	区分 2	【B3】
66	【息の根を止める】いきのねをとめる	8	2. 5702	区分 4	区分 3	【B3】
67	○【息を凝らす】いきをこらす	6	2. 5710	区分 2	区分 2	【C3】
68	【息を殺す】いきをころす	6	2. 5710	区分 5	区分 3	【C3】
69	△【息をつく暇もない】いきをつくひまもない	10	3. 3320	区分 1	区分 1	【D3】
70	【息を詰める】いきをつめる	6	2. 5710	区分 5	区分 3	【B3】
71	○【息をのむ】いきをのむ	5	2. 3002	区分 5	区分 5	【B2】
72	【息を引き取る】いきをひきとる	7	2. 5702	区分 5	区分 5	【B3】
73	【息を吹き返す】いきをふきかえす	8	2. 5701	区分 4	区分 5	【A3】
74	○【異彩を放つ】いさいをはなつ	7	2. 1331	区分 4	区分 4	【B3】
75	【いざという時】いざというとき	7	1. 1611	区分 5	区分 5	【A2】
76	【意地が悪い】いじがわるい	6	3. 3680	区分 5	区分 2	【A3】
77	【石にかじり付いても】いしにかじりついても	10	3. 3040	区分 1	区分 2	【D3】
78	【意地になる】いじになる	5	2. 3040	区分 3	区分 3	【C3】
79	【石橋をたたいて渡る】いしばしをたたいてわたる	12	2. 1346	区分 1	区分 2	【D3】
80	【意地を張る】いじをはる	5	2. 3040	区分 4	区分 3	【C3】
81	【板につく】いたにつく	5	2. 3050	区分 3	区分 4	【C3】
82	○【至れり尽くせり】いたれりつくせり	8	3. 3680	区分 3	区分 3	【C3】
83	○【一か八か】いちかばちか	6	3. 3045	区分 4	区分 3	【B3】

84	【一から十まで】 いちからじゅうまで	8	3. 1940	区分 2	区分 2	【C3】
85	【一言もない】 いちごんもない	7	3. 3041	区分 3	区分 3	【C3】
86	【一事が万事】 いちじがばんじ	7	3. 1940	区分 2	区分 2	【B3】
87	【一日の長】 いちじつのちょう	7	1. 1584	区分 1	区分 3	【D3】
88	○【一目置く】 いちもくおく	6	2. 3021	区分 4	区分 4	【A3】
89	○【一も二もなく】 いちもにもなく	7	3. 1671	区分 3	区分 2	【B3】
90	△【一家を成す】 いっかをなす	6	2. 3470	区分 2	区分 1	【C3】
91	【一糸乱れず】 いっしみだれず	7	3. 1340	区分 3	区分 4	【C3】
92	○【一笑に付す】 いっしょうにふす	7	2. 3680	区分 4	区分 3	【B3】
93	○【一矢を報いる】 いっしをむくいる	8	2. 3681	区分 2	区分 4	【D3】
94	【一杯食う】 いっぱいくう	6	2. 3683	区分 3	区分 1	【D3】
95	【居ても立っても居られない】 いてもたってもいられない	12	3. 3013	区分 4	区分 4	【B3】
96	○【命の洗濯】 いのちのせんたく	8	1. 3320	区分 1	区分 2	【D3】
97	【命を懸ける】 いのちをかける	7	2. 3040	区分 5	区分 5	【A2】
98	【いばらの道】 いばらのみち	6	1. 3310	区分 2	区分 3	【C3】
99	△【意表をつく】 いひょうをつく	6	2. 3002	区分 4	区分 5	【A3】
100	【今か今かと】 いまかいまかと	7	3. 1611	区分 3	区分 3	【B3】
101	【今や遅しと】 いまやおそしと	7	3. 1611	区分 1	区分 1	【D3】
102	【芋を洗うよう】 いもをあらうよう	8	3. 1340	区分 1	区分 1	【D3】
103	【いやが上にも】 いやがうえにも	7	3. 1920	区分 4	区分 3	【B3】
104	【嫌気が差す】 いやけがさす	6	2. 3020	区分 5	区分 5	【B3】
105	【いやでも応でも】 いやでもおうでも	8	4. 3130	区分 1	区分 1	【D3】
106	【嫌と言うほど】 いやというほど	7	3. 1920	区分 5	区分 4	【A3】
107	○【入れ替わり立ち替わり】 いれかわりたちかわり	10	3. 1504	区分 4	区分 4	【B3】
108	○【色を失う】 いろをうしなう	7	2. 3030	区分 3	区分 1	【C3】
109	【意を決する】 いをけつする	6	2. 3067	区分 5	区分 4	【A3】
110	○【因果を含める】 いんがをふくめる	8	2. 3531	区分 2	区分 1	【D3】
111	△【上を下への大騒ぎ】 うえをしたへのおおさわぎ	12	1. 3380	区分 1	区分 1	【D3】
112	【動きが取れない】 うごきがとれない	8	3. 1520	区分 4	区分 5	【B3】
113	△【雨後の竹の子】 うごのたけのこ	7	3. 1504	区分 2	区分 3	【C3】
114	○【牛の歩み】 うしのあゆみ	6	1. 1913	区分 1	区分 1	【D3】
115	【後ろ髪を引かれる】 うしろがみをひかれる	10	2. 3020	区分 3	区分 3	【B3】
116	【後ろ指を指される】 うしろゆびをさされる	10	2. 3135	区分 2	区分 3	【D3】
117	【うだつが上がらない】 うだつがあがらない	9	3. 3410	区分 3	区分 3	【C3】
118	○【うつつを抜かす】 うつつをぬかす	7	2. 3040	区分 4	区分 3	【B3】
119	△【腕が上がる】 うでがあがる	6	2. 3050	区分 1	区分 2	【D3】
120	【腕が鳴る】 うでがなる	5	2. 3041	区分 1	区分 1	【D3】
121	○【腕に覚えがある】 うでにおぼえがある	9	2. 3041	区分 1	区分 2	【D3】
122	【腕によりを掛ける】 うでによりをかける	9	2. 3040	区分 2	区分 3	【D3】
123	【打てば響く】 うてばひびく	6	2. 3001	区分 2	区分 2	【D3】
124	【腕を振るう】 うでをふるう	6	2. 3421	区分 4	区分 5	【B3】
125	【腕を磨く】 うでをみがく	6	2. 3050	区分 3	区分 5	【B3】
126	【うなぎの寝床】 うなぎのねどこ	7	1. 4430	区分 1	区分 2	【D3】
127	【うなぎ登り】 うなぎのぼり	6	1. 1540	区分 3	区分 4	【C3】

128	【うの目たかの目】うのめたかのめ	7	3. 3090	区分 1	区分 1	【D3】
129	△【うまい汁を吸う】うまいしるをすう	8	2. 3750	区分 3	区分 3	【C3】
130	○【馬が合う】うまがあう	5	2. 3020	区分 3	区分 2	【B3】
131	△【海のものとも山の物とも付かない】 うみのものともやまのものともつかない	18	3. 3068	区分 1	区分 1	【D3】
132	○【有無を言わせず】うむをいわせず	7	3. 3680	区分 5	区分 3	【A3】
133	【恨みを買う】うらみをかう	6	2. 3680	区分 4	区分 3	【B3】
134	○【裏をかく】うらをかく	5	2. 3683	区分 3	区分 4	【B3】
135	△【売り言葉に買い言葉】うりことばにかいことば	11	1. 3100	区分 2	区分 2	【C3】
136	【うり二つ】うりふたつ	5	3. 1130	区分 4	区分 3	【B3】
137	【雲泥の差】うんでいのさ	6	1. 1930	区分 4	区分 3	【B3】
138	【運を天に任せる】うんをてんにまかせる	10	2. 3310	区分 3	区分 1	【C3】
139	【悦に入る】えつにいる	5	2. 3011	区分 4	区分 3	【B3】
140	○【襟を正す】えりをただす	6	2. 3422	区分 2	区分 5	【C3】
141	○【縁起を担ぐ】えんぎをかつぐ	7	2. 3360	区分 2	区分 4	【C3】
142	【縁の下の方持ち】えんのしたのちからもち	11	1. 3040	区分 2	区分 4	【C3】
143	【おうむ返し】おうむがえし	6	1. 3100	区分 4	区分 2	【B3】
144	○【多かれ少なかれ】おおかれすくなかれ	9	3. 1910	区分 5	区分 4	【A2】
145	○【大きな顔をする】おおきなかおをする	9	2. 3030	区分 2	区分 2	【D3】
146	△【大きな口をきく】おおきなくちをきく	9	2. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
147	○【大見得を切る】おおみえをきる	7	2. 3030	区分 2	区分 1	【C3】
148	【大目玉を食う】おおめだまをくう	8	2. 3682	区分 1	区分 2	【D3】
149	○【大目に見る】おおめにみる	6	2. 3670	区分 4	区分 4	【A3】
150	○【お株を奪う】おかぶをうばう	7	2. 3421	区分 1	区分 3	【D3】
151	【おくびにも出さない】おくびにもださない	9	3. 3100	区分 4	区分 2	【C3】
152	○【おくめんもなく】おくめんもなく	7	3. 3041	区分 4	区分 1	【B3】
153	【後れを取る】おくれをとる	6	2. 3570	区分 5	区分 5	【A2】
154	【お先棒を担ぐ】おさきぼうをかつぐ	9	2. 3540	区分 1	区分 2	【D3】
155	【押し合いへし合い】おしあいへしあい	8	1. 1562	区分 3	区分 3	【C3】
156	○【押しも押されもしない】おしもおされもしない	10	3. 3421	区分 3	区分 3	【B3】
157	【遅かれ早かれ】おそかれはやかれ	8	3. 1643	区分 4	区分 3	【A3】
158	【お茶の子さいさい】おちゃのこさいさい	8	3. 1346	区分 1	区分 1	【D3】
159	【お茶を濁す】おちゃをにごす	6	2. 3135	区分 3	区分 4	【C3】
160	【同じ穴のむじな】おなじあなのむじな	9	1. 2200	区分 3	区分 2	【C3】
161	○【鬼に金棒】おににかなぼう	7	3. 1400	区分 2	区分 2	【C3】
162	△【鬼の目にも涙】おにのめにもなみだ	9	3. 3020	区分 1	区分 1	【D3】
163	【尾ひれを付ける】おひれをつける	7	2. 1580	区分 1	区分 1	【D3】
164	【お目にかかる】おめにかかる	6	2. 3520	区分 5	区分 5	【A1】
165	【思いも掛けない】おもいもかけない	8	3. 3066	区分 5	区分 4	【A2】
166	○【思いも寄らない】おもいもよらない	8	3. 3066	区分 5	区分 5	【A2】
167	【思うつぼ】おもうつぼ	5	1. 3042	区分 4	区分 3	【B3】
168	【重きを成す】おもきをなす	6	2. 3311	区分 3	区分 2	【B3】
169	○【重荷を下ろす】おもにをおろす	7	2. 3470	区分 1	区分 2	【D3】
170	△【及びもつかない】およびもつかない	8	3. 1584	区分 3	区分 2	【C3】
171	【折り紙付き】おりがみつ	6	1. 3071	区分 2	区分 4	【C3】

172	【尾を引く】おをひく	4	2. 1600	区分 4	区分 5	【A3】
173	【音頭を取る】おんどをとる	6	2. 1525	区分 4	区分 5	【B3】
174	△【恩に着せる】おんにきせる	6	2. 3650	区分 1	区分 1	【D3】
175	○【恩に着る】おんにきる	5	2. 3650	区分 3	区分 1	【D3】
176	【恩をあだで返す】おんをあだでかえす	9	2. 3681	区分 1	区分 2	【D3】
177	【飼い犬に手をかまれる】かいいぬにてをかまれる	11	2. 3550	区分 1	区分 1	【D3】
178	【顔が売れる】かおがうれる	6	2. 3142	区分 2	区分 3	【D3】
179	【顔が利く】かおがきく	5	2. 3311	区分 3	区分 3	【C3】
180	【顔がつぶれる】かおがつぶれる	7	2. 3142	区分 1	区分 1	【D3】
181	【顔が広い】かおがひろい	6	3. 3500	区分 2	区分 4	【C3】
182	【顔から火が出る】かおからひがでる	8	2. 3030	区分 2	区分 1	【D3】
183	【顔に泥を塗る】かおにどろをぬる	8	2. 3142	区分 2	区分 2	【D3】
184	【顔向けができない】かおむけができない	9	3. 3041	区分 2	区分 1	【D3】
185	【顔を曇らせる】かおをくもらせる	8	2. 3030	区分 4	区分 4	【D3】
186	○【顔を出す】かおをだす	5	2. 3511	区分 5	区分 5	【A1】
187	【顔をつぶす】かおをつぶす	6	2. 3142	区分 1	区分 2	【D3】
188	○【影が薄い】かげがうすい	6	3. 1400	区分 4	区分 5	【B3】
189	【掛け替えのない】かけがえのない	7	3. 1040	区分 5	区分 5	【A2】
190	【陰になりひなたになり】かげになりひなたになり	11	3. 3680	区分 1	区分 1	【D3】
191	【影も形もない】かげもかたちもない	9	3. 1200	区分 3	区分 2	【C3】
192	【かさに懸かる】かさにかかる	6	2. 3670	区分 2	区分 1	【D3】
193	【かさに着る】かさにかきる	5	2. 3041	区分 3	区分 2	【C3】
194	【風の便り】かぜのたより	6	1. 3142	区分 3	区分 2	【C3】
195	○【かたずをのむ】かたずをのむ	6	2. 3002	区分 4	区分 4	【A3】
196	【肩で風を切る】かたでかぜをきる	8	2. 3030	区分 2	区分 1	【D3】
197	【型にはまる】かたにはまる	6	2. 1331	区分 4	区分 4	【A3】
198	【肩の荷が下りる】かたのにおりる	8	2. 3470	区分 2	区分 4	【C3】
199	【肩の荷を下ろす】かたのにおろす	8	2. 3470	区分 2	区分 2	【D3】
200	【片棒を担ぐ】かたぼうをかつぐ	8	2. 3540	区分 3	区分 3	【C3】
201	【肩身が狭い】かたみがせまい	7	3. 3041	区分 4	区分 4	【A3】
202	【肩を落とす】かたをおとす	6	2. 3391	区分 5	区分 5	【B3】
203	△【肩をすぼめる】かたをすぼめる	7	2. 3042	区分 4	区分 3	【D3】
204	○【肩を並べる】かたをならべる	7	2. 1584	区分 4	区分 5	【A3】
205	【肩を持つ】かたをもつ	5	2. 3650	区分 4	区分 3	【B3】
206	○【活を入れる】かつをいれる	6	2. 3000	区分 3	区分 4	【C3】
207	【角が立つ】かどがたつ	5	2. 3500	区分 2	区分 3	【C3】
208	○【角が取れる】かどがとれる	6	2. 3041	区分 1	区分 2	【D3】
209	【金に糸目をつけない】かねにいとめをつけない	11	3. 3710	区分 2	区分 2	【D3】
210	【かぶとを脱ぐ】かぶとをぬぐ	6	2. 3570	区分 2	区分 1	【D3】
211	【かまを掛ける】かまをかける	6	2. 3132	区分 3	区分 1	【D3】
212	【かゆい所に手が届く】かゆいところにてがとどく	12	2. 3650	区分 1	区分 3	【D3】
213	【我を折る】がをおる	4	2. 3041	区分 1	区分 1	【D3】
214	○【我を張る】がをはる	4	2. 3040	区分 1	区分 1	【D3】
215	【かんこ鳥が鳴く】かんことりがなく	8	2. 3790	区分 2	区分 3	【C3】
216	○【かんで含める】かんでふくめる	7	2. 3640	区分 2	区分 2	【C3】

217	【堪忍袋の緒が切れる】 かんにんぶくろのおがきれる	13	2. 3012	区分 3	区分 2	【C3】
218	【気炎を上げる】きえんをあげる	7	2. 3100	区分 1	区分 2	【D3】
219	【気が置けない】きがおけない	6	3. 3013	区分 3	区分 3	【B3】
220	【気が重い】きがおもい	5	3. 3014	区分 4	区分 4	【B3】
221	【気が利く】きがきく	4	2. 3421	区分 5	区分 3	【A2】
222	【気が気でない】きがきでない	6	3. 3013	区分 4	区分 4	【C3】
223	【気が済む】きがすむ	4	2. 3013	区分 5	区分 4	【A2】
224	○【気が付く】きがつく	4	2. 3062	区分 5	区分 5	【A1】
225	【気が強い】きがつよい	5	3. 3420	区分 5	区分 5	【A3】
226	【気が速くなる】きがとおくなる	7	2. 3002	区分 5	区分 4	【A3】
227	【気がとがめる】きがとがめる	6	2. 3041	区分 3	区分 2	【D3】
228	○【気が抜ける】きがぬける	5	2. 3062	区分 4	区分 5	【B3】
229	【気が引ける】きがひける	5	2. 3680	区分 4	区分 4	【B3】
230	【気かもめる】きかもめる	5	2. 3013	区分 1	区分 1	【D3】
231	【聞き耳を立てる】ききみみをたてる	8	2. 3093	区分 5	区分 3	【B3】
232	【机上の空論】きじょうのくうろん	8	1. 3075	区分 3	区分 3	【B3】
233	【機先を制する】きせんをせいする	8	2. 3542	区分 4	区分 3	【C3】
234	【切っても切れない】きってもきれない	8	3. 1110	区分 4	区分 4	【A3】
235	○【きつねにつままれる】きつねにつままれる	9	2. 3067	区分 4	区分 3	【B3】
236	【木で鼻をくくる】きではなをくくる	8	2. 3680	区分 2	区分 2	【D3】
237	【気に入る】きにいる	4	2. 3020	区分 5	区分 5	【A1】
238	【気に掛かる】きにかかる	5	2. 3013	区分 5	区分 5	【A2】
239	○【気に掛ける】きにかける	5	2. 3013	区分 5	区分 5	【A2】
240	【気に食わない】きにくわない	6	3. 3020	区分 5	区分 4	【A3】
241	【気に障る】きにさわる	5	2. 3012	区分 4	区分 3	【C3】
242	○【気にする】きにする	4	2. 3013	区分 5	区分 5	【A1】
243	【気に留める】きにとめる	5	2. 3062	区分 4	区分 4	【B3】
244	○【気になる】きになる	4	2. 3013	区分 5	区分 5	【A1】
245	【気に病む】きにやむ	4	2. 3013	区分 4	区分 2	【C3】
246	【着の身着のまま】きのみきのまま	7	3. 3330	区分 4	区分 4	【B3】
247	○【きびすを返す】きびすをかえす	7	2. 1527	区分 5	区分 2	【C3】
248	【気骨が折れる】きぼねがおれる	7	2. 3013	区分 1	区分 1	【D3】
249	○【肝が据わる】きもがすわる	6	2. 3000	区分 1	区分 2	【D3】
250	【肝が太い】きもがふとい	6	3. 3430	区分 1	区分 1	【D3】
251	【肝に銘じる】きもにめいじる	7	2. 3050	区分 5	区分 5	【A3】
252	【肝をつぶす】きもをつぶす	6	2. 3002	区分 3	区分 2	【C3】
253	【肝を冷やす】きもをひやす	6	2. 3002	区分 2	区分 3	【C3】
254	【脚光を浴びる】きゃっこうをあびる	8	2. 3300	区分 5	区分 5	【A2】
255	【九死に一生を得る】きゅうしにいっしょうをえる	11	2. 5701	区分 3	区分 4	【B3】
256	△【興に乗る】きょうにのる	5	2. 3011	区分 2	区分 2	【D3】
257	【気を失う】きをうしなう	6	2. 3002	区分 5	区分 5	【B3】
258	【気を落とす】きをおとす	5	2. 3042	区分 2	区分 2	【D3】
259	【気を配る】きをくばる	5	2. 3062	区分 5	区分 5	【A1】
260	【気を付ける】きをつける	5	2. 3062	区分 5	区分 5	【A1】

261	【気を取られる】きをとられる	6	2. 3062	区分 5	区分 5	【A2】
262	○【気を取り直す】きをとりなおす	7	2. 1500	区分 5	区分 4	【B3】
263	【気を回す】きをまわす	5	2. 3062	区分 3	区分 4	【C3】
264	【気をもむ】きをもむ	4	2. 3013	区分 4	区分 5	【A3】
265	△【悔いを残す】くいをのこす	6	2. 3041	区分 2	区分 4	【D3】
266	【ぐうの音も出ない】ぐうのねもでない	8	3. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
267	△【空を切る】くちをきる	5	2. 3470	区分 4	区分 5	【D3】
268	○【くぎを刺す】くぎをさす	5	2. 3670	区分 4	区分 5	【B3】
269	△【臭い物にふたをする】くさいものにふたをする	11	2. 1210	区分 1	区分 2	【D3】
270	【くさびを打ちこむ】くさびをうちこむ	8	2. 3542	区分 2	区分 4	【C3】
271	【口がうまい】くちがうまい	6	3. 3100	区分 2	区分 3	【D3】
272	【口が重い】くちがおもい	6	3. 3100	区分 3	区分 3	【C3】
273	【口が堅い】くちがかたい	6	3. 3100	区分 3	区分 2	【C3】
274	【口が軽い】くちがかるい	6	3. 3100	区分 2	区分 1	【D3】
275	【口が滑る】くちがすべる	6	2. 3100	区分 2	区分 2	【D3】
276	【口が減らない】くちがへらない	7	3. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
277	△【口から先に生まれる】くちからさきにうまれる	11	3. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
278	【口が悪い】くちがわるい	6	3. 3100	区分 3	区分 2	【D3】
279	【口に合う】くちにあう	5	2. 1332	区分 4	区分 4	【B3】
280	◎【口にする】くちにする	5	2. 3331	区分 5	区分 5	【A2】
281	◎【口にする】くちにする	5	2. 3100	区分 5	区分 5	【A1】
282	【くちばしが黄色い】くちばしがきいろい	9	3. 5701	区分 1	区分 1	【D3】
283	【くちばしを入れる】くちばしをいれる	8	2. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
284	【唇をかむ】くちびるをかむ	7	2. 3040	区分 5	区分 2	【B3】
285	○【口火を切る】くちびをきる	6	2. 3100	区分 4	区分 5	【B3】
286	【口も八丁手も八丁】 くちもはっちょうてもはっちょう	13	3. 3421	区分 1	区分 1	【D3】
287	◎【口を利く】くちをきく	5	2. 3100	区分 5	区分 4	【A2】
288	◎【口を利く】くちをきく	5	2. 3522	区分 1	区分 2	【D3】
289	◎【口を切る】くちをきる	5	2. 1553	区分 1	区分 1	【D3】
290	◎【口を切る】くちをきる	5	2. 3131	区分 4	区分 1	【C3】
291	【口をそろえる】くちをそろえる	7	2. 3100	区分 5	区分 5	【A3】
292	【口を出す】くちをだす	5	2. 3100	区分 5	区分 5	【A2】
293	【口をつぐむ】くちをつぐむ	6	2. 3100	区分 5	区分 5	【B3】
294	【口をとがらせる】くちをとがらせる	8	2. 3030	区分 5	区分 3	【C3】
295	【口を挟む】くちをはさむ	6	2. 3100	区分 5	区分 5	【A2】
296	【口を割る】くちをわる	5	2. 3100	区分 4	区分 1	【C3】
297	【苦になる】くになる	4	2. 3014	区分 4	区分 5	【A3】
298	【首が回らない】くびがまわらない	8	3. 3790	区分 1	区分 2	【D3】
299	【首にする】くびにする	5	2. 3630	区分 4	区分 4	【B3】
300	【首になる】くびになる	5	2. 3630	区分 5	区分 5	【A3】
301	【首をかしげる】くびをかしげる	7	2. 3061	区分 5	区分 5	【A2】
302	【首を切る】くびをきる	5	2. 3630	区分 3	区分 4	【C3】
303	【首を突っ込む】くびをつっこむ	7	2. 3430	区分 5	区分 4	【B3】
304	【首を長くする】くびをながくする	8	2. 3042	区分 3	区分 3	【C3】

305	○【首をひねる】くびをひねる	6	2. 3061	区分 5	区分 5	【A2】
306	【工夫を凝らす】くふうをこらす	7	2. 3061	区分 5	区分 5	【A2】
307	△【雲をつく】くもをつく	5	3. 5600	区分 1	区分 1	【D3】
308	△【軍配が上がる】ぐんばいがあがる	8	2. 3570	区分 2	区分 4	【B3】
309	【軍門に下る】ぐんもんにくだる	8	2. 3570	区分 2	区分 2	【D3】
310	○【群を抜く】ぐんをぬく	5	2. 1584	区分 5	区分 5	【A2】
311	【けがの功名】けがのこうみょう	7	1. 3480	区分 2	区分 2	【D3】
312	○【けたが違う】けたがちがう	6	2. 1584	区分 3	区分 2	【C3】
313	【げたを預ける】げたをあずける	7	2. 3670	区分 1	区分 3	【D3】
314	○【けちが付く】けちがつく	5	2. 3470	区分 2	区分 1	【D3】
315	○【けちを付ける】けちをつける	6	2. 3683	区分 4	区分 3	【B3】
316	【血相を変える】けっそうをかえる	8	2. 3030	区分 4	区分 3	【C3】
317	【けむに巻く】けむにまく	5	2. 3100	区分 4	区分 4	【B3】
318	○【けりが付く】けりがつく	5	2. 1503	区分 3	区分 3	【C3】
319	○【けりを付ける】けりをつける	6	2. 1503	区分 4	区分 4	【B3】
320	○【犬猿の仲】けんえんのなか	7	1. 1110	区分 2	区分 3	【D3】
321	【けんかを売る】けんかをうる	6	2. 3543	区分 3	区分 2	【B3】
322	○【けんもほろろ】けんもほろろ	6	3. 3680	区分 2	区分 2	【D3】
323	【口角泡を飛ばす】こうかくあわをとばす	10	2. 3100	区分 2	区分 2	【D3】
324	【業を煮やす】ごうをにやす	6	2. 3012	区分 4	区分 4	【B3】
325	【声を限りに】こえをかざりに	7	3. 3100	区分 3	区分 2	【D3】
326	○【声を掛ける】こえをかける	6	2. 3131	区分 5	区分 5	【A1】
327	【声を立てる】こえをたてる	6	2. 3031	区分 5	区分 2	【C3】
328	【声をのむ】こえをのむ	5	2. 3031	区分 3	区分 1	【D3】
329	△【声を潜める】こえをひそめる	7	2. 5030	区分 5	区分 4	【C3】
330	【小首をかしげる】こくびをかしげる	8	2. 3061	区分 5	区分 2	【C3】
331	【心が痛む】こころがいたむ	7	2. 3014	区分 4	区分 5	【B3】
332	△【心が動く】こころがうごく	7	2. 3067	区分 3	区分 4	【C3】
333	△【心が通う】こころがかよう	7	2. 1130	区分 4	区分 3	【B3】
334	△【心が弾む】こころがはずむ	7	2. 3011	区分 2	区分 2	【C3】
335	【志を立てる】こころざしをたてる	9	2. 3042	区分 2	区分 2	【C3】
336	△【志を遂げる】こころざしをとげる	9	2. 3470	区分 1	区分 1	【D3】
337	【心に掛かる】こころにかかる	7	2. 3013	区分 3	区分 3	【C3】
338	【心に掛ける】こころにかける	7	2. 3013	区分 2	区分 2	【B3】
339	【心に留める】こころにとめる	7	2. 3062	区分 4	区分 4	【A3】
340	【心を痛める】こころをいためる	8	2. 3014	区分 5	区分 5	【B3】
341	△【心を打つ】こころをうつ	6	2. 3002	区分 4	区分 5	【B3】
342	△【心を奪われる】こころをうばわれる	9	2. 3020	区分 5	区分 4	【A3】
343	△【心を鬼にする】こころをおににする	9	2. 3680	区分 2	区分 3	【C3】
344	【心を砕く】こころをくだく	7	2. 3061	区分 4	区分 5	【A3】
345	【心を配る】こころをくばる	7	2. 3062	区分 3	区分 3	【B3】
346	【心を込める】こころをこめる	7	2. 3040	区分 5	区分 5	【A2】
347	【心を許す】こころをゆるす	7	2. 3500	区分 4	区分 3	【B3】
348	○【腰が抜ける】こしがぬける	6	2. 3002	区分 4	区分 2	【B3】
349	【腰が低い】こしがひくい	6	3. 3680	区分 3	区分 2	【B3】
350	【腰を折る】こしをおる	5	2. 3100	区分 1	区分 2	【D3】

351	○【腰を据える】こしをすえる	6	2. 3013	区分 5	区分 5	【A3】
352	○【腰を抜かす】こしをぬかす	6	2. 3002	区分 4	区分 3	【B3】
353	○【御多分に漏れず】ごたぶんにもれず	8	3. 1130	区分 3	区分 3	【B3】
354	△【事と次第によっては】こととしだいによっては	11	4. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
355	【異にする】ことにする	5	2. 1130	区分 5	区分 5	【A1】
356	【事によると】ことによると	6	4. 3100	区分 1	区分 5	【D3】
357	△【言葉に尽くせない】ことばにつくせない	9	2. 3103	区分 1	区分 2	【D3】
358	【言葉を返す】ことばをかえす	7	2. 3133	区分 4	区分 3	【C3】
359	【言葉を濁す】ことばをにごす	7	2. 3103	区分 4	区分 5	【D3】
360	【ごまをする】ごまをする	5	2. 3680	区分 2	区分 1	【C3】
361	【小耳に挟む】こみみにはさむ	7	2. 3093	区分 3	区分 3	【C3】
362	△【最後を飾る】さいごをかざる	7	2. 1503	区分 2	区分 4	【C3】
363	【細大漏らさず】さいだいもらさず	8	3. 1940	区分 2	区分 1	【D3】
364	【さい配を振る】さいはいをふる	7	2. 3620	区分 2	区分 3	【C3】
365	【先を争う】さきをあらそう	7	2. 3542	区分 3	区分 3	【C3】
366	【探りを入れる】さぐりをいれる	7	2. 3065	区分 4	区分 3	【C3】
367	○【さじを投げる】さじをなげる	6	2. 3067	区分 4	区分 3	【B3】
368	【さばを読む】さばをよむ	5	2. 3064	区分 1	区分 1	【C3】
369	【三拍子そろう】さんびょうしそろう	8	2. 1342	区分 2	区分 4	【D3】
370	【思案に暮れる】しあんにくれる	7	2. 3061	区分 2	区分 2	【D3】
371	○【舌鼓を打つ】したつづみをうつ	8	2. 3020	区分 3	区分 5	【B3】
372	【下にも置かない】したにもおかない	8	3. 3680	区分 1	区分 1	【D3】
373	【舌を巻く】したをまく	5	2. 3002	区分 4	区分 5	【B3】
374	○【地団太を踏む】じだんだをふむ	7	2. 3012	区分 1	区分 2	【D3】
375	【十指に余る】じっしにあまる	7	2. 1931	区分 1	区分 1	【D3】
376	○【しっぽを出す】しっぽをだす	6	2. 3470	区分 2	区分 1	【D3】
377	【しっぽをつかむ】しっぽをつかむ	7	2. 3071	区分 2	区分 1	【D3】
378	【しのぎを削る】しのぎをけずる	7	2. 3543	区分 4	区分 5	【B3】
379	【自腹を切る】じばらをきる	6	2. 3710	区分 2	区分 4	【C3】
380	【しびれをきらす】しびれをきらす	7	2. 3040	区分 4	区分 4	【C3】
381	△【始末に負えない】しまつにおえない	8	2. 1346	区分 3	区分 1	【C3】
382	【しゃくにさわる】しゃくにさわる	6	2. 3012	区分 4	区分 2	【C3】
383	【雌雄を決する】しゅうをけっする	8	2. 3543	区分 2	区分 2	【C3】
384	【春秋に富む】しゅんじゅうにとむ	7	2. 1622	区分 1	区分 1	【D3】
385	【食指が動く】しょくしがうごく	7	2. 3020	区分 1	区分 2	【D3】
386	【知らぬが仏】しらぬがほとけ	7	3. 3013	区分 1	区分 1	【D3】
387	【白羽の矢が立つ】しらのはのやがたつ	8	2. 3630	区分 3	区分 4	【D3】
388	○【白を切る】しらをきる	5	2. 3030	区分 3	区分 2	【C3】
389	○【しり馬に乗る】しりうまにのる	7	2. 3683	区分 2	区分 1	【C3】
390	○【しりが重い】しりがおもい	6	3. 3420	区分 1	区分 1	【D3】
391	【しりに火が付く】しりにひがつく	7	2. 1611	区分 1	区分 2	【D3】
392	○【しり目にかける】しりめにかける	7	2. 3683	区分 1	区分 1	【D3】
393	【死力を尽くす】しりよくをつくす	7	2. 3040	区分 3	区分 3	【D3】
394	△【白い目で見ると】しろいめでみる	7	2. 3683	区分 3	区分 3	【B3】
395	【心血を注ぐ】しんけつをそそぐ	8	2. 3040	区分 4	区分 4	【A3】
396	【辛酸をなめる】しんさんをなめる	8	2. 3311	区分 3	区分 4	【B3】

397	○【心臓が強い】しんぞうがつよい	8	3. 3041	区分 1	区分 1	【D3】
398	【進退きわまる】しんたいきわまる	8	2. 1526	区分 3	区分 2	【C3】
399	【水泡に帰す】すいほうにきす	7	2. 1250	区分 3	区分 3	【C3】
400	【すずめの涙】すずめのなみだ	7	1. 1910	区分 2	区分 1	【D3】
401	【砂をかむよう】すなをかむよう	7	3. 3011	区分 2	区分 1	【C3】
402	【図に当たる】ずにあたる	5	2. 3470	区分 1	区分 2	【D3】
403	○【図に乗る】ずにのる	4	2. 3041	区分 3	区分 2	【C3】
404	【すねに傷を持つ】すねにきずをもつ	8	2. 3410	区分 1	区分 1	【D3】
405	【すねをかじる】すねをかじる	6	2. 3330	区分 1	区分 2	【D3】
406	○【隅に置けない】すみにおけない	7	3. 3410	区分 1	区分 1	【D3】
407	【精が出る】せいが出る	5	2. 3040	区分 1	区分 1	【D3】
408	△【生計を立てる】せいけいをたてる	8	2. 3710	区分 5	区分 5	【A3】
409	○【青天のへきれき】せいてんのへきれき	9	1. 1500	区分 3	区分 4	【B3】
410	○【精を出す】せいをだす	5	2. 3040	区分 5	区分 5	【A3】
411	【是が非でも】ぜがひでも	5	4. 3130	区分 4	区分 3	【A3】
412	【背筋が寒くなる】せすじがさむくなる	9	2. 3012	区分 3	区分 3	【C3】
413	【背に腹は替えられない】せにはらはかえられない	11	3. 1230	区分 3	区分 3	【C3】
414	【世話が焼ける】せわがやける	6	2. 3650	区分 2	区分 1	【D3】
415	【世話を焼く】せわをやく	5	2. 3650	区分 5	区分 4	【A3】
416	○【背を向ける】せをむける	5	2. 3500	区分 5	区分 5	【A3】
417	【先見の明】せんけんのめい	7	1. 3421	区分 4	区分 3	【A3】
418	△【先手を打つ】せんてをうつ	6	2. 3542	区分 4	区分 4	【B3】
419	【相好を崩す】そうごうをくずす	8	2. 3030	区分 3	区分 3	【D3】
420	○【底を突く】そこをつく	5	2. 1250	区分 5	区分 5	【A3】
421	【そ知らぬ顔】そしらぬかお	6	1. 3030	区分 4	区分 3	【C3】
422	【そでにする】そでにする	5	2. 3680	区分 3	区分 1	【D3】
423	【太鼓判を押す】たいこばんをおす	8	2. 3530	区分 3	区分 5	【C3】
424	【大事を取る】だいじをとる	6	2. 3040	区分 2	区分 4	【D3】
425	【たがが緩む】たががゆるむ	6	2. 3000	区分 2	区分 2	【D3】
426	【高根の花】たかねのはな	6	1. 4000	区分 3	区分 4	【B3】
427	【高みの見物】たかみのけんぶつ	8	1. 3091	区分 2	区分 2	【C3】
428	○【宝の持ち腐れ】たからのもちぐされ	9	3. 3710	区分 3	区分 3	【B3】
429	【高をくくる】たかをくくる	6	2. 3066	区分 4	区分 4	【B3】
430	△【竹を割ったよう】たけをわったよう	8	3. 3420	区分 1	区分 2	【C3】
431	△【多勢に無勢】たぜいにぶぜい	7	3. 3500	区分 3	区分 2	【C3】
432	【だだをこねる】だだをこねる	6	2. 3100	区分 4	区分 3	【A3】
433	【立つ瀬がない】たつせがない	6	3. 3410	区分 2	区分 2	【D3】
434	△【手綱を引き締める】たづなをひきしめる	9	2. 3000	区分 1	区分 2	【D3】
435	【立て板に水】たていたにみず	7	3. 3100	区分 2	区分 2	【D3】
436	【盾に取る】たてにとる	5	2. 3560	区分 3	区分 2	【C3】
437	【盾を突く】たてをつく	5	2. 3543	区分 1	区分 3	【D3】
438	【棚に上げる】たなにあげる	6	2. 3066	区分 4	区分 4	【A3】
439	【他人の空似】たにんのそらに	7	1. 1130	区分 2	区分 1	【D3】
440	○【玉にきず】たまにきず	5	1. 1331	区分 1	区分 2	【D3】
441	【矯めつすがめつ】ためつすがめつ	7	3. 3090	区分 2	区分 1	【D3】
442	【駄目を押す】だめをおす	5	2. 3062	区分 1	区分 4	【D3】

443	【たもとを分かつ】たもとをわかつ	7	2. 3500	区分 4	区分 4	【B3】
444	【たんかを切る】たんかをきる	6	2. 3100	区分 4	区分 2	【B3】
445	【端を発する】たんをはつする	7	2. 1502	区分 5	区分 5	【A2】
446	【知恵を絞る】ちえをしぼる	6	2. 3061	区分 4	区分 5	【A3】
447	【血が通う】ちががよう	5	3. 3020	区分 4	区分 4	【B3】
448	【血が騒ぐ】ちがさわぐ	5	2. 3002	区分 3	区分 4	【C3】
449	【血がつながる】ちがつながる	6	2. 1131	区分 5	区分 4	【B3】
450	○【力を入れる】ちからをいれる	7	2. 3040	区分 5	区分 5	【A1】
451	【力を落とす】ちからをおとす	7	2. 3042	区分 1	区分 3	【D3】
452	○【力を貸す】ちからをかす	6	2. 3650	区分 5	区分 5	【B3】
453	○【地に落ちる】ちにおちる	5	2. 3142	区分 2	区分 4	【C3】
454	△【血の気が引く】ちのけがひく	6	2. 3030	区分 5	区分 3	【C3】
455	△【血のにじむような】ちのにじむような	8	3. 3040	区分 2	区分 3	【C3】
456	【血道を上げる】ちみちをあげる	7	2. 3040	区分 3	区分 3	【C3】
457	【血も涙もない】ちもなみだもない	8	3. 3020	区分 2	区分 2	【D3】
458	【茶茶を入れる】ちゃちゃをいれる	6	2. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
459	○【宙に浮く】ちゅうにうく	5	2. 1250	区分 5	区分 5	【A2】
460	△【注目を浴びる】ちゅうもくをあびる	8	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
461	◎【調子に乗る】ちょうしにのる	6	2. 1660	区分 2	区分 3	【D3】
462	◎【調子に乗る】ちょうしにのる	6	2. 3041	区分 4	区分 4	【B3】
463	【長足の進歩】ちょうそくのしんぽ	8	1. 1913	区分 1	区分 1	【D3】
464	【ちょうちんを持つ】ちょうちんをもつ	7	2. 3540	区分 1	区分 1	【D3】
465	【血わき肉踊る】ちわきにくおどる	8	2. 3002	区分 1	区分 2	【D3】
466	【血を分ける】ちをわける	5	2. 1131	区分 4	区分 2	【B3】
467	○【月とすっぽん】つきとすっぽん	7	3. 1130	区分 1	区分 2	【D3】
468	【土が付く】つちがつく	5	2. 3570	区分 1	区分 2	【D3】
469	【つむじを曲げる】つむじをまげる	7	2. 3680	区分 1	区分 1	【D3】
470	【つめに火をともし】つめにひをともし	8	2. 3710	区分 2	区分 1	【D3】
471	【つめのあかほど】つめのあかほど	7	3. 1910	区分 1	区分 1	【D3】
472	【面の皮が厚い】つらのかわがあつい	9	3. 3041	区分 1	区分 1	【D3】
473	【つるの一声】つるのひとこえ	7	1. 3140	区分 3	区分 3	【B3】
474	【手が上がる】てがあがる	5	2. 3050	区分 1	区分 1	【D3】
475	【手が空く】てがあく	4	2. 3320	区分 4	区分 3	【C3】
476	【手が掛かる】てがかかる	5	2. 3320	区分 5	区分 5	【A2】
477	【手が込む】てがこむ	4	3. 1341	区分 5	区分 4	【A3】
478	【手が付けられない】てがつけられない	8	3. 1346	区分 5	区分 4	【A3】
479	【手が出ない】てがでない	5	3. 1346	区分 2	区分 4	【C3】
480	【手が届く】てがとどく	5	2. 1584	区分 5	区分 5	【A2】
481	△【手がない】てがない	4	3. 1346	区分 3	区分 4	【B3】
482	【手が離れる】てがはなれる	6	2. 3650	区分 2	区分 3	【C3】
483	【手がふさがる】てがふさがる	6	2. 3320	区分 2	区分 2	【D3】
484	【手ぐすねを引く】てぐすねをひく	7	2. 3520	区分 1	区分 2	【D3】
485	【てこでも動かない】てこでもうごかない	9	3. 1500	区分 3	区分 1	【C3】
486	【手塩に掛ける】てしおにかける	7	2. 3640	区分 3	区分 4	【B3】
487	【手玉に取る】てだまにとる	6	2. 3680	区分 3	区分 3	【C3】
488	○【手に汗を握る】てにあせをにぎる	8	2. 3013	区分 1	区分 2	【D3】

489	○【手に余る】てにあまる	5	2. 1346	区分 4	区分 4	【B3】
490	【手に入れる】てにいれる	5	2. 3700	区分 5	区分 5	【A1】
491	【手に負えない】てにおえない	6	2. 1346	区分 5	区分 5	【A2】
492	◎【手にする】てにする	4	2. 3700	区分 5	区分 5	【A1】
493	◎【手にする】てにする	4	2. 3392	区分 5	区分 5	【A1】
494	【手に付かない】てにつかない	6	3. 3320	区分 4	区分 4	【B3】
495	【手に乗る】てにのる	4	2. 3683	区分 2	区分 3	【D3】
496	【手八丁口八丁】てはっちょうくちはっちょう	11	3. 3421	区分 1	区分 2	【D3】
497	【出鼻をくじく】でばなをくじく	7	2. 3542	区分 2	区分 1	【C3】
498	【手も足も出ない】てもあしもでない	8	3. 1346	区分 4	区分 3	【B3】
499	○【手を合わせる】てをあわせる	6	2. 3360	区分 5	区分 5	【A2】
500	○【手を入れる】てをいれる	5	2. 3200	区分 5	区分 5	【A3】
501	◎【手を打つ】てをうつ	4	2. 3084	区分 5	区分 5	【A2】
502	◎【手を打つ】てをうつ	4	2. 3530	区分 3	区分 2	【C3】
503	○【手を掛ける】てをかける	5	2. 3320	区分 5	区分 5	【A2】
504	【手を貸す】てをかす	4	2. 3650	区分 5	区分 5	【A2】
505	【手を借りる】てをかりる	5	2. 3650	区分 4	区分 5	【B3】
506	【手を切る】てをきる	4	2. 3500	区分 4	区分 3	【B3】
507	△【手を下す】てをくだす	5	2. 3430	区分 4	区分 3	【B3】
508	△【手をこまねく】てをこまねく	6	2. 3430	区分 4	区分 4	【A3】
509	【手を差し伸べる】てをさしのべる	7	2. 3392	区分 5	区分 5	【A2】
510	○【手を出す】てをだす	4	2. 3430	区分 5	区分 5	【A1】
511	○【手を尽くす】てをつくす	5	2. 3040	区分 4	区分 5	【A3】
512	○【手を付ける】てをつける	5	2. 3430	区分 5	区分 5	【A1】
513	【手を取る】てをとる	4	2. 3392	区分 2	区分 1	【D3】
514	○【手を握る】てをにぎる	5	2. 3540	区分 2	区分 4	【D3】
515	○【手を抜く】てをぬく	4	2. 3040	区分 5	区分 5	【A2】
516	○【手を延ばす】てをのばす	5	2. 3430	区分 4	区分 5	【B3】
517	○【手を引く】てをひく	4	2. 3430	区分 5	区分 5	【A3】
518	○【手を広げる】てをひろげる	6	2. 3430	区分 3	区分 5	【B3】
519	【手を回す】てをまわす	5	2. 3084	区分 3	区分 4	【C3】
520	○【手を焼く】てをやく	4	2. 3014	区分 5	区分 3	【A3】
521	△【手を休める】てをやすめる	6	2. 3320	区分 5	区分 4	【A3】
522	【天びんに掛ける】てんびんにかける	8	2. 3063	区分 3	区分 3	【C3】
523	○【頭角を現す】とうかくをあらわす	9	2. 3311	区分 4	区分 5	【A3】
524	【峠を越す】とうげをこす	6	2. 1583	区分 3	区分 3	【C3】
525	【堂に入る】どうにいる	5	2. 3050	区分 2	区分 2	【D3】
526	【度肝を抜く】どぎもをぬく	6	2. 3002	区分 4	区分 4	【A3】
527	【毒にも薬にもならない】 どくにもくすりにもならない	13	3. 1332	区分 1	区分 2	【D3】
528	【床に就く】とこにつく	5	2. 3330	区分 5	区分 3	【B3】
529	【どこ吹く風】どこふくかぜ	6	1. 3030	区分 2	区分 4	【D3】
530	△【年がいない】としがいない	7	3. 1332	区分 3	区分 2	【C3】
531	【どじを踏む】どじをふむ	5	2. 3470	区分 2	区分 1	【D3】
532	【取って付けたよう】とってつけたよう	8	3. 3045	区分 3	区分 2	【D3】

533	○【突拍子もない】とつびようしもない	8	3. 1331	区分 4	区分 3	【B3】
534	○【トップをきる】トップをきる	6	2. 1525	区分 1	区分 5	【D3】
535	【とてつもない】とてつもない	6	3. 1920	区分 5	区分 5	【A2】
536	○【とどのつまり】とどのつまり	6	3. 1670	区分 4	区分 2	【A3】
537	○【とどめを刺す】とどめをさす	6	2. 3570	区分 5	区分 4	【B3】
538	○【途方に暮れる】とほうにくれる	7	2. 3014	区分 5	区分 5	【A2】
539	【途方もない】とほうもない	6	3. 1920	区分 5	区分 4	【A2】
540	△【とらの威を借るきつね】とらのいをはかるきつね	10	2. 3041	区分 1	区分 1	【D3】
541	【とらの子】とらのこ	4	1. 4010	区分 3	区分 4	【C3】
542	【取り返しがつかない】とりかえしがつかない	10	3. 1346	区分 5	区分 5	【A2】
543	【取り付く島がない】とりつくしまがない	9	3. 3680	区分 4	区分 1	【B3】
544	【取りも直さず】とりもなおさず	7	4. 1150	区分 5	区分 3	【A2】
545	【取るに足りない】とるにたりない	7	3. 1331	区分 4	区分 2	【C3】
546	○【取る物も取りあえず】とるものもとりあえず	10	3. 1671	区分 2	区分 1	【C3】
547	【泥を塗る】どろをぬる	5	2. 3041	区分 3	区分 3	【C3】
548	【泥を吐く】どろをはく	5	2. 3141	区分 1	区分 1	【D3】
549	【度を失う】どをうしなう	6	2. 3013	区分 2	区分 2	【D3】
550	△【度を過ごす】どをすごす	5	2. 1931	区分 1	区分 1	【D3】
551	【長い目で見る】ながいめでみる	7	2. 3091	区分 4	区分 5	【A3】
552	【流れをくむ】ながれをくむ	6	2. 1131	区分 5	区分 5	【A2】
553	【泣きの涙】なきのなみだ	6	1. 3030	区分 1	区分 1	【D3】
554	【なしのつぶて】なしのつぶて	6	1. 3122	区分 2	区分 3	【C3】
555	【何が何でも】なにがなんでも	7	4. 3130	区分 5	区分 5	【A2】
556	△【何かにつけて】なにかにつけて	7	3. 1612	区分 5	区分 4	【A3】
557	△【何くれとなく】なにくれとなく	7	3. 1130	区分 2	区分 1	【B3】
558	【何食わぬ顔】なにくわぬかお	7	1. 3030	区分 4	区分 2	【B3】
559	【何はさておき】なにはさておき	7	4. 1170	区分 2	区分 2	【D3】
560	【何はともあれ】なにはともあれ	7	4. 1170	区分 5	区分 4	【A3】
561	【何は無くとも】なにはなくとも	7	3. 1584	区分 1	区分 1	【D3】
562	【波風が立つ】なみかぜがたつ	7	2. 3543	区分 2	区分 3	【C3】
563	【涙をのむ】なみだをのむ	6	2. 3040	区分 3	区分 5	【B3】
564	○【波に乗る】なみにのる	5	2. 1660	区分 4	区分 5	【A3】
565	【名もない】なもない	4	3. 3142	区分 5	区分 5	【A3】
566	○【鳴りをひそめる】なりをひそめる	7	2. 3311	区分 3	区分 4	【C3】
567	△【名を売る】なをうる	4	2. 3142	区分 2	区分 3	【D3】
568	○【名を成す】なをなす	4	2. 3470	区分 4	区分 3	【B3】
569	【難癖をつける】なんくせをつける	8	2. 3135	区分 3	区分 2	【B3】
570	【煮え湯を飲まされる】にえゆをのまされる	9	2. 3680	区分 2	区分 2	【D3】
571	【苦虫をかみつぶしたよう】 にがむしをかみつぶしたよう	13	3. 3030	区分 3	区分 2	【C3】
572	△【にしきを飾る】にしきをかざる	7	2. 3470	区分 2	区分 3	【D3】
573	【二足のわらじを履く】にそくのわらじをはく	10	2. 3400	区分 2	区分 3	【C3】
574	○【似たり寄ったり】にたりよったり	7	3. 1130	区分 4	区分 3	【B3】
575	△【にっちもさっちもいかない】 にっちもさっちもいかない	12	3. 1520	区分 3	区分 3	【B3】

576	【似ても似つかない】にてもにつかない	8	3. 1130	区分 4	区分 3	【A3】
577	○【二の足を踏む】にのあしをふむ	7	2. 3067	区分 4	区分 5	【B3】
578	【二の句がつげない】にのくがつげない	8	3. 3100	区分 2	区分 1	【C3】
579	【抜き足差し足】ぬきあしさしあし	8	1. 3392	区分 2	区分 1	【D3】
580	【抜き差しならない】ぬきさしならない	8	3. 1520	区分 3	区分 3	【C3】
581	○【抜け目がない】ぬけめがない	6	3. 3421	区分 4	区分 2	【B3】
582	【寝返りを打つ】ねがえりをうつ	7	2. 3391	区分 1	区分 1	【D3】
583	【願ったりかなったり】ねがったりかなったり	10	3. 3310	区分 1	区分 2	【D3】
584	○【願ってもない】ねがってもない	7	3. 3310	区分 4	区分 4	【B3】
585	△【猫の手も借りたい】ねこのてもかりたい	9	3. 3320	区分 1	区分 2	【D3】
586	【猫の額】ねこのひたい	6	1. 1912	区分 3	区分 3	【C3】
587	○【猫もしゃくしも】ねこもしゃくしも	7	3. 1940	区分 2	区分 1	【C3】
588	【猫をかぶる】ねこをかぶる	6	2. 3030	区分 1	区分 1	【D3】
589	【熱が冷める】ねつがさめる	6	2. 3011	区分 2	区分 3	【D3】
590	△【熱しやすく冷めやすい】ねっしやすくさめやすい	11	3. 3420	区分 1	区分 2	【D3】
591	【熱に浮かされる】ねつにうかされる	8	2. 3002	区分 4	区分 2	【C3】
592	【熱を上げる】ねつをあげる	6	2. 3002	区分 4	区分 3	【B3】
593	△【熱を入れる】ねつをいれる	6	2. 3040	区分 2	区分 4	【D3】
594	【寝ても覚めても】ねてもさめても	7	3. 1600	区分 2	区分 3	【C3】
595	【根に持つ】ねにもつ	4	2. 3020	区分 3	区分 2	【C3】
596	【根掘り葉掘り】ねほりはほり	6	3. 3100	区分 4	区分 3	【C3】
597	【寝耳に水】ねみみにみず	6	3. 1611	区分 3	区分 5	【B3】
598	【根も葉もない】ねもはもない	6	3. 1113	区分 3	区分 3	【C3】
599	【音を上げる】ねをあげる	5	2. 3031	区分 4	区分 4	【B3】
600	○【根を下ろす】ねをおろす	5	2. 1513	区分 5	区分 5	【A2】
601	【根を張る】ねをはる	4	2. 5701	区分 4	区分 5	【B3】
602	【年がら年じゅう】ねんがらねんじゅう	8	3. 1600	区分 3	区分 2	【C3】
603	【年季を入れる】ねんきをいれる	7	2. 3050	区分 1	区分 1	【D3】
604	○【年貢の納め時】ねんぐのおさめどき	9	1. 1611	区分 1	区分 1	【D3】
605	【念を押す】ねんをおす	5	2. 3062	区分 5	区分 5	【A2】
606	【のどから手が出る】のどからてがでる	8	2. 3042	区分 3	区分 3	【C3】
607	△【乗り掛かった船】のりかかったふね	8	1. 3067	区分 2	区分 1	【D3】
608	【のるか反るか】のるかそるか	6	3. 3045	区分 2	区分 1	【C3】
609	【のれんを分ける】のれんをわける	7	2. 3770	区分 1	区分 1	【D3】
610	【背水の陣】はいすいのじん	7	1. 1690	区分 3	区分 5	【B3】
611	○【場数を踏む】ばかずをふむ	6	2. 3050	区分 2	区分 3	【C3】
612	○【歯が立たない】はがたたない	6	3. 1346	区分 4	区分 4	【B3】
613	○【ばかになる】ばかになる	5	2. 1583	区分 1	区分 1	【D3】
614	△【歯が抜けたよう】はがぬけたよう	7	3. 1504	区分 1	区分 1	【D3】
615	○【ばかを見る】ばかをみる	5	2. 3310	区分 3	区分 3	【C3】
616	【馬脚を現す】ばきやくをあらわす	8	2. 1210	区分 1	区分 1	【D3】
617	△【白紙に戻す】はくしにもどす	7	2. 1251	区分 2	区分 5	【D3】
618	○【拍車をかける】はくしゃをかける	7	2. 1400	区分 5	区分 5	【A2】
619	△【薄氷を踏む】はくひょうをふむ	7	2. 3012	区分 2	区分 3	【D3】
620	【化けの皮がはがれる】ばけのかわがはがれる	10	2. 1210	区分 1	区分 1	【D3】

621	【はしにも棒にも掛からない】 はしにもぼうにもかからない	13	3. 1346	区分 1	区分 1	【D3】
622	【バスに乗り遅れる】バスにのりおくれる	9	2. 3311	区分 1	区分 3	【C3】
623	△【旗色が悪い】はたいろがわるい	8	3. 1302	区分 1	区分 2	【D3】
624	【破竹の勢い】はちくのいきおい	8	1. 1403	区分 2	区分 2	【D3】
625	△【はちの巣をつついたよう】 はちのすをつついたよう	11	2. 3380	区分 2	区分 1	【D3】
626	【ばつが悪い】ばつがわるい	6	3. 3041	区分 5	区分 3	【A3】
627	○【発破をかける】はっぱをかける	7	2. 3682	区分 2	区分 4	【D3】
628	【バトンを渡す】バトンをわたす	7	2. 1504	区分 1	区分 3	【D3】
629	【鼻息が荒い】はないきがあらいい	8	3. 3430	区分 1	区分 3	【D3】
630	△【鼻が利く】はながきく	5	2. 3421	区分 2	区分 1	【D3】
631	【鼻が高い】はながたかい	6	3. 3041	区分 1	区分 2	【D3】
632	○【話にならない】はなしにならない	8	3. 1920	区分 5	区分 5	【A2】
633	△【話に花が咲く】はなしにはながさく	9	2. 1540	区分 3	区分 4	【C3】
634	【話の腰を折る】はなしのこしをおる	9	2. 3100	区分 3	区分 1	【C3】
635	【鼻であしらう】なはであしらう	7	2. 3680	区分 1	区分 1	【D3】
636	【鼻に掛ける】はなにかける	6	2. 3041	区分 3	区分 2	【C3】
637	◎【鼻に付く】はなにつく	5	2. 3020	区分 3	区分 3	【B3】
638	◎【鼻に付く】はなにつく	5	2. 5040	区分 2	区分 2	【D3】
639	○【鼻持ちならない】はなもちならない	8	3. 3020	区分 3	区分 2	【B3】
640	○【鼻を明かす】はなをあかす	6	2. 3570	区分 2	区分 1	【C3】
641	○【鼻を折る】はなをおる	5	2. 3041	区分 1	区分 1	【D3】
642	【鼻を突く】はなをつく	5	2. 5040	区分 4	区分 4	【B3】
643	【鼻を鳴らす】はなをならす	6	2. 3020	区分 5	区分 1	【B3】
644	○【花を持たせる】はなをもたせる	7	2. 3680	区分 2	区分 2	【C3】
645	【歯にきぬを着せない】はにきぬをきせない	9	3. 3100	区分 2	区分 1	【D3】
646	【羽を伸ばす】はねをのばす	6	2. 3013	区分 2	区分 2	【D3】
647	○【歯の根が合わない】はのねがあわない	8	3. 3012	区分 1	区分 1	【D3】
648	【幅を利かせる】はばをきかせる	7	2. 3030	区分 4	区分 4	【A3】
649	○【羽目を外す】はめをはずす	6	2. 1340	区分 4	区分 2	【B3】
650	【腹が据わる】はらがすわる	6	2. 3000	区分 2	区分 2	【D3】
651	【腹が立つ】はらがたつ	5	2. 3012	区分 5	区分 5	【A2】
652	【腹が太い】はらがふとい	6	3. 3420	区分 1	区分 1	【D3】
653	【腹に据えかねる】はらにすえかねる	8	2. 3012	区分 3	区分 2	【C3】
654	【腹の虫が治まらない】はらのむしがおさまらない	12	3. 3012	区分 2	区分 1	【D3】
655	【腹を決める】はらをきめる	6	2. 3067	区分 3	区分 4	【B3】
656	【腹をくくる】はらをくくる	6	2. 3067	区分 4	区分 4	【B3】
657	【腹を探る】はらをさぐる	6	2. 3065	区分 2	区分 2	【D3】
658	【腹を据える】はらをすえる	6	2. 3067	区分 1	区分 2	【D3】
659	【腹を立てる】はらをたてる	6	2. 3012	区分 5	区分 5	【A1】
660	【腹を割る】はらをわる	5	2. 3141	区分 3	区分 4	【C3】
661	△【はれ物に触るよう】はれものにさわるよう	10	3. 3045	区分 2	区分 2	【C3】
662	【歯を食い縛る】はをくいしばる	7	2. 3040	区分 5	区分 5	【A3】
663	【万事休す】ばんじきゅうす	6	2. 1346	区分 3	区分 3	【B3】

664	【判で押したよう】はんでおしたよう	8	3. 1130	区分 3	区分 3	【B3】
665	【火が消えたよう】ひがきえたよう	7	3. 1400	区分 1	区分 2	【D3】
666	○【びくともしない】びくともしない	7	3. 3030	区分 4	区分 4	【B3】
667	○【引けを取る】ひけをとる	5	2. 1584	区分 4	区分 5	【B3】
668	△【ひざを乗り出す】ひざをのりだす	7	2. 3391	区分 2	区分 1	【D3】
669	【ひざを交える】ひざをまじえる	7	2. 3531	区分 1	区分 3	【D3】
670	【額を集める】ひたいをあつめる	8	2. 3510	区分 1	区分 1	【D3】
671	【引っ込みがつかない】ひっこみがつかない	9	3. 3041	区分 2	区分 2	【D3】
672	【一泡吹かせる】ひとあわふかせる	8	2. 3570	区分 2	区分 2	【D3】
673	△【人聞きが悪い】ひとぎきがわるい	8	3. 3100	区分 2	区分 1	【D3】
674	【一筋縄では行かない】ひとすじなわではいかない	12	3. 1346	区分 4	区分 4	【B3】
675	【ひとたまりもない】ひとたまりもない	8	3. 1400	区分 4	区分 3	【B3】
676	【一旗揚げる】ひとはたあげる	7	2. 3311	区分 3	区分 2	【C3】
677	【一肌脱ぐ】ひとはだぬぐ	6	2. 3650	区分 2	区分 3	【D3】
678	【ひとみを凝らす】ひとみをこらす	7	2. 3091	区分 1	区分 1	【D3】
679	○【人目に付く】ひとめにつく	6	2. 3091	区分 5	区分 5	【B3】
680	【人目を忍ぶ】ひとめをしのぶ	7	2. 1210	区分 3	区分 2	【C3】
681	【人目をはばかり】ひとめをはばかり	8	2. 1210	区分 2	区分 2	【D3】
682	【人目を引く】ひとめをひく	6	2. 3091	区分 4	区分 4	【B3】
683	○【一役買う】ひとやくかう	6	2. 3541	区分 4	区分 5	【A3】
684	○【人を食う】ひとをくう	5	2. 3683	区分 2	区分 3	【D3】
685	【火に油を注ぐ】ひにあぶらをそそぐ	9	2. 1400	区分 3	区分 3	【C3】
686	【非の打ち所がない】ひのうちどころがない	10	3. 1331	区分 4	区分 2	【C3】
687	△【火の海】ひのうみ	4	1. 5161	区分 3	区分 4	【C3】
688	【火の車】ひのくるま	5	1. 3790	区分 3	区分 4	【B3】
689	【日の出の勢い】ひのでのいきおい	8	1. 1403	区分 1	区分 1	【D3】
690	○【目の目を見る】ひのめをみる	6	2. 1524	区分 4	区分 5	【A3】
691	【火花を散らす】ひばなをちらす	7	2. 3543	区分 2	区分 5	【C3】
692	○【火ぶたを切る】ひぶたをきる	6	2. 1502	区分 2	区分 3	【C3】
693	【百も承知】ひやくもしょうち	6	3. 3068	区分 5	区分 3	【A3】
694	【冰山の一角】ひょうざんのいっかく	9	1. 1940	区分 3	区分 5	【B3】
695	【ピリオドを打つ】ピリオドをうつ	7	2. 1503	区分 4	区分 4	【B3】
696	△【目を追って】ひをおって	5	3. 1650	区分 4	区分 4	【B3】
697	○【ピンからキリまで】ピンからキリまで	8	3. 1940	区分 3	区分 2	【C3】
698	【不意を食う】ふいをくう	5	2. 1611	区分 1	区分 1	【D3】
699	【不意を突く】ふいをつく	5	2. 3560	区分 5	区分 3	【B3】
700	【風雲急を告げる】ふううんきゅうをつげる	10	2. 3543	区分 1	区分 2	【D3】
701	【風前のともしび】ふうぜんのともしび	9	1. 1346	区分 2	区分 3	【D3】
702	【不覚を取る】ふかくをとる	6	2. 3470	区分 2	区分 3	【D3】
703	【袋のねずみ】ふくろのねずみ	7	1. 1346	区分 2	区分 1	【D3】
704	【不幸中の幸い】ふこうちゅうのさいわい	10	1. 3310	区分 4	区分 4	【C3】
705	【筆が立つ】ふでがたつ	5	2. 3200	区分 1	区分 1	【D3】
706	○【筆を入れる】ふでをいれる	6	2. 3200	区分 1	区分 3	【D3】
707	○【筆を加える】ふでをくわえる	7	2. 3200	区分 1	区分 1	【D3】
708	【筆を執る】ふでをとる	5	2. 3151	区分 4	区分 4	【B3】
709	【筆をふるう】ふでをふるう	6	2. 3151	区分 2	区分 4	【D3】

710	【ふに落ちない】ふにおちない	6	3. 3068	区分 5	区分 3	【B3】
711	【船をこぐ】ふねをこぐ	5	2. 3003	区分 1	区分 1	【D3】
712	【踏んだりけったり】ふんだりけったり	8	3. 3310	区分 2	区分 3	【D3】
713	【べそをかく】べそをかく	5	2. 3030	区分 4	区分 3	【B3】
714	【へそを曲げる】へそをまげる	6	2. 3030	区分 2	区分 2	【D3】
715	【へとも思わない】へともおもわない	8	3. 1346	区分 1	区分 1	【D3】
716	△【変哲もない】へんてつもない	7	3. 1331	区分 5	区分 4	【A3】
717	○【棒に振る】ぼうにふる	5	2. 1250	区分 3	区分 4	【C3】
718	【ほうほうの体】ほうほうのてい	7	3. 3390	区分 3	区分 1	【C3】
719	【ほごにする】ほごにする	5	2. 3530	区分 3	区分 4	【C3】
720	○【骨が折れる】ほねがおれる	6	2. 3040	区分 4	区分 4	【A3】
721	【骨身にこたえる】ほねみにこたえる	8	2. 3001	区分 1	区分 1	【D3】
722	【骨身を惜しまない】ほねみをおしまない	9	3. 3040	区分 1	区分 1	【D3】
723	【骨身を削る】ほねみをけずる	7	2. 3040	区分 1	区分 2	【D3】
724	△【骨を埋める】ほねをうずめる	7	2. 3040	区分 3	区分 4	【D3】
725	○【骨を折る】ほねをおる	5	2. 3040	区分 4	区分 4	【B3】
726	△【ぼろが出る】ぼろがでる	5	2. 3470	区分 2	区分 1	【C3】
727	【本腰を入れる】ほんごしをいれる	8	2. 3040	区分 4	区分 5	【B3】
728	【枚挙にいとまがない】まいきょにいとまがない	10	3. 1910	区分 4	区分 4	【A2】
729	○【魔が差す】まがさす	4	2. 3003	区分 2	区分 3	【D3】
730	○【間が抜ける】まがぬける	5	2. 3062	区分 5	区分 2	【B3】
731	○【間が悪い】まがわるい	5	3. 3310	区分 3	区分 2	【C3】
732	【幕が開く】まくがあく	5	2. 1502	区分 3	区分 4	【B3】
733	【幕を開ける】まくをあける	6	2. 1502	区分 4	区分 5	【A3】
734	【幕を閉じる】まくをとじる	6	2. 1503	区分 4	区分 5	【A3】
735	【負けず劣らず】まけずおとらず	7	3. 1130	区分 4	区分 3	【B3】
736	○【またに掛ける】またにかける	6	2. 3333	区分 3	区分 2	【B3】
737	【的を射る】まとをいる	5	2. 3070	区分 1	区分 4	【D3】
738	◎【間に合う】まにあう	4	2. 1660	区分 5	区分 5	【A1】
739	◎【間に合う】まにあう	4	2. 1931	区分 5	区分 5	【A2】
740	○【真に受ける】まにうける	5	2. 3061	区分 5	区分 4	【B3】
741	【まゆをひそめる】まゆをひそめる	7	2. 3030	区分 5	区分 4	【A2】
742	【まんじりとしめない】まんじりとしめない	9	3. 3330	区分 3	区分 2	【C3】
743	【磨きを掛ける】みがきをかける	7	2. 3050	区分 4	区分 5	【A3】
744	【身が入る】みがはいる	5	2. 3040	区分 3	区分 4	【B3】
745	△【右から左】みぎからひだり	7	3. 1671	区分 3	区分 2	【D3】
746	【右に出る者がいない】みぎにでるものがない	10	3. 1584	区分 2	区分 2	【D3】
747	○【見切りをつける】みきりをつける	7	2. 3067	区分 5	区分 5	【A3】
748	【水と油】みずとあぶら	6	3. 1120	区分 3	区分 4	【C3】
749	○【水に流す】みずにながす	6	2. 3500	区分 3	区分 4	【C3】
750	【水の泡】みずのあわ	5	1. 1112	区分 3	区分 3	【B3】
751	【水も漏らさぬ】みずももらさぬ	7	3. 1331	区分 1	区分 2	【D3】
752	【水をあける】みずをあける	6	2. 1584	区分 2	区分 5	【C3】
753	【水を打ったよう】みずをうったよう	8	3. 5030	区分 3	区分 2	【D3】
754	○【水を差す】みずをさす	5	2. 1563	区分 4	区分 5	【B3】
755	○【水を向ける】みずをむける	6	2. 3132	区分 4	区分 4	【C3】

756	【みそを付ける】みそをつける	6	2. 3470	区分 1	区分 2	【D3】
757	○【道草を食う】みちくさをくう	7	2. 1520	区分 2	区分 2	【D3】
758	【身に余る】みにあまる	5	3. 1332	区分 2	区分 3	【D3】
759	○【身に覚えがない】みにおぼえがない	8	3. 3066	区分 4	区分 4	【A3】
760	【身にしみる】みにしみる	5	2. 3002	区分 5	区分 5	【A2】
761	【身に付く】みにつく	4	2. 3050	区分 5	区分 5	【A1】
762	○【身に付ける】みにつける	5	2. 3050	区分 5	区分 5	【A1】
763	【身につまされる】みにつまされる	7	2. 3014	区分 2	区分 4	【C3】
764	△【身になる】みになる	4	2. 1700	区分 4	区分 4	【B3】
765	【身の毛がよだつ】みのけがよだつ	7	2. 3012	区分 3	区分 2	【C3】
766	○【耳が痛い】みみがいたい	6	3. 3041	区分 2	区分 3	【C3】
767	【耳が遠い】みみがとおい	6	3. 5710	区分 3	区分 4	【B3】
768	【耳が早い】みみがはやい	6	3. 3090	区分 1	区分 1	【D3】
769	【耳に入れる】みみにいれる	6	2. 3093	区分 4	区分 2	【B3】
770	【耳にする】みみにする	5	2. 3093	区分 5	区分 5	【A1】
771	【耳にたこができる】みみにたこができる	9	2. 3093	区分 2	区分 2	【D3】
772	【耳につく】みみにつく	5	2. 3093	区分 3	区分 2	【C3】
773	【耳に入る】みみにはいる	6	2. 3093	区分 5	区分 4	【A2】
774	【耳に挟む】みみにはさむ	6	2. 3093	区分 1	区分 3	【D3】
775	【耳を疑う】みみをうたがう	7	2. 3093	区分 5	区分 4	【B3】
776	【耳を貸す】みみをかす	5	2. 3093	区分 5	区分 4	【A2】
777	【耳を傾ける】みみをかたむける	8	2. 3093	区分 5	区分 5	【A1】
778	【耳を澄ます】みみをすます	6	2. 3093	区分 5	区分 5	【A2】
779	【耳をそばだてる】みみをそばだてる	8	2. 3093	区分 4	区分 3	【D3】
780	【耳をそろえる】みみをそろえる	7	2. 1342	区分 1	区分 1	【D3】
781	○【身もふたもない】みもふたもない	7	3. 3011	区分 3	区分 2	【C3】
782	○【脈が有る】みやくがある	5	3. 3410	区分 2	区分 2	【D3】
783	【見様見まね】みようみまね	6	1. 3050	区分 4	区分 5	【A3】
784	○【見る影もない】みるかげもない	7	3. 3300	区分 4	区分 3	【B3】
785	【見るに忍びない】みるにしのびない	8	3. 3090	区分 2	区分 2	【C3】
786	【見るに見兼ねて】みるにみかねて	7	3. 3090	区分 2	区分 2	【D3】
787	【身を入れる】みをいれる	5	2. 3040	区分 3	区分 3	【B3】
788	【身を固める】みをかためる	6	2. 3410	区分 5	区分 4	【B3】
789	○【身を粉にする】みをこにする	6	2. 3040	区分 3	区分 3	【B3】
790	【身を立てる】みをたてる	5	2. 3311	区分 4	区分 3	【B3】
791	【身を引く】みをひく	4	2. 3311	区分 5	区分 5	【A3】
792	【実を結ぶ】みをむすぶ	5	2. 1220	区分 5	区分 5	【A2】
793	【身をもって】みをもって	5	3. 3045	区分 5	区分 5	【A2】
794	【身を寄せる】みをよせる	5	2. 3333	区分 5	区分 5	【A2】
795	【虫がいい】むしがいい	5	3. 3042	区分 4	区分 4	【A3】
796	【虫が知らせる】むしがしらせる	7	2. 3001	区分 1	区分 1	【D3】
797	【虫が好かない】むしがすかない	7	3. 3020	区分 2	区分 1	【C3】
798	【虫が走る】むしずがはしる	7	2. 3020	区分 2	区分 1	【D3】
799	【虫の息】むしのいき	5	1. 5710	区分 2	区分 2	【D3】
800	【虫の居所が悪い】むしのいどころがわるい	11	3. 3011	区分 2	区分 1	【C3】
801	【虫の知らせ】むしのしらせ	6	1. 3001	区分 2	区分 1	【D3】

802	【胸くそが悪い】むなくそがわるい	8	3. 3011	区分 1	区分 1	【D3】
803	【胸が痛む】むねがいたむ	6	2. 3014	区分 5	区分 5	【B3】
804	【胸が一杯になる】むねがいっぱいになる	10	2. 3002	区分 4	区分 4	【B3】
805	△【胸が躍る】むねがおどる	6	2. 3011	区分 2	区分 3	【D3】
806	【胸がすく】むねがすく	5	2. 3011	区分 2	区分 3	【D3】
807	【胸がつぶれる】むねがつぶれる	7	2. 3014	区分 2	区分 2	【D3】
808	○【胸が詰まる】むねがつまる	6	2. 3002	区分 4	区分 4	【C3】
809	【胸が張り裂ける】むねがはりさける	8	2. 3014	区分 3	区分 3	【C3】
810	△【胸が膨らむ】むねがふくらむ	7	2. 3011	区分 1	区分 1	【D3】
811	【胸がふさがる】むねがふさがる	7	2. 3014	区分 1	区分 2	【D3】
812	【胸に刻む】むねにきざむ	6	2. 3050	区分 3	区分 5	【C3】
813	【胸に迫る】むねにせまる	6	2. 3002	区分 3	区分 4	【B3】
814	【胸を痛める】むねをいためる	7	2. 3014	区分 3	区分 4	【B3】
815	【胸を打つ】むねをうつ	5	2. 3002	区分 4	区分 5	【B3】
816	○【胸を躍らせる】むねをおどらせる	8	2. 3011	区分 3	区分 3	【C3】
817	○【胸をなで下ろす】むねをなでおろす	8	2. 3013	区分 5	区分 5	【A3】
818	【胸を張る】むねをはる	5	2. 3041	区分 5	区分 5	【A2】
819	○【胸を膨らませる】むねをふくらませる	9	2. 3042	区分 3	区分 4	【C3】
820	【無用の長物】むようのちょうぶつ	8	1. 4000	区分 3	区分 3	【C3】
821	【目が利く】めがきく	4	2. 3066	区分 2	区分 1	【C3】
822	○【目がくらむ】めがくらむ	5	2. 3067	区分 4	区分 3	【B3】
823	○【目が肥える】めがこえる	5	2. 3066	区分 2	区分 3	【D3】
824	○【目が覚める】めがさめる	5	2. 3003	区分 4	区分 4	【C3】
825	○【目頭が熱くなる】めがしらがあつくなる	10	2. 3002	区分 3	区分 4	【B3】
826	【目が据わる】めがすわる	5	2. 5721	区分 2	区分 1	【D3】
827	【目が高い】めがたかい	5	3. 3421	区分 2	区分 5	【D3】
828	○【芽が出る】めがでる	4	2. 1211	区分 1	区分 4	【D3】
829	【目がない】めがない	4	3. 3020	区分 4	区分 3	【A3】
830	【眼鏡にかなう】めがねにかなう	7	2. 3142	区分 2	区分 2	【C3】
831	【目が回る】めがまわる	5	2. 5721	区分 2	区分 4	【D3】
832	【目からうろこが落ちる】めからうろこがおちる	10	2. 3062	区分 3	区分 3	【B3】
833	【目から鼻へ抜ける】めからはなへぬける	9	2. 3421	区分 1	区分 1	【D3】
834	【目くじらを立てる】めくじらをたてる	8	2. 3030	区分 3	区分 3	【B3】
835	【メスを入れる】メスをいれる	6	2. 3065	区分 4	区分 5	【B3】
836	【めどが付く】めどがつく	5	2. 3066	区分 3	区分 5	【C3】
837	【目と鼻の間】めとはなのあいだ	8	1. 1911	区分 1	区分 1	【D3】
838	○【目に余る】めにあまる	5	3. 1332	区分 4	区分 4	【B3】
839	△【目に浮かぶ】めにうかぶ	5	2. 1210	区分 5	区分 5	【A2】
840	【目に角を立てる】めにかどをたてる	8	2. 3030	区分 1	区分 1	【D3】
841	【目にする】めにする	4	2. 3091	区分 5	区分 5	【A1】
842	○【目に付く】めにつく	4	2. 3091	区分 5	区分 5	【A1】
843	【目に留まる】めにとまる	5	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
844	【目に入る】めにはいる	5	2. 3091	区分 5	区分 5	【A1】
845	【目に触れる】めにふれる	5	2. 3091	区分 4	区分 4	【A3】
846	【目に見えて】めにみえて	5	3. 1920	区分 5	区分 5	【A2】
847	【目にも留まらぬ】めにもとまらぬ	7	3. 1913	区分 3	区分 2	【C3】

848	【目に物見せる】めにものみせる	7	2. 3570	区分 2	区分 1	【D3】
849	【目の色を変える】めのいろをかえる	8	2. 3030	区分 3	区分 3	【C3】
850	【目の上のこぶ】めのうえのこぶ	7	1. 1563	区分 2	区分 1	【D3】
851	【目の黒いうち】めのくろいうち	7	1. 1652	区分 1	区分 2	【D3】
852	【目の中に入れても痛くない】 めのなかにいれてもいたくない	14	3. 3020	区分 2	区分 1	【D3】
853	【目鼻が付く】めはながつく	6	2. 1220	区分 1	区分 2	【D3】
854	【目星を付ける】めぼしをつける	7	2. 3066	区分 3	区分 2	【C3】
855	○【目も当てられない】めもあてられない	8	3. 3012	区分 3	区分 2	【C3】
856	【目もくれない】めもくれない	6	3. 3000	区分 5	区分 4	【B3】
857	○【目を疑う】めをうたがう	6	2. 3002	区分 5	区分 4	【B3】
858	○【目を奪う】めをうばう	5	2. 3091	区分 5	区分 5	【A3】
859	【目を覆う】めをおおう	5	2. 3091	区分 4	区分 4	【B3】
860	△【目を落とす】めをおとす	5	2. 3091	区分 5	区分 4	【B3】
861	○【目を掛ける】めをかける	5	2. 3650	区分 5	区分 4	【A3】
862	【目を配る】めをくばる	5	2. 3091	区分 5	区分 4	【A3】
863	【目をくらます】めをくらます	6	2. 1210	区分 4	区分 2	【C3】
864	【目を凝らす】めをこらす	5	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
865	○【目を覚ます】めをさます	5	2. 3003	区分 4	区分 4	【B3】
866	【目を皿のようにする】めをさらのようにする	10	2. 3091	区分 2	区分 2	【B3】
867	【目を白黒させる】めをしろくろさせる	9	2. 3002	区分 4	区分 2	【C3】
868	【目を注ぐ】めをそそぐ	5	2. 3091	区分 4	区分 3	【C3】
869	△【目を背ける】めをそむける	6	2. 3091	区分 5	区分 5	【A3】
870	【目を付ける】めをつける	5	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
871	○【目をつぶる】めをつぶる	5	2. 3670	区分 4	区分 5	【A3】
872	○【目を通す】めをとおす	5	2. 3150	区分 5	区分 5	【A2】
873	【目を盗む】めをぬすむ	5	2. 1210	区分 4	区分 4	【A3】
874	【目を離す】めをはなす	5	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
875	△【目を光らす】めをひからす	6	2. 3091	区分 5	区分 5	【A3】
876	【目を引く】めをひく	4	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
877	【芽を吹く】めをふく	4	2. 5701	区分 2	区分 1	【D3】
878	△【目を細くする】めをほそくする	7	2. 3030	区分 2	区分 1	【D3】
879	○【目を丸くする】めをまるくする	7	2. 3002	区分 5	区分 4	【B3】
880	【目を回す】まをまわす	5	2. 3002	区分 3	区分 2	【C3】
881	○【目を見張る】めをみはる	5	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
882	○【目をむく】めをむく	4	2. 3002	区分 5	区分 4	【B3】
883	【目をやる】めをやる	4	2. 3091	区分 5	区分 5	【A2】
884	【持ちつ持たれつ】もちつもたれつ	7	3. 1120	区分 3	区分 4	【B3】
885	【もったいをつける】もったいをつける	8	2. 3030	区分 2	区分 1	【D3】
886	【元の本阿弥】もとのもくあみ	7	1. 1300	区分 3	区分 3	【B3】
887	○【元も子もない】もともこもない	7	3. 1200	区分 4	区分 4	【B3】
888	△【物心がつく】ものごころがつく	8	2. 3000	区分 3	区分 3	【B3】
889	◎【物にする】ものにする	5	2. 3050	区分 5	区分 4	【A2】
890	◎【物にする】ものにする	5	2. 3700	区分 5	区分 5	【A3】
891	【物になる】ものになる	5	2. 1220	区分 3	区分 1	【B3】

892	△【物は試し】ものはためし	6	1. 3065	区分 2	区分 1	【D3】
893	○【物を言う】ものをいう	5	2. 1112	区分 5	区分 5	【A2】
894	【物を言わせる】ものをいわせる	7	2. 1112	区分 4	区分 4	【B3】
895	○【矢面に立つ】やおもてにたつ	7	2. 3543	区分 3	区分 4	【B3】
896	【焼きが回る】やきがまわる	6	2. 3062	区分 1	区分 1	【D3】
897	○【焼きを入れる】やきをいれる	6	2. 3682	区分 1	区分 1	【D3】
898	【役に立つ】やくにたつ	5	2. 1112	区分 5	区分 5	【A1】
899	【焼け石に水】やけいしにみず	7	3. 1112	区分 1	区分 4	【D3】
900	○【やせても枯れても】やせてもかれても	8	4. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
901	【矢の催促】やのさいそく	6	1. 3670	区分 1	区分 1	【D3】
902	○【やぶから棒】やぶからぼう	6	3. 3066	区分 2	区分 1	【D3】
903	【やむにやまれず】やむにやまれず	7	3. 1230	区分 3	区分 3	【B3】
904	【やむを得ず】やむをえず	5	3. 1230	区分 5	区分 5	【A1】
905	【やむを得ない】やむをえない	6	3. 1230	区分 5	区分 5	【A1】
906	○【やり玉に挙げる】やりだまにあげる	8	2. 3683	区分 3	区分 4	【B3】
907	【有終の美を飾る】ゆうしゅうのびをかざる	10	2. 1503	区分 1	区分 4	【D3】
908	○【指をくわえる】ゆびをくわえる	7	2. 3430	区分 3	区分 3	【C3】
909	【湯水のように使う】ゆみずのようにつかう	10	2. 3710	区分 2	区分 2	【D3】
910	○【弓を引く】ゆみをひく	5	2. 3543	区分 2	区分 2	【D3】
911	◎【用を足す】ようをたす	5	2. 3400	区分 2	区分 2	【C3】
912	◎【用を足す】ようをたす	5	2. 5710	区分 5	区分 4	【A3】
913	【善かれあしかれ】よかれあしかれ	7	3. 1332	区分 2	区分 2	【C3】
914	【欲の皮が突っ張る】よくのかわがつっぱる	10	2. 3042	区分 1	区分 1	【D3】
915	【横車を押す】よこぐるまをおす	8	2. 3040	区分 1	区分 1	【D3】
916	【横やりを入れる】よこやりをいれる	8	2. 3522	区分 1	区分 2	【D3】
917	【夜の目も寝ずに】よのめもねずに	7	3. 3330	区分 1	区分 1	【D3】
918	【夜も目も明けない】よもひもあけない	8	3. 1600	区分 1	区分 1	【D3】
919	【寄ると触ると】よるとさわると	7	3. 1612	区分 1	区分 1	【D3】
920	△【弱音を吐く】よわねをはく	6	2. 3031	区分 3	区分 4	【B3】
921	○【弱目にたたり目】よわりめにたたりめ	9	3. 3310	区分 1	区分 1	【D3】
922	【世を去る】よをさる	4	2. 5702	区分 5	区分 5	【A2】
923	【らく印を押される】らくいんをおされる	9	2. 3071	区分 4	区分 3	【A3】
924	【らちが明かない】らちがあかない	7	2. 3067	区分 4	区分 3	【A3】
925	△【らっぱを吹く】らっぱをふく	6	2. 3100	区分 1	区分 1	【D3】
926	○【レッテルをはる】レッテルをはる	7	2. 3066	区分 5	区分 4	【A3】
927	【路頭に迷う】ろとうにまよう	7	2. 3330	区分 4	区分 4	【B3】
928	【ろれつが回らない】ろれつがまわらない	9	3. 3100	区分 3	区分 3	【C3】
929	【若気の至り】わかげのいたり	7	1. 3470	区分 3	区分 2	【B3】
930	【わき目も振らず】わきめもふらず	7	3. 3040	区分 3	区分 3	【C3】
931	【訳は無い】わけはない	5	3. 1346	区分 5	区分 4	【A2】
932	【渡りに船】わたりにふね	6	3. 1611	区分 3	区分 4	【C3】
933	【我に返る】われにかえる	6	2. 3002	区分 5	区分 4	【B3】
934	【我も我もと】われもわれもと	7	3. 3045	区分 2	区分 2	【D3】
935	【我を忘れる】われをわすれる	7	2. 3002	区分 5	区分 3	【A3】
936	【輪を掛ける】わをかける	5	2. 1580	区分 4	区分 4	【B3】

資料2 慣用句に関する主要先行研究一覧

I 慣用句の認定及び特徴に関する研究

- 阿刀田稔子（1977）「慣用句雑感（＜特集＞日本語の表現—慣用語句、特別な言いまわし）」『日本語教育』33号日本語教育学会 pp. 36-42
- 神田靖子（2002）「機能動詞結合とその他動性をめぐる覚書」『同志社大学留学生別科紀要』2 同志社大学 pp. 55-73
- 国広哲弥（1985）「慣用句論」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 4-14
- 後藤斉（2002）「慣用句と自由な語結合の間—『博する』を例にして—」『東北大学言語学論集』11 東北大学言語学研究会 pp. 1-8
- 島本基（1994）「社説の語彙（慣用句とその周辺）」『無差』1 京都外国語大学 pp. 41-60
- 白石大二（1977a）「慣用句とその種類—高田与清『松屋筆記』を手がかりとして—（＜特集＞日本語の表現—慣用語句、特別な言いまわし—）」『日本語教育』33号日本語教育学会 pp. 11-22
- 高木一彦（1974）「慣用句研究のために」『教育国語』38 むぎ書房 pp. 2-21
- 高木一彦（2005）「慣用句と連語（＜特集＞連語研究の新段階）」『国文学解釈と鑑賞』70(7) 至文堂 pp. 141-153
- 宮地裕（1974）『『成句』の分類』『語文』第32輯大阪大学国文学研究室編輯 pp. 113-121
- 宮地裕（1977）「慣用句と連語成句（＜特集＞日本語の表現—慣用語句、特別な言いまわし）」『日本語教育』33号日本語教育学会 pp. 1-10
- 宮地裕（1985）「慣用句の周辺—連語・ことわざ・複合語—」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 62-75
- 村木新次郎（1985）「慣用句・機能動詞結合・自由な語結合」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 15-27
- 森田良行（1994）「ことわざ・慣用句の新旧」『国文学解釈と鑑賞』59(1) pp. 142-147 至文堂

II 慣用句の形態や構造に関する研究

- 飛鳥博臣（1982）「日本語動詞慣用句の階層性」『月刊言語』十周年記念臨時増刊号 Vol. 11No. 13 pp. 72-100
- 石田プリシラ（1998）「慣用句の変異形について—形式的固定性をめぐって—」『筑波応用言語学研究』5pp. 43-56
- 石田プリシラ（1999）「動詞慣用句の慣用性の度合—統語的固定性を目安として—」『筑波応用言語学研究』6pp. 69-83
- 石田プリシラ（2000）「動詞慣用句に対する統語的操作の階層関係」『日本語科学』7 国立国語研究所『日本語科学』編集委員会 pp. 24-43
- 大谷晋也（1996）『『気』の慣用句の結合度（＜特集＞『気』の語句）』『日本語学』15(7) 明治書院 pp. 55-68
- 大月実（1987）「慣用句にあらわれた身体（＜特集＞身体から発することば）」『言語生活』423 筑摩書房 pp. 40-45
- 大坪喜子（1985）「名詞慣用句—特に隠喩的慣用句について—」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 54-61

- 島本基（1995）「動詞慣用句の揺れ一助詞について」『無差』2 京都外国語大学 pp. 45-61
- 白石大二（1975）「食物・味覚に関する成語・慣用句（＜特集＞たべものことば）」『言語生活』286 筑摩書房 pp. 34-39
- 程長善（1996）「日本語慣用句の語彙的な特徴に関する一考察」『経営研究』9（3）愛知学泉大学 pp. 455-470
- 西尾寅弥（1985）「形容詞慣用句」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 45-53
- 藤巻一真（2005）「日本語 3 項動詞の慣用句について」『東京国際大学論叢 言語コミュニケーション学部編』1 東京国際大学 pp. 69-80
- 藤巻一真（2006）「慣用句と右方転移」*Scientific approaches to language* 5 神田外語大学 pp. 233-250
- 藤巻一真（2009）「慣用句における取り立て」*Scientific approaches to language* 8 神田外語大学 pp. 27-42
- 宮地裕（1982a）「動詞慣用句（＜特集＞動詞の研究）」『日本語教育』47 号 日本語教育学会 pp. 91-102
- 森田良行（1985）「動詞慣用句」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 37-44

Ⅲ 慣用句の意味・用法に関する研究

- 秋山智美（2009）「同義・類義の慣用表現にみる使用差」『東京交通短期大学研究紀要』15pp. 139-145
- 有菌智美（2008）『『顔』の意味拡張に対する認知的考察』『言葉と文化』9 名古屋大学大学院国際言語文化研究科 pp. 287-301
- 有菌智美（2014）「〈物事との関与〉を表す表現の意味の成立—『手』、『足』の慣用句—」『名古屋学院大学論集言語・文化篇』25（2）名古屋学院大学総合研究所 pp. 79-95
- 石田プリシラ（2003a）「慣用句の意味を分析する方法」『日本語と日本文学』37 筑波大学国語国文学会 pp. 13-26
- 石田プリシラ（2003b）「慣用句の意味分析—《驚き》を表す動詞慣用句・一般動詞を中心に—」『筑波応用言語学研究』10pp. 1-16
- 石田プリシラ（2004）「動詞慣用句の意味的固定性を計る方法—統語的操作を手段として—」『国語学』55（4）日本語学会 pp. 42-56
- 上条由実・富所諒子（2004）「肩・胸・脇・背を含む慣用句と比喻」『信大日本語教育研究』4 信州大学人文学部日本語教育学研究室 pp. 28-32
- 權益湖（2002）「マスコミにおける日本語表現について—漢語と慣用句を中心に—」『東アジア日本語教育・日本文化研究』5 東アジア日本語教育・日本文化研究学会 pp. 31-41
- 小池清治・キロワスペトラ（2003）「慣用句の分類とその応用」『宇都宮大学国際学部研究論集』16 宇都宮大学国際学部 pp. 89-104
- 坂本勉（1982）「慣用句と比喻—慣用化の度合の観点から—」『言語学研究』1 pp. 1-21
- 土屋智行（2007）「動詞慣用句の連体修飾と意味解釈の関係—『顔/目/手/を V』の表現を中心に—」『日本語用論学会大会研究発表論文集』3 日本語用論学会 pp. 113-120
- 土屋智行（2011）「言語の創造性の基盤としての定型表現—慣用句およびことわざの拡張用法の調査—」『認知科学』18（2） pp. 370-374
- 中村明（1977）「語の意味と固定連語の扱い（＜特集＞日本語の表現—慣用語句、特別な言いまわし—）」

『日本語教育』33号日本語教育学会 pp. 43-54

中村明 (1985)「慣用句と比喩表現」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 28-36

中村明 (2009)「感情表現の慣用句と比喩（＜特集＞日本語の形容詞とその周辺一意味・機能から一）」『国文学解釈と鑑賞』74(7) pp. 70-81

藤巻一真 (2007)「慣用句における移動と解釈の問題」*Scientific approaches to language* 6 神田外語大学 pp. 1-12

方小賛 (2014)「日本語慣用句の成り立ち—理論的な枠組みと発生のメカニズム—」『外国文学』63 宇都宮大学外国文学研究会 pp. 77-85

宮地裕 (1982b)『慣用句の意味と用法』明治書院

宮地裕 (1991)「慣用句の意味」『「ことば」シリーズ 34 言葉の意味』文化庁 pp. 65-76

宮田剛章 (2006)「日本語母語話者による動詞慣用句の敬語化」『都大論究』43 東京都立大学国語国文学会 pp. 13-24

村田年・山崎誠 (2011)「『手』の慣用句を指標とした文章ジャンルの判別—現代日本語書き言葉均衡コーパスを用いて—」『日本語と日本語教育』39 慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター紀要 pp. 75-88

榎山洋介 (1997)「慣用句の体系的分類—隠喩・換喩・提喩に基づく慣用的意味の成立を中心に—」『名古屋大学国語国文学』第80号 pp. 29-43

IV 慣用句教育

秋元美晴 (2009)「日本語教育から見たことばと文化—身体語彙を含む慣用句を中心に—」『外国語学研究』10 大東文化大学大学院外国語学研究科 pp. 175-185

新垣真 (2007)「慣用句表現の学習指導の実践と考察—マルチメディアの活用を通して—」『沖縄国際大学語文と教育の研究』8 沖縄国際大学国語教育研究室 pp. 27-37

沖裕子 (2004a)「比喩の形式と意味—日本語教育のための基礎的研究—」『信大日本語教育研究』4 信州大学人文学部日本語教育学研究室 pp. 2-15

沖裕子 (2004b)「日本語の身体慣用句一覧」『信大日本語教育研究』4 信州大学人文学部日本語教育学研究室 pp. 33-85

金子百合子 (1985)「国語教育における慣用句」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 76-83

韓美齡 (2005)「中国人日本語学習者に対する日本語慣用句の指導について—教科書の実態と学生の誤用分析から慣用句の教え方へ—」『福岡教育大学国語科研究論集』46 福岡教育大学国語国文学会 pp. 89-108

金華・鄧娟娟 (2014)「中国の大学の日本語教育における慣用句の扱い」『日本語教育研究』60 長沼言語文化研究所 pp. 97-113

蔡玉琳・仙波光明・王敏東 (2010)「『気』が句頭に位置する慣用句について—慣用句教材を編纂する手がかりとしての一考察—」『言語文化研究』18 徳島大学 pp. 143-164

阪田雪子 (1985)「日本語教育における慣用句」『日本語学』1月号 Vol. 4 明治書院 pp. 84-90

薛鳴・呉月新 (2004)「慣用句の理解に見られる母国語の影響—中国人日本語学習者の場合—」『中京学院大学研究紀要』12(1・2) 中京学院大学 pp. 13-22

張淑華 (1996)「中国人に分かり易い日本語の慣用句の記述について」『信大国語教育』6 信州大学国語教

育学会 pp. 16-26

土井哲治 (2008) 「高等教育ユニバーサル化時代の『短大生のための慣用句集』」『華頂短期大学研究紀要』
53 pp.45-53

日比野浩信 (2008) 「大学生の日本語能力の現状・各論（ことわざ・慣用句・四字熟語・部首）―豊橋技術
科学大学生の場合―」『雲雀野』 30 pp. 121-135

森田良行 (1966) 「慣用的な言い方」『講座日本語教育第2分冊』早稲田大学語学教育研究所 pp.61-78

森田良行 (1990) 「慣用的な言い方について」『日本語学と日本語教育』凡人社 pp. 411-430

李東一 (2006) 「日本語教育における慣用句―『外国人学習者の日本語教育』をメドにして―」『別府大学
国語国文学』 48 別府大学 pp. 41-59

V 慣用句に関する対照研究（中国語との対照研究を中心に）

小野米一・王婉瑩・松田知子・田原佳世・ジェビットスーザン・張海蓉 (1999) 「身体語彙を含む日本語の
慣用句―中国語・英語との対照を通して―」『語文と教育』 13 鳴門教育大学国語教育学会 pp. 66-84

夏玉玲・羅文秀 (2015) 「日中慣用句の対照研究 ―『目』を中心に―」『地域文化研究』 12 地域文化研究
学会 pp. 143-152

キロワスベトラ (2004) 「14ヶ国語における慣用句の調査―東洋と西洋の慣用句に見られる発展の傾向―」
『名古屋大学人文科学研究』 33 pp. 13-24

桂小蘭 (1992) 「日本語と中国語の慣用句に関する一考察―慣用句構成語の比較を中心に―」『大阪大学言
語文化学』 1pp. 93-102

支洪濤 (2001) 「慣用句とその周辺にあるものの概念についての考察―日中両言語における比較―」『岡山
大学国語研究』 15pp. 86-94

支洪濤・吉田則夫 (2002) 「身体部位名称を含む慣用句についての計量的分析―中国語との対照を通して―」
『研究集録』 第 121 号岡山大学教育学部 pp. 157-165

支洪濤・吉田則夫 (2003) 「身体部位名称を含む慣用句についての日中対照研究―『目』の場合―」『研究
集録』 第 124 号岡山大学教育学部 pp. 93-100

孫潮 (2001) 「身体語を含む慣用句に関する対照研究―日本語と中国語の場合―」『龍谷大学大学院文学研
究科紀要』 23pp. 270-274

鄭海燕 (2006) 「中日両言語の慣用句についての対照研究―『氣』を表すものを中心に―」『日本語教育と
異文化理解』 5 愛知教育大学国際教育学会 pp. 9-16

湯艷 (2006) 「中国と日本における“数字”文化の比較―諺と慣用句を中心に―」『研究紀要』 40 佐賀女子
短期大学 pp. 31-38

潘立波 (1998a) 「『頭』を含む慣用句の日中比較考察」『東日本国際大学研究紀要』 4 (1) pp. 191-206

潘立波 (1998b) 「日中両言語における慣用句に対する一考察―『肩』による慣用句を中心に―」『東日本国
際大学研究紀要』 3 (2) pp. 157-175

方小賛 (2011a) 「日本語と中国語における『首』を含んだ慣用句の比較」『宇都宮大学国際学部研究論集』
31pp. 137-150

方小贊（2011b）「日本語と中国語における『鼻』を含んだ慣用句の比較」『外国文学』60 宇都宮大学外国文学研究会 pp. 15-32

吉田則夫・支洪濤（1999）「身体語を含む慣用句についての日中対照研究—『頭』の場合—」『研究集録』第 110 号岡山大学教育学部 pp. 105-109

李雯（2008）「中日『慣用句』考—中日両語における猫に関する慣用的表現を中心に—」『愛媛国文と教育』40 愛媛大学教育学部国語国文学会 pp. 22-30

VI コンピュータによる研究

相菌敏子・小泉敦子・森本康嗣（2004）「慣用句抽出のための統計尺度の比較評価」『情報処理学会研究報告自然言語処理（NL）』2004-NL-162 一般社団法人情報処理学会 pp. 103-108

佐藤理史（2007）「基本慣用句五種対照表の作成」『情報処理学会研究報告自然言語処理（NL）』2007-NL-178 一般社団法人情報処理学会 pp. 1-6

首藤公昭・高橋雅仁・田辺利文（2012）「日本語慣用句機械辞書」『情報処理学会研究報告自然言語処理（NL）』2012-NL-205（3）一般社団法人情報処理学会 pp. 1-12

ダニーミン・佐藤洋（2001）「日本語学習者のための慣用句データベースの作成—統計処理を用いた一手法の提案—」『情報処理学会研究報告コンピュータと教育（CE）』2001-CE-062 一般社団法人情報処理学会 pp. 55-62

橋本力・佐藤理史・宇津呂武仁（2006）「自動検出のための慣用句の分類と語彙的情報」『情報処理学会研究報告自然言語処理（NL）』2006-NL-173 一般社団法人情報処理学会 pp. 59-66

橋本力・河原大輔（2008）「日本語慣用句コーパスの構築と慣用句曖昧性解消の試み」『情報処理学会研究報告自然言語処理（NL）』2008-NL-186 一般社団法人情報処理学会 pp. 1-6

守屋将人・竹内孔一（2011）「網羅的な検出を重視した異形パターンに基づく日本語慣用句同定システム」『電子情報通信学会技術研究報告. TL, 思考と言語』111（227）一般社団法人電子情報通信学会 pp. 45-50

VII 翻訳とコミュニケーションにおける慣用句

板橋安人（1984）「聴覚障害生徒の慣用句を含む文の理解」『筑波大学附属聾学校紀要』6pp. 17-26

張愛平（1995）「日本語・中国語の翻訳に於ける問題点について」『横浜国立大学留学生センター紀要』2 pp. 90-101

廣内裕子（1997）『『異文化』における慣用句の比較』『日本語・日本文化』23 大阪大学 pp. 55-66

山澤秀子・竹内愛子・飯高京子（2003）「失語症者の慣用句の理解—右半球損傷者との比較—」『コミュニケーション障害学』20（1） pp. 16-23

VIII 辞書類及びその他

井上宗雄（1992）『例解慣用句辞典—言いたい内容から逆引きできる—』創拓社

学研辞典編集部（2014）『用例でわかる慣用句辞典』改訂第 2 版学研教育出版

倉持保男・阪田雪子（1994）『慣用句の辞典』新装版三省堂

倉持保男・阪田雪子編集（1998）『三省堂慣用句便覧』三省堂
現代言語研究会（1993）『すぐに役立つ慣用句用例新辞典』あすとろ出版社
現代言語研究会（2007）『慣用句の辞典—日本語を使いさばく—』あすとろ出版社
佐藤理史編（2007）『基本慣用句五種対照表』名古屋大学大学院工学研究科佐藤理史研究室
集英社辞典編集部（1991）『ルーツでなるほど慣用句辞典』集英社
白石大二（1950）『日本語のイディオム』三省堂
白石大二（1961）『日本語の発想—語源・イディオム—』東京堂
白石大二（1969）『国語慣用句辞典』東京堂
白石大二（1977b）『国語慣用句大辞典』東京堂
丹野顯（1998）『意味から引ける慣用句辞典』日本実業出版社
中嶋尚監修（1996）『新選慣用句の辞典—気のきいた言葉 豊かな文章表現—』小学館
日本語表現研究会（1997）『使える慣用句事典—言いたい言葉がすぐに見つかる！—』PHP 研究所
米川明彦・大谷伊都子（2005）『日本語慣用句辞典』東京堂出版

資料3 基本慣用句の分類番号一覧

1. 体の類（分類番号 52 項目、慣用句 62 句）

1.1110 関係

犬猿の仲。

1.1112 因果

水の泡。

1.1130 異同・類似

他人の空似。

1.1300 様相・情勢

元の木阿弥。

1.1331 特徴

玉にきず。

1.1346 難易・安危

風前のともしび、袋のねずみ。

1.1403 勢い

破竹の勢い、日の出の勢い。

1.1500 作用・変化

青天のへきれき。

1.1540 上がり・下がり

うなぎ登り。

1.1562 突き・押し・引き・すれなど

押し合いへし合い。

1.1563 防止・妨害・回避

目の上のこぶ。

1.1584 限定・優劣

一日の長。

1.1611 時機・時刻

いざという時、年貢の納め時。

1.1651 終始

挙げ句の果て。

1.1652 途中・盛り

目の黒いうち。

1.1690 場合

背水の陣。

1.1910 多少

すずめの涙。

1.1911 長短・高低・深淺・厚薄・遠近

目と鼻の間。

1.1912 広狭・大小

猫の額。

1.1913 速度

牛の歩み、長足の進歩。

1.1930 和・差・比・率など

雲泥の差。

1.1940 一般・全体・部分

氷山の一角。

1.2200 相手・仲間

同じ穴のむじな。

1.2210 友・なじみ

赤の他人。

1.3001 感覚

虫の知らせ。

1.3030 表情・態度

そしらぬ顔、どこ吹く風、泣きの涙、何食わぬ顔。

1.3040 信念・努力・忍耐

縁の下の力持ち。

1.3042 欲望・期待・失望

思うつぼ。

1.3050 学習・習慣・記憶

見様見まね。

1.3065 研究・試験・調査・検査など

物は試し。

1.3067 決心・解決・決定・迷い

乗り掛かった船。

1.3071 論理・証明・偽り・誤り・訂正など

折り紙付き。

1.3075 説・論・主義

机上の空論。

1.3091 見る

高みの見物。

1.3100 言語活動

売り言葉に買い言葉、おうむ返し。

1.3122 通信

なしのつぶて。

1.3140 宣告・宣言・発表

つるの一声。

1.3142 評判

風の便り。

1.3310 人生・禍福

いばらの道、不幸中の幸い。

1.3320 労働・作業・休暇

命の洗濯。

1.3380 いたずら・騒ぎ

上を下への大騒ぎ。

1.3392 手足の動作

抜き足差し足。

1.3421 才能

先見の明。

1.3470 成功・失敗

若気の至り。

1.3480 成績

けがの功名。

1.3670 命令・制約・服従

矢の催促。

1.3790 貧富

火の車。

1.4000 物品

高根の花、無用の長物。

1.4010 持ち物・売り物・土産など

とらの子。

1.4430 部屋・床・廊下・階段など

うなぎ寝床。

1.5161 火

火の海。

1.5710 生理

虫の息。

2. 用の類（分類番号 129 項目、慣用句 637 句）

2.1112 因果

物を言う、物を言わせる、役に立つ。

2.1130 異同・類似

心が通う、異にする。

2.1131 連絡・所属

血がつながる、血を分ける、流れをくむ。

2.1210 出沒

足音を忍ばせる、頭をもたげる、臭い物にふたをする、馬脚を現す、化けの皮がはがれる、人目を忍ぶ、人目をはばかる、目に浮かぶ、目をくらます、目を盗む。

2.1211 発生・復活

芽が出る。

2.1220 成立

実を結ぶ、目鼻が付く、物になる。

2.1240 保存

後を引く。

2.1250 消滅

水泡に帰す、底を突く、宙に浮く、棒に振る。

2.1251 除去

白紙に戻す。

2.1331 特徴

異彩を放つ、型にはまる。

2.1332 良不良・敵不適

口に合う。

2.1340 調和・混乱

羽目を外す。

2.1342 調節

三拍子そろう、耳をそろえる。

2.1346 難易・安危

危ない橋を渡る、石橋をたたいて渡る、始末に負えない、手に余る、手に負えない、万事休す。

2.1400 力

拍車をかける、火に油を注ぐ。

2.1500 作用・変化

気を取り直す。

2.1502 開始

端を発する、火ぶたを切る、幕が開く、幕を開ける。

2.1503 終了・中止・停止

けりが付く、けりを付ける、最後を飾る、ピリオドを打つ、幕を閉じる、有終の美を飾る。

2.1504 連続・反復

バトンを渡す。

2.1513 固定・傾き・転倒など

根を下ろす。

2.1520 進行・過程・経由

道草を食う。

2.1522 走り・飛び・流れなど

足が棒になる、足を伸ばす、足を運ぶ、足を棒にする。

2.1524 通過・普及など

日の目を見る。

2.1525 連れ・導き・追い・逃げなど

音頭を取る、トップをきる。

2.1526 進退

暗礁に乗り上げる、進退きわまる。

2.1527 往復

きびすを返す。

2.1540 上がり・下がり

話に花が咲く。

2.1553 開閉・封

口を切る。

2.1563 防止・妨害・回避

水を差す。

2.1580 増減・補充

尾ひれを付ける、輪を掛ける。

2.1583 進歩・衰退

足が鈍る、峠を越す、ばかになる。

2.1584 限定・優劣

肩を並べる、群を抜く、けたが違う、手が届く、引けを取る、水をあける。

2.1600 時間

油を売る、尾を引く。

2.1611 時機

足元に火が付く、しりに火が付く、不意を食う。

2.1622 年配

春秋に富む。

2.1660 新旧・遅速

調子に乗る、波に乗る、間に合う。

2.1700 空間・場所

身になる。

2.1931 過不足

足が出る、十指に余る、度を過ぎず、間に合う。

2.3000 心

活を入れる、肝が据わる、たがが緩む、手綱を引き締める、腹が据わる、物心がつく。

2.3001 感覚

打てば響く、骨身にこたえる、虫が知らせる。

2.3002 感動・興奮

開いた口がふさがらない、あつけに取られる、息をのむ、意表をつく、かたずをのむ、気が遠くなる、肝をつぶす、肝を冷やす、気を失う、心を打つ、腰が抜ける、腰を抜かす、舌を巻く、血が騒ぐ、血わき肉踊る、度肝を抜く、熱に浮かされる、熱を上げる、身にしみる、胸が一杯になる、胸が詰まる、胸に迫る、胸を打つ、目頭が熱くなる、目を疑う、目を白黒させる、目を丸くする、目を回す、目をむく、我に返る、我を忘れる。

2.3003 飢渴・酔い・疲労・睡眠など

あごを出す、船をこぐ、魔が差す、目が覚める、目を覚ます。

2.3011 快・喜び

悦に入る、興に乗る、心が弾む、熱が冷める、胸が躍る、胸がすく、胸が膨らむ、胸を躍らせる。

2.3012 恐れ・怒り・悔しさ

青筋を立てる、足がすくむ、頭に来る、堪忍袋の緒が切れる、気に障る、業を煮やす、地団太を踏む、しゃくにさわる、背筋が寒くなる、薄氷を踏む、腹が立つ、腹に据えかねる、腹を立てる、身の毛がよだつ。

2.3013 安心・焦燥・満足

頭を痛める、泡を食う、気が済む、気がもめる、気に掛かる、気に掛ける、気にする、気になる、気に病む、気骨が折れる、気をもむ、心に掛かる、心に掛ける、腰を据える、手に汗を握る、度を失う、羽を伸ばす、胸をなで下ろす。

2.3014 苦悩・悲哀

頭を抱える、苦になる、心が痛む、心を痛める、手を焼く、途方に暮れる、身につまされる、胸が痛む、胸がつぶれる、胸が張り裂ける、胸がふさがる、胸を痛める。

2.3020 好悪・愛憎

愛想を尽かす、嫌気が差す、後ろ髪を引かれる、馬が合う、気に入る、心を奪われる、舌鼓を打つ、食指が動く、根に持つ、鼻に付く、鼻を鳴らす、虫ずが走る。

2.3021 敬意・感謝・信頼など

一目置く。

2.3030 表情・態度

色を失う、大きな顔をする、大見得を切る、顔から火が出る、顔を曇らせる、肩で風を切る、口をとがらせる、血相を変える、白を切る、相好を崩す、血の気が引く、猫をかぶる、幅を利かせる、べそをかく、へそを曲げる、まゆをひそめる、目くじらを立てる、目に角を立てる、目の色を変える、目を細くする、もったいをつける。

2.3031 声

声を立てる、声をのむ、音を上げる、弱音を吐く。

2.3040 信念・努力・忍耐

意地になる、意地を張る、命を懸ける、うつつを抜かす、腕によりを掛ける、我を張る、唇をかむ、心を込める、しびれをきらす、死力を尽くす、心血を注ぐ、精が出る、精を出す、大事を取る、力を入れる、血道を上げる、手を尽くす、手を抜く、涙をのむ、熱を入れる、歯を食い縛る、骨が折れる、骨身を削る、骨を埋める、骨を折る、本腰を入れる、身が入る、身を入れる、身を粉にする、横車を押す。

2.3041 自信・誇り・恥・反省

いい気になる、腕が鳴る、腕に覚えがある、かさに着る、角が取れる、我を折る、気がとがめる、悔いを残す、図に乗る、調子に乗る、とらの威を借るきつね、泥を塗る、鼻に掛ける、鼻を折る、胸を張る。

2.3042 欲望・期待・失望

肩をすばめる、気を落とす、首を長くする、志を立てる、力を落とす、のどから手が出る、胸を膨らませる、欲の皮が突っ張る。

2.3050 学習・習慣・記憶

脂が乗る、板につく、腕が上がる、腕を磨く、肝に銘じる、手が上がる、堂に入る、年季を入れる、場数を踏む、磨きを掛ける、身に付く、身に付ける、胸に刻む、物にする。

2.3061 思考・意見・疑い

頭をひねる、首をかしげる、首をひねる、工夫を凝らす、小首をかしげる、心を砕く、思案に暮れる、知恵を絞る、真に受ける。

2.3062 注意・認知・了解

気が付く、気が抜ける、気に留める、気を配る、気を付ける、気を取られる、気を回す、心に留める、心を配る、駄目を押す、念を押す、間が抜ける、目からうろこが落ちる、焼きが回る。

2.3063 比較・参考・区別・選択

天びんに掛ける。

2.3064 測定・計算

さばを読む。

2.3065 研究・試験・調査・検査など

探りを入れる、腹を探る、メスを入れる。

2.3066 判断・推測・評価

当てが外れる、高をくくる、棚に上げる、目が利く、目が肥える、めどが付く、目星を付ける、レッテルをはる。

2.3067 決心・解決・決定・迷い

意を決する、きつねにつままれる、心が動く、さじを投げる、二の足を踏む、腹を決める、腹をくくる、腹を据える、見切りをつける、目がくらむ、らちが明かない。

2.3070 意味・問題・趣旨など

的を射る。

2.3071 論理・証明・偽り・誤り・訂正など

しっぽをつかむ、らく印を押される。

2.3084 計画・案

手を打つ、手を回す。

2.3091 見る

注目を浴びる、長い目で見る、ひとみを凝らす、人目に付く、人目を引く、目にする、目に付く、目に留まる、目に入る、目に触れる、目を奪う、目を覆う、目を落とす、目を配る、目を凝らす、目を皿のようにする、目を注ぐ、目を背ける、目を付ける、目を離す、目を光らす、目を引く、目を見張る、目をやる。

2.3093 聞く・味わう

聞き耳を立てる、小耳に挟む、耳に入れる、耳にする、耳にたこができる、耳につく、耳に入る、耳に挟む、耳を疑う、耳を貸す、耳を傾ける、耳を澄ます、耳をそばだてる。

2.3100 言語活動

大きな口をきく、気炎を上げる、口が滑る、口にする、くちばしを入れる、口火を切る、口を利く、口をそろえる、口を出す、口をつぐむ、口を挟む、口を割る、けむに巻く、口角泡を飛ばす、腰を折る、だだをこねる、たんかを切る、茶茶を入れる、話の腰を折る、らっぱを吹く。

2.3103 表現

言葉に尽くせない、言葉を濁す。

2.3131 話・談話

口を切る、声を掛ける。

2.3132 問答

相づちを打つ、かまを掛ける、水を向ける。

2.3133 会議・論議

言葉を返す。

2.3135 批評・弁解

揚げ足を取る、後ろ指を指される、お茶を濁す、難癖をつける。

2.3141 報告・申告

泥を吐く、腹を割る。

2.3142 評判

顔が売れる、顔がつぶれる、顔に泥を塗る、顔をつぶす、地に落ちる、名を売る、眼鏡にかなう。

2.3150 読み

目を通す。

2.3151 書き

筆を執る、筆をふるう。

2.3200 創作・著述

手を入れる、筆が立つ、筆を入れる、筆を加える。

2.3300 文化・歴史・風俗

脚光を浴びる。

2.3310 人生・禍福

運を天に任せる、ばかを見る。

2.3311 処世・出处進退

足を洗う、重きを成す、顔が利く、辛酸をなめる、頭角を現す、鳴りをひそめる、バスに乗り遅れる、一旗揚げる、身を立てる、身を引く。

2.3320 労働・作業・休暇

手が空く、手が掛かる、手がふさがる、手を掛ける、手を休める。

2.3330 生活・起臥

すねをかじる、床に就く、路頭に迷う。

2.3331 食生活

口にする。

2.3333 住生活

またに掛ける、身を寄せる。

2.3360 行事・式典・宗教的行事

縁起を担ぐ、手を合わせる。

2.3380 いたずら・騒ぎ

はちの巣をつついたよう。

2.3391 立ち居

あぐらをかく、肩を落とす、寝返りを打つ、ひざを乗り出す。

2.3392 手足の動作

手にする、手を差し伸べる、手を取る。

2.3400 義務

二足のわらじを履く、用を足す。

2.3410 身上

すねに傷を持つ、身を固める。

2.3421 才能

生き馬の目を抜く、腕を振るう、お株を奪う、気が利く、鼻が利く、目から鼻へ抜ける。

2.3422 威厳・行儀・品行

襟を正す。

2.3430 行為・活動

首を突っ込む、手を下す、手をこまねく、手を出す、手を付ける、手を延ばす、手を引く、手を広げる、指をくわえる。

2.3470 成功・失敗

味を占める、一家を成す、重荷を下ろす、肩の荷が下りる、肩の荷を下ろす、空を切る、けちが付く、志を遂げる、しっぽを出す、図に当たる、どじを踏む、名を成す、にしきを飾る、不覚を取る、ぼろが出る、みそを付ける。

2.3500 交わり

息が合う、角が立つ、心を許す、背を向ける、たもとを分かち、手を切る、水に流す。

2.3510 集会

額を集める。

2.3511 出欠

顔を出す。

2.3520 応接・送迎

お目にかかる、手ぐすねを引く。

2.3522 仲介

口を利く、横やりを入れる。

2.3530 約束

太鼓判を押す、手を打つ、ほごにする。

2.3531 交渉

因果を含める、ひざを交える。

2.3540 協力・参加

お先棒を担ぐ、片棒を担ぐ、ちょうちんを持つ、手を握る。

2.3541 奉仕

一役買う。

2.3542 競争

機先を制する、くさびを打ちこむ、先を争う、先手を打つ、出鼻をくじく。

2.3543 争い

けんかを売る、しのぎを削る、雌雄を決する、盾を突く、波風が立つ、火花を散らす、風雲急を告げる、矢面に立つ、弓を引く。

2.3550 平和・治乱

飼い犬に手をかまれる。

2.3560 攻防

盾に取る、不意を突く。

2.3570 勝敗

後れを取る、かぶとを脱ぐ、軍配が上がる、軍門に下る、土が付く、とどめを刺す、鼻を明かす、一泡吹かせる、目に物見せる。

2.3613 捕縛・釈放

足が付く、網を張る。

2.3620 運営

さい配を振る。

2.3630 人事

あごで使う、首にする、首になる、首を切る、白羽の矢が立つ。

2.3640 教育・養成

かんで含める、手塩に掛ける。

2.3650 救護・救援

恩に着せる、恩に着る、肩を持つ、かゆい所に手が届く、世話が焼ける、世話を焼く、力を貸す、手が離れる、手を貸す、手を借りる、一肌脱ぐ、目を掛ける。

2.3670 命令・制約・服従

大目に見る、かさに懸かる、くぎを刺す、げたを預ける、目をつぶる。

2.3680 待遇

一笑に付す、恨みを買う、気が引ける、木で鼻をくくる、心を鬼にする、ごまをする、そでにする、つむじを曲げる、手玉に取る、煮え湯を飲まされる、鼻であしらう、花を持たせる。

2.3681 礼

一矢を報いる、恩をあだで返す。

2.3682 賞罰

油を絞る、大目玉を食う、発破をかける、焼きを入れる。

2.3683 脅迫・中傷・愚弄など

足元を見られる、足元を見る、足を引っ張る、一杯食う、裏をかく、けちを付ける、しり馬に乗る、しり目にかける、白い目で見ると、手に乗る、人を食う、やり玉に挙げる。

2.3700 取得

手に入れる、手にする、物にする。

2.3710 経済・収支

自腹を切る、生計を立てる、つめに火をともし、湯水のように使う。

2.3750 損得

うまい汁を吸う。

2.3770 授受

のれんを分ける。

2.3790 貧富

かんこ鳥が鳴く。

2.5030 音

声を潜める。

2.5040 におい

鼻に付く、鼻を突く。

2.5701 生

息を吹き返す、九死に一生を得る、根を張る、芽を吹く。

2.5702 死

息の根を止める、息を引き取る、世を去る。

2.5710 生理

息が切れる、息が詰まる、息を凝らす、息を殺す、息を詰める、用を足す。

2.5721 病氣・体調

目が据わる、目が回る。

3. 相の類（分類番号 66 項目、慣用句 227 句）

3.1040 本体・代理

掛け替えのない。

3.1110 関係

切っても切れない。

3.1112 因果

焼け石に水。

3.1113 理由・目的・証拠

根も葉もない。

3.1120 相対

水と油、持ちつ持たれつ。

3.1130 異同・類似

うり二つ、御多分に漏れず、月とすっぽん、何くれとなく、似たり寄ったり、似ても似つかない、判で押したよう、負けず劣らず。

3.1200 存在

影も形もない、元も子もない。

3.1210 出没

頭隠してしり隠さず。

3.1230 必然性

背に腹は替えられない、やむにやまれず、やむを得ず、やむを得ない。

3.1302 趣・調子

旗色が悪い。

3.1331 特徴

味も素っ気も無い、突拍子もない、取るに足りない、非の打ち所がない、変哲もない、水も漏らさぬ。

3.1332 良不良・敵不適

毒にも薬にもならない、年がいもない、身に余る、目に余る、善かれあしかれ。

3.1340 調和・混乱

一糸乱れず、芋を洗うよう。

3.1341 弛緩・粗密・繁簡

ありのはい出るすき間もない、手が込む。

3.1346 難易・安危

赤子の手をねじる、赤子の手をひねる、お茶の子さいさい、手が付けられない、手が出ない、手が無い、手も足も出ない、取り返しがつかない、歯が立たない、はしにも棒にも掛からない、一筋縄では行かない、へとも思わない、訳は無い。

3.1400 力

鬼に金棒、影が薄い、火が消えたよう、ひとたまりもない。

3.1500 作用・変化

てこでも動かない。

3.1504 連続・反復

跡を絶たない、入れ替わり立ち替わり、雨後の竹の子、歯が抜けたよう。

3.1520 進行・過程・経由

動きが取れない、にっちもさっちもいかない、抜き差しならない。

3.1584 限定・優劣

足元にも及ばない、及びもつかない、何は無くとも、右に出る者が無い。

3.1600 時間

明けても暮れても、息が長い、寝ても覚めても、年がら年じゅう、夜も日も明けない。

3.1611 時機

今か今かと、今や遅しと、寝耳に水、渡りに船。

3.1612 毎日・毎度

何かにつけて、寄ると触ると。

3.1643 未来

遅かれ早かれ。

3.1650 順序

日を追って。

3.1660 新旧・遅速

後の祭り。

3.1670 時間的前後

とどのつまり。

3.1671 即時

一も二もなく、取る物も取りあえず、右から左。

3.1910 多少

多かれ少なかれ、つめのあかほど、枚挙にいとまがない。

3.1913 速度

目にも留まらぬ。

3.1920 程度

いやが上にも、嫌と言うほど、とてつもない、途方もない、話にならない、目に見えて。

3.1940 一般・全体・部分

一から十まで、一事が万事、細大漏らさず、猫もしゃくしも、ピンからキリまで。

3.3000 心

目もくれない。

3.3011 快・喜び

砂をかむよう、身もふたもない、虫の居所が悪い、胸くそが悪い。

3.3012 恐れ・怒り・悔しさ

歯の根が合わない、腹の虫が治まらない、目も当てられない。

3.3013 安心・焦燥・満足

居ても立っても居られない、気が置けない、気が気でない、知らぬが仏。

3.3014 苦悩・悲哀

頭が痛い、気が重い。

3.3020 好悪・愛憎

鬼の目にも涙、気に食わない、血が通う、血も涙もない、鼻持ちならない、虫が好かない、目がない、
目の中に入れても痛くない。

3.3021 敬意・感謝・信頼など

頭が上がらない、頭が下がる。

3.3030 表情・態度

苦虫をかみつぶしたよう、びくとしめない。

3.3040 信念・努力・忍耐

石にかじり付いても、血のにじむような、骨身を惜しまない、わき目も振らず。

3.3041 自信・誇り・恥・反省

穴があったら入りたい、合わせる顔がない、一言もない、おくめんもなく、顔向けができない、肩身
が狭い、心臓が強い、面の皮が厚い、ぱつが悪い、鼻が高い、引っ込みがつかない、耳が痛い。

3.3042 欲望・期待・失望

虫がいい。

3.3045 意志

行き当たりばったり、一か八か、取って付けたよう、のるか反るか、はれ物に触るよう、身をもって、
我も我もと。

3.3066 判断・推測・評価

思いも掛けない、思いも寄らない、身に覚えがない、やぶから棒。

3.3068 詳細・正確・不思議

海の物とも山の物とも付かない、百も承知、ふに落ちない。

3.3090 見聞き

うの目たかの目、矯めつすがめつ、耳が早い、見るに忍びない、見るに見兼ねて。

3.3100 言語活動

おくびにも出さない、ぐうの音も出ない、口がうまい、口が重い、口が堅い、口が軽い、口が減らな
い、口から先に生まれる、口が悪い、声を限りに、立て板に水、二の句がつけない、根掘り葉掘り、
歯にきぬを着せない、人聞きが悪い、ろれつが回らない。

3.3142 評判

名もない。

3.3300 文化・歴史・風俗

見る影もない。

3.3310 人生・禍福

願ったりかなったり、願ってもない、踏んだりけったり、間が悪い、弱り目にたたり目。

3.3320 労働・作業・休暇

息をつく暇もない、手に付かない、猫の手も借りたい。

3.3330 生活・起臥

着の身着のまま、まんじりとしめない、夜の日も寝ずに。

3.3390 身振り・立ち居・動作（手足・口・鼻・目）

ほうほうの体。

3.3410 身上

うだつが上がらない、隅に置けない、立つ瀬がない、脈が有る。

3.3420 人柄

後は野となれ山となれ、気が強い、しりが重い、竹を割ったよう、熱しやすく冷めやすい、腹が太い。

3.3421 才能

押しも押されもしない、口も八丁手も八丁、手八丁口八丁、抜け目がない、目が高い。

3.3430 行為・活動

肝が太い、鼻息が荒い。

3.3500 交わり

顔が広い、多勢に無勢。

3.3680 待遇・礼など

意地が悪い、至れり尽くせり、有無を言わせず、陰になりひなたになり、けんもほろろ、腰が低い、
下にも置かない、取り付く島がない。

3.3710 経済・収支

あぶはち取らず、金に糸目をつけない、宝の持ち腐れ。

3.3790 貧富

首が回らない。

3.5030 音

水を打ったよう。

3.5600 身体

雲をつく。

3.5701 生

くちばしが黄色い。

3.5710 生理・病気など

足が速い、耳が遠い。

4. その他の類（分類番号 5 項目、慣用句 10 句）

4.1150 換言

取りも直さず

4.1170 転換

何はさておき、何はともあれ

4.3100 判断

事と次第によっては、事によると、やせても枯れても

4.3120 予期

案の定

4.3130 希望

いやでも応でも、是が非でも、何が何でも

謝 辞

本論文は、北海道大学大学院文学研究科博士後期課程（言語文学専攻）における研究成果を博士論文としてまとめたものです。本論文を執筆し、まとめるにあたって、多くの方々にお世話になりました。この場を借りて、感謝の意を述べさせていただきたいと思います。

まず、論文の作成にあたり、終始適切なご助言を賜り、丁寧にご指導くださった指導教員である池田証壽教授に謹んで深甚なる謝意を表します。池田先生には、修士課程の研究生時代から 6 年間にわたってご指導いただきました。日頃から研究の進み具合を気にかけていただき、時には励まし、時には厳しくご指導いただきました。研究環境から学会発表の支援まで、様々な面で未熟者の私に多くのチャンスと挑戦を与えてくださいました。池田先生のご指導がなければ、研究への道を見つけることはできませんでした。先生には、記述研究を行ううえでの真摯な研究姿勢とデータ処理の厳しさも教えていただきました。毎週土曜日も学校に来られており、休日返上で研究活動を行っている池田先生の研究への姿勢や情熱を模範としながら、自立した一人前の研究者になれるよう、これから益々精進しようと思います。

そして、そのほかの北海道大学大学院文学研究科言語情報学講座に所属される先生方にも修士の頃から大変お世話になりました。毎年講座内にて行われる研究発表、ならびに研究論文Ⅰ、研究論文Ⅱの口述試験において、小野芳彦教授、佐藤知己教授、加藤重広教授、李連珠准教授には、様々なご助言をいただき、最終的な論文の形に仕上げることができました。また、本論文の副査になっていただいた加藤重広教授、藤田健教授にこの場を借りてお礼を申し上げます。両先生におかれましては、本論文に対して非常に丁寧かつ有益なコメントをいただきました。感謝の意を表したいと思います。

さらに、これまでの学会発表と論文投稿において、田島毓堂先生をはじめ、広瀬英史先生、新野直哉先生ほかたくさんの先生方にご助言と叱咤激励をいただいたことも、本研究に大きく影響しています。ここですべての方のお名前を挙げることはできませんが、先生方のご助力により、本論文の完成の運びとなりました。深く感謝いたします。

本論文の調査にあたり、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』をはじめ、多くのコーパスを使用させていただきました。これらのコーパスや検索システムがなければ本論文は存在しないことは言うまでもありません。これらのコーパスや検索システムを作成した皆様にも感謝申し上げます。また、日本語教育における慣用句指導と慣用句習得の現

状調査におきましては、調査の実施において快く協力して下さった中国の華南理工大学広州学院外国語学部日本語科の教員徐婷婷先生、申冬梅先生、馬麗麗先生、魏鳳麟先生、曹静芬先生、楊丹先生、及び学生の皆様には感謝の念にたえません。華南理工大学広州学院の黄業文先生には、本論文における統計学的な分析を行う際に大変お世話になりました。

本研究を遂行するにあたり、中国国家留学基金管理委員会及び日本電通育英会から奨学金をいただいています。事務局の皆様には様々な面でお世話になりました。また、本研究の一部は、平成 27 年度北海道大学大学院文学研究科リサーチ・アシスタント (RA) 勤務期間中に行ったものであり、研究プロジェクト「人文学と社会」の支援を受けました。また、何度かにわたる北海道大学大学院文学研究科「共生の人文学」プロジェクト (Graduate Grant Program) の出張旅費支援と英文校閲費支援、及び「日本語添削プログラム」の日本語添削支援もいただいています。これらの支援がなければ、本研究は実現することはできませんでした。ここに記して感謝いたします。

最後になりましたが、ここまで自分の思う道を進むことに対し、いつも温かく見守り、辛抱強く支えてくれた家族にも、感謝の気持ちを伝えたいと思います。

ここに名前を挙げさせていただいた方々だけでなく、私を支えてくださったすべての方に深い感謝の意を示して、謝辞とさせていただきます。

2017 年 2 月 北海道大学言語情報学講座研究室にて
呉 琳